

裏窓



特集
女忍者・女間諜



6月号

裏窓

女忍者・女間諜特集号

6



定価 120円
IBM 1807

あなたの秘められた感覚へ微妙に迫る異色雑誌!!

耽奇小説

窓 裏
増刊号

No. 3

口 絵

女のリスト

「洩らした
のは誰だ」
今 官一

人工受精に來た女

野田開作

空中ヌード劇場

飯田豊吉

◎赤青白 六線ほ
黒黄桃 うそう 街頭アナウンス

羅切供養異聞

竜胆寺 雄

帰って來た屍体

楠田 匡介

黒い点鬼簿

宇治川 竜

ヨカリンを探せ

岬 洋之助

女にたかる

岡田 誠

★女はそれを待っていた★

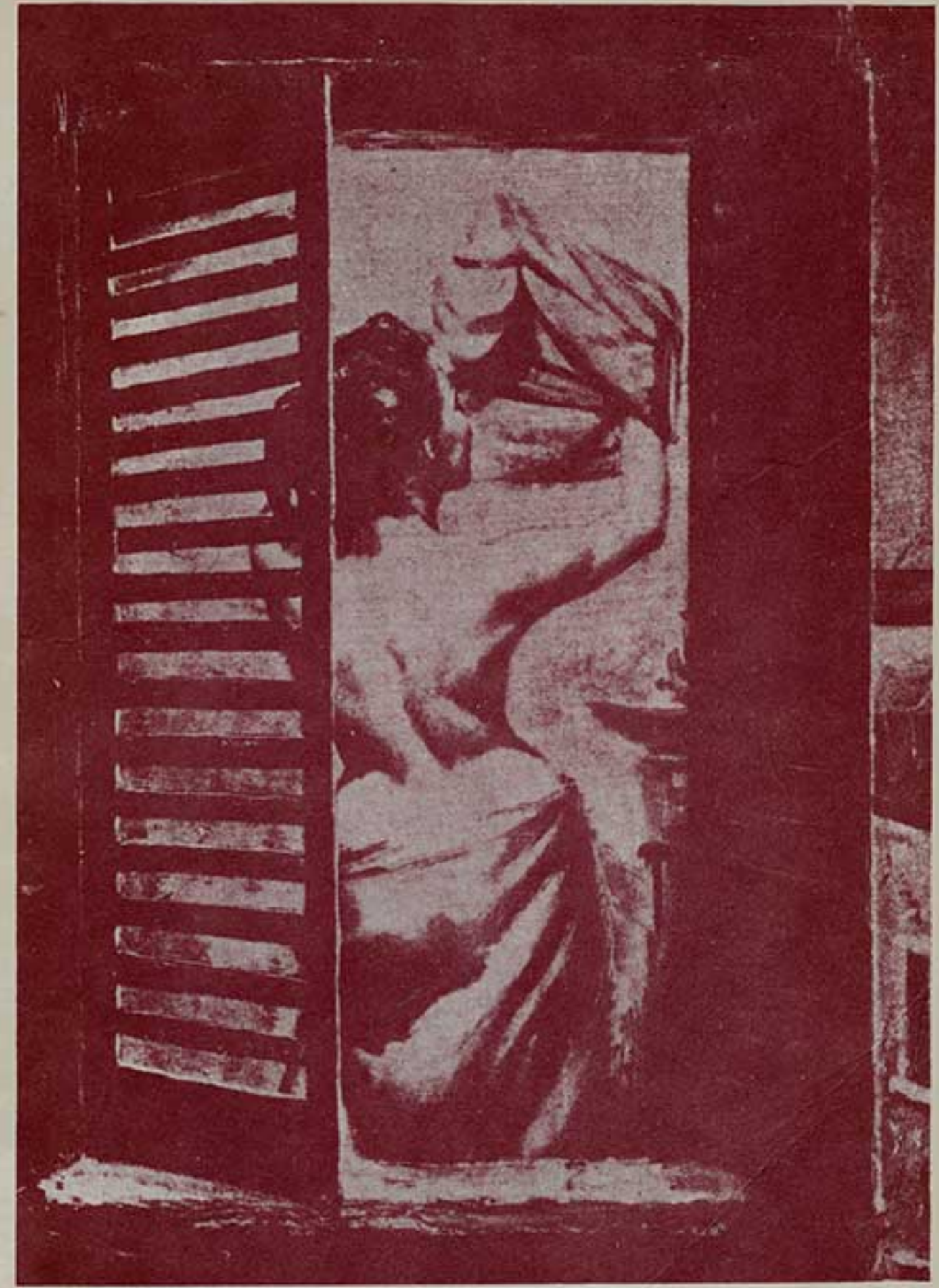
★お買い洩れのないよう早速書店へ!!

★目下・発売中★



東京都中野区江古田1丁目(原簿・東京10756)久保書店

裏 窓



巷の夜の裏窓にふと覗き見た白い花
散るのか咲くのかゆれてゆれて……

血染曼陀羅

橋爪彦七
画・中島喜美

老陶工の眼ははげしい執念に燃えて玉の肌に注がれるのだ。使命半ばに斃れた父の遺志を秘めながら、織江は妖しい悩乱に誘われて立ちすくむ(本文一〇八頁)



表紙……………須磨利之 ○扉カット……………古正英正

目次裏口絵(血染曼陀羅) 中島喜美 ○目次カット……………幸田 稔

口絵 女城鶴巻地獄 文・岩堀 光 画・柴谷宰二郎 (11)

ピグラ 夜の砂時計 撮影・藤沢 晃 構成・美濃村 修 (19)

蛇林洞秘文…南条慎一 (56)

間諜暁に消ゆ…黒羽 新 (67)

伝奇怨霊沼…曲 一二十八 (80)

血染曼陀羅…橋爪彦七 (108)

間諜散華…藤見 郁 (136)

雪肌密書…葉田 光 (184)

紅紐呪縛…小田桐 爽 (210)

傾城忍者…高木竜二 (224)

慶安女忍道…円城寺 達 (268)

江戸暗黒秘録 極刑秘抄 鈴木和夫 (124)

女間諜歌 莎菲は消えた 文・岬 洋之助 画・秋吉 巒 (27)

絵物語 女館南蛮船 画と文・歌川大雅 (163)

刑務所にせ札を獄中で造る男…柳 生 亘 (98)

春痴夢人無精 卵…堀 杏子 (145)

本風俗新卯の花くだし…大門正人 (152)

スマトラ 蛇使いの王女…藤 琴也 (171)

裏窓 死者は蘇える…矢桐重八 (198)

隠密覚書 妖異呪文鏡 島本春雄 (36)

探訪記者 悪魔は見ていた…神行京一 (244)

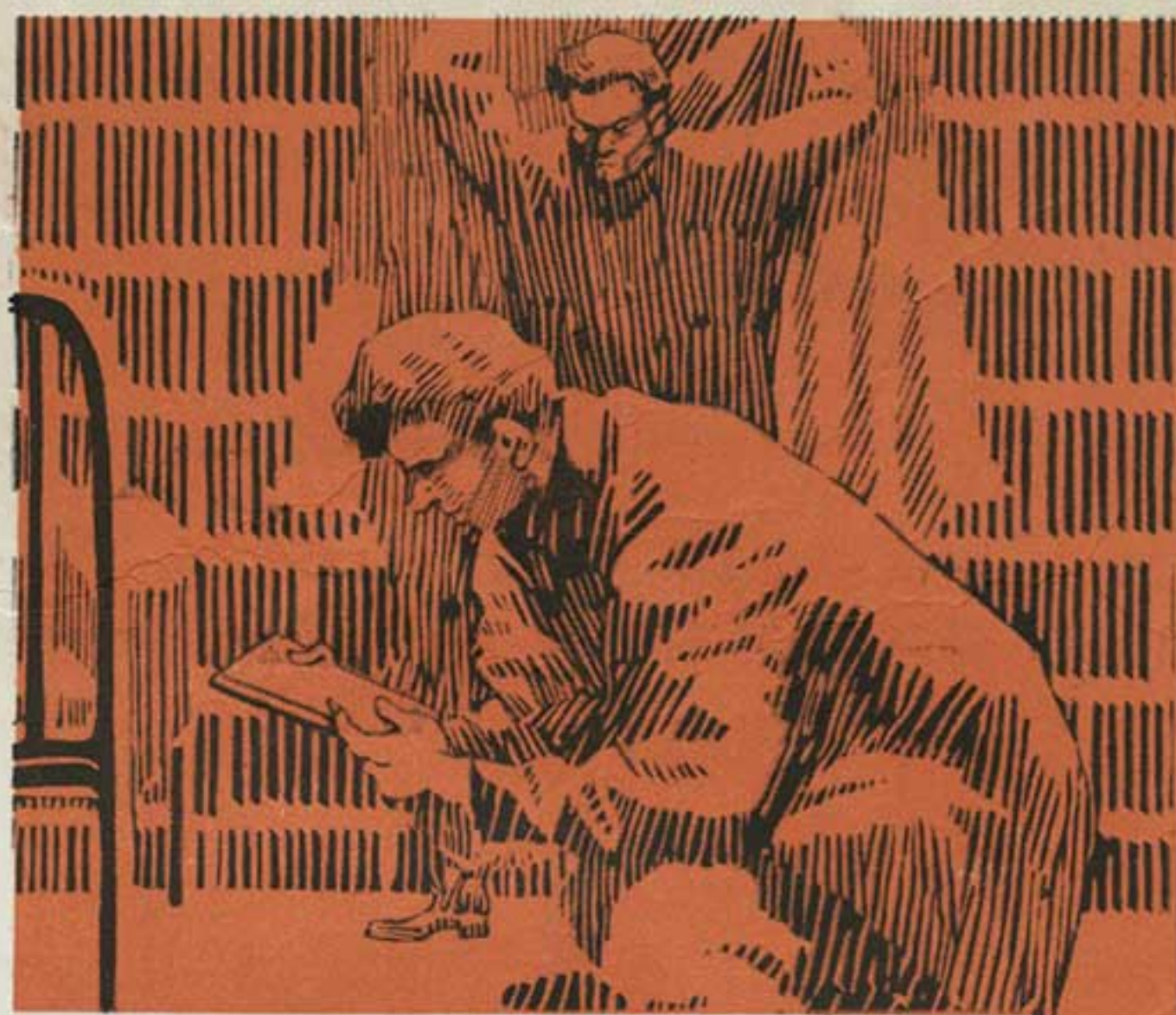
裏窓 殺人犯はそこにいた…三国沢 隆 (257)

連載妖異 地獄の乳房 飯田豊吉 (278)

にせ札を獄中で造った男 柳生 亘

精巧きわまりないにせ札が、いったい獄房
の中で造れるものだろうか？ 現代の煉金
術師達は奇蹟をなし遂げるか？

(本文九十八頁を……)



探訪記者
ノートより

悪魔は見ていた!!

神行京一・作

私の知らない私の姿を、見ていたのは
誰だろう？ 悪魔の歪んだレンズ
が蜜月の夢を破ったのだ!!

(本文三四頁)



女城鶴巻地獄



光堀岩作

画 柴谷幸二郎

① 鶴巻城の奥深く――

有髪ながら端正な尼御台、まだうら若い妙女の眉に、きびしい決意の色があった。

居並ぶ者はすべて女……城内の侍の妻女、娘達。

妙女をふりあおぐたならぬ蒼白な顔、顔。

それも道理、大友傘下のこの小城一つ、島津勢およそ三千騎がぐるりと包囲して、一もみにも潰さん勢いに攻め寄せている時も時前年、当主吉岡三河守を宿願で失った後の采配を振る後室の胸中には、（今はこれまでに）との悲壮な思いがみなぎっていた。



② 「城を捨てんと思う者は一時も早く落ちのびよ。この軍勢を向うに回しては、われらと共に残るとも死あるのみ。のがれる者を怨みも咎めもするものではない。とく心をきめてたも」

傍に控えていた十八才の妹君阿弥姫は、

「姉上、妾は叶わぬまでも最後の戦に加わりとう存じます。その上は城と共にいさぎよく、自害を……」

ひしとよりすがるのだった。

「わたくしも、御方様のお供を」「お城とさだめを一つに……」

口々に叫ぶ女達の、はりつめた声はしかし、折からのときの声の猛々しさにかき消されるのだった。

なまめかしい黒髪に純白の鉢巻をきりりとしめて、長刀を携えた妙女の姿は十重二十重に押し寄せた大友勢を迎えうつ、最後の決戦の陣頭にあって、やさしくも雄々しく指揮をとるのであった。

③妙女の策略で、城壁間近かに迫った人馬が、ドツとばかり陥穽に陥り、敵の威勢をそぐことができた、しかし――

「御後室様、こゝが御一家浮沈にかかわる際でございますぞ。いったんは、城を捨て島津方に従つて時を待たれ、他日の再興をはかるが何よりの御分別……」

ことばをつくして降服を進めるのは譜代家老狩野、中島の老臣。城を枕に討死ときおい立つ重役徳丸権右衛門、その嫡男式部は、まなじりを決して妙女の断を待つ――

「なるほど、そち達の申す通り、この上の戦は無駄、ともかくも――たん城を明け渡しませうぞえ」

「御台様!」「姉上様ツ!」同時に叫んだのは若い式部と阿弥姫。

二人は思わず互いの手を取り合つて、暗然とする。

落城――そして男達はちりちりに、女達の運命は?

思い合つた二人に、あまりにむごい鉄槌だった。



④一夜明けて――

すでに落城ときまつての後、式部の姿は城内に見られなかった。無血入城とはいへ、勝誇った島津の勢。

おもてむきの軍律はともあれ、町家の娘女房をはじめ、武士の妻女とても、飢えた色狼の眼をのがれようとおびえきっていた。

御台妙女をはじめ、阿弥姫、侍女達は城外の邸宅へ引き移った。最後の一人までも討死にと心きめていた身にも、うら寒い、はかない日々だった。読酒三昧に先君の菩提を弔う静かな屋形のうちに、よるべない女の思いがただよった。

明け暮れに、

「姉上様、式部殿はいずこへ参られましたことでしょう」

「案ずるに及ばぬ、式部のことじゃ。すこやかに生き延びて、時節を待つておろうぞ」

美しい姉妹の心に晴れやらぬ影は――

妹には、恋しい人のおもかけが。

姉にはさらに深い、吉岡家の末長き将来へかけた悲願があった。



⑤ 妙女屋形の静かな明け暮れにも春が訪れた。溪流に沿った白梅の名所とて、高雅に匂う梅花の香りのみ、昔に変らぬめでたさを、屋形にただよわせている。
「みごとに咲き匂うたことよのう。御台われらもみやび心は持たぬが、梅が香にひかれてここまでまかり越した」
風流に名を借りた閑入者は、大将伊集院久宣はじめ三人の武將。
「ようこそそのお出まし——」
胸騒ぎをおさえてさすが妙女の沈着なとりなしに、観梅の宴がたちまち設けられる。
「時に御台殿、花にも春、人の子の花ともいうべきあでやかな妹御、そこな阿弥姫にも花咲かすお心はないか。実はわが子息下野守に妹御を申し受けたい」
ハッとあおさめる阿弥姫！
「さすればわれらが主君にも、こよなきあかし。城下も心から従おうぞ」



⑥ 「ありがたいお言葉なれど、阿弥にはすでに定まる夫のある身、この儀はお受けいたしかねます……」
顔色一つ変えず、さわやかな声音で答える妙女だ。
にわかに不機嫌を面に表わした武將達。荒々しく盃を傾けながら次第に殺気をはらんで来た。
何思ったか、久宣は、
「今宵は、ちと食べ酔うた。卒爾ながらわれら三人、一夜の宿を願いたい。明朝早う戻るほどに」



⑦ 「さようあそばしませ、ほんに日も傾いて……」
眉も動かさずうなずいて、侍女達に寝所をととのえさせる。
むくつけき男共に与えるしとねをしつらえながら、侍女達の胸はあやしくおののいた。やがて、客達を寝所に送って、御台は室に阿弥を添寝させた。
「なりませぬ！ 御台様の御寝所でございますぞ！」
はげしく叫ぶ侍女の声！
「急用あつてまかり通るのだ！ のけ」
襖を蹴倒す音、手燭を落したか、暗い中を侍女を突き飛ばして侵入する男達！



⑨「慮外を遊ばしますな！ 島津家の大将ともあろう方が、

かよい女ばかりの館で、何をなさいます」

いいつつおのが小袖をはらりと、阿弥の上へ

着せかけて、きつと男達に立ち向う。

「はっはっは、そう怒られる御台の美

しさは、また格別、なれど、今夜わ

れらの所望いたすは、阿弥殿のお

身柄」

ひげ面がぬつと迫る。

酒気がただよう。

身をすくませる阿弥の、

小袖の下の息づかいは

必死になる。

「なりませぬ！」

荒くれた手で、妙女

を押え、阿弥に迫る。

「あ、姉上様！ 一声、

妙女の手の小袖が残る。



⑩その夜から、若い下野守は公然と屋形へ通
つて来た。さすが城内へ連れ帰ることは控え
たものの、こうなつては阿弥は逃れるすべも
なかった。

生きた屍のように生気を失って行く阿弥に

妙女は、ひそかな声で、

「そなた、屋形を出たかろうの？」とささや

いた。言葉なくうなずく阿弥。

「出ておくれ、そして、豊臣方に吉岡の忠誠

を誓う心の、以前に変らぬことを伝えておく

れ。無事に逃れて、豊臣家に救援を頼む、生

きたあかしとして向うに止まるのじや」

「はい姉上」

妙女の身に万一のことがあっても、阿弥が

無事に逃れさえすれば、血筋も絶えまい。

⑧

素早

く起き直

った妙女は、

白羽二重の寝巻の上

に小袖を羽織ると、どや

どやと襲ってきた男達から、阿弥姫をかばった。

おののきながら妙女の後立ちすくむ阿弥の可憐な姿！

凜然たる瞳に怒りを炎ともやして妙女は叫ぶ。

⑪それは容易なことではなかった。

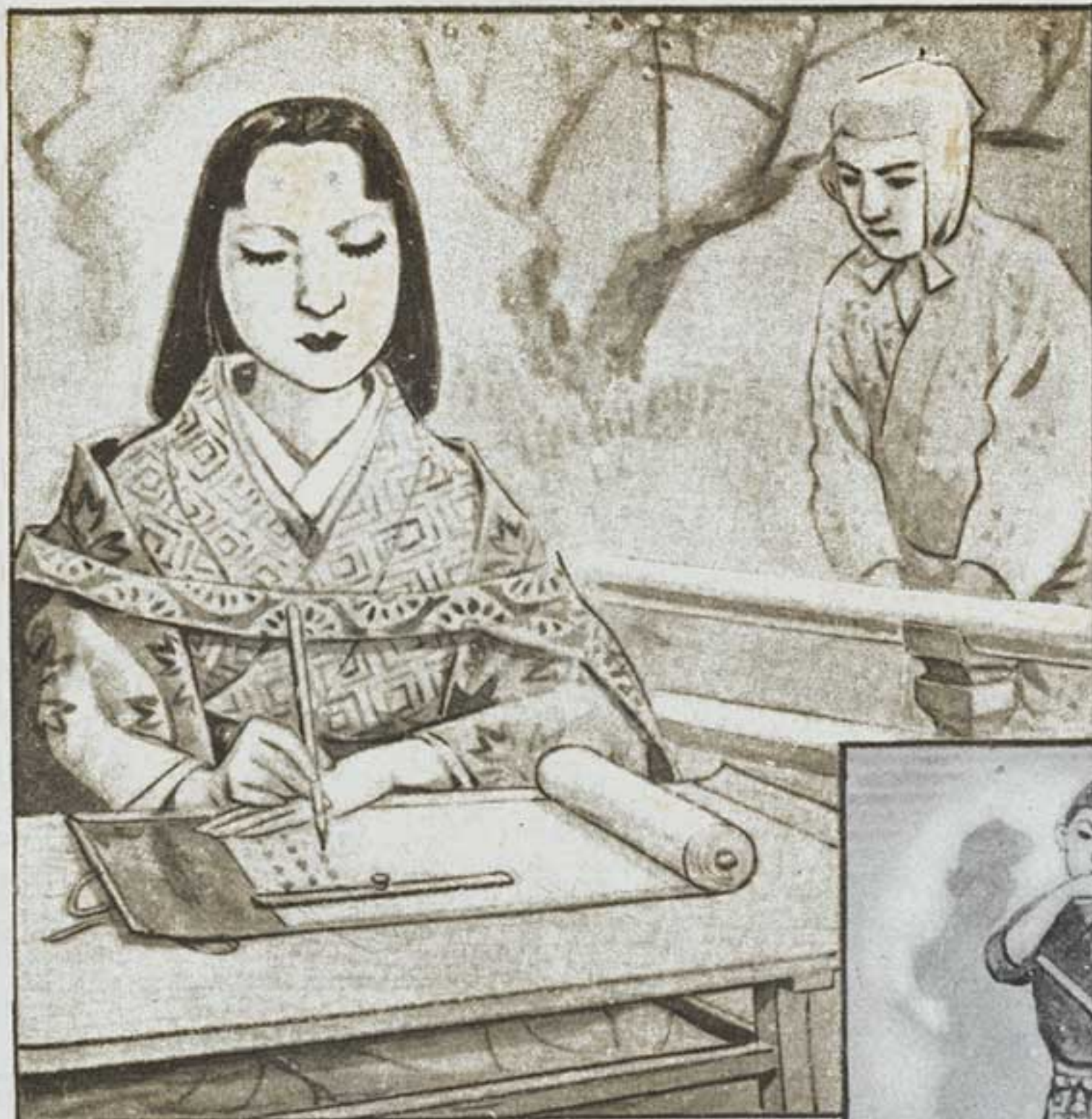
城下はずれの隠れ家に、式部の父徳丸権右衛門らの同志をたずねて、何人か心きいた者を護衛として旅立つ手筈。

その城下を出るまでが難事である。豊臣軍進発のうわさから、吉岡家の動静は厳重な監視を受けている折、蟻一匹はい出るすきもないほどの警戒の中を、どうして脱けるか――。

阿弥姫のいでたちは粗末な帷子に男袴。童子のような姿

はしても、匂いこぼれるような女らしさ――。

「式部様を慕つての家出と、とりつくろうておくほかに。万一つかまっても、決して大事を口にするでないぞえ。心してお行き！」妙女はきびしくいった



⑫常に変らぬ静かなたたずまいで、妙女は写経の筆をすすめていた。

「御台様！」

低い、力強い声音が、庭前から響いて来る。

炭焼きの若者といったなりの、すすけたむき苦しきだが、まさしく式部。

「一足遅かった、阿弥が旅

立ちに間に合うてくれたなら……」

「何と？ 阿弥姫が旅立たれた？」

次第を聞いた式部はすぐに後を追おうとする。「私の方でも内々探りました事

ども、詳しく語る暇はありませんが、降服を主張した狩野中島の両重臣は、攻め

あぐねた島津方に莫大な黄金を贈られ、かくは、御台様に開城を迫ったというこ

とでございます。敵は内にも外にも。お心せられますよう――

式部が姿を消すか消さぬうちに――。

阿弥を訪う下野の傍若無人な姿が現れた。一瞬、妙女は水のように澄んだまなざしを向けた。

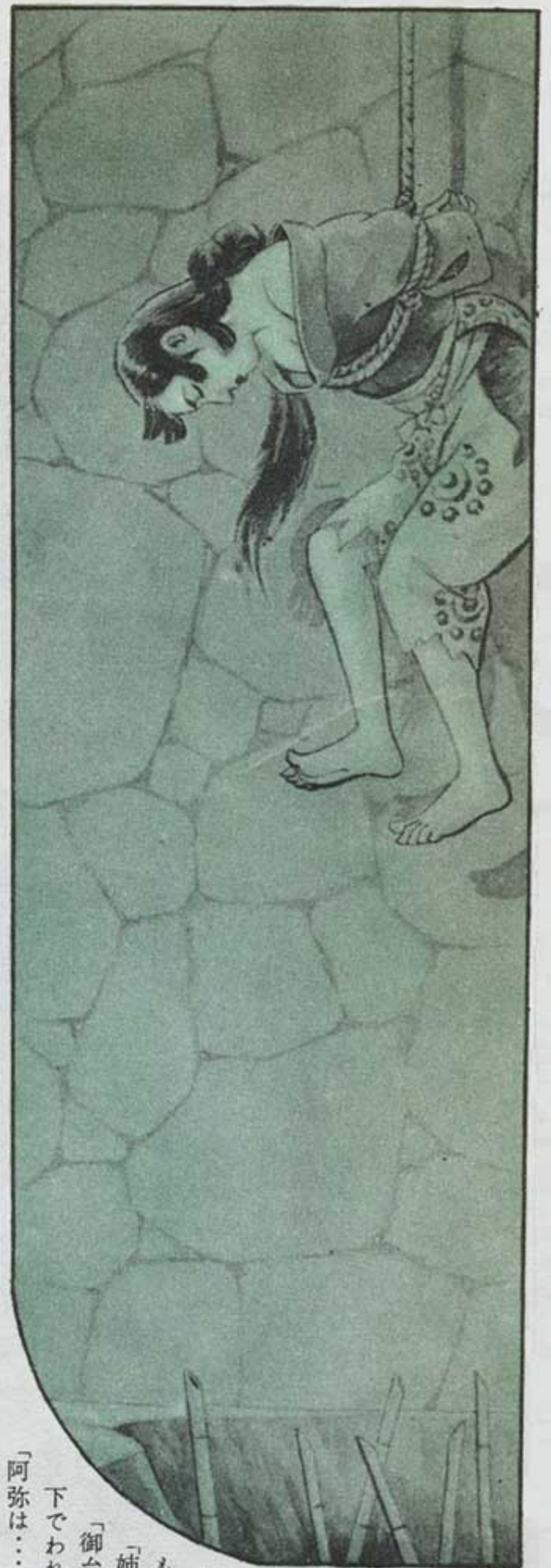
「せっかくのお越し、阿弥も待ちかねておりましたのに、さきほどから熱を發して床についております」

⑬不承々々に帰る下野守。阿弥の足どりはどこまでいったやら。式部の身につつがなきよう――妙女の心は千々に乱れる。

下野守が去って二刻とたたぬまに、荒々しい騎馬の足音が庭前になだれ込んだ。

「御台様、お屋形の方々、即刻お城へ同道いたされたい」否応をいわせぬ武装の一隊。





⑭ ひしひしと取り囲まれながら城に着く女屋形の人
人は、大手門前の広場に設けられた座についた。

正面には大将伊集院親子はじめ諸将が居流れ、常
ならぬ気配が妙女達を迎えるのだった。

「御身は恐ろしい女よのう。阿弥姫は何の使いに、
いずこへ遣わされたか、よもやわれらの眼をあざむ
きおせるつもりはござるまいの」

憎々しげに言い張って大将はにらみすえる。

「何とおおせられます。阿弥は使いになど、つか
わした覚えは持ちませぬ、心得ぬことを……」

りんとした妙女の声に乱れはなかった。

下野守がいきまき叫ぶ。

「ならば、先刻、わしが屋形を訪うた折、何と申さ
れた！ 阿弥は、わしを良人と慕いおると申しおっ
たものを、御台は敵方へ内通の使者と差し向けたに
相違あるまい！」

「それは異なことを」

血走った眼で、下野守は副将に命じた。

「これへ引き立てろ！」

連れ出されたのは、とうに出立したはずの阿弥姫
の、無残な絶え絶えの姿。

「これでも御台は知らぬと申されるのか！」



⑮ 維子も男ばかまも、みじめに引き裂かれ
雪のように白い肌がのぞいている。胸もと
には太い縄がぎりぎり食い込んで、黒髪
はとけ落ちあらわな胸を半ば隠していた。
深窓の姫のおもかげはしのぶ由もない、
変り果てた痛々しさ！

見るなり妙女は駆け寄った。

「阿弥、何故、屋形を脱け出しやった。妾に
も告げず、どこへ行こうというのじゃ」

「姉上様……阿弥は、阿弥は……」

「御台、何よりの証拠じゃ。阿弥はこの通り、城
下でわれらの網にかかったのじゃ」

「阿弥は……妾は、ただ、式部殿慕わしき故に……お許
しなされませ。姉上は御存じなきこと……」

捕われてここまで引きたてられるうちにも、責めさいなまれたで
あろう。息もたえだえに、それだけいうと、がつくりする。

「水を持て！」 「はっ」

容赦のない怒りの手で、下野守は崩折れた阿弥姫の上から冷水を
ざぶりと浴びせるのだ。

「につくき奴！ 式部を慕うて脱け出したとな。なれば聞く！ 式
部はいずこにおるのじゃ、吉岡の残党はどこに隠れおるのじゃ！」

「残党としめし合せて、豊臣方へ内通せん企み、われら、しかと知
ったぞ！」

何やら下知すると、姫はそのまま城壁の上へずると引き上げ
られる。その真下には、島津勢が攻め寄せた時に掘った陥しあなが
黒々と——しかも鋭い槍のようにそいだ竹が植えてあった。

「まず血祭りに、姫を投げ入れるのだ」

「お待ちなされませ。妾に、二心ないことをあかしする手だてがご
ざいます」妙女はきっぱりと、大将に向き直った。



⑩「妾も阿弥も、城へ戻りましょう。城を離れて屋形にすまえばこそ、お疑いもございましょうが、明け暮れお側近くに暮しますれば、吉岡の城下の者共も島津様に心から忠節を上げましようぞ」

端麗な中に、りんとした気品。妙女の一言一言に、はげしい気魄がこもっていた。

「なるほど、それはもつともじや、御台さまが城内に住われれば、万好都合に運ぶであらう」

やがて女屋形の主は、再び鶴巻城へ――

その夕、調度を運ぶ小者にまぎれ式部の油断のない眼があたりを窺いつつ、妙女と阿弥に近づいた。

「城に戻れば、たやすく出入りも叶うまい。心して、今の計略を皆の者にぬかりなく伝えてたもれ」

阿弥と式部の愁いにみちた眼が、離れともなく見交される。

城はなつかしい、心ない柱の一つにも昔のおもかけはまつわるが、帰る身は敵に仕える牢獄に等しかった。



⑪「姫、まだ式部が恋しいか。わしを逃れきることがようできると思つたか」

下野守の暗い血走つた眼は、朝に夕に阿弥にまつわりともすれば荒々しい折檻が加えられるのだった。

豊臣へ内通の疑いは晴れたが、かきたてられた嫉妬の炎は消え去ろうとしない。

妙女の身も、心静かには過し得なかった。

飢えた狼の煩悩が久宣に宿っていた。

「御台、先君の供養に余念なき貞節のお志、感じ入ってござる。したがうら若い御身、時には一献、武骨ながらお相手いたすほどに、娯楽を極楽に見立てるも一興ではあるまいか」

「ほほほ、かたじけのう存じまする」あやなしてにっこり、妙女のうちとけかたに久宣陶然となった。

「いずれ近々に、御身と阿弥殿は薩摩へ御同道願うことになるが、不自由はかけぬほどに必ずお気遣いあるな」



伊集院父子の率いる島津勢引き揚げの隊伍が、川辺にさしかかった。一方は川、一方は森に包まれた山肌、二列になって通るしかない細い道幅である。

突如、森かげからおどり出た刀身がキラと光るかと見る間に、伊集院久宣の馬がさお立ちになった。どっと繰り出した吉岡家の武士達ノもとより数は少いが精鋭揃い。二十万の豊臣勢出発の報で浮足立っている将兵に、不意討ちの恐怖は大きかった。

久宣はたおれた。下野守の首を挙げたのは若い式部の憤りの刃であつた。



三千騎の軍勢も、大将が討ち取られた後は、烏合の衆と化していた。大将を中心とした一角だけの戦いであつたため、前後の将兵は、豊臣勢に囲まれたと錯覚したのか、討たれた者はわずかだったが、たちまち散り散りに逃げ散っていった。

妙女の策略はみごと鶴巻城を救つたのである。式部は阿弥に近寄つた。

⑮「嬉しゅうございます。御供を……」

この時、実は豊臣二十万の兵が島津勢を襲うべく進んで来ていたのだ。

内心うろたえた伊集院久宣、すぐさま鶴巻城を引き払い、本隊と合流して豊臣の大軍と当らねばならない。

それと同時に妙女と阿弥は豊臣軍との連絡を断つたまま、本国薩摩へ送り、人質とする手筈。

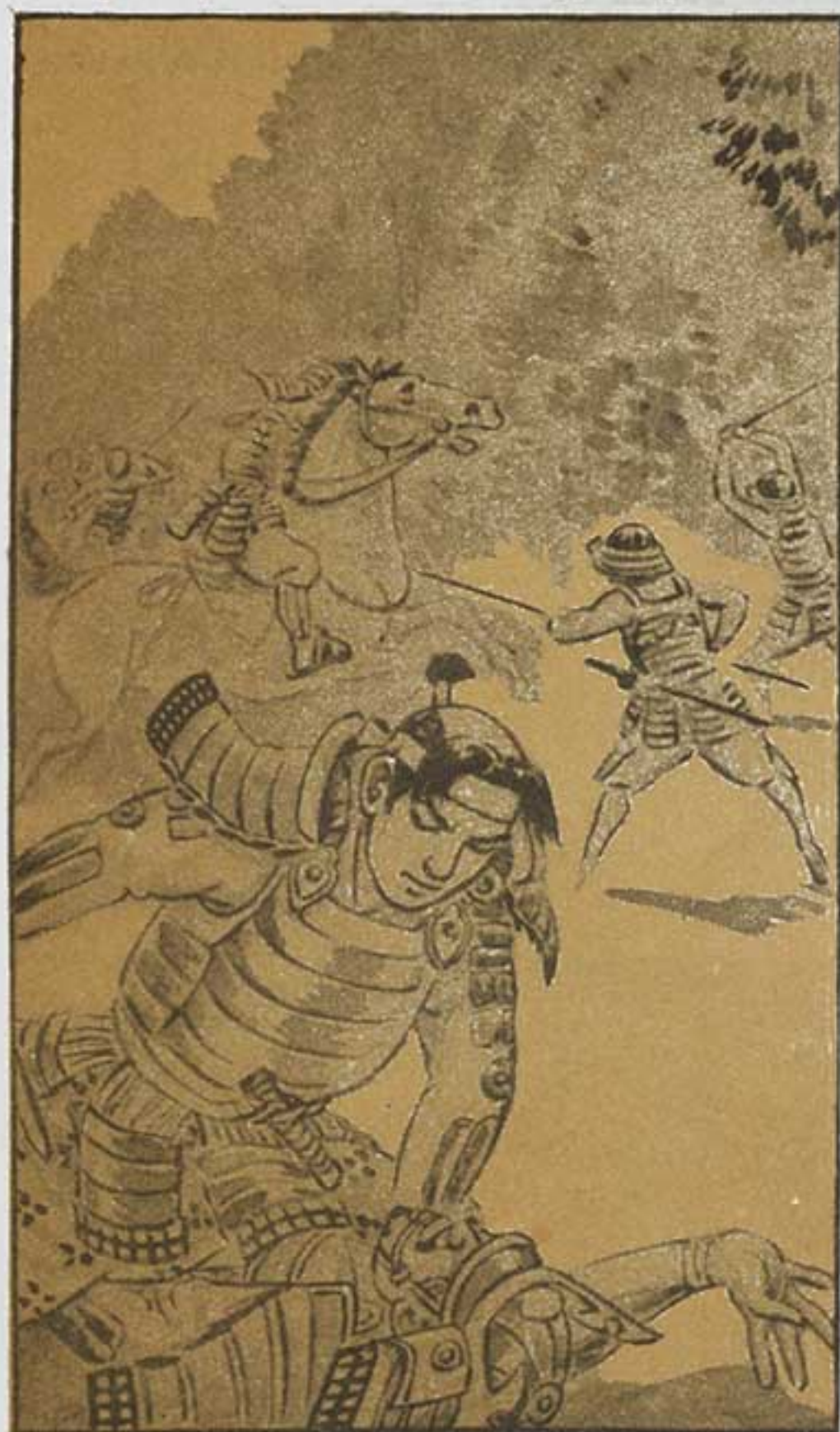
姉妹顔を合せてのひととき――

心にもない忍辱の日々にやつれた阿弥はうつたえる。

「姉上様、薩摩へなどと、阿弥はいやでございます！
今でさえ身を捨てたような日々を送っておりますのに、妾はここで最後を遂げたい」

「いいえ、長い月日ではありませぬ。妾にまかせてお置き！」

よりすがる阿弥の肩をやさしく抱いて、期するところある妙女の笑顔だった。



「式部様！」
「阿弥どの！」
再び離れまいとする二人に、妙女は静かな微笑を向けた。

「鶴巻のお城は、もとどおり吉岡家に戻りましたぞ」
やがて二人の祝言は、晴れて鶴巻城の広間に行われたのだった。

戦国の世はきびしい。
関西からの豊臣勢が、やがて到着するであろう。しばしの安泰を強者の保護の下に与えられるではあろうが――

妙女の澄んだ声の読経が、今日も鶴巻城の奥に静かに流れる。⑯

夜の砂時計

撮影・藤沢修



吐息だけが流れる夜のしじまに
ガラス玉が女の脚を捕えている
キラキラと光るそれは、女の涙か――



限られた空間と、限られた時間のこちら側に
まがましい死が、静かに待っている――
歓喜の時も、悦楽の瞬間も
まがましい死がそれを覗いている――



虚栄に憑かれた女は
砂の落ちる音に気がつかない——
虚栄にとらわれた女は
縛られていることを知らない——





白い柱と柱の間を、風が通りすぎる
ヒラヒラとひるがえる敗北の旗は
闇の中に芳香をとけこませた——

朝の光の中に、砂時計は沈黙した——

夜を脱ぎすてた女は、新しい息吹きを呼吸する



構成・美濃村 晃

莎

菲

は消えた

岬
洋之助

Ran 画

① 誕生日の客

パース・デイ

あれから十三年たつ。記憶もなまなましい呪いの誕生日がやってきたのだ。その痛苦の記憶からのがれようとでもするように、毎年その日になるとT荘の女主人は親しい客を麻布の自宅に招いて誕生日のパーティをひらく。そして今宵も男女とりまぜ十三人の客が、T荘の客間を埋めていた。舞台の幕あきを待つような緊張の一瞬の後、女主人は立上った。

びったりと肉線をみせている美しい中国服、キラめく高価なイヤリング。が、その燃える花びらのような唇をついて出る言葉は、あまりにもいたましい。

「今日あたしの誕生日、そして同時にあたしが殺された日です。十三年前の今日、欧陽莎菲は日本軍閥の手先のために、この地上から消されたのです。だけど、莎菲はいまでも生きています。その証拠にはホラ、足音が聞こえるでしょう？」 莎菲のやってくる……」

② 不思議な闖入者

女主人のコトバはあまりにも奇妙だ。この女主人が莎菲その人なら、莎菲はまさしく生きてゐる。それとも、もう一人莎菲がいるのか？

もともと、この女主人の前身は謎に包まれていた。日華混血とも言い、戦争中は上海でスパイをやっていたとも言われている。そしていまの素性もハッキリしていない。おぼろ

にわかっているのは、この人がある富豪の囲いもので、物質的には、スバラしく恵まれてゐるということだけ。

その時、階段を上ってきた足音が部屋の前で止ると、扉がひらいた。客の注視を浴び、やつれた一人の中年の男が立っていた。男は苦痛で頬を歪めながら、

「皆さん。莎菲を殺したのは私です。十三年前のあの日、私は軍の命令で莎菲を……」

この不思議な闖入者は何を告白するのか？



③ 殺人命令

不思議な男の告白は、十三年まえ、終戦直前の上海にさかのぼる。

その男——沢井三郎は上海の日本軍特務機関の囑託で、滬西地区の情報を担当していた。ある朝愚園路のリバースコート・アパートメントの自室で寝ていた沢井は、本部の久保田少佐からの電話で起された。

「沢井君。緊急の要件だ。すぐ本部まで来るように。」

一種の予感に緊張しながら本部にかけつけた沢井は、久保田少佐の命令をきいて、がく





然と青ざめた。沢井の心理の動揺を無視して久保田少佐はつづける。

「すぐ殺つてくれ。情況は切迫してくる。いままでは逆情報をつかむ意味で彼女を泳がせておいたが、生かしておいてはまずいことになったのだ。彼女は、あまりいろんなことを知りすぎているからな」

彼女というのは、重慶側のスパイとしてマークされている欧陽莎菲のことだ。日本側は一度彼女を逮捕したが、すぐ釈放した。彼女を自由に泳がせ、その足どりから、彼女につながる秘密組織への手がかりをつかもうという腹だ。が、戦局は急速に悪化していた。特務機関では、ひそかに重要書類の逸散や焼却が行われている。釈放された莎菲には、日本軍のヒモがついており、彼女はある程度こちら側のことを知っている。スパイはつねにこちら側のスパイであると同時に敵側のスパイでもあるという二重性格をもっている。そして、そのために一つの宿命を持っているのだ。最後は消されるという宿命を……

殺人命令を受けた沢井の心は暗い。沢井には一人の愛人がある。その愛人こそ、莎菲と一卵性の双生児で、その名もやはり莎菲とって、まったくの瓜ふたつ……

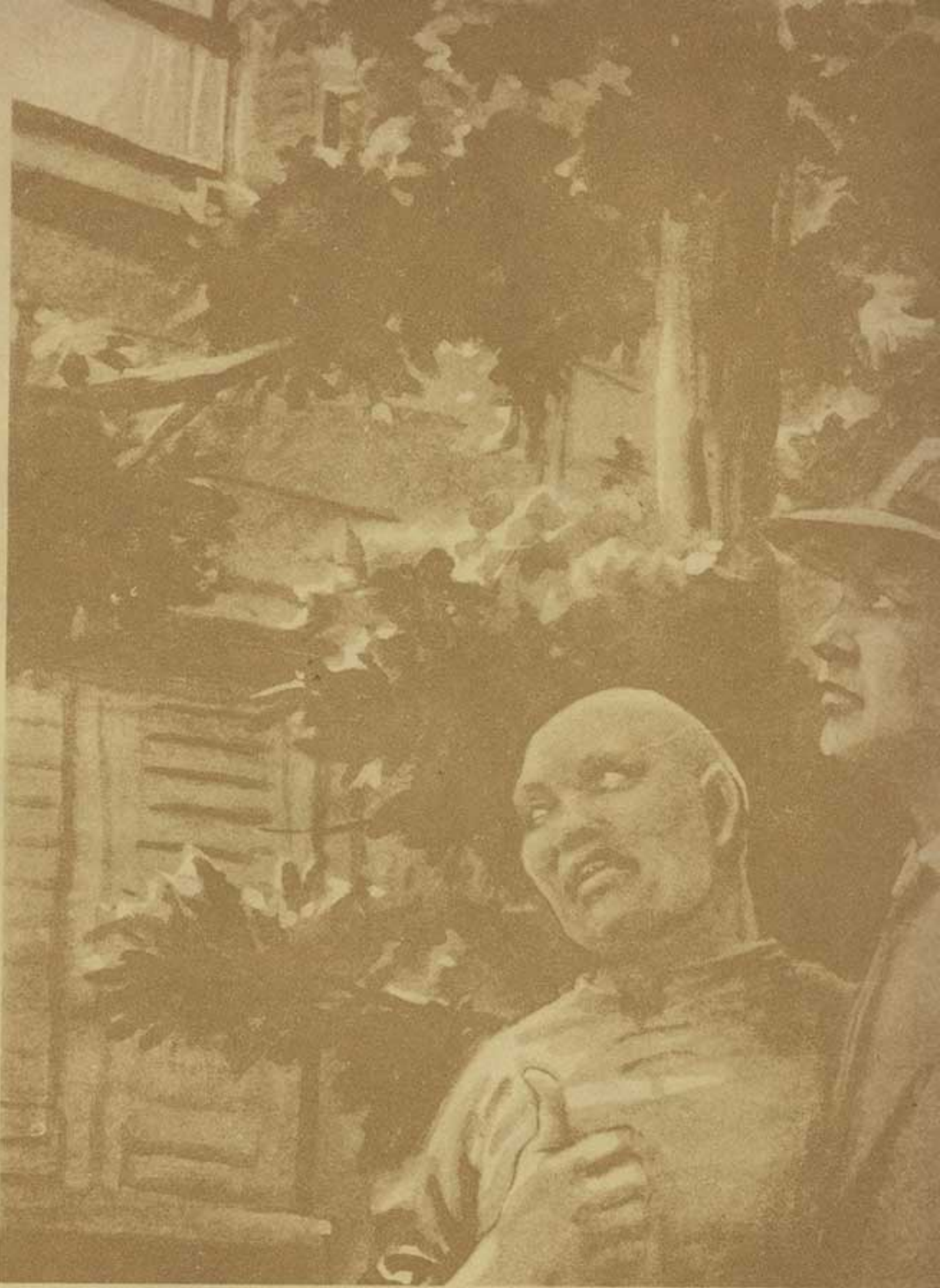
④ ふたりの莎菲

もう一人の莎菲つまり沢井の愛人は、あるフランス人商社のタイピストをやっている。久保田少佐の許を辞した沢井は電話で莎菲を呼び出した。「僕、沢井だ。今晚アベニュージョッフルのデイデイスで待っているよ」「アラ、何か急な用事?」「うん、なんだか顔が見たくなつたんだ」「まあ」

その夜、二人はデイデイスで会い、競馬場前のパークホテルに踊りにいった。踊りながら、沢井は莎菲の胸を軽く抱いている自分の腕が、もう一人の莎菲を殺す虐殺者の腕に思え、心が暗くなる。目の前の、花のような莎菲の顔。もう一人の莎菲の、しめ殺される苦悶の表情。あ、沢井のステップは妖しくもつれる。莎菲は「今晚は沢井さん変ね。ステップをまちがえてばかりいて……」それから「莎菲の身の上に何か変ったことが起るんじゃないかしら。あたしとっても胸騒ぎがするの」



「……」
「ねえ、何かあるんじゃないかしら」
「何もありません。何もありません」
「沢井はウワ言のように、くり返した。」



⑥ 決 行

「ホラ、見えるでしよう。一二階のあの窓ね。あれがあの子の部屋でさあ」

そう言って指して見せるのは、密偵の陳である。獲物を追いつめた猛獣のように、陳の眼はギラギラもえさがる。沢井は、
「うむ」とうなずき、悲しげに眉を曇らせた。

私情は私情、公務は公務だ。分身の莎菲が殺されたと知ったら、あの莎菲はどんなに悲しむだろう。そして、その殺し手が、自分であることを知ったら……

「しかし、俺は殺さねばならない！」
その時、様子を見にアパートの中に入っていった陳が出てきて、

「旦那いますよ。お誂えむきに寝てまさあ！」

⑦ 誰も知らない

陳の声で、沢井はハッと我にかえる。と、陳が、長衫の裾をひるがえし、足音もなくベツドのそばへ突進したかと思うと、蚊帳の外から、ものも言わずに莎菲におそいか、った。蚊帳ごと包み込んで圧殺してしまう気である。突然、花のひらくように、莎菲の肉体に抵抗が起った。美しい二本の脚が、双角望遠鏡のように逆だちになって、二三度はげしく宙を蹴ったが、すぐにグッタリとくずれた。

その時、
「痛いっ！」

陳が悲鳴をあげた。断末魔の力で、手首をひっ搔かれたらしい。

「いかん！」

沢井は傍観者の立場をすて、断崖にとびこむような気で陳に代って女の肉体にラッシュする。ほとんど、夢中で押えつける彼の手の下に、生命の最後の奔騰ではげしくけいれんする女のやわらかいノド首があった。そして、それは満身の力をこめた沢井の手を、まるで下からつきあげでもするように、二三度、大きく脈動すると、グーッと鳴って動かなくなった。

寝ているから好都合です。こいつを使うまでもない」

陳は長衫のうちぶところに呑んだ拳銃をかけるく手のひらで叩いて、

「この手で、ひと思いにやつちまいましょう」

両手の指で輪をつくり、ニワトリをしめ殺すような恰好をして見せる。沢井は思わずイヤな顔をした。この陳ときたら、根っからの密偵根性で、自分とは同じ中国人の、しかも莎菲のようなうら若い美しい女を殺すことをなんとも思っていない。こんな男を使わなければやってゆけない特務工作というのは、なんと因果な仕事なのだろう。

そつとドアをあけると、莎菲は白い紗の蚊帳の中に、人魚のように沈んで、美しい寝顔を見せている。窓から吹きこむ、あるかなしの微風が蚊帳を通して、そのひたいのおくれ毛を、かすかにそよがせている。心もちひらかれ、そこから匂やかな息を吐いているかたち。のいい唇。

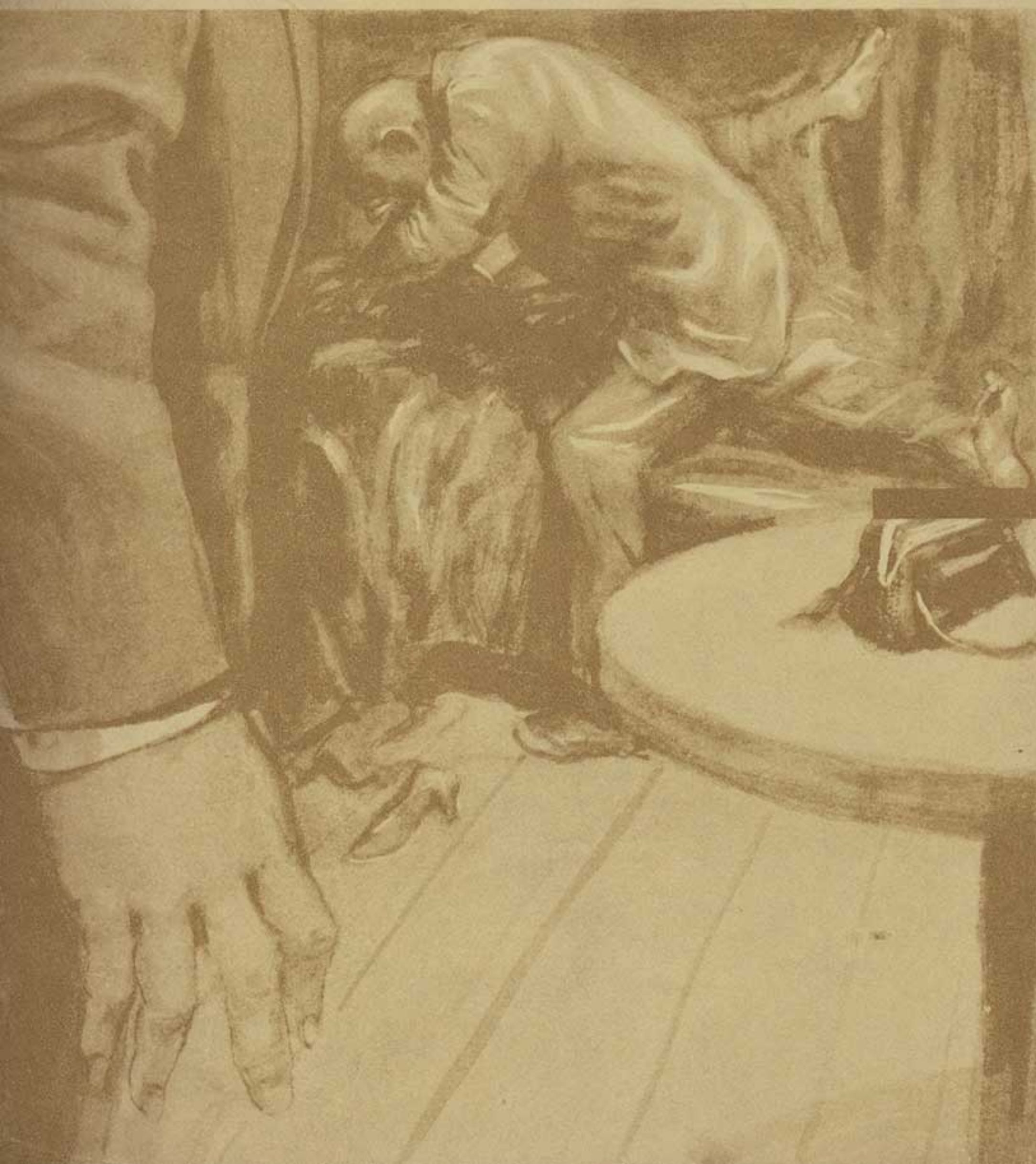
「あ、」

沢井は思わず眩暈を感じて、眼をとじた。

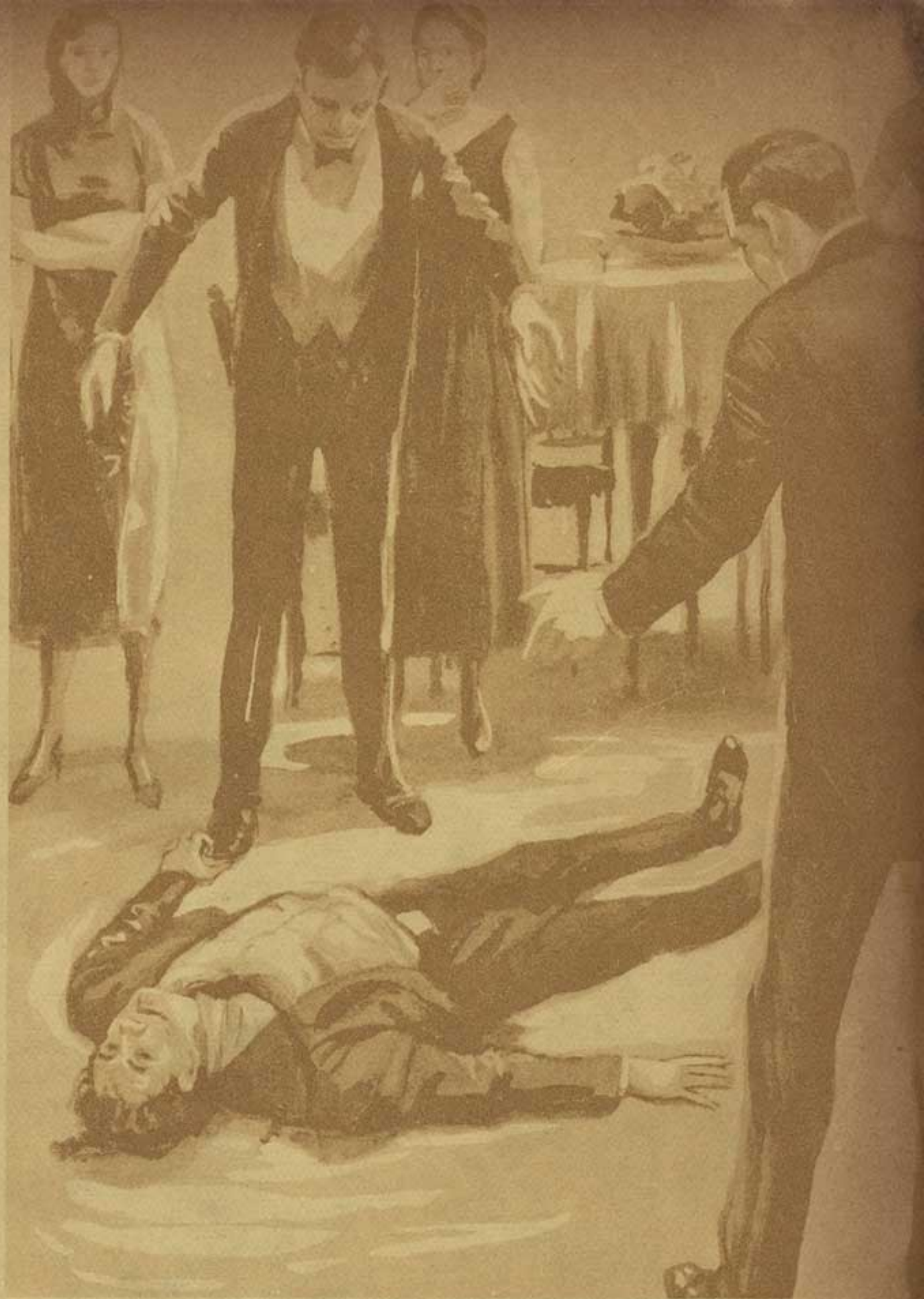
なんという酷似だろう。そこにあるのは、彼がいつも吸う莎菲の唇そのものであり、いま閉じられているのは、やさしく彼を見つめる

莎菲の瞳そのものではなかったか。

「さあ、殺つちまいましょう。人がくるといけない。」



どこかで、ものうい胡弓の音が聞える。沢井は、手に残るぬくみを感じながら、一瞬、莎菲への挽歌と聞いた。



⑧ 復讐はとげられた

その男——沢井三郎の告白はまだつづく。
「殺人命令は、完全に遂行されました。莎菲は死んだ。私と陳はそれを見届けると、身をひ

るがえしてその部屋をのがれました。
戸外は、たったいま演ぜられた凶行も知らぬげに、ものうい油でりの真夏の午後の街がひっそりとひろがっていました。何喰わぬ顔をした二人の殺人者は、口笛を吹きながら、

その街をすぎていったのです。そして、それから一月余り後、戦争は終り、一切は謎の中に葬り去られてしまったのです。そして、私が殺した女が、もう一人の莎菲ではなく、私の莎菲であることを知ったのは、凶行後三日目のことでした。その時の、私のおどろき……」
そこで沢井は、のどもとを掻きむしるような手つきをすると、

「あ、ノドが乾いた。失礼します」

よろよろと室の中央に歩み、グラスの一つを取ると、傍らの酒瓶から酒をみたして、

「告白は終わりました。みなさん御機嫌よう」
一気にそれをあおった。あつという間の出来事である。一同が呆気に取られて見つめる中で、沢井の顔はみるみる蒼白となり、朽木のくずれるようにフロアに倒れた。総立ちになった皆が取り囲むと、沢井の瞳孔はすでに散大し、歴然たる死の兆候が現れていた。

その時、女主人は色を失っている客たちに向って、氷のようにつめたく澄んだ声で、言った。

「みなさん。騒がずにお席について下さい。今夜のバースデイのパーティは、この上もない贈物を得ました。復讐はとげられたのです。さあ、乾杯しましょう」

裏

窓

女忍者・女間諜特集号



第三卷・第八号



隠密管見書
第十五話

妖異呪文鏡

島本春雄
画・山田彬弘

一墓鏡

雨が降っている。
小糠雨というのであろう。
細い、絹糸のような雨であり
音もなく、ひめやかに、そし
てまた陰気に降り続ける雨
であった。

暗い。

天も地も、墨汁の中に溶



ばかるような物音が聞こえて来た。

音——それもかすかな、あたりをは

その無明の闇の向うから、異様な

サック……

サック……

不気味な闇である。

どに、どす黒く、

けた——と
言ってよいほ

妙である。

あった。

丑の刻近いのであろう。——
とすれば深夜であり、しかし、こう
更けなくても、このあたりは、日が暮れ
ると人の気配は全くなくなってしまいうはすで

いったい、この夜ふけ、誰が何をしているのであろう。

冥府の使者かもしれぬ。

それとも、幽気に誘われて迷い込んだ犬であろうか……

そんな気がする。

ここは、正住寺という寺であり、その墓地であった。

サック……

サック……

まだ聞こえて来る。

闇に目が馴れると、あたりの様子が、ぼんやりと認識でき
るようになった。——正住寺はさして大きな寺ではなく、樹
林をとおして、その向うに、小ぢんまりした本堂が見える。

寺塀が崩れている。

無住ではないにしても、これでお粗末な貧乏寺だとわかる
はずだ。

★男嫌いの柔肌守りが魔を呼ぶ！ 血に曇る鏡面に映った妖鬼の顔は？

墓石が林立していた。

その多くは位牌形の墓碑であり、なかに五輪塔や宝篋や卵塔の姿もちらほら見られた。

五輪塔碑は、地、水、火、風、空の五大に象ると言うが、異様な物音は、この五輪塔碑の蔭から来るように思われる。

退散。

突進。

しばらく迷って、しかし元来が度胸のある男であった。若い者が集って、面白半分の試胆会である。このまま逃げ帰ったら、当分は笑いはなしの種にされるだろう。それが癪だし、好奇心もある。よし——一つ、確かめてくれよう……

米屋の次男坊房次郎であった。

人間の運というものはわからない。死生瞬転——逢魔の丑の刻は、この男に兇と出た。

そっと足音を忍ばせる。

雨夜の闇に馴れて来た眼で、五輪塔碑の横からのぞくと、向うは盛土の新墓であり、けれども、あらかた掘り返されていた。

サック……

サック……

この異様な音が、柔かい墓土を掘る音だとわかって、恐怖心と好奇心が胸中に渦を巻いた。

（——はてな、あの墓はそうだ、越前屋小町お千世さんの新墓だ）

ビーンと来た。

呉服問屋越前屋お千世は、界限でも評判の小町娘であり、町内の若い男なら、だれ一人想いを寄せなかった者はなかったろう。

その小町娘の新墓をあばいている。

（なんてえ奴だ。生きてるうちは手が屈かず、死人となったお千世さんを抱こうというのか……死体を弄ぼうというのか……）

人相は悪いが見知らぬ男である。

小糠の雨に、じっとりと濡れて、やっときさ、白木の柩を掘り出した。

棺の蓋をあけた。

手をさし入れた。

血気の男である。生前のお千世に胸をこがした男でもある。たまりかねて房次郎は飛び出した。

「おい、待った！」

威勢はよかったが、雨で下がぬれている。飛び出した拍子に、滑って、もろに尻餅をついてしまった。

「うへっ」

それっきりである。尻餅をついたのが、死生瞬転の境界であり、つぎの瞬間、墓荒しの男の手に、七首の刃がギリリと光って、

「げっ」

叫んで房次郎は虚空をつかんだ。

血！

無言で、容赦なく人を殺す男であった。

「ふん、馬鹿な奴だ」

呟やいて七首の血を拭くと、また、ぬうっと棺の中へ手を入れる。その手が死美人の胸をさぐった。ひんやりと冷たい肌、再び春を感じるよしもない乳房……そのふくらみの辺りをさまよった手が、丸く固い物に触れた。

女のいのち——懷中鏡である。

「これだ」

ニタリと笑って、男は、あばいた柩もそのままに、雨闇の彼方に消えた。

二 青痣の男

（——や？）

小雨と闇の中で、まず、血——のにおいを感じた。

走って来る足音は、先刻から耳にしているし、夜更けではあってもあたりをはばかるような足音ではなかった。

すれ違った。

途端に、血臭——を感じたのである。

「待てっ！」

「……………」

答えはなく、構わずに走り去る奴が、タッタッタッ……歩数で十歩行って、突然、もんどりうってぶっ倒れた。

ピシッ

肌を縄で叩くような音がしたのと、倒れるのと、それは同時であった。

が——

縄は、闇の中のことでもあり、目には映らなかった。

「うーん」

心得のない奴とみえる。ひと声唸って目を廻したようであった。左手を懷手にした遊び人風の小意気な男がのっそり、近づいた。

「ふん、中間あがりだな」

わかると見える。

目を廻して動かない胸のあたりに血痕が散っていた。懷から七首がのぞいていて、抜いてみると、一応は拭いてあるが、柄口にベッタリと血が残っている。

墓地で房次郎を刺した男であった。

「ほう。妙な物を持ってやがる」

遊び人風の男の眼が、七首を抜いた懷に妙なものを認めた。懷中鏡である。

「うむ？」

急に、ギロリと目を光らせたのは、その懷中鏡に死臭を感じたからであった。

裏をかえして、また唸った。

「うむ」

鏡紋は多種多様——波千鳥もあれば、鴛鴦端花模様もあるし、また七宝花鳥、鳳凰、菊花散らし、楼閣山水……

が——

この懷中鏡の裏面の紋様は、いささか変っていた。

持国天。

たしかにそうである。帝釈天の外將四天王の随一で、父の名は難陀母の名が密闍盧といわれる持国天が、左手に刀を把り、右手に光を放つ宝珠を捧げて、しかも三像、放射状に金板打出模様となっている。

「何かいわくがありそうだ」

唇のはしを歪めて呟やくと、耳をすますように右手を見たが、この遊び人、左の耳の下から下頬をよぎって顎まで、べたりと不気味な青

瘧がある。

否。

不気味なのは青瘧のみでなく、左の眼が、まるで腐った魚の眼のように、白く濁っているのであった。

ちよつと見ると、瘦せぎすの筋肉質で、背のすらつとした小意気な男に見えるだけに、不気味な瘧と白く濁った眼の存在は、何となく暗い過去のありそうな、ただ者でない印象を与えるようである。

「どれ、訳を聞こうか」

目を廻している男の横にかがみ込んで、いきなり、その頬つぺたを引っぱらいた。

「う、うーん」

「しっかりしろい。聞きてえ事があるんだ」

パシッ

と、もう一つ平手を食わせる。

「痛てえッ」

「ふっ、気がついたか」

と、言つて、急に、ガバと身を伏せた。

「あつ、いけねえ」

ズドン

短筒の音である。伏せたのと同時だった。

「げっ」

叫んで、ピクッと動いたのは、やっと正気づいて起き上りかけた墓荒し男であつた。

当らぬものの代表に、大道易者の八卦と闇夜の鉄砲がある。——しかし、雨夜の闇のこの鉄砲は、正確に一人の男の心の臓を背後から射抜いて、さて、後は地獄の底のように暗く静かであつた。

青瘧の男は、死骸を盾に氣息をひそめている。

（——第二弾が来るか……）

四半刻。

ふわりと立った。狙撃手はすでに消えたと見たのである。

陰気な小糠の雨のみが、音もなく降り続けている。

血と煙硝の臭気が、じつとりとあたりに拡がった。

三 湯文字芸者

ひたひたと大川の水が、窓の下まで慕い寄っている。

手すりがあつて、その窓障子はしまっているが、灯は、明るく窓外に流れていた。

小春。

という料亭であり、その大川に面した一室であつた。

客がある。

床の間を背にして、端然と坐っているが、風邪気味だといって、頭巾は取らずにいる。

侍である。

頭巾のせいで、人相のほどはしかとわからぬが、恰幅といひ着ている物といい、旗本ならず千石以上、陪臣な



ら大藩の重職——さしずめ江戸留守居役といったところでもあらうか。——そんなふうに思われる。仲居が退いて、芸者と入れ替った。

小糸。

ちか頃、めきめき光り出した小町芸者で、ただの美貌でなく、品があった。髪かたちを変えたら、何様の姫君と称しても、疑う者アないだろう。——あれア、さる御大身のお殿様の御落胤だアな……と噂する奴もある。

その小糸が、脂粉の香と、髪油の匂いと、女体の温気をぶつけるように、客侍のかたわらに坐った。

「お一つ……」

と、銚子の尻を持ち上げる。

「うむ」

と受けて、一口ぐびりとやった客侍は、まるで品定めでもするよう、じっと小糸の顔を見詰めている。

「おや、何かついているんですか？」

(扱いにくいお人らしいよ……)

そう見て、試しに一つ、話の糸口をつけてみた。
「いや」

と、しかし男は、にべもなく、ぼつり……まるで口を利くのが大儀だともいった態度である。

「じゃア、あたいの顔がおかしいから……？」

「美人じゃ」

「あらっ」

「小糸……春乃家の小糸……であろうな？」

「はい。正真正銘、春乃家の小糸でございます。どうぞ、今後とも御
鼻眞に」

「うむ」

と、また黙り込んでしまう。ただ、盃だけは、注げば躊躇なく口へ運んだ。

（——ああ、しんき……いやな二本棒だよ本当に……）

ピーッ

窓の外、大川の上から、何の予告もなく、突然口笛が聞こえた。
と——

今まで、野暮ったく黙り込んで、酒ばかり吞んでいた頭巾侍が、一瞬、豹変したのである。

ぬっと立った。

「あ！」

驚く小糸の胸へ拳が飛ぶ。——当身である。

「うーん」

ぐたりとなるのを片手で支えて、その胸に手を入れた。
「ないッ」

乱暴に胸元をかき払げる。

「ないッ」

帯の間に手が走った。さぐって、顔を歪めて、
「ないッ」

三度呟やいたが、この時廊下に足音があった。

「よし」

当身をくらって失神した小糸を、軽々と横抱きにして窓障子を開いた。——手すりの下に舟が来ている。屋形である。豆絞りの手拭で頬つかぶりの船頭が立っている。

「おいっ。受け取れ」

「へい」

窓から舟へ、小糸を移して、おのれも素早く飛び乗ったが、まるで手馴れた仕事のようにソツがなく、瞬時といってよいほど短時間に事をすませた奴であった。

ギイッ

ひと揺れして、舟は水の上を滑り出した。

「ううん」

冷気を感じて正氣に戻ったとき、小糸は、自分があられない姿になっっているのに気づいた。

湯文字一枚の裸である。

「あっ！」

両手で乳房を抱いて、坐り直した。座敷着が、緋繻絆が、帯が、くしゃくしゃになって散っている。

「ないッ」

目の前で、頭巾の侍が、ぼそりと言った。

四 水 踊 り

舟は流れにさからって、兩岸の人家の灯も途絶えた暗い中流に出ている。

「動くな」

頭巾侍が冷たく言った。

「どうしようって言うんだい？」

羞かしい姿のまま、小糸は伝法に叩きつけて切れ長の眼で睨んでいる。

「素直に答えればどうもせぬ」

「ふん。断りもなく人を裸に剥いてさ、この上何を答えると言うんだい。酒席の取持ちはしても、芸者ア好き放題に裸になったり、抱かれたり、へん、男のおもちゃになるようにヤアできていないんだよ」

「それだけか」

「え？」

「言う事はそれだけか」

「まだまだ山ほどありますのさ。けれども言ったって仕様がな。あたいは、このまま帰してもらったらそれでいいのさ」

「断る」

「ふん」

「帰りたくば答えるがよい」

「何を？」

「鏡だ」

「え？」

「懷中鏡だ。持っているはず……ちゃんと確かめてあるぞ」

「それがどうしたんだい」

「どこにある？」

「捨てちゃったのさ」

「黙れっ。お前が幼女の頃より、肌守りの鏡として、宝のように所持し続けた懷中鏡だ。見えすいた偽りを申すな」

「ふん。おかしいねえ。大の男が、それも立派なお武家様が、どうして芸者風情の鏡なんぞをそんなに気になさるのかしら」

姫様芸者と言われて、その気品と美貌が売物の小糸ではあったが、下町で鉄火に育ち、元来が勝気な伝法娘である。

湯文字一枚の裸にされて、さて、少しもひるむところがなかった。

しかし、どうやら相手は、ただの助平侍でなく、役者が一枚も二枚も上のようなのである。

「冷たいぞ」

ぼつりと、えぐるように言ったのだ。

「何が？」

「大川の水だ」

「えっ？」

「どうだ、闇夜の人魚……ふ、泳いでみるか……それとも素直に申すか」

小糸は下唇を噛んだ。

泳げない——いや、たとえ泳ぎを知っていたとしても、まだ大川の水は冷たく、このままでは手足がしびれて、あつというまに死の転帰をとるだろう。

わかっている。

けれども、持って生れた勝気と意地っ張りが、素直に屈服を許さなかったし、また、肌守りの懷中鏡は、母の遺言で、絶対人手に渡してならぬものとされていたのである。

頭巾侍は、多くを語らぬ男であった。

いきなり、太い右腕をのばして、ぐいっと小糸をねじり伏せた。

「おい、手伝え」

と船頭に声をかける。

「へえ」

こいつは人間が下司にできている。

「へっへっへ」

いぎたなく笑って、後手に縛りあげると、

「いい身体アしてやがる。こちとらア逆立ちしても、姫様芸者の裸なんざア金輪際拝めっこねえと思っていたのに……へっ」

足首に、別に一本縄をかける。

「抛り込めッ」

「よいしょッ」

足首にかけた縄尻を手に、ドボンと冷たい大川へ投げた。

沈んだ。

浮いた。

「どうだ。大川の水は冷たかろう」

必死に足をばたつかせて舟端へ顔を寄せると、豆絞りの船頭が、片足あげて肩先を蹴る。

ジャブリ

水中で一廻転して、仰向けに浮けば、猿臂をのばして滑る濡れ肌を器用につかみ、引き寄せて、持ちあげて、

「おととい来やがれ」

とまた突き放した。

暗い水面に、白い女体が、苦悶の七変化を見せて浮きつ沈みつするのを、四つの眼が、冷酷に見守っている。

殺してはならぬ。

我慢の緒が、いつ切れるか——それを待っているのであった。

五 芸 者 鏡

「変な泥棒がはやるじゃないか」

ぬっと入って来たのはお蘭である。近頃は何かしら話の種を仕込んで来ては、半刻、一刻、鳴子善四郎の顔を眺めて、揚句の果て、不服そうにブンとふくれて帰って行くのが常になっていた。

魂胆がある。

胸の奥では、好きで好きで、一度可愛がってくれたら死んだっていい……と思っているくせに、口に出しては言えずにいる。

だから善四郎のやつが、ふざけ半分に、ちよいと口を吸ったり、時には乳房を握ったりするのを、眼に角たてて怒りながら、実はそれが嬉しくて、しかし、それだけの事だ。揚句は何かしら物足らず、ブンとふくれて帰るといふ結果になる訳だった……

(なぜかしら?)

と時々考えて見る事がある。

(——至って女好きで助平なくせに、どうして、あたしにだけは本気で手を出さないのだろうね。待っているのにさ。甲賀育ち、たとえ契っても、べたべたくっつこうなんて思っちゃいないんだよ……)



と、じれったくて腹を立ててしまう。

「何をしてるのさ？」

書物机の横

へベタリと坐り込んだ。善四郎は、何やら調べ物をしている。

「へえ、賈金調鑑——」

机上に積んである冊子の一つを取りあげて表題を読んだ。

「賈金づくりが、またぞろ御府内を荒してると聞いたけど、善さんがこの一件に首をつっ込んでいるとは知らなかった」

「將軍家お声掛りの甲賀衆だからって、何も大名や旗本のアラ探しばかりしなくちゃならないという法はねえぜ。賈金という奴ア、人殺しよりもたちのよくねえ罪をつくる事があるんだ。奉行所の奴らア、はがゆくって見ちゃいられねえから、蔭ながらちよっと手伝ってるという寸法よ」

「ふうん」

「この頃は、あちこちの旗本賭場で、ちよいちよい現れるんだ」

「何が？」

「馬鹿。賈金がだ」

「あたしも、手伝おうかな」

「賭場歩きができるかい」

「甲賀のお蘭だよ」

「片肌脱ぎになって、丁と張る。時にア、もろ肌脱いでの色仕掛け、半だ、半目と張りやした」

「やって見せる」

「ほう。そんな女アおれは嫌いだ」

「なら止めた」

「へっ、今日はいやに神妙だぜ。——時に、何とか言ってたな、変な泥棒が、どうしたんだ？」

「鏡さ」

「なるほど」

「正住寺の墓をあばいた奴があるのさ。新仏で評判の小町娘……てつきり、非人仲間の汚ない死女盗みだと思ったら、仏さんはいたずらされておらず、一緒に埋めた懷中鏡だけが盗まれていたんだよ」

「どんな鏡だ？」

「肌守りの懷中鏡で、裏彫りは三体の持国天……ちょっと変ってるじゃないか」

「ふむ」

「新仏は越前屋小町のお千世で、養女なんだとさ」

「うみの親は？」

「女親は、両国の矢場で評判だったお園小町なんだけど、種を仕込んだ男がわからない。噂だと、何でも旗本直参の誰かだって言うんだがねえ……」

「鏡アその父親がくれたものだろう」

「ええ」

「話はそれだけか」

「いいえ。まだあるんだよ。続いては、芸者小系の神隠し」

「ほう」

「お座敷から客侍と一緒に消えて、心配してるとねぐらが荒された」

「鏡か」

「ずばりさ。春乃家の小系の部屋が荒されてたった一つ、盗まれたのは、肌守りの懷中鏡なんだから、ねえ、近頃変な泥棒だろう」

「裏彫りが気になるて」

「ふふ。妙な事に、聞いて見ると、どうやら帝釈天の外将で四天王の一人、今度のは、多聞天の立像らしいのさ」

「多聞天か……うむ、右手に鞘を執り、左手に仏塔を捧持し、夜叉、羅刹の二神を率いる……父は羅婆陀、母は密闍盧——つまり早く言えば七福神の一人、毘沙門様だ」

「ねえ」

「ん？」

「何か、いわくがありそうだろう」

「うむ。小系とお千世、この二人の父親が何者か……厄介だが探ってみる必要があるだろう」

「鬼が出るか、蛇が出るか——ふっ、やってみるよ」

「へっ、女のくせに物好きな奴だ。よっぽど退屈していると見えるな」

「性分さ」

「怪我アするなよ。こいつの蔭で動いている奴は、人殺しなんぞ屁とも思っちゃいねえようだ」

「へえん」

「ふふ、命のあるうちに、一度抱いてやろうか。心残りがするといけねえ」

いきなり着物の上から乳房を掴んだ。

「あっ。すけべ！」

「今にはじまった事じゃねえぜ」

瞬間である。——くると向き直って、もう文机の上の書類を読みはじめている善四郎だった。

六 旗本賭場

旗本も墮落している。

たとえ小祿でも、役付の者は、御役料というものが入るからまだよいが、無役の者は、閑居して不善をなすたくいで、遊惰に日を送っては御内証が苦しくなるのも当然である。

旗本賭場——というものができたのもそのため、天下の直参が、賭場のテラ銭を稼いでいる。

中には、大名賭場まであった。

旗本大名の屋敷うちには、不浄役人と蔑称される町奉行所配下の者は手が出せない。これがつけめであった。

小笠原右近。

千五百石の直参だが、小普請入りして無役で無能で遊び好きのこの男の屋敷でも、中間部屋で賭場を開いていた。

さすがにお殿様の右近は顔を見せないが、用人の村瀬喜十郎老人が錢箱の番人をつとめている始末である。

「丁！」

「半！」

取ったり取られたりは時の運だが、盆莫盛の背後で一息入っていた二人連れが、隠かでない話をはじめた。

「見たかよ」

「何を？」

「裸芸者」

「へえ、そんなのがあるのかい？　どこの何てえ女だ」

「春乃家の小糸よ」

「けっ。馬鹿も休み休み言やアがれ。あの売れっ子芸者が、何を好んで裸になるんだ。裸どころか、男嫌いで通っている鉄火者で、噂じゃアまだ男知らずの生娘だと言うぜ」

「ふっふ、その評判の小糸が、素裸で浮き上ったんだ」

「浮きあがった？」

「そうよ。見たには見たが、生身の肌じゃアねえのさ。土左衛門と名前が変わっていやがる奴だ」

鳶の者らしい、若い男二人である。

「いつのことだ」

突然、横から口を出した奴がある。

「え？」

見ると、渡世人らしい小意気な男だが、凄いのはその頬の青痣と左の眼が白く濁った左半顔で、こう、じろりと睨まれるとあまりいい気持はしないようにできている。

「土左衛門の話だ」

「へい、つい先程の事なんで。あっしがここへ来る前の話でがしてね」

「そうかい……死んだか」

青痣男は、呟やくように言うのと、音もなくぬっと立った。

何か考えている。

そんな顔で外へ出たが、すでに夜は更けていて、空は一杯の星であった。

(や——?)

立ち歩いて、ツと聞き耳をたてた。——遠く、悲鳴のようなものを聞いたのである。

それは、ほんのかすかな声であった。

「空耳か……」

舌打して、反対の方角に一步……二歩……三歩……くると廻っ

た。やはり気になると見える。今度は走るように足早に歩きだした。屋敷塀が続いている。

裏手へ廻ると、潜戸があつて、その前に何やら落ちていた。草履である。

それも片一方で裏返しになっていたが、痣男は拾いあげて縁取りの表に手を当てた。

「ほう」

その草履には人肌のぬく味があつた。まるで、たった今脱ぎ捨てたかのようなものである。

「すると……」

呟やいて、いきなり路上へ右の耳をつけた。——妙な事をする奴である。

寸刻。

「ちよつ。馬鹿に仕事のはえエ奴だ」

苦い顔で腰をあげ、ベツと唾を吐いて、またふらりと歩き出している。

夜空を見た。

「声……草履……ぬく味……潜戸……小笠原屋敷……はあて、気に食わねえ」

ぶつぶつ呟やき続けている。

七 荒屋敷女

土塀が崩れて、荒れ放題になっている。

荒れ屋敷には違いないが、屋敷——といつても敷地を欲張った大名

や旗本の居宅ほど広くはなく、さりとて無論素町人の貧乏長屋であるはずもないのだ。

いかに豪商分限者であっても、門構え玄関は許されず、この荒れ屋敷は、たとえ狭くとも土塀があり、門があり、玄関があつた。

しかし、今は無住と見た。否。

無住というのは、この場合、正当な居住者がいないという意味で、荒れ果ててはいても、その気になりさえすれば、全く住めないというほどでもないであろう。

灯が見える。

人声もする。

人相の悪いのが二人、ぶよぶよの古畳の上に胡坐をかいて、するめの足をかじりながら茶碗酒を呑んでいるのだ。

「為兄哥、うまく行ったな」

と言つたのは、縞物を着た男であり、小糸を拐ったときの豆絞りの船頭でもあつた。

「あた棒よ、伊達や酒落で、お互い渡り中間の年期を積んだ訳じゃあるめえ。腰元拐いなんざアお手のものだアな」

と答えたのは、紺看板の中間姿、木刀を背に廻した毛脛野郎である。「ふふ、彦為七の悪党中間三人組か。しかし、彦八の奴アかわいそうな事をしたな。墓荒しはうまくやったが、途中妙な奴に取っつかまってさ、お蔭で旦那にズドンと食らわされた」

「桑原桑原、一人頭千両の仕事だてえから、喜んで子分になったが、しくじったら仲間でも容赦なく殺す旦那だ」

「時に、為七兄哥、女アどうする」

「へへへ、気になるかい」

「ふっ。自由にしようてんだろう」

「あた棒よ。おい、七五郎、お前は姫様芸者といわれた小糸小町をよ、たっぷり楽しんでいる」

「ちえっ」

「へへへ、わかったか。今度ア俺の番だ。不服はあるめえな」

「勝手にしやがれ」

「勝手にするよ。へへへ……どりや、ちょっと様子を見るか」

よろりと立ち上った。

裸蠟燭を左手に持って、隣り部屋へ一步、二歩、足を踏み入れる。

隅。

腐りかけた床の間の隅に女がいた。豆絞りの手拭で猿轡をかませ、両手を後手に縛りあげてある。

乱れはしたが屋敷島田で矢絣縮緬、立矢の帯、懐剣と道具だてが揃っていた。

「へへへ」

その前に腰を踢めて、紺看板の為七が、汚ないダミ声で笑った。

「琴絵さん——と来らあ。へっ、気の毒な事になりやんしたね。なあに心配はいらねえ、ただ懐中の鏡を頂戴して、おあと、ちよっとうれしがらせてやろうというだけの事だアな」

手が息づく胸を探る。

「あっ」

途端に、どしんと尻餅をつきアがった。女は足が自由であり、気丈に、為七の脛を蹴ったのである。

「この野郎」

顔を歪めて、起き直って、為七中間はペロリと分厚い唇をなめた。

「小味な真似をするじゃアねえか。おい琴絵、見損なうなよ」

噛みつくように言って、左手の蠟燭の焰を女の鼻先に近づけている。

「こいつで一なめしてやろうか」

かなり冷酷な男とみえる。言うだけでなくいきなり、形のいい鼻の頭を裸蠟燭の灯でペロリとやった。

「うっ」

悲鳴が、猿轡の奥で、陰にこもった音となった。

「へへ、こいつアおもしれえや」

と、またペロリ、良心も善意も母親の胎内へ忘れて来た男である。

女は激しく身を揉んだ。

鼻の頭を焼かれては、我慢も羞恥もないのだろう。思わず足を開いて横向きに倒れたから裾を蹴って、下着が乱れ、雪のように白い下肢がのぞいた。

呻いている。

眼が歪んだ。

「わかったか。おとなしくしやアがれ」

「為兄哥」

と次の間から七五郎が声をかけた。

「何だ？」

「女を気ままにするのは後の事、その前に鏡を抜いておかねえと、旦那にドヤされるぜ」

「けっ。わかってるよ。鏡ア身につけている。ちゃんと確かめてあるんだ」

黒縞子の帯の間に手を入れて、丸い小さな懐中鏡を抜きとった。

八三ツ鏡

「――女ッ」

背後から不意に声をかけられて、お蘭は思わずギョッとなった。甲賀育ちである。

ただの女でない。

しかし、誰しも油断というものはあるのだろう。小町芸者小糸、越前屋の養女お千世の実父を探つて、これを突きとめ、三人目の娘琴絵の存在を知った。

例の懷中鏡が問題である。

いったいどんな祕密が隠されているのだろう。その謎を解こうとして小笠原屋敷に近づいたとき、潜戸から出た琴絵を襲う二人の男を見た。

七五郎と為七である。

その後を尾行して、今までこうして様子をうかがっていた。

まだ飛び出す時機でないと思ひ、しかし、為七の女体淫虐を黙視できず、次第によっては甲賀手裏剣を投げて……と、つまりは窺視の光景にのみ心を奪われて、背後への警戒を怠っていたのである。

ふり返った。

頭巾の侍が、ひとり冷然と立っていてその右手には短筒があった。

「動くな。動けば射つ」

「ふん」

鼻で笑ったが、お蘭は頭巾侍の声に殺気を感じていた。

「向うをむけっ！」

「あいよ」

「七五郎、為七！」

奥へ向つて鋭く呼んで、二人の悪党が飛び出して来ると、

「ただの女ではないようだ。後手に縛りあげろ」

短銃の狙いを崩さずに、用心深く命じている。

「――ちっ。どうしてこうへまばかりするのかしら……」

たちまち囚女となって自嘲するお蘭であった。

「痛いッ」

腐れ畳の上へ蹴倒された。

（ちきしょうッ）

頭巾侍の手が懷を探った。

「ほう」

と言ったのは、お蘭の懷から、十万手裏剣をつかみ出したからである。

「甲賀者だな。ふーむ」

頭巾の奥の眼が、妖しく光ったようである。

「旦那、琴絵の鏡」

と横から中間姿の為七が手を出した。受取つて裏を返す。

「うむ、増長天か……」

鏡裏の飾り彫刻は、これまた帝釈天の外將四天王の一人で、鬼形の従者をはべらせた増長天の像であった。

右手に剣を持ち、甲冑の上に天衣を着している。

「これで鏡は三つだ」

と、古畳の上に並べて見せる。

多聞天鏡。



増長天鏡。
広目天鏡。

「多聞天は小糸の手に、増長天は琴絵の手に、そして広目天鏡はわしが父から譲られて持っていた。残る一つは、持国天鏡に違いないが、彦八の奴め、へまをやりおって、他人の手に渡ってしもうた」

「旦那」

「何だ、七五郎」

「あっし達ア、いわば小悪党でさア。時にはへまもやりやす。そのたびにズドンでは、命が幾つあっても足りやせん。」

彦八の二の舞は願げえ下げですぜ」

「心配するな。彦八は小悪党だが、

お前たちよりは頭が鋭い。四天王鏡の祕密を、教えもせぬに嗅ぎ出した奴だ。——が、言った通り根が小悪党ゆえ、捕えられたらへなへなと口を割りかねん。だから射った。不服か？」

「へ、いえ、滅相もござんせん。あっし達ア約束の二千両さえ頂戴できれば、へへへ……まア文句はこ

「さいやせんので、へい。鏡の祕密なんぞア知りてえとも思いやせんよ」

横から、あわてて為七が口を出した。

「うむ、その心がけなら一人頭千両ずつ、二人共分限者になれるぞ」

「それから、旦那」

「何だ為七、まだ何かあるのか？」

「へへへ、あの女」

「琴絵か」

「へい」

「くれてやる。——が、ここから出すな。なるべく早いところ片づけてしまふのだぞ」

「へい」

人間の皮着た鬼共なのであろう。

「来やがれ」

為七中間は、次の間で生きた心もない琴絵を引っ担いで、さらに奥へと姿を消した。

お蘭は見送って唇を噛んだ。

何がはじまるのか、火を見るより明かである。

「ああッ」

狼嚙を剝いたのであろう。奥の間から、肺腑をえぐるような悲鳴が来た。

琴絵の悲しい絶望の声であった。

「ちきしょう」

「黙れッ。お前には別の用がある。飛んで火に入る夏の虫だ。彦八から鏡を奪った痣男——彼奴もその身のこなしから甲賀衆と睨んであ

る。同じ仲間なら存じておろう。——ふふ、眼底に刻んだあの顔、似顔を描くぞ。痣はつくり物かも知れぬで、痣のあるのと痣のない顔と……女ッ、八つ裂きにしても、これから描く似顔絵の男が何者か白状させずにおかぬのだ」

頭巾侍は、短筒をお蘭の鼻先に突きつけて毒々しく言った。

九首と雨

「おい、為兄い」

と七五郎が破れ襖を引きあけて、奥の間へ顔を出した。

落花狼籍の現場である。

小笠原屋敷の腰元琴絵は、屋敷島田の髪も海藻のように乱れ、櫛簪もはねとんで、すでに気力も消失していた。

黒縹子の帯が解けて、古畳の上を蛇のようにうねくっている。

矢絰縮緬の屋敷着は、引き裂かれ剥ぎとられて、帯の上に投げすてられ、肌もあらわ、胸もあらわ……その盛り上った胸が、大きく上下に息づいて、激しい抵抗の疲れを物語っている。

「ちよッ。これで二度目だッ」

為七が妖しく歪めた顔を振り向けてどなった。

「何が？」

「何がだと——この野郎ッ！ こっちは、まだ仕事が済んじやいねえんだぜ。これからという時に邪魔な野郎じゃねえか。手前は船頭に化けたあの晩、小糸芸者を思いのままにしたろうが。けッ、ちッとは氣を利かしアがれ！」

「へへへ」

「こいつ」

「待った兄哥。旦那の御指図だぜ」

「えっ。旦那がいけねえと言うのか？」

「さにあらず」

「じれってえな。いったい、何だと言うんだ」

「用があるよ」

「ちょっ！」

「女ア縛って転がしときアいい。おれたちは中庭へ穴を掘るんだ」

「穴？」

「そうよ。あの女、甲賀者だとか言う、あの女を埋めるんだとさ」

「殺ったのか」

「違う。首まで埋めて、似顔の男を白状しなきゃ、坊主に剃ったり、

片耳削いだり、てえへんな折檻になるらしいぜ」

「ほう。そいつアおもしろえ……よし」

と起き直った。

「手伝ってくれ。もう一度ふん縛っておく」

「合点」

動く気力もない琴絵を縛り直すと、二人は中庭へ出やアがった。

掘りはじめる。

一尺——二尺……三尺——

暗い裸蠟燭の光を頼りに穴を掘って、その前にお蘭を引据えた。

「着物を剥いで抛り込め」

と相変らず頭巾のまま、冷酷に言う短銃侍である。

「へい」

「合点」

と、こういう仕事なら、駄賃を払ってでもやりたい顔の二人が、荒
荒しくお蘭を剥いだ。

「ありやっ！」

「へへえ、こりア驚いた。旦那、この女ア妙なところへ入墨してます
ぜ」

「入墨？」

「へえ。両方の乳に、これア髑髏の入墨だ」

「兄哥、腋の下にもあるぜ」

「本当だ。凄げえ！ 何だかこう、ぞくっとなるような凄げえ髑髏で
やがる」

丹州隠密行の怖ろしい烙印——黒沼闇斎の祕法毒彫髑髏（第二話、
第二巻五月号参照）とは、むろん知るよしもない奴らである。

「女忍者だ。油断するなよ。そんな物に構わず抛り込め」

「へい」

と穴へ突き入れて、後手に縛ったまま土を落した。

踏みかためる。

「すぐには降参する女でない。四、五日は放置して、気力の衰えを待
つが良策じゃ。お前たちはクジを引いて、交替で見張れ」

「へい」

二枚の似顔絵、痣のあるのと、痣を取ったのと、二枚の似顔絵を、
土中から首だけ出したお蘭の眼の前に置いた。

「ふふふ」

笑って三人は屋内に引揚げた。

雨だ。

悪い事に、明け方から雨になった。降ったり止んだり、翌日も、翌

翌日も、終日雨が続いてしまった。

首ざらしのお蘭。

雨ざらしのお蘭。

三日後の夜は月が出た。時には激しく、時には弱く、時には小止みになったりした雨もやっと遠のいて、雲間から明皓々の月が顔をのぞかせたのだ。

水溜りができている。

お蘭は、その水溜りに顎まで沈んで、凄惨な姿であった。

「どうじゃ、女っ。……ふふふ、まだシラをきる所存か」

頭巾侍がのっそり姿を現して、生色のないお蘭の顔を睨みつけた。

「この上強情を張るとあれば、耳を切り鼻を削いでくれるぞ」

と脇差を抜いて、刀身の横っ腹で頬を叩いた。

唇が白く荒れて来ている。

頬にもすでに感覚がない。

「知らぬ」

それでも、かぼそい声ではあったが、お蘭はこの逆境に負けなかった。

（——くそっ！）

頭巾侍の眼に、一瞬、妖しい血走が見られた。

「化け物ヅラにしてくれるぞ」

と右手の脇差をふりあげる。

万一を頼みに、お蘭が耐え抜いた人——鳴子善四郎の出現を見たのは、この時であった。

「あっ！」

叫んで、ポロリと脇差しを落したのは、振りあげた瞬間であり、こ

れは、右手の丈なす雑草の向うから、黒い縄が電光のようにのびて、頭巾侍の右手を激しく叩いたからである。

「おっと、懐へ手を入れるな。短筒を取り出すより先に、八方手裏剣が飛ぶぜ」

蘇生の思いで聞く、威勢のよい善四郎の声だ。

「へへへ」

ぬっと立ち上った。青痣で、左濁眼のあの男である。

「教えてやろう」

と歩いて来て、

「贖金使いを探るために、こんな顔で賭場歩きをして来たが、ほれ、こうして嵌め込みの魚の鱗を取れば、すすしい綺麗な眼だ。痣も拭えば消える」

たちまち善四郎の凜とした素顔になった。

「覚えておけ。甲賀組鳴子善四郎だ」

一件落着である。

善四郎の覚書の一節を見よう。

“埋れ草”

——お蘭帰らず。危難を感じず。幸い手に懷中鏡あり。特異の彫刻なり。御府内鏡師を探し歩き、今は退隠せる鏡翁無碌斎を発見す。

四天王鏡、無碌斎の作なり。聞く、すなわち元勘定奉行与力柳原典膳の依頼なり。典膳、曲事あり。蟹居を命ぜられ、後急死す。家断絶、捨屋敷荒れ果てて梅の森にあり。手掛りなきやと荒屋敷に忍び、お蘭の急を救う。僥倖なり。

御鎗奉行同心能勢左内を捕う。

左内口を緘して語らず。然れどもこの男、同じく元勘定方同心能

勢左十郎の嫡なり。左十郎、榊原典膳の配下にして、記録を調べたるに、佐渡に使いして金塊江戸送りの事あり。二十年前の事にして典膳、左十郎その宰領たりしが、途中賊に襲われ金塊盗難の屈をなす。

偽りて埋蔵せるならん。

推測的を射たり。左内ついに包み切れず白状に及ぶ。すなわち、典膳、左十郎相はかりて金塊を横領せるが、後日の発掘を期していずれかに埋没す。典膳、正室の他に愛妾二人あり、その一は芸者花竜にして一子を産む。すなわち小糸なり。他の一人は茶屋女お園なるが、やはり一女をもうけ、千世と名づく。正妻琴路にも一女あり琴絵すなわちそれなるが、典膳、金塊埋没の個所を四ヶの鏡に刻みその一を左十郎に与え、他の三鏡を、それぞれ三人の幼女の肌守りとして、家宝なりと称し手渡したるなり。

典膳、然るに急死す。

天、曲事を許したまわぬか、前後して左十郎また没したり。然れども、左十郎生前に、金塊の秘密及び四鏡の事、一部文書にして書残せり。嫡男左内長じてこの文書を読み、典膳の遺児を探る。典膳の遺児、妻妾、鏡の秘密を知らず。すなわち探り当てて奪う。

鏡の秘密、極めて幼稚なり。

予発見す。四鏡に光を投じ、壁面に反射せしめるに、裏面に刻める四天王に隠し彫りあり、その微妙なる凹凸、投影となりて壁面に浮かぶ。文字なり。

持国天鏡——箱根山……東方守護神
多聞天鏡——三本松……北方守護神
增長天鏡——三十尺……南方守護神

広目天鏡——二十尺……西方守護神
解く、即ち「東箱根、北三本松より南へ三十尺、更に西へ二十尺」となるなり。——その下に金塊あらん。
覚の為、善四郎一筆す。

(第十五話 終り)

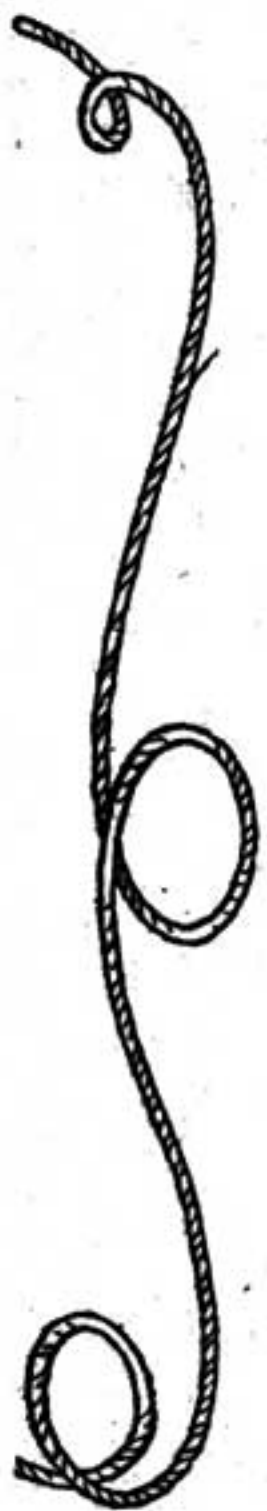
次号予告

隠密覚書 第十六話

裸女小判

島本春雄

なめらかな象牙の肌に逢魔が時の影さす時、
人の子の妄執を越えて輝く黄金の心を読むは
誰ぞ？ お蘭善四郎の動きはいかに？





娘忍者始末記

蛇^だ林^{りん}洞^{どう}秘^ひ文^{もん}

南条慎一

宇佐美健・画

鬼佐兵衛

忍者といえは一時は伊賀の上野あたりを中心に、ずいぶん多くの忍者が輩出したものでございます。このあたりに発祥したので、伊賀者などと呼ばれ、のちのちには將軍家のお庭番として重宝されるようになりました。しかし、栄枯のならいはこの社会も御多聞にもれず、紀州の八代吉宗將軍の御代となつてからは、將軍の疑ぐりぶかい性質もあつて、

「伊賀者は腹が黒いから、のちのち禍根を残すことがあつてはならぬ」

というので、だんだんと遠ざけられるようになり、かわつて紀州の忍者を採用になつた。しかし、どのみちこの頃になりますと、幕府の礎もかたまって、諸国の動静もおちつくいきおいにあつたので、細作（隠密）としての忍者の需要も、ひとところほどではなくなつていたのでございます。

特集 女間諜・女忍者

そうすると、忍者というものは、もともとそう身分の高いものではなく、正式に任官する途も閉ざれていましたので、大半はちりぢりになり、山奥に逼塞するなど、末路は概してめぐまれなかったようであります。

百々地三太夫などという人は、伊賀流の元祖ともいわれ、あとあとその流れを汲む頭梁がかなりあったのですが、時世がそうなつては頭梁として一家をなし弟子を取ることにもむずかしく、いつとはなく世間から忘れられてゆきました。伊賀の上野や紀州あたりは山の深いところ、少し入れば、將軍家の御威光もとどかぬ天嶽をめぐらしてありますから、そうしたところに立て籠り、なんとなく世をすねて、天下の一波乱を待ち望んでいるような手合も、かなりあったのでございます。

鬼佐兵衛もその一人でございました。山中ふかく籠つて隠者のような生活をしたがら、胸中ひそかに、ある一念を研いでいたのでございます。

というのは、この鬼佐兵衛には、一つの執念のようなものがあつた。この鬼佐兵衛の縁辺につながる忍者の一人がふとしたことで將軍家に手討にされたのでございます。そうしたことに加え、伊賀者をうとんじて紀州の忍者を採用になったという以前の事情もからみ、鬼佐兵衛としては、ことのほか、將軍家に怨みをふくみ、

「いまに見ろ」

おのれの生のあるうちに、なんとか報復したいと、固く心に念じていたのでございます。

鬼佐兵衛は、もともと非常に執念ぶかい性質でございますが、その一面を物語る、こんな話がある。

忍者の鍛錬というものは一通りのものではないが、わけても色欲のみちは、固くこれをいましてある。身うちに色欲の念動く時は、たちどころに術が破れ、忍者として破滅を来すとされている。鬼佐兵衛は、何事も徹底しなければならぬ性格から、この一事を固く胸にきざみ、

「よし。色情の禍根を絶つてやろう」

そう思いたつと、無残にも、みずからの陽物を損なうことを敢てしたのであります。これが鬼佐兵衛二十五の時、じらい四十才まで十数年のあいだ、女性の肌一指も触れたことがないと申します。

忍者としては当然のこととは申せ、他のたいていの忍者は、使命に臨んでは固くその戒律をまもりはしても、平素はさして常人と変るところがない。それを、鬼佐兵衛は、四六時中のいしめとしたのでございます。

この鬼佐兵衛が四十才の時、里で一人の拾い子をしました。誰が捨てたのか、生後八ヶ月あまりを経た、可愛らしい女の子でございす。

「これも天のひき合せかも知れん。連れかえって養育するとしようか」

★鬼佐兵衛のきびしい手で深山に育つ娘忍者が恋知りそめた時……

彼はその赤子を山の庵につれ帰ったのであります。あるいは、この時すでに彼の胸中には、ある一つの計画が芽ぐんでいたのかも知れません。

彼は元来頭梁たるべき人でしたが、前に述べましたような事情で、いまはまったく天涯の孤客、彼の身の上に万一のことでもあれば復讐の意図も中絶してしまふ。彼としては、せひとも、忠実な後継者がほしいところでございました。そして、天が、彼にその後継者をあたえてくれたように思つたのでございます。

「よし。この子を立派な女忍者に育てあげよう」

そう決心した瞬間から、彼は異常な情熱をこの事業に傾けはじめたのでございます。

耶奈

その女の子は耶奈と名づけられました。人里はなれた山奥、しかも男手ひとつで乳呑児を育てようと言うのですから、なみたいいの事ではありません。しかし、佐兵衛には異常な執念がある。まして、その女の子を、ありきたりの娘に育てようというのではなく、女忍者として育てようというのですから、考

えようによつては、かえつて好都合だったかしれません。

かくて耶奈は、佐兵衛の苦心により、折しも授乳期にあるけものの乳や、木の実の漿液を糧として、とにかく發育をとげていったのは、稀有のことでもございました。むろん、その間には、精分のつよいけものの乳や果汁のために下痢をするなど、思いもかけぬ障害はありましたが……

やがて耶奈は乳をはなれ、そして三才になり五才になる。山の精氣を吸い、鳥獸を友としながら耶奈は、しだいにたくましい野性の子として發育してゆきました。そして十四才のころには、とどこおりなく、めでたい女のしるしも見られたのでございます。

このころになると佐兵衛は、耶奈について「おや？」

と思うようなことがありました。いかなる親の子か、耶奈という娘は、そうした野性のかんばせのうちにも、ろうたけたというか、都にもまれな美貌の片鱗を徐々として見せはじめたのでございます。ことに、山野の風にさらされつつも、その雪をあざむくような膚の白さは、生得のものとは言えあやしいまでに冴えわたり、切れ長に愁をふくんだまなざ

し、丹花のくちびるなど、凜とした氣韻のうちにも、男心を蕩かさずにはおかぬ風情がございます。丈なすみどりの黒髪を、いとも無難作に背のあたりに波うたせているさまは伝説にきく人魚もかくやと思われるばかりでございます。そして、身につけている、男わらべのまとうような粗衣にもかかわらず、窈窕たる肢態のなまめきは、隠すすべもございません。言葉づかい、物腰にいたしまして、他日をおもんばかつて、佐兵衛がしつけをきびしくしておりましたので、野卑にわたるところは微塵もなく、みやびたものすら秘めております。あけくれ、佐兵衛が文学や教養一般を講じ、また女らしい立居ふるまいを強調しておりましたので、いつしかそれが身についたのでございましょう。このころ、佐兵衛はすでに養父としてではなく、頭梁として、そして至上の絶対者として耶奈に君臨していたのでございます。

「耶奈」

佐兵衛がハガネのように強い声で呼びますと、耶奈はどこで何をしておりますとも、たちどころに佐兵衛のもとに馳せ、

「はい。頭梁さま」

地面に膝をつかえ、さかしげにすすろな眼

をみはって、佐兵衛を見まもります。服従の化身とでも申しましょうか。佐兵衛に対しては彼女はまったくおのれというものを失ったように従順でございます。

「これでよし」

佐兵衛はひそかに満足の笑みをもらすのでございました。

佐兵衛が耶奈を訓育するその態度は、親としての愛情ではなく、耶奈を、自分の意のままに動く一個の女忍者として養成するためのあくなき執念でございました。その点に関しては、耶奈は魂をうばわれた人形、佐兵衛の意志をその意志として疑わない、一個の人形であつたとも申せましょう。その彼女に対し佐兵衛はすいぶんとムゴい訓練をいたします。たとえば、夜分就寝のおりにも、一枚のやわらかい夜具をすら、耶奈にあたえるではない。土間にいちまいの藁をのべ、その上にゴロ寝をするのが、ながいあいだのしきたりでございました。寒中などでも、トロトロとホダ火の燃え残るイロリのかたわらに藁をのべるくらいがせいぜいで、かけものとてもあたえられません。そのかたわらに、つつましく横臥して、耶奈は寝につくのでございます。膝のところまでしかない、男わらべのよ



うな粗衣の裾を固くあわせ、姿勢正しくねむる耶奈の姿こそ、あわれでありました。そして、彼女が十八才になりましたある夜、ある出来ことが起つたのでございます。

煩悩

その晩も、例のようにして耶奈はねむって

いたのでございます。ところが夜半、そのまくらべに、いつあらわれたのか、凝然としてうずくまっている佐兵衛の姿が見られたのであります。そして異様なのは、じっと耶奈の寝顔をのぞきこんでいる、佐兵衛の、その常でない表情でございます、その瞳は熱気をおびてキラキラとかがやき、ひたいにはアブラ

特集 謀間女、忍者女

の汗すら、浮いております。そして鼻孔のあたりをヒクヒクと動かしているのは、おのずとたかまる呼吸を、けんめいに泳いでいるのかと思われまふ。

耶奈とて、いかに深く熟睡してしようともかすかな気配、ほとんど針のおちるようなかすかな気配にさえ、さとき眼をさますだけの訓練は、佐兵衛によって受けております。

それにもかかわらず、いまは、佐兵衛のまくらべに迫るのも知らぬげに、しずかな寝息を立てておりました。その寝息が、まったくききとれぬくらいにかすかなのも、忍者としての訓練がそうさせるのでございましょうか。

それはそれは端然と静かな寝ざまでございます。耶奈が、佐兵衛の気配を察知できなかったのは、やはり佐兵衛のほうが、忍者としては、格段に術がたけていたからにほかなりません。もつとも、佐兵衛にしましても、いまは身うちに疼くほんのうの欲に、その術の破れを防ぐのに、やつとではありましたが、ひきつづき、くい入るように佐兵衛は耶奈

の寝顔に見入っておりますが、ややあつてその顔をすかすかに耶奈の顔にちかづけ、いとおしげに眼をほそめて耶奈の呼吸を嗅いでいました。

「やな」

と呼びました。むろん、声を出して、呼んだわけではございません。口の動きによってそれと知られるばかりでございます。

察するにこのとき、佐兵衛は忍者としての自制も、頭梁としての衿持もわすれ、一介の凡夫として、衝動のおもむくままに、耶奈の胸の上に崩れたいおもいだつたにちがいありません。

しかし、さきにも申し述べましたように、彼は忍者を志した若年のみぎり、みずから男子の機能を絶ち切っております。いかに、意馬心猿の荒れ狂うとも、しよせん、それを行動に移すすべはないのでございます。

この時の佐兵衛の顔には、なんとも言えない痛恨の表情が、あらわれておりました。そのまゝ、彼は、頭髪をかきむしらんばかり、気配を殺したまゝ身を悶えておりましたが、もう一度、双の眼をくわツ、と見ひらきますと、絶叫するように大きく口をひらき、しかも声を殺したまゝ、

「や、な……」

と呼びかけたかと思うと、あとは頭を抱えたまゝ、

「あ、あ、あーっ」

と、声のない慟哭に肩をふるわせ、身を悶えるばかりでございました。

その夜はほとんどまんじりともせず、佐兵衛は耶奈のまくらべにうずくまり、あかずにその寝顔を見つめておりましたが、あけがたちかいひかりが戸のすき間からさし込むころ憔悴しきつた様子で、踰跽としておのが寝所へと退いていったのでございます。めんめんとつきせぬ、うらみをば残して……

思うにもし、佐兵衛に正常な男子のいとなみが残されておりましたなら、彼は永年いたきづつけた復讐の計画の挫折をもかえりみずその余生を、情念のほむらと燃えあがらせたかも知れません。しかし、それがかなわぬゆえにこそ、なお復讐の一途に生きなければならなかったとは、なんたる運命の皮肉でございましょうか。

そうした懊悩の一時期が去りますと、耶奈に対する佐兵衛の態度は、かえって、一見、冷酷無残とも思われるほど、きびしいものを加えてまいりました。おそれおののきつつも、

それを無上の命令と帶して、ひたすら佐兵衛につかえにつかえる耶奈こそあわれでありました。ちょうど、そうした頃おい、佐兵衛は

よんどころない用事から、数日にわたって、山を下り、里へまいることになったのでございます。それについて佐兵衛は、耶奈を帶同すべきか否かについてずいぶんと考えめぐらせたのでありますが、思案のはてに、結局耶奈は山の庵に残してゆくことに心を決めました。耶奈とて、いつかは佐兵衛のもとをはなれ、都のただ中にはなれてゆく女性であり、それについては、一応都の風も身につけさせておかなければならぬ、とは思いつつも、成熟しきった美しい耶奈に、誘惑の手がのびないでもない事を考えると、佐兵衛はわれにもなく嫉妬のために心が千々に乱れ、とてものこと、耶奈を山の庵から出す決断がつかなくったのでございます。

「耶奈。心してわしの帰りを待て。よいかな。わしはその身ここになくとも、つねにそちの上に心を通わしておるぞ。よいか」

「はい。頭梁さま」

しかしその留守中に、思いもかけぬ事態が発生しようとは、さしもの佐兵衛も知る由もありません。

迷い人

佐兵衛の発ったあと、耶奈は神妙に留守居をしております。しかし、佐兵衛という、四六時中あたまからのしかかっているような大きな威圧物がいなくなると、耶奈はふと、呪縛から放たれたような、かろやかな心の羽博きを、おさえかねるのでした。季節はちょうど六月、万物はパツと発光して、山のみどりも燃えるばかりでございます。男を知らず、およそ色情はいやしきもの、よしまなものとして固く佐兵衛に言いきかせられている耶奈ではありますが、おのずと身うちに脈うつ青春の血潮は、いかんともしようもありません。

平素は抑圧されているそれが、佐兵衛という威圧物のいなくなったとたんに、せきを切ったようにあふれ出したのも、当然のことわりというべきでございました。

山の庵のすぐうしろに小さな滝があり、それはさらにいくつかの岩清水に細分されて、チヨロチヨロと流れ落ちていたのであります。が、滝壺からすこし外れたところが、あさい美しい淵をなしております。佐兵衛のいない屈託のなさから、

「そうだ。ひとつ浴みをしようかしら」と思いたったのでございます。

耶奈は、淵のほとりに着物を脱ぎすてますと、浅瀬を踏んで淵のふかみへと歩みます。もし、そのさまをかいま見る者があれば、照り映える山のみどりをうつすその裸身のうつくしさに、恍惚として眼をみはらずにはいられなかったであります。しかし、訪なう人としてない山中ぐらしの気やすさは、誰はばかりとなく、思いのままに四肢をのべることができません。

耶奈は股ほどの深みへ歩みますと、「おおつめたい！」

ひとりごちながら、思い切ったようにざぶりと身を沈めます。じいんと澄み切った山の水が、全身に泌み入るつめたさはきびしくも快よく、身うちに燃える心熱をば、しずめてくれるのでございます。水のつめたさになれた彼女は、さらに興を唆られたのか、からだを倒して、淵の中流へユラリと泳ぎ出しました。水練はもとより自在でございます。泳ぐかと思えば反転し、さらに次の瞬間には白いあなうらをひるがえして水を蹴るかと思えば水中深く姿を没するなど、変化自在の妙味を見せておりましたが、ややあってさすがに疲

労をおぼえたのか、浅瀬のところで、紗のよう
うにうすいうすい水の膜を衣がわりに、まば
ゆい天日をまともに受けて、おそれるけしき
もなく仰臥したたのでございます。そのま
ま、恍惚として時のたつのをば忘れていたの
でございます。その時でございます。測から
少し距てた茂みの中で、けものの気配かとも
思われる、かすかな葉ずれの音がしましたの
は……。

耶奈はハッとなって、思わず仰臥していた
のを反転し、身をば臥せるかたちとなったの
はさすがに女の本能でございましょうか。そ
うしておいて、鋭く茂みのあたりを窺うその
まなざし、身の構えには、さすがに忍者とし
て身についた修練のほどが、不意のうちにも
うかがわれます。

その時、茂みをガサガサといわせながら、
そこからよろめくように出てまいりましたの

は、獵人かとも見える一人の若者でございま
す。そのまま、耶奈をみとめて、二三步ちか
づきかける。耶奈は、

「……………」

無言のままキッと男を見すえ、もうこの時
は濡れた全身を拭いもあえず、すばやく着物
をまといつておりましたが、この不意の出現者
の出方によつては容赦はせぬぞ、といったき
びしい気迫が凜としてほとばしります。

が、どうしたことでしょう。その若者は、

「おお」

何かもの言いたげに、耶奈をさし招くよう
な様子をしました。そのまゝ足が棒だちに
なったかと思うと、バツタリその位置に倒れ
伏しました。

「手負い？」

はじめて耶奈は気がつき、なおも警戒の念
をゆるめぬまま、そろそろと若者にちかづい

てゆく。そして、倒れている若

者の顔をのぞきこむなり、

「まあ」

と、いたましげな声をあげま
した。人の顔を見た安心からか
この時若者はすでに気を失って
いたのであります。そして、接

近してはじめてそれと知られたの
ですが、足をすべらせ岩から落ち
てもしたのか、腰のあたりにべっ
とりと血の斑痕がひろがり、着衣
の上までしみ出してあります。よ
ほどの深傷らしくそれまで張りつ
めていた気がゆるむと同時に失神
してしまったものでございしまし
う。

耶奈は大変苦心のあげく、気を
失っている若者を肩に担うように
して、庵まで連れ返り、創膏を出
して血どめとか応急の処置を施し
ます。それから数刻のあいだ、若
者は気を失ったままでしたが、傷
の手当と同時に施した気つけぐすり
が効を奏したのか、まもなくハッ
と気がついて眼をひらきます。鬼
佐兵衛自慢の秘薬だけあって、
傷の痛みもよほどすらいだ様子
です。そして気がつくなり、まだ
焦点の定まらない視線を、心も
となげに漂よわせておりましたが、
視点が定まると同時に、そこにち
かちかとのぞきこんでいる耶奈
の顔を発見して、

「おお！」

とつさに、途切れていた前後の記憶を呼び



特集 女間諜・女忍者



水戸

醒まそうとするようでしたが、
今度は、

「鉄砲が、鉄砲が……」

言いながら半身を起しかけ、
起しかけると同時に痛みを覚え
て、

「うーん」

と、苦痛の叫び声をあげま
す。察するに、転落と同時に、
愛用の銃を谷底に失ってしまった
のでしょう。そうした若者に
耶奈は、

「静かに。動いてはなりません」
と、制します。

いったん気がつく、若者は
その若い体力がものを言って、
意外に早く意識もたちなおり、
遭難前後の事情や、自分の素姓
を明しました。里の獵師で千代
吉と言ひ、親も妻もないまった
くの一人身であること、それか
ら獲物を追う獵師山を見ずで、
獲物に気を取られるあまりつい
不覚を喫したことなどを、まだ
時おりは疼き出るらしい傷の痛

みに耐える風情で、ほつりほつりと語りま
す。そして、

「あの鉄砲がなくなつては大事だ。父親ゆず
りの大切なものです。さっそく探しにゆかな
くては……」

と、今にも身体を起しそうに、視線を戸外
へ移すのです。

「お待ちなされませ。それよりいまは傷の養
生が第一、こんな山奥で鉄砲を盗む者もあり
ませぬ。およその場所さえわかつていれば、
のちほどあたたくしが見て来てあげましょう」
「すみません、娘さん……」

千代吉はじつと眼をうるませながら、
「いろいろ、お世話になつて」

いまさらのように、まぶしく、耶奈の顔を
あおぎ見ます。まぶしいのは、耶奈のほうも
同じでした。相手が怪我人とは言え、千代吉
のような若い者と、二人きりでこうして言葉
を交すのは、はじめてのことです。それに、
千代吉は意外に凛々しい目鼻だちの若者でこ
さいました。じつは、耶奈は千代吉の知らな
いあいだに、恥かしいことをしていたのでご
ざいます。怪我人をいたわる一心からではご
ざいますが、気つけ薬をばあたえる時分に、
まったく気を失ってそれを吞むすべを知らぬ

千代吉の口に、みずから水をふくんで口移しにふくませたのでございました。

その時の、生れてはじめて味わう異様な感覚が甦って来て、千代吉が語る唇の動きを見るにつけ、なんとも言えない恥かしさで、思わず伏し眼がちに、頬をあからめるのでありました。

さらに千代吉は、一日、二日と寝たままの養生をする。食欲もつき、体力の回復はしるきものがありますが、まだ起き上るのがやつとで、立つことも歩くこともかたまりません。

しかし、耶奈は千代吉から彼が遭難した地点の説明をきくと、みずから、遺留された銃を探しに出かけました。たいへんな苦心のすえ崖の斜面の、ちようど柵のようになっておりますところに、それを発見したのはめでたい限りでございます。三、四日するうちに、千代吉はどうやら、耶奈の肩を借りて歩けるようになり、さらに杖にすがって歩けるようになりました。すると彼は、

「娘さん。あんたのようにキレイな人が、どうしてこんな山奥に一人でいるのです。なんだか、お伽話の世界にいるようだ。私は、もう里へ帰りとうなくなつた」

「あれ、そんなことを言つて……」

「冗談ではない。ほんとうなのだ。しかし、あなたはいったい誰なのです。そして、どうしてこんなところに？」

そう言いながら、千代吉は、何か嗅ぎ出そうとするように、家の中を見廻します。が、この頃から、耶奈はそわそわとして、何かに脅える様子でありました。もう、鬼佐兵衛が里から戻ってくる頃なのです。その前に、なんとか、千代吉を立去らせなくては……それにこれ以上、千代吉と二人きりでいては、二人のあいだに何か起りそうでならなかつたのです。

結局、千代吉は耶奈にうながされ、途中までおくられてまだ不自由な手足をひきずるうちに、里へ下つてまいります。なおも千代吉が耶奈の身の上を問い質すのに、

「これ以上、何もたずねないでくださいませ。そして、忘れてくださいませ」

「いや、忘れられぬ。私はまたくる。きっと来ますぞ！」

「では、お氣をつけて、さようなら」

耶奈はすばやく身をひるがえすと、灌木の茂みに身を没します。千代吉はそのすばやい身のこなしを、あっけに取られたように見送っていました。その姿の見えなくなつたあ

と、山にひびく大きな声でもう一度叫びました。

「娘さん。私は必ずやつて来ますぞ。待っていて下され！」

話の結末を急ぎましょう。千代吉はまたやつて来たのです。しかも、鬼佐兵衛が、山の庵に帰つて来たあとで……耶奈の氣転で、どうやら鬼佐兵衛に気づかれずにすんだことこそ、もつちの幸いでした。しかし、鬼佐兵衛ほどの者の眼をのがれて、逢瀬をもつことはかないません。顔を見るより早く、

「いけない、早く帰つて」

耶奈に促され、千代吉はそうそうと立去ります。そんなことが、二度、三度——しめし合せたわけでもないのに、ふたりが忍び逢うその場所は、あの、最初の、淵のほとりでありました。そしてその逢瀬は、まだ契らぬ、つかの間のはかない恋でありました。ところが、とうとう鬼佐兵衛の知るところとなつたのでございます。鬼佐兵衛のおどろき、怒りそして嫉妬の逆上——そして彼は、耶奈を、庵のちかくにある洞へ、いましめのまま封じこめてしまったのでございます。

群蛇の棲家

ひるかよるか、夢かうつつか、それさえさだかにはわかりません。周囲にあるものとはと言えば、刳初さながらの、さいげんもない闇のひろがりだけであります。

あまりにもながいあいだ、こうした闇の底に閉じこめられていたなら、人は、みずからの生をすら疑わずにはいられなかったでしょう。そしていまの、耶奈がそれでした。

「いったいあたしは生きているのかしら。それとも……」

すでに、まとまった思考力はうしなわれていた。ただそうした、うつろな思いから思いのあいだを、もうずっと前から、どうどうめぐりしているのをごさいました。

「ここは人の世なのか、それとも、あの、話にきく冥府とやらいうところなのかしら」と――。

しかし、耶奈は死んでいるわけではありませんでした。なにより、彼女のからだはそのことを知っていました。時おりおぼろになりかける意識を、するどく呼びもどすもの、それは、彼女の糸まとわぬ裸身のやわ肌――その背をがっしり噛んでいる、巨大な石の重量感です。

その岩肌はヌメヌメと濡れ、死びとの肌よ

りもつめたい。そして彼女の全身はいく重にもいく重にも巻きつけられた荒縄で身動きどころか、呼吸さえもできないほど、しっぺと岩に固定されておりました。それにしてもそのさまの、なんという無惨さよ。もしここが人の世であるなら、そして彼女にうつせみのいのちがかようているなら、むしろ深い闇のとばりに、いっさいが覆われていることこそ倖せてございました。その全身をぎりぎりと緊縛している縄の編目の、なんというむごたらしさ――。それはやわ肌を牙よりも鋭く噛んでいるばかりではない。よほどの妄執――そして悪魔のような手練の持主でない限り常人にはとても果し得ない、完璧な結束のあとを見せていたのでございます。それが、あかるい日の下の出来ごとであるなら、耶奈は夢疑いもなく、おのがさまを愧じ死んでいたにちがいありませんでした。

「ここは人の世なのかしら。それとも……」

耶奈はふたたび、おぼろな意識でそう繰り返します。それから、

「頭梁さま。頭梁さまはなぜ、あたしをこのような、つらいおそろしい目にあわせなさるのです。頭梁さま……」

声にならない声で、暗黒の虚空に呼びかけ

ます。むろん、いらえのあるはずはない。たとえ、声に出して呼んだとしても、いらえるものは、地下数十尺の洞くつに飢える、彼女自身の声だけだったのでございます。

だが、しかし――その依然たる闇の中に、ごくかすかにではあるが、なにごとかが起ろうとする、一種の気配が感じられます。たしかに、さいぜんまでとはちがう、なにかが生れているのです。

彼女は、なぜともなく全身のひきしまるような戦慄をおぼえたと、おどろに髪をふりみだした顔をおもむろにあげ、注意ぶかく周囲の闇を窺いました。すでに、暗闇の恐怖とたたかいつづけ、いのちのもしびもつきはてんばかりであるが、さらにおそろしいことの起ろうとする予感が、彼女に最後の死力めいた力をあたえていたのでございます。

なおも、見えない眼をみはり、暗闇の中に耳をすまします。どんな、微細な変化をも、とらえようとするように――。と、そのとき、彼女は一種の気配とも音ともつかないサラサラという音を聴いたのであります。

「この闇の中になにかがいる。生きているなにかが……」

洞くつの精気を吸って、五官は妖しく研ぎ

すまされたのでしょうか。このとき暗黒のはかは何ものをも見ようとしなかった彼女の眼は、ごくおぼろにはあるが、洞くつの内壁を形づくっている奇怪な岩石の顔貌をとらえはじめておりました。それと同時にその耳はサラサラサラサラという気配がつみ重なってかすかではあるが、まぎれもなく何ものかが地を這う不気味な音を聴いたのであります。

「ああ」

と息を吞みました。いる、いる！ 蛇。十匹、いや百匹——千匹かも知れない。生きた腫い織物のように揺れ動きながら、みるみる数をまし、地面いっぱいにあふれて耶奈に接近しつつありました。

いや、地面だけではない。蛇群は洞くつの内壁にも、そして耶奈が縛りつけられている岩にも、岩肌が見えないくらいびっしりと埋めつくし、ゆるやかな流れとなってゆれ動いていたのであります。そしてそれは、あとからあとからつきることなく、サラサラサラサラという音はつきかきなり高まって潮騒のように洞くつの内部をみたましました。

それから一月あまり後、一人の旅の僧が、このあたりを通りかかりました。荒れ果てた

無住の庵に、彼はふと怪訝の念をさそわれます。そこには、すでに耶奈も、鬼佐兵衛の姿も見られないのです。さらに僧は、その庵の周囲をめぐるうち、照りつける炎天の下でまつ黒な口をひらき、なんともいえない凄涼の気を吐いている洞くつの門を発見して、何か眼に見えない糸に繰られるように、その中へ歩を運びます。洞くつの道路は複雑に屈折して、その行きどまりは、地下の陥牢にも似た、落ちこんだような自然の一室をなしております。ひやりと顔をなでるなまぐさい風に耐えながら、かすかな外光をたよりにその中をのぞきこんでいた彼は、思わず、「ああ」と声をあげました。なんという身も凍るような凄涼さ。内部はびっしりと敷きつめ、垂れ下る群蛇の密林です。旅の僧はなんともいえないおぞましい念いにかられ、

「喝！」

とばかりに、手に持った杖で、岩を打ちます。その音に驚いた蛇群がザワザワと揺れ動いて結びを解くと、そのあとから、三体の人骨があらわれました。二体は一つにまとまり残る一体は、それから四、五尺はなれたところで、その二体のからみ合った人骨を指呼するような形を示しております。どういう葛藤

があったのか、その三つの人骨は、耶奈、千代吉、それから鬼佐兵衛のものであることは、どうやらまちがいないようでした。

蛇くつに幽閉された耶奈、それを知って助けに來た千代吉。それを妨害しようとする鬼佐兵衛。そして、蛇くつの中の、あさましい葛藤。鬼佐兵衛ほどのものも、嫉妬に狂っては凡夫にひとしく、千代吉と争ったはてに、そこに果てたのかも知れません。

それにしてもすさまじいのは、からみ合った二体の人骨——耶奈と千代吉でした。蛇群のひしめく下で、ふたりの愛ははじめて遂げられたのです。一筋のナワのようにもつれ合ったその二体の人骨は、最後の瞬間の、身をやきつくす十全の歓喜のさまを、ありありと表現していたのでございます。が、それらのすべてはむなしく蛇群の餌食となり、いまは三体の白骨と化したのでございました。

旅の僧は、そのいきさつを知る由もございません。

「南無阿弥陀ぶつ」

と唱えて瞑目合掌すると、眼もくらむような八月の外光に黒い衣をひるがえしながら、どこともなく去ってゆくのでございました。

(完)



無国籍の女王

間諜暁に消ゆ

麻薬の親玉を張りに来たオレだが、女の脚につい目がくれて……

ホンキイ・トシク

黒羽 新・訳

中川彩子・画

脚に自信のある女

セウタでバスへ乗るとき、フェルナンデスがオレにこういった。

「宿はリッツ・ホテルだぞ。予約済みだ。部屋はソイツのとなり、三十七号室。わかっていと思うが、十分注意してくれ」

オレは親指と人指し指で丸を作り、心得たというように片目をつむってみせた。

蝸牛が匍つてゐるみたいに、バスは二時間以上、のろのろのそのそ動いて、目的のタンジール市内へ入りこんだ。

ジブラルタルの咽喉を扼すといわれているアフリカの西北端タンジール。

昼間なら、さぞ暑かろうと思うが、着いた

のが日暮れて後の午後七時。砂漠の旅を二時間も続けてきたオレにとっては、かすかな沙風だったが、それでも生き返った思いがした。バスはリッツ・ホテルの前で止った。オレはわざと彼女たちの後から降りて行くように按配した。セウタで一緒になったときから、彼女たちがオレと同じように、リッツに泊ると睨んだオレの眼は狂わなかった。

何国人だろう？ 顔立ちや肌色だけでは、ちょっとその女の国籍をオレには言い当てられない。頬骨が心持ち張っているが、青い眼は静まりかえった湖水のように澄んでいる。肩すれすれの褐色の髪は、バスの動揺につれて、様々な色に変化するように見えた。ただオレにいわせると、唇の色が赤すぎる。もう

少し淡いリップ・スティックを撰んだ方が賢明だし、もっと顔立ちがそれで引き立つと思う。

年のころは二十五か、六。

脚に自信があるとみえ、これみよがしの脚を組んでいる。いやだつて、視線がそのすらりとした脚に惹きつけられてしまう。オレばかりじゃない。およそマリィネ・デイトリッヒと縁があるうと思われぬ二人のベルベル人が、時々その脚をちらりちらりと鑑賞し、髭面をくつつけるようにして、何か小声で囁いていたから、オレばかり非難されちゃア間尺に合わない。

一緒にいるのは多分その女の女中だろう。いかにも、アタクシは女中でございますという顔や服を着ている。こっちは三十を少し出たところか？

別に聞き耳を立てていたわけじゃないが、オレのすぐうしろの席にかけているから、いやでも二人の話声が耳へとびこんでくる。話といったって全く他愛のない女のおしゃべり。砂漠の砂はどのくらい熱いでしょうかしらと、そんな話題の連続。ただ、この美しい

特集 諜女 忍女

彼女の英語に、フランス訛りのあるのがオレの気になった。

さてバスがホテルの前に着いたから、わざと一足おくれでオレは降りたのだが、これはオレなりの作戦。つまり、この二人の後から帳場へ行けば、いやでも先の二人の名や部屋の番号がオレにわかるという寸法。

緩急よろしく、帳場でオレはペンを握りながら二人の女の名と番号を盗み読んだ。

部屋はオレのとなりの三十九号室。彼女の名は、ヴィヴィアン・プレヴォア——やっぱりフランス女だった。女中の方はマリィ・ヴァーネルと書いた氏名の上に、わざわざマダムと書いてあった。二人とも行先きはリスボン。職業欄と年齢欄は共に空白。

断っておくが、はじめはこのヴィヴィアンという女とオレは、全く関係はなかったんだ。オレが狙っていたのは、セウタでフェルナデスがいった(ソイツ)だ。誰だって女の嫌いな奴はいない。オレは少々世間並以上に女に関心をもつ男の一人だったんで、そのおかげで思いがけない事件へ引きずりこまれてしまったというわけ。

怪物であるソイツ

今でこそタンジールは国際管理の永世局外中立地帯になっているが、何しろジブラルタル海峡の航行をおさえているので、戦時になると、戦略的な要地として忽ちクローズ・アップされる。ここの人間からみれば地中海は内海も同然だ。スエズ運河をぬけて地中海へやってきても、タンジールの目と鼻の先のジブラルタル海峡をおさえられてしまつては、大西洋に出ることはできない。だからこそ、かつて海の覇者であったポルトガルやスペインや、そしてイギリスは、自国民の犠牲を払つても、このタンジールを我が手におさめようと必死になったのだ。

オレは別にジブラルタルやタンジールの歴史をここで語るつもりはない。オレのいいたいのはスエズ運河を利用して地中海へ出てきた船舶が、ジブラルタル海峡を通過して大西洋へ出て行くということ、頭にしっかり止めておいてもらいたいだけのことなのだ。

始めからオレはタンジールへ来る予定ではなかった。二月前、オレはチュニジアのチュニスに別の用で滞在していた。すると、大将から指令が来た。急遽セウタにいるフェルナデスに逢えといってきた。そして、セウタへ行ったら、例の(ソイツ)がタンジールへ

立ちまわるから、ソイツの尻尾をつかんで、国際警察へ引きわたすよう命令された。

ソイツというのは、国際麻薬密輸団の首領で、ゲオルギスというギリシア人。年は三十とも、五十ともいう。というのは、こいつなかなか変装の妙にたけていて、あるときは三十年代の外交官を装うかと思えば、あるときは五十がらみの宝石商に変装するからだ。一味の数はどのくらいだか、国際警察ですら調査未了である。いくら調べてもわからないのは、縦の連絡はあっても、横の連絡を全然つけさせないやり方だからだ。

例えば、Bという奴が挙げられる。だが、Bは姿を知らぬAから指令をうけ、自分の正体を連絡先のCに知らせぬようにして事を運ぶ。結局B一人を挙げて、いくら責めても、Aの正体はわからないし、同じようにCの正体もわからない。組織の方では、Bが挙げられると、今度はBの代りに、XでもYでもそのあきにはめこむやり方をしているので、全体の組織をどうしてもつかめなかった。

ただはつきりわかることは、世界のどこかに首領のゲオルギスが姿をみせると、きまつてゲオルギスのいる場所に、麻薬団の一味がひそかに集り、そしてその場所から、何十キ

ログラムというヘロインが、どこかへ分散されて行くということだけである。

むろん、そんな大量の麻薬を、ゲオルギス一人が運んでくるわけではない。つまり、わかりやすく説明すると、ゲオルギスは、かつての輪型陣の中心に位する航空母艦みたいな存在で、このゲオルギスを囲むように、幾人かの巡洋艦や駆逐艦などが隠忍裡に進攻してくるという渡洋作戦にも等しい。

ヘロインを運んでくるのは、ゲオルギスを中心にしている巡洋艦や駆逐艦といった連中。ゲオルギスは提督さながら、母艦の艦橋で指揮をとっているという寸法。だから、小者の巡洋艦や駆逐艦を一二隻捕えたところで、ゲオルギスはびくともしない。敵の作戦を徹底的に粉碎するには、ゲオルギスの輪型陣を外から囲み、中心のゲオルギスを逸脱させず、一網打尽にしなければ勝利は永遠にこっちのものにはならない。

その超弩級空母というべきゲオルギスが、オレのとなりの三十五号室に納まっているはずなので、オレもこのときは少し胸がおどった。今までオレも、随分タフな奴を相手にしたが、ゲオルギスはタフとだけでは形容できない、いわば怪物ともいうべき存在だ。

オレは、ホテル・リッツの階段を三階へむかって上りながら、何も遠慮せず、どうしてヴィヴィアンの乗っていたエレベーターにのらなかったのかと、それをいささか悔んでいた。もつとも、考えてみれば、敵はヴィヴィアンではない。やはりゲオルギスなのだから……。

中国人J・P・チャン

オレは抜け目なくやった。ここでも現金のドルは靈頭いやちこだった。給仕のアリは、オレの部屋がどういう風に位置しているか、くわしく略図まで書いてくれた。つまりこうだ。ゲオルギスの三十五号室は、三階のエレベーターのまん前にある。その右どりの三十七号がオレのいる室。そしてオレの右どりの三十九号でヴィヴィアン達の居室。その通路の真向いは三十八号室で、そこに泊っているのは、宿帳だと、J・P・チャンという人物。どうも東洋のお方ようですとアリがいていたが、恐らく中国人とオレは睨んだ。だが、どうしてこんなアフリカへ中国人がやってくるのだろう。まアそれはいい。そして、オレの真向いの三十六号室は空室だった。三十六号のとなりに部屋はない。つまり

ゲオルギスの三十五号の前がエレベーターでエレベーターを軸にして、階段が地下の酒場まで螺旋状に下っていた。

ゲオルギスは、今さら断わるまでもなく変名を使っていた。オレがちょっと胆を抜かれたのは奴がジョルジュ・オーモンと名のついていたことだ。ジョルジュをギリシア読みすればゲオルギスになる。これじゃあ、変名のうちに入らない。オレは首をひねった。きつと何かあるにちがいない。

オレ自身は新聞記者の触れ込み。何気ない顔で給仕のアリに、J・P・チャンという人物は、何屋かと聞いてみた。

「貿易商だっていってましたよ、旦那。貿易って商売は、よっぽど儲かるとみえますね。指に大きなダイヤの指輪をはめてましたぜ」

十四だとアリはいったが、この少年の観察力をオレは買った。それに、都合のいいことには、三階の給仕はこのアリ一人しかいない。誰かが用があつて帳場へよべば、このアリがとんで上ってくるわけだ。だからオレはぐんとはずんでチップをやっておいた。この子はひよつとすると、オレの「見る眼・嗅ぐ鼻」になると思ったからだ。

一服していると、となりの三十九号室でシ

ヤワの音がした。おそらく、あのヴィヴィアンが砂漠の汗をながしているにちがいない。眼をつむると、オレの臉に、ヴィヴィアンのストリップがまざまざと真白く浮んだ。三十五号の方では、コトと音もしない。もつともアリのはなしだと、ゲオルギスは早くから地下の酒場でとぐろを巻いていたそう

だ。いきなり、三十九号室から女の罵声がひびいてきた。ヴィヴィアンだ。壁越しだし、おつそろしく早口のフランス弁なので、何をどなっているか意味はとれなかったが、どうも女中のマリーを叱りつけているらしい。大體顔の美しい女というものは、えてして癪の強いものだ。オレのデデも癪の強い女だったが、いい身体をしていたつけ——あの梨のようにしゃくれた乳房は今でも忘れられない。デデはどうしているだろう……。

オレは、はっとして時計をみた。八時十分前。いけないいけない。うっかりして、約束の時間を忘れるところだった。急いでタクシーに着かえ、外へ出てドアに鍵をかけ、ひよいとふりむくと、三十八号室から太っちょが一人同じように出てきてドアに鍵を下した。

J・P・チャンにちがいない。先方は、オ

レの顔をみると、相宿の客に対して、ニヤリと愛想笑いをした。どうせ下に行くのだろうし、エレベーターも一緒になることだと思つて、オレは「ハロオ・ジョオ」と声をかけた。エレベーターの中で、チャンは自己紹介とした。オレもAPの特派員と名乗った。チャンの英語はなかなか巧みだ。きいてみると、ロンドンへ留学したことがあるという。それじゃア巧いのも当然なはなし。

最初のオレの予定では、一人で地下の酒場へ八時きつちりに行く。スタンドへまっすぐ行つて、カルヴァドスを一杯注文する。すると、前からスタンドにとまっていた英国人のアレックス・オブライエンが、へえ、カルヴァドスをのむのかい、君は——と、こう話しかけてくる段取りになっていた。

ところがチャンが、どういうわけかオレのそばをはなれない。オレがスタンドにとまると、まるでオレとアレックスの予定を邪魔するみたいに、オレとアレックスの空間へ割りこみやがった。だから、オレがカルヴァドスを注文しても、チャンが間にいるので、アレックスは話しかけるきつかけを失ってしまった。

もつとも、アレックスにしてみれば、定め

の時間にオレが姿をみせたので、連絡はいつでもできると安心したのか、素知らぬ顔で、新聞をよんでいた。

チャンはしきりに話しかけてくる。去年、はじめてニューヨークへ行って、全く驚いてしまったの、お国の広さは中国に匹敵するのと、愚にもつかないおしゃべりで、こっちは中国人の多弁に驚かされてしまった。

いつまでこういう手合の相手をしていても際限がない。オレは合槌をうちながら、スタンドを背に、ゲオルギスの姿を探したが、見当らなかった。アリは下にいるといったが、別の酒場にでも出かけたらしい。アレックスとも意が通じたから、オレは疲れたとチャンに断り、三階へ戻った。

部屋へ帰り、五分もたたぬうち、予期しないさわぎに、オレはまきこまれてしまった。

盗難に次ぐ疑惑

廊下が急にざわつきだしたので、何だろうと立ち上がる途端、ノックである。入れと答えると、ドアがあいて入ってきたのは給仕のアリではなく、軍服を着た将校風の男。その背後に三人ほど、これは警官らしい制服姿。軍服の男は突然の訪問をまず詫び、名乗りを

上げた。

「自分はこの町の保安隊長であり、同時に警察署長をも兼ねているドン・セルバンテス中佐です。実は、まことに御迷惑とは思いますが、おとなりのセニョリタ・ヴィヴィアンさんが——」

聞いてみりやア全く馬鹿げた話。ヴィヴィ

アンのもっていたダイヤの腕かざりが紛失したのだという。

「じゃア中佐、このボクがそのダイヤの腕かざりを盗んだとでも——」

むっとした顔でいってやった。むろん、盗ったおぼえなんかありはしないが、痛くない腹をさぐられたくない。第一、なるだけこっ



ちの存在を、ゲオルギスに感づかれたくない
と思っていたところだったから、このさわぎ
には実のところ少し弱った。

推定盗難時刻は八時二十分から八時三十五
分までの約十五分間。ヴィヴィアンはマリー
を使いに出し、自分は電報を打ちに一階の帳
場において行ったその留守。鍵はかけておい
たという。

「それならボクじゃないな。ボクはそのころ、
そうそう、三十八号室の客と一緒に地下の酒
場で酒をのんでいましたよ。三十八号の客に
聞いてくれれば、ボクの不在証明は立つんだ
が——」

こう答えると、困ったというように、中佐
は眉をひそめ、声をおとすと、

「実は、三十八号のチャンさんも、あなたと
その時御一緒だったといわれるのです」

「そんならいいじゃないですか、君」

「ところが、それだからこそ困るのです」

「困る？」

「ええ。問題の盗難品が、三十八号室で発見
されました」

おかしい。そんなはずはない。アリの話で
は、チャンには連れがいなかった。連れがい
ないということは、共犯者がいないというこ

とだ。間違いなく、チャンはオレと一緒に、
八時半ごろには地下の酒場にいた。もつとも
一二度便所に立ったことはある。しかし、ヴ
ィヴィアンはオレと一緒にのバスで来たのだし
前からの逗留客ではないから、まだチャンと
面識はないはずだ。ましてや、面識のない、
前の室の女の腕かざりを、チャンが盗めるだ
ろうか？

こう考えているとき、オレの頭にひらめい
たことがあった。だが、オレはそのことを中
佐に話をしなかった。

中佐は非礼を重ねて詫び、どうにも分らな
い事件で、被害者も被疑者も共に外国のお方
なのでちょっと面倒ですといい、それでも、
オレがチャンの不在証明をいい立ててやった
ので、満足した様子だった。

「不幸中の幸です。盗難品が出てきたので、
三十八号のお客さんの身柄を、今日は強制執
行しないことに決めました。あなたも御迷惑
だと思いますが、明日改めて調べを進めま
す。どうぞその節は、参考人として御協力を
願っておきます」

こういうと、きちんと敬礼して、部下をひ
きつれ部屋を出て行った。

オレには、もうびんと来ていた。ダイヤの

腕かざりをヴィヴィアンの部屋から盗んで、
三十八号室へおいたのは、いわずとしたゲ
オルギスの仕業。しかし、なぜゲオルギスは
そんなことをして、チャンに盗人の濡れ衣を
着せようとしたのだろう？

チャンがいうこと

オレにはオレで、やらなきゃならぬ仕事か
あるというのに、ホテルへ着いた早々この始
末。先刻地下の酒場でアレックスとうまく連
絡できなかったが、そのうち向う
から連絡があるものと思っている
と、電話のベル。てっきりアレッ
クスからにちがいないと、受話器
を耳にあてると、ちがった声。

「先刻は失礼しました。もし、よ
ろしかったら、ちょっと私の部屋
まで御足労ねがえませんか」

男の声だった。耳なれぬ声なの
で、相手を糺すと、三十八号です
と答えた。チャンである。今、手
がはなせないのだと、婉曲に断っ
たが、是非、あなたのお耳に入れ
ておかなければならない重大事か
あるのですと、チャンは意味あり

特集 女間諜・女忍者

「氣にいい、お待ちしていますと、勝手に電話を切ってしまった。そういわれると少々気になる。どうも腕かざりの一件だけではないらしい。行くことにして、帳場へ電話し、もし電話があったら三十八号室にいるから、そっちへ繋いでほしい」といっておいた。

「チャンは、ブランドイを用意して待っていた。だが、オレはこういう場合、（決して用意されたもの）に手をつけない。危いからだ。辞退すると、チャンは意外にも、ああそうですかといった無理強いしなかった。だからこっちは一人相撲をとっているような気がして、少し拍子ぬけがしてしまった。

「本来なら、こっちからお部屋へ伺うべきなのですが」と、こういつてからチャンは、ドアの鍵穴へ目をあてて、外をのぞいた。

それから、

「と申しますのは、あなたのお部屋に、ひよっとすると隠しマイクでも仕掛けてはあるまいかと、それを懸念したからなのです」

オレは、とぼけてきき返した。

「どうして隠しマイクが？」

「つまり、お部屋のとまりが三十五号室だからです」

「三十五号がどうだというんです？」

するとチャンは一そう声を低めた。

「私に、腕かざり盗難の濡れ衣を着せたのが三十五号の奴なんです。ジョルジュ・オーモンなんて、フランス人みたいですが、あいつはフランス人じゃありません。ユダヤか、それともギリシア人——」

「どうして、そう推定されます？」

チャンは、答をはぐらかせた。

「腕かざりを盗まれたと騒いだ御婦人は、たしかあなたと御一緒にバスでみえた方ですね」

オレは、事実のことだから、そうだと答えた。

重大な事を耳に入れたいと、わざわざオレを呼びつけておいて、この男は何をうたうだいつてやがるんだと、オレがそう思い始めている時、チャンが妙なことをいいだした。

「あなたは、マダム・ヴィオレのはなしは聞き及びでしょうな」

マダム・ヴィオレ・紫夫人は国際的な女スパイである。ヨーロッパを股にかけ、金次第でAの機密をBへ売り込むという腕利きの女スパイ。むろんオレは知っていたから、知っているという風にうなずいた。

「その三十九号にいるのが、マダム・ヴィオ

レだということにお気づきでしたか？」

これにはさすがのオレも驚いた。あの脚のきれいな女が、有名な女スパイとは……。

オレの驚きを顔に読みとったチャンは言葉ををつづけた。

「私がマダム・ヴィオレだということを知っているのです、あの女は、それで私に濡れ衣を着せたのです。いや、こういった方が本当かもしれません。つまり、私があの女の正体をあばく前に、こっちの鼻っ面を一発なぐりつけて、機先を制してきたわけです」

「しかしですよ、チャンさん」オレは納得できなかつた。

「そうすると、三十九号室の女と、三十五号室の男が共謀して、あなたに無実の罪をきせたことになるわけですよ。でなければ、話の辻褄があわんじゃありませんか」

「そうなのです。共謀してやった芝居です。私があなたと御一緒に地下へおりている間に三十九号の女が、三十五号の男に腕かざりをわたし、それを三十五号の男が、私の部屋へおいて行ったのです」

「でも君、鍵が？」

「鍵など問題じゃありません。世の中に、開けられぬ鍵は一つありません。どんな鍵で

も——」

オレは、チャンを手で制し、目くばせすると足音を殺して、ドアのところへ行った。いきなりオレはドアを引きあけた。オレの目の前を風のように右へ通りぬけた者がいる。立ち聞きしていたにちがいない。それは、三十九号の、ヴィヴィアンの女中マリーだった。マダムと称しているあの女中だった。

すっぱり仮面

オレはそれを潮に、チャンの部屋を辞して自分のところへ戻った。結局、チャンのいたいことは、三十九号室の女は国際的な女スパイで、三十五号の男は、この女スパイと何か取引のある臭い男だから、右左の部屋に充分注意して下さいということだった。チャンは重ねて、こういう差出がましいことをいうのも、オレがチャンの不在証明を立ててやっ



た礼心だといった。ゲオルギスのことは、チャン以上にこっちは百も承知だったが、三十九号にマダム・ヴィオレがいるとは全く思いがけなかった。オレは考えた。ゲオルギスかもし、チャンのいうように、何かマダム・ヴィオレと関係があるのなら、その関係は一体何なのだろう？ 麻薬団の大立物と国際的な女スパイ。どっちも利害にさとい連中だ。手を握っているとしたら、共通の利害は？ まさかマダム・ヴィオレは、ゲオルギスから何か情報を買う——いや、それはちょっと考えられない。むしろ、考えられるのは、マダム・ヴィオレも、ひよっとすると麻薬団の一味であるのかもしれない。この方が、平仄が合う。

色々考えているうちに、この考えが次第に間違いないもののように思われてきた。

しかし、ちょっとひっかかるものがあつた。というのは、オレがホテルについてからというものの、どこにもゲオルギスの姿がないことだ。チャンは、腕かざり事件の真犯人はゲオルギスだといっていた。しかし、

これだって、考えようによっちゃア、一つの推定でしかない。チャンが盗んだのでないことだけは確かなようだ。

これは、ゲオルギスを探るより、マダム・ヴィオレを痛めつけた方が、ひよっとすると何か出てきはしまいかとオレは考えた。

アレックスからは一向に連絡がない。何か支障がおきたのかもしれない。それとも、アレックスは、ゲオルギスにつきまといてそれで手がはなせず、連絡できぬのかもしれない。

オレたちにとって、時は金だ。そこで思い出して腕時計をみた。十時十五分すぎ。オレは部屋の灯を消した。まず靴を穿きかえた。ゴム底の軽い靴。これなら足音を立てずにすむ。尻のポケットと胸のかくしに一挺ずつ拳銃をおさめた。露路に面した窓をあけて、右と左をうかがった。ゲオルギスの部屋の窓は暗かった。ゲオルギスはどこにいるのだろうか？ ヴィヴィアンたちのいる三十九号室の窓はあいていたし、灯りが外へもれている。まだ起きているらしい。暦の上では秋だが、この秋はニューヨークの夏みたいに暑い。オレは黒手袋をはめ、目だけくりぬいてある頭巾をすっぱり冠った。窓から下をのぞい



てみると、いい具合に、二階の窓の上に当る小庇がみえた。窓框をのりこえ、足をのぼすと、足が小庇にかかった。壁にはりつくように、左へ横に匍う。こんなことは馴れっこだ。すぐに、ヴィヴィアンたちの部屋の窓の

下へたどりついた。首をそうっとのぼして見ると部屋の中に誰もいない。しかし、灯りがついているところから考えると、誰かいるはずだ。風呂場か？ 洗面所か？ 当って砕けろだ！

オレは窓框に手をかけて腕に力をこめ、反動をつけて部屋の中へ飛び入った。耳をすますと、洗面所の方で人が歩きまわっている気配。よし、オレは寝台の下へもぐりこんだ。

ほとんどそれと入れちがい、洗面所の戸があき人が出てきた。尤もオレのところからじゃア人の足しかみえなかった。桃色のスリッパをはいて、足首からふくら脛が、ボーリングの瓶を逆に立てたようにすらりとみえる。ヴィヴィアンだ。

まさかオレが寝台の下にもぐってしようと

思わないので、こっちへ近づいてきたかと思うと、ドシンと寝台へ腰を下した。二本の足がオレの鼻っ先でぶらぶらしている。そのうち、女は靴下をぬぎだした。寝るのかな？ 薄皮をむいたような靴下が、床の上にとぐろを巻く。女が立ち上った。足がみえなくなったと思うと、窓をしめる音。それからちょっとして、パチンとスイッチをひねる音。部屋の中は暗くなった。もっとも、窓から淡い光はさしこんでいる。

オレは待っていた。寝苦しいのか、ヴィヴィアンはしきりに寝返りをうつ。そのたびに寝台のスプリングが、ぎいぎいときしる。それにしても、女中のマリーは？

腕時計の燐光文字を睨みながら、オレは女の寝込むのを待ち、次の作戦を考えた。

縛りあげて家探しするか？ それとも、女の口から泥を吐かせるか？ なるだけ手荒いことはしたくない。オレはいつもそうなんだ。相手が男なら手加減しないが、オレは女をあまっていためつけない主義。ことにその女が美しい場合は、絶対に主義をまげない。

時計の針が11の数字の上で重なりあう頃、ヴィヴィアンのかすかな寝息が聞こえはじめた。今だ――。

不覚の一瞬

オレは寝台の上から匍い出した。ヴィヴィアンは、みるとこっちへ背をむけて眠っている。淡い、窓からの光りが、白いシーツの上に横たわっている女の姿を照す。桃色の寝間着の色がオレの眼に痛いくらいだ。くびれた胸から、腰へかけての隆起。脚も美しい女だが、寝姿も絶品だ。思わずオレは、その立場を忘れ、女の姿態を一、二分鑑賞してしまつた。

と、コトンと小さい音がどこかでした。オレははっとなった。あたりをみまわし、息を殺したが、それっきり音は続いて聞こえてこなかった。気の迷いか？ いや、そうではあるまい。オレはすぐ仕事にとりかかった。

まず、寝台の上で、こっちへ背をむけているヴィヴィアンにのしかかるように、寝息をうかがった。すうすう寝息を立てている。よく寝ているようだから、このままでも起きはすまいと、オレは多寡をくくり、寝台からはなれようとした。

そのとたんである。ヴィヴィアンが、ごろんと寝返りをうったから、あわてて身をひこうとする、そのオレの首っ玉を、いきなり抱

特集 女間諜 女忍者

えるようにヴィヴィアンがつかんだ。そして、

「本当に寝ていたと思つたの、馬鹿な泥棒さん」こういったじゃないか。

オレは危険を感じ、女の両手をはらいのけたのだが、はらいのけた両手は、首からはなれると、オレの胸を抱いた。中腰だったからたまらない。オレはまともにヴィヴィアンの腹の上に引き倒された。

「止せッ」

今度は女が身をひねって、身体をオレにからませてきた。

「何がほしいの、泥棒さん」

「お前がほしいといったら、どうする？」

「ほしけりやあけてよ」

おどろいた。片手で胸をはだけやがった。

冗談じゃない。オレはヴィヴィアンを押しつけるやうとした。再びそれでオレはヴィヴィアンの斜め上になった。女はオレの胸をしめつけてはなさない。

カチリとオレのうしろで小さい音がした。しまった！ オレは女をつきとばし、半ば

身をおこしたのだが、時すでにおそし、何者か、オレのうしろに忍びよった奴が、いきなり拳銃の台尻みたいな固いもので、オレの後頭部を打った。

やられた——とオレの頭が感じたときにはもうオレは文字通りのびてしまった。

痛みがよみがってきた。頭がふらふらしていたが、意識が次第にはっきりしてきた。オレは絨毯の上に棒のようのにびていた。腕時計をみると、一時五分すぎ。

畜生。オレは寝台につかまって、やっと思いで立ち上った。寝台の上に、ヴィヴィアンが横になっていた。寝ていたのではない。はだけた胸の真中に、短刀の柄がのぞいていた。刺されて、もう息はなかった。おそろく、あおむいているヴィヴィアンの顔を片手でやさえつけ、力一杯、乳と乳の間に短刀を打ちこんだに相違ない。

誰だ！ 殺した奴は？ オレをなぐった奴であることはいうまでもない。からりと音がしたのは、ドアをあけた音だったのだ。あの音を聞いたとき、オレはヴィヴィアンに抱きつかれていた。ヴィヴィアンの肌の香が、まだ鼻に残っているようだ。そいつは、いや、

ヴィヴィアンは、そいつが誰だか見ていたにちがいない。そいつがオレをなぐり倒した。ヴィヴィアンは、そいつが誰だか知っていたが、あえて騒ぎ立てなかったのだ。仲間が助けてくれたと安心したにちがいない。ところが、その仲間が、ヴィヴィアンを裏切って刺殺してしまった。そして、おそらくこのオレに、ヴィヴィアン殺しの濡れ衣を着せる気なのだ。

では、そいつは？ 残念ながら、オレはなぐられたとたんに気を失ったから、うしろをふりむく余裕がなかった。見当だけはつく。チャンではあるまい。とすると、ゲオルギスカ、マリーの二人の中だ。

一本、二本、三本、

そして

もう逃げの一手しかない。オレは戸口の方へ行きかけたが、廊下を出たところで、誰かに姿をみられる恐れがある。やはり入ったところから退散と、窓をあけて窓框から外へぶら下った。小庇に足がついた。今度も蟹の横ばい同然。

すぐ、オレの部屋の窓框が指にふれた。オレもうっかりしていた。というのは、部

屋から出る前、オレは自分の部屋の灯を消して窓から出た。ところが、今度窓框に手をかけ、じりじりと身体をずり上げようとして、オレは、オレの部屋に灯がついているのに気づいた。

畏にかかったのである。いきなり、窓框へ十本の指をかけ、上りかけているオレの鼻先に、冷たい拳銃の筒先をつきつけた奴がいた。

「御苦労さん。わざわざ死に戻ってきたって恰好ね。もっとも、あのまま朝までのびていれば、否応なしに殺人罪でつかまって死刑。うまくそれをのがれたつもりで、戻ってきたのはおあいにく様。そうは問屋がよろさないんだよ」

憎々しげにこういったのは、ヴィヴィアンの女中マリーだった。

「第二、お前の恰好がいいよ。すっぱり頭巾で出ているのは目の玉だけ。おまけに手袋をはめている。おあつらえむきじゃないか。筋立てはこうなんだよ。ヴィヴィアン殺しの犯人は、忍びこんできた窓から逃げようとしてへまをやって窓からおち、下の歩道で頭を打って死にました。ね、そうだろう。おまけにポケットには拳銃が二挺入っている。お前が

のびている間に、お前の部屋の鍵を頂戴して私はこうして待っていたのさ。いわば私は死刑執行人格。でも、この死刑執行人はちょっとばかり意地悪でね。蛇の生殺しさ——」

悪魔が正体を現わした！ オレは出るも退くもできない。ただ、オレの体重を十本の指にかけて、宙にぶら下っているばかり。これにだって限度がある。

「いいかい、お前はおちる前に本当のことをいい。どうして私たちの部屋へ忍びこんだんだい、そんな恰好で。何がほしかったんだい。おいしい——」

そういったと思うと、拳銃の銃口で、オレの左手の親指を思い切り叩きやがった。痛い痛くないのって、思わずその親指を下へ曲げてしまった。だから、九本の指しか窓框にかかっていない。

オレは意地になって口をきかなかった。オレは希望をすてない。いつだって希望をすてたりしない。僥倖をたのんでいるわけじゃないんだ。いけないと思ったとき、いつもオレの頭は素早く回転する。

ところが、今度はいけない。まだ頭の痛みが充分なおっていないので、考えようとして考えはまとまらず、考えようとするだけで

頭の芯が痛くなってくる。

「いわないのかい、じゃア」

今度叩かれたのは、右手の親指だった。

窓框がさらさらしていたから、まだ助かったんだが、もしそこがつるつるした木で作ってあったら、両手の親指を叩かれたオレは、そのままずるずると下へ滑りおちていったにちがいない。

ともすると滑りかける。八本の指先にオレは力をこめ、おちまいと、しがみついていた。

自分の体重が下半身にかかり、腰骨がのびはじめたような気持ちに襲われた。額から汗がにじみ出す。もし、すっぱりと冠っていなかったら、額の汗が目に入って、それこそ目もみえなくなってしまうにちがいない。

女は、一向にオレが音を上げないので、それが癪にさわりはじめたらしい。

「いいよ。あくまでお前が強情をはるのならもう聞かないよ。これから指を一本ずつつぶしてやろう。二本や三本の指だけで、お前のような男が、いつまでもそこへぶら下ってはもらえない。だから、八引く五。あと五本叩けば、それでおしまい。そうそう、その前に地獄の土産ばなしを聞かせようかね。あのシナ人がいつてたろう。三十九号室に、マダム

・ヴィオレが来ているって。その通りなんだよ。お前がさっき、その眼でみたのが、マダム・ヴィオレの死体さ。明日になれば、国際女スパイ、マダム・ヴィオレ刺殺されるって記事が、世界中に飛ぶだろう。だがね、本当のマダム・ヴィオレは死んでいないのさ。殺されたのは、マダム・ヴィオレの替え玉にされた、かわいそうな、脚に自信のある女。あの女が、もう少し利巧だったら、私だって殺さずにいて、もっと利用するつもりだった。ところがいけないよ。あの女は、妙に自分に自信をもちはじめた。人形はあやつられていればいいのに。勝手に操り人形が一人で動きだしちゃア、操り師はやりにくくてたまらない。人形はいくらでも金で買える。惜しいと思ったけど、私は人形をつぶしてしまった。あの女が、私の代りにマダム・ヴィオレになって死んでくれれば、本物の私は当分のんびりできる。それに、もう一分もしないうちにヴィヴィアン殺しの犯人も、窓からおちて地獄の超特急の乗客になるだろう。こういうのを、きっと一石二鳥というんだよ」

女め、すっかりいい気になって、しゃべりまくる。指先にまで汗がにじみ出て、その汗で指がすべるのじゃないかと、オレはひやひ

やした。こいつのいう通り、こんな恰好で下へおちれば、頭をうって即死は免がれない。

「では、ぼつぼつ出かけるといいよ」

また一本、今度は左手の人さし指を叩きやがった。残っているのは七本。

もうオレにしてみれば一二本たたかれたらそれでおしまいだという気がした。だんだん面倒くさくなった。こんなふうにしがみついていたって助かりっこはない。一か八か手を放して——いや、助かる確率はゼロだ。

今度は右手の人さし指を叩かれた。六本。

と、いきなり女が、むきをかえた。オレに背をむけたかと思うと、銃声が一発轟いた。

つづいて、もう一発、そしてもう一発。

女がぐっと背のびしたような恰好をした。

それで、しまいだった。斜めに前へ倒れて、どしんとオレの耳に倒れた音が響いてきた。

助かった——と思った瞬間、気がゆるみ、

指先の力がぬけて、オレはずるずると——だが、力強い二本の手が、すべりかけているオレの両手首をしっかりとつかみ、オレを中へ引きずりあげてくれた。

「間にあいましたよ」

こういった相手は意外にもチャンだった。

「殺すつもりはなかったんです。手を狙った

んですが——」

嘘を吐け！ チャンの射った二弾は、女の心臓に、二発とも命中していたのだ。

「申しおくれましたが、私は——」

電話のベルが鳴った。チャンが出た。そして「あなたにですよ」といって受話器を渡してくれた。アレックスからの電話だった。

「何がすまんだ、アレックス。オレはもう少しで死ぬとこだった。チャンというこの紳士が——」

するとチャンが、にやりと笑って横から口を出した。

「トングさん、国際警察のチャンとおっしゃって下されば、アレックスさんも御承知のはずです」

オレはすんでのところで吹き出しかけた。何のことはない、オレはチャンに一杯食わせられていたんだ。こっちは知らなかったが、チャンはオレの正体を知っていたんだ。だからこそアレックスは、オレがチャンと飲んでいたので、話はついていたものと思い、それで連絡を急がなかったのだと弁解した。

肝心要のゲオルギスは、国際警察やオレたちの動きを嗅ぎとって、キャバレーから、荷物一つもたず、飛んで逃げてしまった。

「私の部屋へ、ヴィヴィアンの腕かざりをおいて行ったのは、この女だったのです」チャンは、自分の足下に倒れているマダム・ヴィオレを指さしていった。

それから、オレの指をみて、

「どうやら六本の指は大丈夫のようですからどうです、地下の酒場へ行ってブランディでもいかがです。ブランディのグラスなら、指でつかむ必要はありませんからな」といってからからと面白そうに笑った。



裕福な老女にまめまめしく仕える
巡查は思いもよらぬ果報を受けた
が、沼からぬめり出るあおみどろ
の怪異は夜ごとに彼を脅かすのだ！

裏窓妖異譚

次号掲載!!

あおみどろ
青綿の座
宇治川 竜



伝^{でん}奇^き怨^{おん}霊^{りよう}沼^{ぬま}

曲 二十八

高柳 春雄

特集 女間諜・女忍者



伝奇発端

徳川家康が、豊臣家を打倒し、ついに天下を一手に納める大偉業を為し遂げたその裏に「怪物」と呼ばれ、常に家康の黒幕にあってその威権は、多くの武臣をしのぐといわれた人物が居た。

生れは甲州。武田家お抱えの猿樂師、金春七郎喜然の子で、金春大蔵である。

ふとしたことから徳川家康に見出され、猿樂師として、側近のお伽衆に加わるや、もって生れた才智を従横に駆使し、天下に散在する山師（鉾山師）たちを集めて、関東をはじめ、全国の金銀、

銅鉄を採掘し、それが驚異的な成功をおさめた。

慶長八年、金春大蔵はその功により、大久保十兵衛

長安の姓名を許され、さらに石見守に任官し、武蔵国八

王子に、三万石の知行を持つ身分になった。

知行高はさておき、全国の金山を一手に取締る大元締めとして、一世の権力をふるった大久保石見守長安の豪華な生活

は、その金山巡視の際の道中行列をみても一端が知れる。上り下りの泊りでは、飲めや歌え、はやせや踊れの乱痴氣騒ぎ。祝儀には黄金小判の雨が降るといふ――

大袈裟な道中行列を競う諸大名たちが、あっとばかりに驚くほどの豪勢なもの。

この栄華を誇った大久保長安が、慶長十八年四月二十五日原因不明の急死を遂げた。

この謎の死の一説に――
長安を利用し、働かせるだけ働かした家康が、かえって長

安の狡猾な智略を怖れ、彼を謀殺したという。

八王子城床下の祕庫を、幕府の手で調べた結果、国禁の異邦と交通した文書や、切支丹関係の書類がでてきた――とい

う罪状で、大久保家一族を、すべて死罪や流刑に処したのである。

もちろん、長安が貯えた莫大な私財は、家康の手中に捲き

黄金眠る魔の沼に集い寄る妄執の群！

正邪せめぎ合う争闘の果に沼が動く日！

特集 謀間女、忍者女

あげた。

長安には七人の子供があった。この子供たちと二十四人の愛妾のうち、家康の追求の目を逃れて、諸国に身を隠した者も多く居た。幕府の詮議がきびしかったのは大久保一族の処刑よりも、それらの者が長安から分配された秘宝を没収するためだったのである。

怨霊沼由来

常陸と下総の国境を流れる利根川。

その流れから、北へ三里ほどの所に、まむし蛇が腹の中に大きな獲物を呑んだような形をした沼がある。

印旛沼

この印旛沼の西北に、もう一つ大きな沼があつて、手賀沼とよぶ。

沼と沼の間には、小さな村落が点々と散在する。いずれも細々と農漁を営む村である。

その寒村の一つ、網嵐という部落のはずれに、小さな小屋があつた。

小高い丘に、ポツリと立っているその小屋は、人呼んで四本松の小屋――

というのは、みるからに貧しげなその小屋の周囲に、高さ五十尺はあろうかと思われる見事な松の木が四本、高々とそびえているからである。

小屋の主は、八十を越えて、或いはもう九十才にも手が届くかと思われる老婆、名を萩乃。その孫娘で、絹、十七才。この二人だけであつた。

「おば様、たいへんです……」

ある朝、薪を拾いに外へ出たお絹が、大声をあげて小屋の中に駆けこんだ。

「なにごとじゃの？」

萩乃婆は、薪割りの手を休めた。老令の身ながら、腰も曲らず、眼光の衰えもない。孫娘に向けた顔は、気品すら感じられる。

「隠城沼の立て札を、どこやらの男どもが引き抜き、それで火を焚いております……」

「なに、立て札を？」

萩乃婆は、腰をあげた。

四本松の一樹、北の松に手をかけ、眼の下にひろがる隠城沼を見おろした。

隠城沼

しかし、萩乃婆の見おろす辺りには、水の光りなど無い。

ほうほうと生い茂る草原が、円形にひろが

っているだけである。

この草原が、隠城沼……この土地の者が、怨霊沼とよぶ、底無し沼であつた。

これを知らない旅人が、うっかり足でも踏み入れようものなら、身体は止め度なく一瞬一瞬に沈みはじめた。

一寸沈んだ足を引き抜こうとすれば、片方の足は二寸沈む。それを抜こうとすれば、さらに片方は三寸もぐる。あわてればあわてるほど、足に噛みついた粘泥は、ズルズルと人間をひきずりこむ。

頭髮が草の根にからまるのが、最後のむなしい抵抗――次の瞬間には、その人間の姿はこの世から全く消え失せてしまふ、怖ろしい自然を秘めた泥沼である。

――その昔、承久年間に、この地方の豪族たちの間に争いが起り、弱い城主たちは次々に滅亡した。その中でも、この網嵐城の一族郎党は、城もろとも敵の水攻めにあつて、一人残らず溺死したという、悲惨な伝説が残っている。

その一族の呪いがこの沼を生み、隠城沼は怨霊沼と呼び変えられて、人々から怖れられているのである。

黄金亡者

「——なるほど、立て札がない……」

萩乃婆は、小手をかざして隠城沼の岸辺を見わたす。

立て札には——これより危険に付、近寄るべからず——とある。

沼の怖ろしさを知る者はよい。しかし、他国からの旅人が踏みこむおそれがあるのだ。

「——また、人が死ぬぞよ……」

と、つぶやく萩乃婆。

「燃やしているのです。おば様、ほら、あそこに、あのように煙りが……」

お絹は、指をさす。

「なるほど。焚火がわりに燃やしているのじやな。無法者めが。ハテ、このあたりには見かけぬ男どもじゃが……」

「眼の強いおば様。よくあのような向う岸の人が見えますね。そのとおり、昨日あたりより、あの沼岸に、何やら小屋を建てはじめた様子……」

「ふうむ。また、亡者めらが……。お絹、あの男どものそばに近寄ってはならぬぞ」

細い眼を光らせて、なおも向うの沼岸を見つめる萩乃婆である。

草加の虎五郎は、竹の棒切れをビュツと振って怒鳴った。

「早くしろ！ ていさいなンか構っちゃいられねえ。頑丈でさえありやいいンだ。早くおっ建てることが先だ！」

近くの雑木林から切り倒してきた木材で、屈強な男たちが汗を流しながら小屋の組み立てに懸命である。

荒けずりの頑丈な丸太小屋が、十人近い男たちの手で、みるまに出来上っていく。

「——親分……」

汗を拭きながら、丑松が近づいた。

「ねえ親分、このへんてつもねえ草ッ原に、ほんとに埋っているンですかねえ？ 広い沼じゃねえから、全部掘り起したって一年も二年もかかるとは思わねえが、さらい尽して、かんじんなものが出てこなかったらどうなるンで？」

「必ず、でてくる。この絵図面に間違いはねえ！」

「その絵図は、いつかの雪の晩に、親分の家の前で行き倒れになった婆アから捲きあげたもんでしょう？ あっしにやどうもまだ眉唾なんだが……」

「あの藤乃とかいう婆アは、昔、大久保石見

守の妾の一人だったんだ。金山奉行の妾からじかに聞いた話だ。よもや嘘やでたらめじゃあるめえ」

「親分のいいつけとはいえ、あの婆アをしめ殺したのは、このあっしなんですからねえ。」

その古ぼけた絵図面には、どうもあの婆アの怨霊でもついていそうで気味がわるい」

「くだらねえ弱音を吐くんじゃねえ。うまく掘りあてりや、百万両……いや、千万両もの金の延べ棒が、おれの手に入るんだ」

「百万両の金の延べ棒か。……どうせ隠すんなら、もっと手っ取り早く出せるところへ隠しときゃいいのに」

「ばかやろう。誰でも探せるところへ隠したのなら、今頃おれ達が来る前に、誰かに持っていかれてらァ。それでなくても、その頃は

金山奉行が隠した宝を探して、東照宮様の手の者が、八方に手を廻していたという話だ」

「しかし、この沼に沈めた黄金の在り場所はたった一枚、親分のふところに鎮座ましましてるってえわけだ」

「フフフ、そのとおりよ。みている、丑松。おれは、きつと掘りあててみせる！」

がっしりと腕を組んで、虎五郎は自信に満ちた笑みを、唇の端に洩らす。

——虎五郎一家のそんな小屋掛けの様子を四本松の萩乃、お絹のほかに、もう一人眺めている者が居た——

半襟と袖口に赤い縮緬をつけ、編笠をかぶった女である。編笠には赤い縮緬の紐がかかり、その紐を顎のところにキリリと結び、三味線を小脇に抱えた艶やかな女——いわずと知れた鳥追い女。

腰のあたりまでのびた草むらに身をひそませ、隠城沼とそれを取り巻く四辺の状況を、じっと見下している。

「——こりアたいへんな仕事を引き受けたものだ。この沼は、ただの泥沼じゃない……」

女は、小声でつぶやいた。

「それに、沼の宝を狙っている亡者どもも、思ったよりも多そうだし……」

鳥追い女——伊賀のお美夜は、これからの仕事の多難を思つて、ふと眉をひそめたが、小さな口もとには、うつすらと笑みをみせていた——

瘡かき浪人

同じ頃——

いむば屋、という、表構えは居酒屋、裏へまわれば酒のほかに、だるま女も並んでいよ

うという店。

その二階の、陽当りの悪い三畳の部屋である。茶色にすり切れた畳、ねずみ色に煤けた障子。むっと鼻にくるのは、すえたような安白粉の匂い。髪油の香。

くずれ落ちた壁土の中にまで、腐った人間の臭気が滲みこんでいる。

この三畳部屋の主——お銀。しどけなく立て膝をして、生味噌を指につけてなめながら酒をのんでいる。そのほかに、このいむば屋の抱え女たちが、それぞれの投げやりな姿で酒を飲みながら無駄口をたたいていた。

更に、もう一人。

ほうほうと月代をのぼし、げっそりとやつれた頬に、黒々と無精ひげを生やした浪人。

笹垣右膳——。

破れ壁に背をもたせ、眼を半開きに、うつらうつらとまどろむ姿は、生きるに疲れた野良犬の風貌を思わせる。手もとに置いてある大小の刀と、腰にさげた印籠だけが、わずかに侍の面影を残していた。

まだ夕刻には、間がある。やがて店に訪れる客のための化粧にも、早い時刻であった。

「——お銀。……おれにも、いっぱいくれぬか」

右膳が、ふと、つぶやいた。

「およしよ、お銀さん。病気に悪いよ。大事な御亭主さまじゃないか。もっと身体の心配をしてやらなきゃ……」

眉をひそめてとめたのは、酌婦のお松である。

「お銀さん、山帰来でも飲ませてあげなよ。

顔色だって、この頃ひどく悪いじゃないか」

「お金が無いよ」

「右膳さんの腰にブラさがっているやつを売ったらどうだい。古ぼけちゃいるが、なんだか由緒ありげな印籠じゃないか」

「忠告はありがたいが、この印籠だけは売れぬ。それより、鼻が落ちててもかまわぬから、いっぱい飲ませてくれよ。……どうせお前たち、おれのことを蔭では、瘡かき右膳などと呼んでいるではないか。ははは……」

笹垣右膳、盃を突きだしながらわらった。

「あら、知ってたの、右膳さん。ほほほ……」

女たち、声をあげてわらいこる。

「今夜もくるだろうか、あの連中……」

と、お松が話を変えた。

「ああ、草加の親分さんたちね」

「来てくれなけりゃ困るよ。久しぶりのカモだからね」

「草加の貸元が、なんでこんな下総の網風くんだりまでやって来たンだろうねえ」

「怨霊沼の宝探しさ」

「またかい？　これであたしの知っているだけでも三度目だよ。あんな底無しの泥沼に、ほんとに金の延べ棒が沈んでるのかねえ」

年かさのお松が、あきれ顔で云った。

「沈んでるのは、人間と牛と馬の骨だけさ。さんさん掘り起して、二、三人が沼にはまって死に、それであきらめて帰っていくのさ。その間に、こっちはたとと稼がせてもらおうってエわけ。…おや、もうおつもりかい…」

お銀が、徳利を逆さに振った。

酒が切れた。小皿の味噌もなめつくした。

「お米ちゃん、したの禿頭に云って、もう五合ばかり、借りておいでよ」

「もうおひらきにしようよ。昼間っから飲んでちゃ、借金がふえるばかりだよ。…それより、せいぜいきれいにお化粧して、草加のおにいさん達から捲きあげる仕度でもしようよ」

憂さはらしの貧しい酒宴がすんで、女たちはそろそろと自分の部屋へ戻っていく。

残るは、お銀に、右膳。陽は傾いて、部屋はいよいよ暗い。右膳のそげた頬に、深いか

げができる。

「——お銀。今夜あたり、草加のやくざ共に店で暴れさせろ」

ほそつと、右膳がつぶやく。

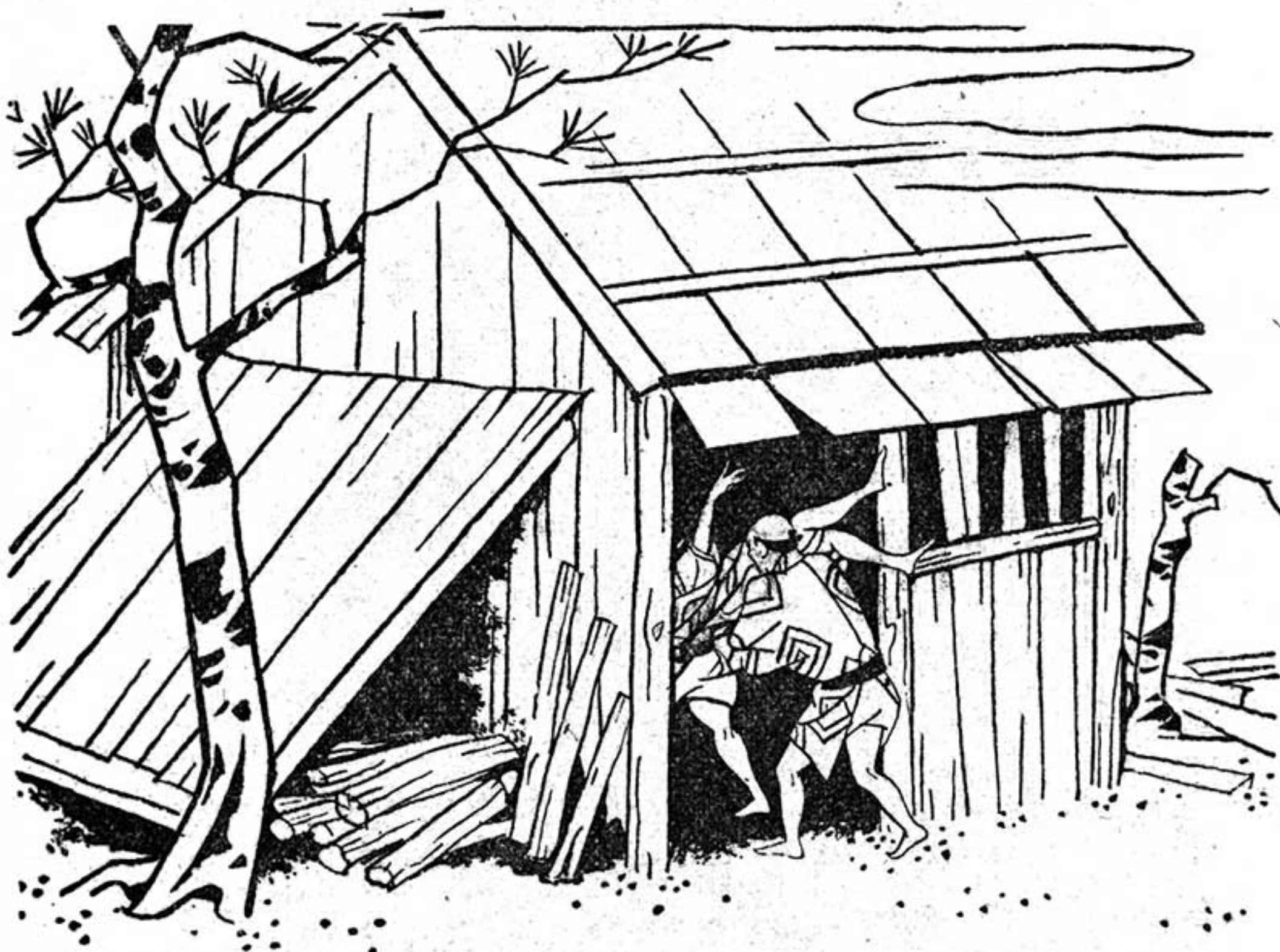
「そうだねえ。たまには働かないと、用心棒もお払い箱になるからねえ……」

もの憂く答えるお銀の頬に、さびしいやつれの蔭がみえるのも、この下総の寒村、網風の淫売酒屋に忍び寄った、たそがれのせいばかりではなさそうである。

色狼二匹

その夜遅く——

いむば屋から、村はずれの沼岸に建てた小屋に戻る道で、仙太と勘六は、夜空に向って



吠えていた。

「ちくしょう！ ふざけやがって！」

「そうともよ！ 親分だとか、兄哥だとかいっても、この道ばかりは別もんだい！ なア兄弟！」

二人とも、草加の虎五郎の子分である。

この在へきて、酒と女のある店といったらむば屋ただ一軒。しかも酌婦はたった三、四人。その女たちを虎五郎、丑松、猪助らが昨夜も今夜もひとり占めにしてしまった。いや、これは、男たちのふところ具合を睨んだ酌婦たちの当然のあらわれかも知れない。

「いい年をして、親分の助平にも、まったくあきれるぜ！」

「草加へ帰りや、妾が三人も居るくせによ」

と――

二人の後ろを、小走りに駈けていく足音。女の髪の毛の匂いが、プンと二人の鼻の穴をくすぐった。

村の家に、いつものように貰い湯にいったお絹である。湯上りの女の肌の香が、飢えた狼の眼を光らせる。

「おや、姉ちゃん……」

「おっと、逃げることはねえ。ちょっと顔ぐらい見せなよ」

手の早い仙太が、お絹の袖をつかむ。ビリッと裂ける。

「あれエッ！」

と叫んで身をのけぞらすお絹の口を、熊のような手でふさぐと、二人がかりでかつぎあげる。そのまま沼岸の小屋まで一散走り。

「おっと。もうここまで来たら、お前もあきらめなよ。この辺りは夜這いのさかんなところだっていうじゃねえか。お前だって、もう生娘じゃねえんだろ」

「いやッ！」

ガブリッと、気丈にもお絹は男の腕に噛みついた。

「ちくしょう！ ナンてえあばずれだ！」

本気になってお絹につかみかかる。細腕を逆にとって、足をからんで引き倒す。

裾をみだし、どうと倒れる女の上に馬乗りになった仙太、必死に床を掻くお絹の両腕を後ろにねじあげ、抑えつけると、手首に血のにじむほど、ギリギリと縛りあげ、

「おとなしくしていりや、こんな手荒なまねはしねえのに……」

仙太がお絹の身体に手をかけた時、

「オホホホ……」

女のわらう声。しかも、誰も居ない筈の小

屋の貌の闇から聞える。

狼二匹、ギョッとして後を振りかえった。

「だ、誰だ！」

わめく男の前に、静かに近寄る女。

「あ、兄貴、おれはこっちの女にするよ。すげえやうない女じゃねえか。今夜はおれたち、なんて女運がいいんだ！」

勘六、舌なめずりして喜んだ。

狼のように奇声をあげて女にとびかかる。

「ピシリッ」

横つらが激しい音を立てた。しかし、床に倒れているのは勘六だった。横つらを張ると同時に、女の膝が勘六の股間を蹴りあげていたのだ。

勘六は、もろくも悶絶した。

「やりやがったな。やい女！ うぬは一体誰だ！」

身構えると、女に詰め寄る。

「ごらんのとおり、しがな旅の門附女……」

――女は、伊賀の忍者、お美夜である。

「その門附が、なんでおれ達の小屋に入りこ

特集 女間諜・女忍者

んだ」

仙太、隙をみていきなりお美夜の手首をつかんだ。それをねじりあげようとして、反対にぐいと握り返され、

「うッ！」

悲鳴をあげた。腕がビリビリとしびれる。すかさず、その背に馬乗りになって、利腕とるとしめあげる。浅黄の脚絆で包んだ脛で仙太の胴をぐいぐいと押えこむ。

懷中から渋塗りの糸を五寸ほど取りだし、仙太の両腕を背中にまわすと、両手の親指だけを重ねて、その渋糸でくくり合わせた。

「いてえ！」

「動かないほうがいい。あんまりもがくと、左右の親指が、いちどにちぎれ落ちるよ」

お美夜は、お絹のそばへ寄る。恐怖に身を固くしているお絹に、

「娘さん、とんだ災難でしたねえ。痛かったですでしょう。今、縄を解いてあげますからね」

お絹の身体に幾重にも喰いこんでいる縄が女忍者の軽い指さばきでスルスルと解ける。

「ありがとうございます。おかげさまで」

「さ、それは後で。早く逃げないと、ほかの奴らが帰ってくるからね。いくらあたしが強いといっても、いちどに十人は相手にできない

い、ホホホ」

娘の手をとると、一散に小屋の外へ……。

松風やんで

四本松の梢が、風にさらされ、ひょうひょうと鳴りさわいでいる。

その松風の中の小屋に、萩乃婆が一人、名ばかりの粗末な仏壇に向って手を合わせている。

貰い風呂にいった孫娘の戻りが、今夜に限ってひどく遅い。不安な胸さわぎがする。

が、やがて——旅の門附女に連れられて帰ってきたお絹をみると、萩乃婆は涙をこぼして喜んだ。

「——どこのお方かは存じませんが、娘の危い所を、よくまアお助け下さいまして……」

「いえ、そんなお札よりも、こんな村はずれのさびしい所に、お婆さんと娘さんがたった二人きりでお暮しとは、どういうわけなんです？」

萩乃の差しだす茶をすすりながら、お美夜はさりげなく聞く。

「そのような深いわけのあるはずはございませんよ。昔からここに住んでいるというだけでな。ほっほっほ……」

「——お絹さんの親御さんは？」

「これの父親というのが、わたしの生んだ子でございましたな。この網罟で一番の器量よしを嫁にもらいました。はい、それがお絹の母親でございますよ」

「道理で、お絹さんは、そう云っちゃなんです、すが、この辺りじゃ珍らしいほどの美しさ、品の良さ……」

「ありがとうございます。ところがあなた、なんの因果か、嫁はお絹を生み落すと、産後の肥立ちが悪くて、まもなく亡くなりました。の。——その上、伴めは、嫁をたいそう気に入ってりましたのでな。嫁が死ぬと、半狂いになって酒を飲み続け、ある嵐の夜、足をすべらせて隠城沼にはまり、そのままでございます……」

「それじゃお婆さんは、お絹さんを赤ン坊の時からお育てになったわけなんですかねえ」

「はい。しなびた乳房をふくませてな。……わたしがこの沼から離れられぬのも、伴の骨が、この沼の底に沈んでいるからでございますよ……」

「なるほど……。——で、お婆さんはこの土地のお生れで？」

しかし、このお美夜の問いには答えず、萩

乃は、ふと眼を宙に浮かせた。

「——松風がやんだ。妙になまあたかくな
った……雨が、くるぞいな……」

萩乃婆が、つぶやいた。

「こんどの雨は、長くなるぞいな……」

萩乃婆が、唇をひらかずに、ぼそりとつぶ
やいた。

「お婆さん。風がやんだだけで、長雨のくる
のがわかるんですか？」

お美夜、好奇の眼を、しわだらけの老婆の
顔に向ける。

「オホホ……。お婆さまはね、明日の空模様
をあてるのが、とてもお上手なの」

「——もう、七十年も、この四本松に居りま
すのでな。……ことしの梅雨は長くなる……」

蛙の鳴き方が普通ではない……」

女忍者の背筋に、冷たいものが走った。

「——沼の底が、ぬける年かも知れぬ……」

「沼の底が？」

聞き返すお美夜。

しかし、萩乃婆は眼を

閉じ、あとは口の

中でモゾモ



ゾと、何やら祈りの如きつぶやきを洩らすの
み。

お美夜の背筋に、再び、氷のようなひやや
かなものが生じる。

パラパラ……と、かやの屋根に、雨が降っ
てきた。

泥沼を渡る影

「——降ってきたな……」

笹垣右膳は、いむば屋の裏口から、ぶらり
と外へ出た。

今夜も、いむば屋の店の中には、昼間の力
仕事に疲れた虎五郎一家の荒くれ男どもが、

酒に酔い痴れて騒いでいる。

濡れながら、隠城沼に足を向ける。

虎五郎の沼掘り工事は、もう始っていた。

沼面をおおった草群の一角が、掘り起され

て黒々と口をあけている。

と——。右膳は、思わず目をみはった。
雨降りしきる沼の上を、人影が動いている
のだ！

一步踏みこめば、足を取られて、みるまに
全身を吸いこまれてしまう泥沼の上を、人間
が歩いているのだ！

草を足でなぎ倒しながら、スイ、スイ……
と、滑るように歩いている……

その人間の手には、一本の長い竿が握られ
ていた。おそろしく長い、一丈もあろうかと
思われる竹竿である。

その竿を、泥の中に突きさす。また抜いて
は、沼の上を滑りまわる奇怪な人影！

渋茶に染めた覆面、忍び装束——女忍者、

伊賀のお美夜である。

腰には、鎖のついた四寸程の小さなイカリ

が結びついている。

足には、水蜘蛛をつけていた。

水蜘蛛——上質の竹を、さし渡し二尺一寸

八分の円形に編み、その上に厚さ四寸ほどの

桐の板をあてがう。更に鹿皮を袋状に貼りつ

け息を吹き入れる。中央に下駄の鼻緒のこと

き紐がついており、それを足にくくりつけて

履く。水上に浮かびて渡る、伊賀忍者の密器

である——



底を通っているのだ……)

このあたり一帯に、妙に湿地が多いわけがここにある……。

ふと――

お美夜は、沼岸に人の立つ気配を感じた。
(しまった!……)

はっと、身をかがめる。

竹棒を泥中に突き隠したまま、お美夜は中腰になって猫のように沼の上を滑った。ざわざわと草が揺れる。岸について、水蜘蛛をはすす。すばやく折り畳む。

しかし、はっと一息ついたお美夜の背後に早くも沼岸を半周した男の影が近づいた。

「沼をすべる曲者。おぬし、何者だ。狐か、狸か?……」

――笹垣右膳、雨の中を駆けぬけ、さすがに肩で息をしながら云った。

しかし、お美夜は無言である。

着流しの瘦浪人だが、腕は確かと睨んだ。

二人は、一本の木立ちの中には、互いに呼吸を計りあった。ギラリと、右膳が刀を抜いた。

をあてる。

竹のフシは、すべて抜いて

ある。

水蜘蛛を履いたお美夜が、二間半の竹を四

本継ぎにして一丈の長竿づくり、それを、ズブリと泥の中に突きおろす。

深さを測っているのである。

一丈の竹を沈めるだけ沈め、端が沼面すれすれになると、お美夜はその竹の切り口に耳

お美夜は、沼底の声を聴くのだ。

底無し沼ではない――底はある。泥でない

水の流れが、彼女の耳に伝わる。

女忍者の耳は、雨音と流水とを的確に聴きわけける。

(――印旛沼と手賀沼を結ぶ流れが、この沼

特集 女間諜・女忍者

お美夜が、つと、腰のイカリに手をやる。

高い所へ登る時、城壁をひき破る時、敵船にひっかけて転覆させる時に使う、四寸の小イカリ。三間の細鎖がついている。

じりっと押す右膳に、びゅっとイカリが空を切った。

「ほう、珍しい武器。おぬし、忍者か？」

危くかわした右膳、たじろぎながら声をあげる。

お美夜は、なおも無言。

「幕府の隠密だな！」

斬り込む右膳。びゅっと、またイカリが鼻さきに鳴る。右膳は飛び退った。

また、睨み合い数秒――。

じりつくと、右膳は左後に退りはじめた。機をみて、ひらりと雑木が密集している林の中に飛びこむ。

（しまった！）

お美夜は叫ぶ。この林の中では、鎖のついたイカリは振りまわせない。

「――幕府の隠密は、おぬしで三人目だ。先の二人も、おれが斬った！……」

身構えたまま、右膳はつゞやく。

「――徳川も、もう三代。この基礎はゆらぐまい。金も莫大に溜めこんだ。なお、その上

に、こんな田舎に埋もれた私財までも奪おうとするのか！」

右膳の声は、悲痛だった。

沈黙を守っていたお美夜が、ふと、それに答える。

「――私財ではない。公財であろう……」

ふくみ声である。相手には女と気づかれな

い。「ちがう。この沼に沈む黄金は、大久保家に仕えたおれの祖母が、命をかけて守ったものだ！」

「なに？」

「――石見守の妾だったおれの祖母が、殿から遺された唯一の財産だ。大久保家をつぶした家康は、妾の金まで奪おうと、祖母を追った。祖母はここまで逃れて、金を沼に沈めて殺された……」

お美夜の気迫がゆるんだ。

「――おい隠密。今夜の勝負はあずかりだ。

雨が降ってる。おれの身体によくない。また逢うぞ！」

右膳は、刀をひいた。

「待て！」

だが敵は、木立ちの蔭から蔭へ消え去って

鳥追ひ受難

――びしょ、びしょ、びしょ……

びしょ、びしょ、びしょ……

「よく降りやがる。今日でもう十日だ……」

虎五郎が、ベツと唾を吐く。

しかし、雨は降り続いて、沼掘り工事はすすんでいる。ふんどし一つの裸になった男たちが、掛声あげて泥をすくいあげる。一方ではそれを運びだす。

沼の岸辺に、さらいあげた泥の山が、幾つも並ぶ。その泥が雨に流れだして、あたり一面に這い出し、腐臭がむんむんとたちこめる。人喰い沼の泥だけに、妙にねっとり足の裏にべとつくのである。

「裸虫のおれたちにや、雨に濡れるのはこたえねえが、この臭いだけはたまらねえな」

人足たちが顔をしかめる。

「それにしても、よく降りやがる」

丑松も空を仰いだ。

「天の底が、ぬけたんじゃねえかな」

と、猪助も悲鳴をあげる。

「くさくさしてやりきれねえな。何かこう、パアッと陽気に騒ぎてェもんだ」

と、丑松が大きな舌打ちをした時である。

——どこから現われたか、鳥追い笠をかぶり、裾を高くはしょった女が、小屋の軒に駆けこんできた。

「ああ、いやな雨なこと。すっかり濡れてしまったよ」

雨がかからないように、三味線をしっかりと袖の下にかいこんでいる。

草履の素足が、ぬけるように白い——お美夜である。

「こいつはおどろいた。おあつらえ向きじゃねえか。おい、ねえさん」

丑松が、目を丸くして声をかける。

「あい、何です？」

「なんですじゃねえ。どこから来た？」

「向うから」

「この長雨続きに、商売に出てきたのか？」

「雨降りだからといって、宿にゴロゴロしていられるような、そんな結構なご身分じゃないンでね」

「それは、おれ達も同じことよ」

「ねえ、おにいさん、お願い。しけ続きなんだよ。ここで商売させておくんないな」

丑松の裸の肩に、お美夜の白い指がのってしきりにの字を書いている。編笠の下のが、じっと丑松をにらむ。その色っぽさ。

丑松、思わずブルブルとふるえて、

「よし、おれが親分に話してやるから、今夜はこの小屋で商売するがいいや。若え者が二十人もゴロゴロしてるんだ。女ッ気がねえんでイライラしてやがる。酒の酌でもしてやりや大喜びだ」

「うれしいよ、おにいさん。これでやっと今夜はおまんまにありつけるよ」

丑松の腕にギュッと取りすがる。

そして——

その夜は、小屋の中で酒盛りがはじまる。

お美夜のかき鳴らす三味線で、飲めや歌えの大騒ぎ。長雨の憂さをはねかえして、小屋が破れかえるほどのにぎやかさ。

「——ねえさんのおかげで、うちの若い者たちや大喜びだ。野郎には、やっぱり女の匂いが一番気つけになるよ。ははは」

お美夜を自分の横に座らせて、虎五郎も上機嫌である。

「さあ、お前も三味線ばかり弾いていねえでいっぱいやったらどうだ。野郎どもも大方酔いつぶれて寝こんでしまったじゃねえか」

騒ぎもやがて静まって、あっちにゴロゴロこっちにゴロゴロ、真赤な顔をした男どもがひっくり返って高いびき。

「ほんとうに罪のないおにいさんがた……」

虎五郎の盃を、器用な手つきで飲み干してお美夜が、

「さ、親分、ご返盃……」

「いい飲みっぷりだなア、ねえさん。気に入ったぜ。もういっぱいやれ」

赤い顔をテラテラと光らせた虎五郎、お美夜の肩を抱きかかえて、その手を握り、

「こんな白い手で、うちの仙太や勘六を手玉にとるとは、嘘のような話だな。うふふふ」

ハッと、お美夜の手から盃が落ちる。

「うふふ。おれの腕は、仙太よりはちっとばかり筋金が入っているぜ」

「あっ！」

と、立ち上ろうとするお美夜を、がっしりと抱きすくめた虎五郎、

「やい、女。てめえ誰に頼まれて、この小屋に探りを入れたきた！」

「そ、そんな！ あたしや旅の門附で……」

お美夜は虎五郎の手を振りきる。戸口に向って逃げかける。

丑松と猪助が、大手をひろげて、お美夜の前に立ちふさがる。

「あっ！」

男三人が、前後から一度に襲いかかる。

足を払う者、腰に抱きつく手、咽喉をしめつける腕。たちまち、どっと倒され、ねじ伏せられるお美夜。

「あれ！ ゆるして！」

男三人に躍りかかられては、お美夜の抵抗もむなしく、手どり足どり、人形のように転がされる。

「仙太と勘六の仇だ。思い知ったか！」

お美夜の腕が、後ろに縛りあげられる。びりつと袖が片方ちぎれる。

「ついでに足も縛っちまえ！」

「ひいッ！」

荒くれ男の手が指が、腰や太腿のあたりに這いまわって、お美夜は思わず女の悲鳴をあげた。

全身グルグル巻きに縛りあげられたお美夜どさりと床の上に放りだされる。縄に締めつけられた胸が、せつなくあえいでいる。

黄金絵図面

「油断しちゃいけねえ。こんな荒くれ男どもの中に、たった一人で探りを入れに来た阿女だ。白状させるまでは気をゆるすな」

さすがは虎五郎、ただの女でないと睨んでいる。

「念のために、この上からもう一卷き縛って柱につないでおきましょう」

荒縄をつかんだ猪助、お美夜の髪をつかんでぐいと引き起す。力まかせに、さらに俵をくるように縛りあげ、縄尻は柱に結ぶ。

「これだけしめあげりや、煙りにでもならねえ限りは逃げられねえ。もう死んだようにぐったりしてるぜ。ハハハ」

仰向いたお美夜の白い咽喉を、ぐいと足の裏で踏みこむ。

「こんな邪魔がはいるのは、はじめっから承知の上だ。うまくいけば、この秋頃までに金は掘りだせそうだ。それまでは、どんな奴がおれたちの仕事を狙っているかわからねえ。油断は禁物だぜ」

「へえ、だが何といったって、親分には確かな絵図面がある……」

「馬鹿野郎！ それがお断だっていうんだ。絵図のことは、おれと丑松とお前だけしか知らねえ。丑松とお前には、工事の小頭だから仕方なく教えたんだ！」

虎五郎は、眼をジロリとお美夜に向ける。しかし、胸も腕も、腰から太腿までギッチリと縛られ、足首も柱の根もとにくくりつけられている女は、青白い顔で眼を閉じたまま

である。

その時、死んだようになって転がされているお美夜の耳が、ピクリ、と動いたのを、虎五郎は見逃していた。

そして——それから二刻ばかりたった暁方近く。

蛇が身をくねらせて前進するように、縛られたお美夜の身体が、くねくねと動きはじめた。

——腕の関節が、音もなくはずれる。

あれほど全身にかけて、ギリギリと縛った縄が、ズルズルとゆるみ、やがて苦もなく脱けだすお美夜である。

びしょ、びしょ、びしょ……

怨霊沼に降りしきる雨。その雨しぶきの中を走っていく女忍者の手には、たった今、虎五郎の懷中から抜き取った絵図面が、しっかりと握られていた。

雨に濡れた顔で、ニヤリと笑う女である。

地底の歌

「よく降ること。今日で、二十五日目です。おば様、この梅雨は、いつになったら終わりますか？」

お絹は、小屋の軒から空を見上げる。どっ

ぷりと墨を流したような空から、寸時の小止
みもなく、雨は降り続ける。

「——あと三日じゃ、あと三日たてば、沼の
底がぬける……」

「そんな、おば様。沼の底がぬけ
るなんて……そのような、おかしな
ことが……」

お絹は、わらった。

「ことしは、二十五年目じゃ。二十
五年目ごとに、この沼の底はいれか
わる……」

「二十五年目ごとに？」

「——お絹、よく聞くのじゃ、今年
こそ、あの黄金があがる。今こそ、
お前に云って聞かす、わたしの秘密
を……」

「おば様の秘密？」

「——今を去る七十年前、慶長十八
年の秋の暮であった……わたしたち
は、家康様の手の者に追われて、八
王子のお城から、ようようと、ここ下総の国
まで逃げのびてきた……」

萩乃婆は目をつぶった。当時を思い起すか
の如く、頭をひとつ、ゆるやかにふって語り
はじめる。

「——わたしたち、つまり金山奉行、大久保
石見守長安様の側妾のうち、雪乃どの、藤乃
どの、そしてわたしの三人は、それぞれのお

た祖母の意外な物語に聞き入る。

「——しかし、家康様の詮議はまことに厳し
く、ついに、わたしたちはここより先へも、



子を抱いて、家来、侍女たちと共に、お殿さ
まから頂戴した黄金を馬に乗せて、その頃に
は、まだ水のたたえられたこの隠城沼のほと
りにまで、たどり着いた……」

お絹は目をみはって、今まで秘められてい

後へも退くことのできぬまでに追いつめられ
てしまった……そこで覚悟を決め、家来、侍
回たちには、それぞれ金と物を与えて暇をだ
し、その場からこっそりと立ち去らせた……
雪乃どののは男のお子、藤乃どのには女のお子

特集 謀間女・忍者女

……わたしには男の子、つまりお前の父と、三人には、それぞれ一人ずつの乳呑子があった。わたしたちは、その子供たちと共に、この沼に身を投げるつもりであった……」

「……」
「——そしてまず、まわりの草に火を放ち馬五頭の背に乗せた黄金を、馬もろともに、この隠城沼に追いたてて沈めたのじゃ……」

「……」
「さて、次にわたしたちが、それぞれの子を抱えて、いざ入水しようとした時に、それをとどめたのが藤乃どのであった。——家康様の御詮議は黄金だけをめあてにされてのこと。さすれば黄金はひとたび沼に隠し、時移り、世情変りてより、改めて掘り出し、大久保家再建の折の費用になどあてて——と語らって、わたしたちは死を思いとどまった。そして、絵ごころのある雪乃どのが、黄金を埋めた場所の絵図を描き、心覚えとしたわけじゃ……」

「……」
「——わたしたち三人は、その夜、沼のほと

りの物置小屋に泊った。すると真夜中、藤乃どのは一人起き上って、寝ている雪乃どのの胸を懐剣で突き刺し、息の根をとめ、目ざめて逃れようとするわたしの背をも、また背後から突いて、わたしを倒したのじゃ……」

「まあ……」

「お前もよく知っている、わたしの背の古傷はその時のもの。藤乃どのは、沼に沈めた黄金を一人占めにする気であったのじゃ。絵図面を懷中にとすると、ご自分の子まで捨てて、どこへか姿をかくしてしまった。その時よりわたしは殺された雪乃どのの子、捨てゆかれた藤乃どのの子、それからわたしの子、この三人の乳呑子を、その小屋に住んで育てたのじゃ。……しかし、三人の子に与える乳もなく、その日の食にこと欠く貧しい暮しに、村の人々も見ろに見かね、お二人の子は、旅商人の手を経て、どこへか貰われていった……」

胸おののかせて聞く孫娘お絹。

そして、老婆の語り継ぐ話に、息をひそめて耳を傾ける、もう一人の人間が居た。

小屋の板壁に、蝙蝠のように身を寄せた渋茶装束の者——お美夜である。

「——そうか、お前にも聞えたか……。あの地鳴りは、長雨のために、いままで涸れ果て

ていた沼が、またよみがえる、その前触れじゃ……」

「沼がよみがえる？」

「そうじゃ。長雨が降る年に、この変異がおきるのじゃ。いま地の上にあるものが、沼底に沈み、そのゆりかえしで、泥沼の底が地上に押しあげられるのじゃ」

「おそろしい話……」

「——わたしが、黄金をこの沼に沈めてから二度、この変異があった。わたしは今までに二度みている。こちらの沼が浮き、あちらの丘が沈むのを。こちらの丘が沈み、あちらの沼が涸れて丘となるのを……。だから、藤乃どのが奪い去った絵図面も、まるであてにならぬ、反古同然のものなのじゃ、ほっほっほ……」

その絵図面は、めぐりめぐって、いま戸外にひそむ女忍者の懷中にある。

「この沼の黄金は、わたしのものじゃ。わたしと、藤乃どのに殺された雪乃どののものなのじゃ……。その雪乃どのの孫が、一人、このあたりに居るのじゃが……」

「そ、それは誰です！」

「いむば屋に住む、笹垣右膳じゃ。笹垣というのは雪乃どのの苗字。あの浪人の眼のあた

り、鼻のあたり、よう雪乃どのに似ている。それに、あの腰にさげた印籠は、古びてはいるが、たしかに雪乃どのが、殿より拝領した品に相違ない！」

「あの、いつもお酒に酔っている、怖しいお侍が……」

「しかし、あのような無頼の浪人に、殿より頂いた大切な黄金は渡せぬ。殿の黄金が泣くからの。七十年の間、この沼のほとりに住んで、あの黄金を守ってきたわたしの一念からしても、あの野良犬侍には渡せぬ！」

「しかし、その黄金は、まだ沼の底に……」

「ふっふっふ……。もう、しばらくじゃ、もう、しばらくじゃよ、お絹……」

雨はなおも、びしょびしょと降り続く。

老婆の一念こもる、怨霊沼の長雨である。

幻覚の黄金

雨音にまじって、遠雷のように響く地鳴りを、いむば屋の二階で、笹垣右膳も聞いた。

真夜中——うなされるが如く、右膳は目ざめる。

せんべい布団をはねのけ、彼は起った。

「お前さん、どうしたの？」

隣りに寝ているお銀も眼をあげ、不審気に

聞く。無言で階段をおり、外へ出る右膳。

不安な予感がして、お銀も後を追う。

雨降りしづく深夜を、右膳は物の怪につかれたように、フラフラと歩く。

げっそりと肩のそげた右膳の後姿が、お銀の眼に、幽霊のようにも見える。

「お前さん、身体に毒だから……」

寄りそうお銀の手を払いのけ、なおも雨に濡れてすすむ右膳。

やがて、彼の眼の前に、怨霊沼がその不気味な姿をさらす。

彼は、濡れた地に、ひたと耳を寄せる。

(うむ、聞える、怨霊沼の地鳴りが！)

その時——右膳は聞いた。

ひととき高く、重く響く地のうめきを。

そして、その時——彼は見た！

彼の眼前に横たわる泥沼の表が、ぐぐっと大きく左に傾くのぞ！

「おおッ！……」

泥が流れる！ うわべに生い茂る草を押し倒し、巨大な悪魔の口のように、ぽっかりと

黒くあいた穴から、ドロドロといま粘泥が溢れて片方にゆらく。

ごおごおとうなりをあげ、あとからあとから噴出する泥！

と、同時に——

沼岸の北側が、ズルズルと沈みはじめた。

岸辺の土堤が音たてて崩れ、ひび割れて沈下していくのである！

そして、沼底から押し上げられた泥の奔流が、その陥没の隙に、どどっとなだれこむ。

「おおッ！——」

その時、笹垣右膳の眼が、カッと見開く。

「馬だ！ 黄金を積んだ馬だ！」

右膳の眼はみた！

溢れ流れる泥の中から、黄金棒を背にのせた馬五頭！

ひづめの音ひびかせながら、いま、岸に向かってすすみくる姿を！……

「おおッ、黄金だ！ おれの黄金だ！」

両腕を前に突きだし、雨に濡れた顔を空にむけて、右膳はよろよろと足を踏みだす。

「お前さん、あぶない！」

お銀は必死の力で右膳の腰を抱き、後へ引き戻す。

「あっはっはっは……」

右膳の異妖な高わらいに、お銀はギョッと彼の顔をみた。キラキラ光る眼は、もう何物の影も認め得ない。

(狂った！……)

——ついに病氣は脳を犯したのだ！

「馬なんて居やしないよ！ 黄金なんて見えないじゃないか！ 危ない！ 沼に近寄っちゃ、あぶない！」

お銀はしかし、すさまじい狂人の力にひきずられた。

右膳の足が、流れ動く泥沼に踏みこむ。

「ああ！」

流泥に足をすくわれ、彼は横さまに転げ落ちる。

泥波が、みるまに右膳の身体を呑む。

「お前さん！」

右膳の腰にすがりついたお銀も、一声を残して泥にまみれた。

「ああ！」

抱き合った二人の身体は、またたく間に暗黒の泥流に没した。

老婆執念

恐怖の一夜は明けた。

と、嘘のように、昨夜までの長雨があがった。

ひと月ぶりの日光が、サン然と怨霊沼の上に輝きわたる朝であった。

四本松の、萩乃婆の小屋は——

老松四本の強固な根に支えられた土が、びくともせず、小屋の土台を守っている。

お絹が、小鳥のように外へとび出す。

「おば様、たいへん！」

その声に、萩乃婆も外へ出る。一夜荒れ狂った怨霊沼を見おろす。

「おお！……」

——沼は、移り変っていた……。

はるか対岸の虎五郎の小屋も工事場も、影かたちなく消えている。そのあたりには、既に満々たる泥水が、朝の日ざしに、にぶい光りをはねかえしていた。

そして、目の前の怨霊沼に、むっくりと高く盛り上った土の山。それこそ、昨日までその沼底に眠っていた土なのである。

萩乃婆は丘をかけおりた。

老婆とも思えぬ、猿のような身のこなしで一夜のうちに陽の目にさらされた沼底の土にむしやぶりついた。

うわべの泥をはねのけ、はねのけ、狂気のように白髪みだし、黄金棒を探す老婆の一途の執念。

「おば様、やめて！」

不安になったお絹が声をかける。

しかし、萩乃は素手を泥に突っこみ、眼を

血走らせて、黄金のありかをまさぐる。

「あった！」

老婆の指先が、固いなまこ型の物にぶつか。両手で泥をかきのける。

「おお、あったぞ！」

爪で、それをひっかく。陽にすかしみる爪の先に、わずかに光る黄金の粉！

「黄金があった！ 七十年守り通した、わたしの黄金だ！」

白髪をふるわせ、金粉の光る爪をおのが眼に押しあて、歓喜の老婆は、泥まみれになつて躍り狂った。

と——老婆の身体が、うむ、と折れ屈む。がっくりと膝をついて、泥の中に両手を突きそのまま俯伏した。

「おば様！」

かけつけたお絹が、あわてて抱き起す。

しかし——萩乃のこたえはなかった。

既に、息が絶えていたのである。

伝奇滅亡

——その有様を、女忍者、伊賀のお美夜は四本松の枝に腰をかけて見つめていた。

松の幹に、おのが身体を結びつけて、変貌する泥の一部始終を観察していたのである。

お美夜は、スルスルと枝をおりた。渋茶装束のまま、お絹のそばへ走り寄る。

「お絹さん！」

「あ、あなたは！」

お美夜は、老婆の胸をひらき、まぶたを裏がえした。しかし、息を吹き返す気配はもうなかった。

泣き伏すお絹。そのかたわらに、泥をかぶった黄金の延べ棒、およそ三十本……。

七十年間、沼底に眠り続けた祕宝、いまここに現われる！

お美夜は、草鞋の足で、しばらく泥をかき落していたが、やがて腰から小刀をひきぬいた。黄金棒の表面を、注意ぶかくけずり取るのである。

「お絹さん、これをこらんなさい……」

小刀でけずりとられた黄金棒の一片下は、意外にも、すぐそれとわかる、ねずみ色の鉛であった！

「こ、これは！」

「そう……黄金はうすい上皮一枚、あとはすべて、鉛の固まりなのよ……」

お美夜は、三十本の黄金の上皮を、次々にあばいていった。すべて中身は、冷たい色をした鉛の固まりだけである……。

お美夜は、ふうっと深い息を吐いた。

「——家康様も、狸と呼ばれるほどの方だったんだけど、大久保様もたいしたお方だったのよ、お絹さん。——一介の猿楽師から、天下一の大金持に成り上った人だ。悪がしこさも人一倍……。奥方のほかに妾が二十四人。その妾に、金をかぶせた鉛の棒を与えて喜ばす……。あくどい話だが、この位のことはやりかねない殿さまだったのよ……」

「おば様！ 可哀想なおば様……」

「——たくさんの人が、そのおかげで死んだり、殺されたり……。萩乃さんは、この黄金の山が、まさか鉛の固まりとは知らずに、喜んだまま亡くなりなされた……。一番しあわせなのは、お婆さんかも知れませんが、お絹さん……」

老婆の亡骸の前に立つお美夜とお絹に、さわやかな梅雨明けの風が吹く。

伝奇を秘めた怨霊沼は、かくして消え去った。

——女隠密は、江戸城吹上奉行への報告状を、胸の内にしたためる。

それから数日後——

江戸への街道を、手甲脚絆きりりと旅仕度

に身を包んだ二人の女が歩いていく。

その一人は鳥追い女。連れの娘の面倒を何くれなくみてやり、二人は姉妹のようにも見えるのだった。

街道には、もう夏を思わせる明るい日ざしが、まぶしいほどに照りかえしている。

悦虐への道

黒い陽炎

かげろう

次号掲載

浜松 武



にせ札を獄中で造った男

柳 生 巨

古 正 英 生・画

★現代の錬金術師は看視嚴重な獄房の中でみごとににせ札を造り上げた！奇蹟はいかにして起つたか？

獄房第百五〇号

「こうやって一日じゅう何もしないでいるとやりきれん」

三十がらみの丸顔の男が、きたないものでも吐きだすように言って、いらいらと、壁まで急いで歩き、どすんと身体をぶつけて戻ってきた。ものの五秒とかからなかった。そのはずである。間口六フィートに奥行九フィートの獄房だったからだ。

「そうヤキモキしたって始まらん。成行にまかせろさ」

ほっそりした蒼白い顔の若いほうが静かにあきらめの眼を窓に向けた。物思いに沈んでいる学生といった感じの男だった。

「腹が立つ。俺は、もう、たまらん。いった





い、なんだって判事の畜生め、判決を延ばして、こんなところに送りこみやあがつたんだ？

「俺たちが、まだどこかに金を隠してると思ってるんだよ、きっと。それで、こんなふうにし殺しにしておいて、ウイルキイの野郎、ない金を一生懸命さがしてるんじゃないですかねえ？」

「なんにせえ、こんなに癪にさわることでありやしない。むしろくしゃする」

「ま、落着きなせえ。じたばたしたって、どうにもなるもんじゃない。まだ半月になるかならねえかですぜ。どうせ、俺たちや、短くて五年は食うにきまつてる。いまから辛抱で

きなくちゃ病気にでもなったらどうするんです？ ヘレンさんが――」

「やめてくれッ！ 二度と女房のことを言ったら締めあげるぞッ！」

丸顔は、蒼くなって怖ろしい眼つきで若いほうを睨みつけた。若い男は、だまって首をすっこめ、指先で軽くベッドの縁をたたきはじめた。

「あーあ」

丸顔は、低い絶望的な呻きを発し、両手で頭をかきむしりながら、ひとしきり房の中を行ったり来たりしていたが、やがて片隅にじいッとうずくまると、それっきり口をつぐんでしまった。

ニセ金作りのアーサー・テイラーとボールドイン・ブレデルの二人だった。ブレデルのほうが三つばかり年下の弟分だった。そこはフィラデルフィアの南の端にあるモヤメンシン監獄の第百五十号房で、じめじめした薄暗い、囚人たちの言葉で言うアナだった。周囲はビクともしない石でたたんであり、縦三フット横四インチという牢獄特有の細長い窓が一つあるきりで、もちろん窓には頑丈な鉄棒が植えてあった。小さな覗き穴がある桧材で作った厚い戸がぴたりと閉められ、まるで狭い戸棚の中に入っている感じだった。二つの簡易ベッド、ぐらぐらしている洗面台、よこれきった水差し。これが部屋の中にある道具の全部だった。

一八九九年のアメリカの獄房は、どこでもこの程度で、囚人たちは、おたがいに膝を重ねて同居しているといってもよかった。

「おい」 翌朝テイラーは何事か決意したように顔を近づけた。「俺は、五年なんて長いのにや我慢できないぞ。もっと軽くなるように判事を仕向ける道を考えついたんだ」「そんな巧えことがあったらね」

ブレデルは気のない返事をした。

「あるんだ」テーラーは戸のほうにチラと眼を走らせた。「金を作ろう、金を」

「え？」

「知れたこと、ニセ札を作るんだ、お手のものの」

「なんだって？」ブレデルはベッドに起きなおった。「気でも狂ったんじゃないのか、兄貴？ このアナの中でビラ作りだと？」

「どうしておかしい？」テーラーの眼はきらきらと光った。「いいか、俺たちは、ちょっとまとまった金を作って女房に持ち出させるんだ」

「何に使うんだ？」

「あたり前じゃないか、買収するんだ。特捜の奴らだって判事だって、それ地獄の沙汰も何とかだよ。その代りに刑を軽くしてもらうんだ」

「ニセ札作りを捕まえる奴らにニセ札をつかますのか？」

「そうよ」

ぶッとブレデルは吹きだした。それから不安な顔で兄貴分をじいっと見つめた。

「ふん、俺が気でもフレてると言うんかい？ 本物と違わない物が作れる俺じゃないと言う

のかい？」

「そりゃわかってる。俺と兄貴が一緒に仕事をすりゃ本物そっくりな物ができることは百も知ってる。しかし、それや娑婆での話だぜ。自由に材料や道具を使

っての話だ。いくら俺たちが名人だって、ここじゃねえ」

「要る物は持ちこむさ。道具だって腐蝕液だって版下の材料だって」

「だめだよ」ブレデルは頭をふった。「まさかカメラや印刷機械までは持ちこめまい。

だいいち、印刷機をここに入れたら部屋が一杯になって身動きもできなくなる、たとい看守が全部メクラで運び入れたとしてもさ」

「だからお前は脳味噌が足らんというんだ。できることをやるんだ。

カメラがなきゃあ、ないようにやる。印刷機械がなくなつて、お前は機械にかけては天才じゃないか」

「とてもできないよ」ブレデルは相手を哀



れむように眺めた。「ここじゃ、悪魔でも不可能だね。しょっちゅう回ってくる看守の眼があるし——」

「俺たちや尻が腐るまで坐っていることはできないんだ。いまから指の爪を尖らせておいて一枚の紙を二枚にハガせるようにしとけ。一つ一つにぶつかってはなんとかするんだ」

テラーの声は昂奮してふるえていた。

「なアに、監獄の中でだって、できないことがあるもんか！」

名人コンビ

「部長、これですよ」

若い男が差し出した一枚の二十ドル紙幣を黙って受取った四十に近い精悍な顔つきをした男は、ぴちツと札を指で弾いて片手に大型の拡大鏡を取りあげた。

「ふーむ」しばらくして拡大鏡から眼をあげて若い男に声をかけた。「こいつが自転車屋から出たやつか？」

「そうです。銀行が言うには、その札の緑色がおかしいような気がするというんですが」「ニセかどうかは検査してみなくちゃわからん。いくらフレデルの弟が使った金だといっ

ても簡単に決めてはいかん。それに兄のフレデルはモヤメンシン監獄にいるんだからな」

アメリカ合衆国財務省の秘密特別捜査部長ジョン・ウイルキイは、大きな息をつく腕を組んで眼をつむった。すると、すぐに彼の頭の中に、にこにこ笑っているテラーとフレデルの顔が浮び、それを払いのけようとしても、どうしても消えなかった。

「部長のおっしゃるとおり、かりにその札がニセ物としても、テラー・フレデルの仕事じゃありません。あの二人は獄中にいるんですから、犯人は別のやつですよ」

ウイルキイは眼を開けなかった。若い部員は勝手にしゃべった。

テラーたちがモヤメンシン監獄に送られてから約五ヶ月、もう秋風がワシントンの街角に吹きはじめていた。財務省の特捜部は、もっぱらガン造の紙幣や硬貨を対象にし、その他の税票や有価証券、密輸出入などを取扱い、警察権をもっていた。かれらはTメンと呼ばれ、ずっと後になって暴力ギャングに対抗するために連邦警察にGメンができたが、これはTメンと区別するためだった。

ウイルキイ部長がテラー一味を逮捕する

までには十七ヶ月もかかった。それほど彼らは巧妙に立廻り、かれらが作ったガン造紙幣は、アメリカはじまって以来の精巧を極めたものだった。なるほど、今日から見ると、作るほうも観破捜査する側も時代に相応した幼稚さがあつたろうが、この二人はまさに名人コンビであり、その技術は天才的であつた。また、彼らが簡単に逮捕されなかったのは共犯が少く、二人だけで作っていたからであつた。テラーの妻もフレデルの弟も、良人や兄がくれる金がニセ物とは思っていなかった。

この名人コンビのニセ札作り以後、今日までに現われた名人級は、たった三人しかいない。

ジェイムス・ニンガー。駱駝の毛の筆で手描きをして作る天才的な男で、彼が作った百ドル紙幣は銀行などではわからず財務省の検査で見破られた。

ウィリヤム・ワット。この製版師は、一九三〇年にルステイツ伯のために五百万ドルのニセ札を印刷した。特捜部で調べたところあまりにも多額のニセ札を流通させたとわかり、一九三一年のアメリカ通貨の安定性を危

ぶませた。

ジョセフ・パターノスター。すばらしい腕前のニセ金作りで、一九四六年に二百万ドルを偽造した。財勝省の専門家が、『これまで現われたもののうちで最も完全に近いもの』と嘆声をもらしたほどの出来だった。彼は、服役後、現在ある小さな印刷屋で働いている。テイラー・ブレデルの二人組は、こうした連中の大先輩とでも言うべき存在で、たとい未決で入獄中でも、ニセ札といえ彼らを連想しないわけにかなかった。やはり、睨んだとおり、別にどこかに隠しているのかな？

ウィルキイ部長

テイラーは、フィラデルフィアの一流製版者アーネスト・ライトに雇われていた。ライト製版社第一の技術者だった彼は、ある新しい写真製版法を発明した。当時、それに勝るものは他になかった。装飾模様や肖像画のエッチングに特に素晴らしい腕をもっていた。

そこへブレデルが雇われて来て、テイラーの弟分格で働くようになった。彼は、生れながらの機械の天才で、どんな複雑な器械でもチラと見ただけで同じ物を作ることができ

た。化学の知識も十人並以上で、ときどき魔法使のような芸当をやって見せた。

一八九六年の秋、二人の煙草製造業者が二人に近づき、煙草の税票を偽造する計画をもちかけた。

「あの二人は根からの犯罪者ではありません。だが、彼等はその計画に加わった。なぜか？ 誰でも金は欲しいし、金があれば好きな物が買えるからです。それに、いつまでも他人に使われているより早く独立したいという気持と、最後に一番重要な動機は、自分たちの技術で当局や世間に挑戦してやろうという職人気質と言おうか名人精神と言おうか、そういうものが強く働いて陰謀の片棒をかついたのであります」

ウィルキイ部長は、なんだか犯人たちを弁護するかのよう上司に述べたことがある。とにかく、彼ら一人はライト製版社を辞めて、フィラデルフィアに店を持った。どこよりも高い料金をとったので注文が少く、ゆっくりにとニセ税票を作ることができた。やってみると子供の遊びみたいだった。かんたんに本物そっくりの物を何千枚も作りだした。すると、びっくりするほど沢山な金がポケット

に流れこんできた。かれらは若かった。身なりもリュウとなり、すべてが贅沢になった。高価な宝石を平気で買い、フロリダあたりへ遊びに出かけた。

ヘレン——テイラーの美しい妻は、この頃に彼の前に現われた女だった。女ができるお金はいくらあっても足りない。第二の悪は避けられなかった。税票なんか作って煙草業者から金をもらうなんてきだるい。直接に金を、紙幣を作ったほうが手っとり早いではないか！

「だめだよ、そればかりは」相談を受けたブレデルは反対した。「俺たちは、あくまで技術家なんだ。その誇りは失いたくない。俺には年とったお袋や弟がある。ニセ札だけは御免だ」

「だからさ」テイラーは自信たっぷりだった。「その誇りがあるからこそやってみようんだ。税票を作るも札を作るも同じ犯罪だ。わざわざ煙草屋を俺たちの力で儲けさすという手はねえ。やめよう、税票は。それより俺たちだけで儲かることをやろう」

「紙幣ガン造は重罪だぞ」
「見つかるから重罪になるんだろう。見つ

らなきゃあ重罪になりようがないじゃないか
本物と同じものを作ったらしい。それともお
前には、それだけの自信がねえというんか？」
「兄貴と二人なら専門家の眼でも見分けがつ
かないものが作れる」

「それ見ろ。な、だから一辺だけやろう。ど
かッと何百万と作って、それっきり止めよう。
俺たちあワシントンの技術者より腕がいいん
だ。あいつらの仕事の複製くらい朝飯前さ」

ここでも彼等の自惚が大いに煽った。むず
かしい仕事だけにかえって刺戟された。手始
めにモンローの顔がついた紙幣を作ること
に、テラーが肖像と装飾と渦巻模様を受持
ち、ブレデルが文字や番号を引受けた。

仕事にかかる、二人は儲けや犯罪の意識
を忘れてしまった。それは競技でありコンテ
ストであり、技術の挑戦であった。彼等は、
鬼になって半年のあいだ仕事をした。そして
ついに精巧な鋼鉄の版下を完成し、大きな印
刷機にかけて刷った。

「それは私が今日までに見た最も精巧なニセ
ものでありまして、至芸の作品とでも申しま
しょうか」

アメリカ第一のガン造紙幣の鑑定者モーガ

ン博士が法廷で証言した。

だが、彼等のニセ札にもちよつとした欠点
があった。インクの質であった。真紅の印璽
の部分が、日がたつにつれて鮭桃色に変化し
た。それを銀行が気づき、特捜部が活動を始
めた。と同時に、モンローがついた百ドル紙
幣の回収が行われ、十七ヶ月の後、ウイルキ
イはテラーとブレデルを逮捕した。

「一千万ドル作って一、二ヶ月でバラ撒くつ
もりでしたが、九十七枚しか作っていません。
金儲けというより芸術家の自尊心からやった
のです。他に隠してなんかいるもんですか」
テラーは傲然とうそぶいた。

こうして、二人は、モヤメンシン監獄に移
され、ウイルキイ部長がほつと一安心したが、
なんとなく憂鬱になってしまった。十七ヶ月
も苦勞したので疲れが出たのか？ ノオ。目指
す犯人を挙げてがっかりしたのか？ ノオ。
ウイルキイは、二人が犯罪者だと思えなか
った。芸術家？ かどうかはさて置いて、彼
等の技術に魅せられてしまった。道を誤まっ
た二人が可哀そうでたまらなかった。が、ま
た町にニセ札が現われた。ブレデルの弟から
出たものだという。

「ちきしょう！」

とたんにウイルキイの憂鬱が吹っとんだ。

ニセ札の作り方

技術と材料と器具が揃っていても、ニセ札
を作るのはむずかしいことである。まして、
その頃は今日ほど製版術や印刷術が進んでい
なかった。ワシントンの製版局や印刷局の技
術者は象の外科医よりむずかしい仕事をして
いた。

一つのデザインが決まると、紙幣の表と裏
との二枚の鋼鉄の版下を作らねばならない。
一人で全面を受持つのではなく、部分々々を
専門家が分担する。いちばんむずかしいところ
は肖像の部分で、細いノミで鋼鉄版に毛描
きの線や点を彫る。眼や唇が彫れる者はアメ
リカ全土に幾人もいなかった。眼の一点が、
あたたかい、生きているような表情を人物に
あたえる。たいていのニセ札の肖像は、平た
い感じで、こちこちと固く、死んでいる。
錯綜した渦巻様様を彫る者もいる。人間の
毛より細い、線と線との間を八分の一インチ
の狭さにして、きちつと手で彫りこむのであ
る。裏面の風景は酸で腐蝕することが多い。

簡単なようだがエッチング特有の技術を要する。たとえば、ある一つの線は、一定の幅と深さに腐蝕させて、それ以上、浅くても深くてもいけない。

その他の装飾は機械彫りをする。機械が、肖像のバックの影などを彫りつける。ルーベ・ゴルトベルグ式という旋盤が、無限の変化のある模様を幾何学的に作り、蜘蛛の巣形やレース模様を肖像のまわりに楕円形に作りあげる。縮図器で、各種の入りこんだ環状線や渦巻をこさえる。

こうした一切を半年ぐらいかかって、辛抱づよく鉄の意志と細心の注意をもって仕上げた。どんな小さな誤ちも許されない。たった一点の過失でも全体がダメになってしまう。製版者たちの待遇は至れり尽せりで、あせらず、ゆっくりと仕事をする。

政府は用紙の質とインクの配合の秘密を保ち、優秀な印刷者と二人の助手に大きな紙に印刷させる。印刷も製版と同じように最高の技術が要る。非常に細い線が多いので、下手をすると線が潰れたりボケたりする。

だから、もし、ニセ札を作ろうとすると、以上のあらゆる困難にぶつかり、芸と技を競

わねばならない。ニセ札作りにはさらに障害がある。こっそり秘密裡に仕事をし、出来上った品を巧みに使わなくてはならない。

ところが、テラーは、この困難な仕事を間口六フィート奥行九フィートの獄房でできると確信した。

「まるで強烈な風が吹きすさんでいる北極でノミと槌だけで精巧な時計を作るようなもので、つまり気違い沙汰です」

後で彼等のニセ札が問題になったとき印刷局の一官吏は言った。

さいわい、モヤメンシン監獄の看視は、他より厳しくなく、面会人と直接に会うことができた。ブレデルの弟ハリイやテラーの妻ヘレンが、いろいろな差入物を持ってやって来た。ハリイは、沢山の本や雑誌を差入れ、ヘレンはバスケット一杯に菓子や肉類を運んだ。

六種ばかりの彫り道具、糸ヤスリ、鋼板や石板、米で作った糊、酸が入っている小さな壺、鋼板に塗る感光剤、二つの強力なルーベ、ケロシン油用のカンテラ。こんな物が、いつの間にか差入物と一緒に二人のガン造紙幣製作者の手に渡っていた。

「まずいんだ」 ある日、ハリイは面会所で声をひそめた。「立入禁止になったんだ。店に近寄れなくなった。漂白剤やインクは持つてくることができないよ」

房に戻ると、ブレデルは両手をひろげた。「と弟の奴は言うんだ。あきらめよう。紙の漂白剤もなく印刷インクもないんじゃ万事あがったりだ」

「俺あ投げないぜ、どんなことがあっても。なんとか考えるから心配するな。ところで、お前の受持分の印刷機械はどうなった？」

「ああ、それならこれだ」

ブレデルはベッドの下から監獄内のポスターの裏に設計した図面を取り出した。

「なんだ、それは？」

「世界最小の印刷器だよ」

不可能事

「なんの用だ、ブレデル？」

看守長は、ブレデルの面会に応じた。肥った好人物で、囚人たちから慕われていた。「へい、ちょっとした器械を発明したんで、これです」

「なんだ、これは？ さっぱりわからんな」



看守長は図面をのぞきこんだ。
「襟や袖口にアイロンをかける器械です。旅行者やセールスマンは便利ですぜ。鞆の中に入れて持って歩けば、旅先で一々洗濯屋に頼まなくてもいいのです。ひとつ、これを試作させてくれませんか。メリイランドのスノーヒルの私の知っている工場へ図面を送れば作

ってくれます」

「だめだよ、そんなこと」

「ねえ、看守長、あなたはウインチェスターの話を知っていますか？」

「監獄の中で鉄砲を発射した奴のことだろう」

「そうですよ。その、あなたが持っている銃がそうですよ。私の発明だって、将来、どんな大きな役割を果たすかわかりませんぜ」

「よし、わかった。その工場の所を書け。図面を送ってやろう」

半月ほどすると、煙草箱くらいの新案カフスアイロン器がとどいた。

「いいですか」 プレデルは職員たちの前で実演してみせた。「ここへ袖口を平らに入れて、上からぐッと押す。ほら簡単でしょう」
「早く特許を出願しろよ」

「ありがとうございます」

とか何とかゴマをすって、その怪しげな器械を第五十号房に持ちこんでしまった。

こうして不可能事の一步が始められたが、漂白剤もカメラもインクもなかった。しかし、プレデルは、まず最初に弟から受取った二十ドル札を二つに裂きはじめた。表と裏を一枚ずつにする困難な仕事だったが、おそらくアメリカ中にそれができる者はプレデル一人か、よくって二人くらいのものだった。

一枚の札が二枚になると、どれにも油を滲まして透明にした。

「これでカメラなしで板に焼きつけられる」
テラーは興奮して喜んだ。

焼付が始まった。天気の良い日をえらんで洗面台を窓から差しこむ陽の光の中に出し、本を立てて銅板を九十度に光にあてた。板には感光剤を塗り、その上に札の片面を貼りつけた。看守に見られないように、テラーが戸のところに立って覗き穴をふさいでいた。
プレデルは太陽が動くにつれて洗面台を移動した。日が暮れたり、見つかリそうな気配があるときは、すばやくその仕事を中止した。
「しめた！」

幾日か同じことを繰り返した後、ある日板を検べていたテーラーが叫んだ。

「うむ」 レンズから眼を離したブレデルが唸った。「はッきり出たな。よしッ、もう一枚だ。その間に兄貴は——」

「言うにや及ぶだ。さっそく取りかかる」

「だが作図旋盤も縮図器もない以上、どうしてもサラシ粉か過マンガン酸を手に入れなくちゃ。監獄の洗濯場には、そういう漂白剤があると思うが。こんど運動や洗濯の時間に何とか当たってみよう」

その夜、看守が夕食の皿を運び去ると、二人は戸の前に毛布のテントを作り、その中でカンテラを燃やし、床の上に腹ばいになって仕事を始めた。工具や酸などを持ち出して紙幣の模様が焼きつけられた板を彫り、腐蝕させた。

とても信じられないような離れ業だった。いかに二人が名人とはいえ、カンテラの弱い灯がゆらゆらと揺れて、全神経を集中しないと細い線が見分けられない。毛布をかぶっているのも息苦しくなり、ときどき外へ首を出して息をつき直さねばならなかった。

「来た」

ちよつとでも危険なときは、ぶッと灯を消し、手際よく品物を片づけてベッドに横になった。

まい夜まい夜、二人の仕事は続いた。何かに取り憑かれたように熱狂的に製版に打ちこんだ。ちつとも退屈でなくなり、なんだか生甲斐が感じられた。ほんの少しノミを外したらすべてが水の泡になるのだ。だが、その仕事に困難なほど二人の情熱は高まり、執念のように鋼版に全エネルギーをたたきつけた。そして、やがてのことにハミルトンの顔が生きているように板の上に浮びだし、そのバックや周囲の渦巻模様が鮮やかに彫り出された。

製版は完了したのだ。あとは漂白剤の入手と印刷だけである。

ブレデルは洗濯場から漂白剤を盗みだし、食物から採った材料を混ぜて独特の漂白物を作った。それに、かねてから用意していた一ドル札四十枚を浸けた。あくる朝、みごとに白い紙になっていた。

この頃から、ヘレンが、しきりに花や果物や乾燥食糧を差入れしだした。緑の葉、黄色い花、赤い莓。

天才悪

「この紙幣には何等の異常も認められないが、ただワシントンという文字の中のTという字が少しボヤけている。それだけだ」

モーガン博士はウィルキイに説明した。

「じゃ本物ですか？」

「ニセ物でなかったら本物じゃ」

「ブレデルの弟から出たものなんです、兄が捕まる前に貰った物だと言ってます」

そこへ一人の部員が慌しく入って来た。

「部長、テーラーの女房が使った二十ドル札を手に入れました」

「どれ」

博士は二枚の札を見くらべていたが、だまってポケットに入れると行ってしまった。そして、その夜中に、ウィルキイは博士の研究室に呼び出された。

「あッ、これは!？」

指さされた陶器製のパッドの中を覗いたウィルキイは二の句が出なかった。

「貼り合わせてあった。どうして、こんなことをしたのか解せん」

「挑戦です。テーラーの挑戦です」

ウイルキイは蒼くなった。

それをやるのはテーラーたちより外にはいない。

「だろうね」

「でも、あいつらは入獄中です。とても——」

「いいから二人の房を洗ってごらん」

「あいつらは、さいきん、弁護士を道じて裁判官に働きかけたらしいんですが効を奏しなかった。それでヤケになって、こんなイタズラをしたのかも知れません」

「そうじゃないだろう。俺たちの腕前はこんなもんだと君を笑ったのさ」

ウイルキイ部長は、すぐに第百五十号房を訪れた。

「とうとうやったな。それとも隠していたのを掘り出させたのか？」

「新たに作ったんです」

テーラーは観念して、しかし得意気に答えた。

「どこで、誰に作らせたんだ？」

「ここで、私たちが作ったんです」

「ふざけるな、こいつ」

「ほんとうです」

「そんなはずはない」

「部長さん、これを見て下さい」

カンテラやノミなどが取り出されてウイルキイの眼の前に並べられた。

「二枚貼り合わせたのが解ったんですな？」

ウイルキイ部長は、目の前に見せられた証拠を手に取りながらも、半信半疑の態度だった。

「モーガン博士だ。ふつうの水に浸けたんでは剥がれないと言っておられた」

あはは、と、さも愉快げにテーラーは笑い出した。

「あれは米の糊にちょっとおまじないをして貼り合わせたんです」

ブレデルも楽しそうに微笑んだ。

「なにしろインクには参りましたよ。店を塞がれたものだから、弟のやつ持って来られなくてね。下手に他で買ったら旦那に怪しまれるし——」

「どうやってインクを作った？」

「カンテラの灯で花や葉などを蒸溜し、油を混ぜました」

ウイルキイ部長は氣絶するほど驚いてしまい、どこまで信じてよいかわからぬと言った顔になった。

二人はむしろ、困難な状況の中で作り上げた芸術作品についての苦勞を語るように、眼を輝かせていた。

「嘘だとおっしゃるんなら、いま、ここで実験してお目にかけましょうか？」

稀代のニセ金作り、悪魔のような至芸をもった二人の公判は世にも狂らしいものになった。

とくに、かれらが監獄内で美事にニセ札を作ったことにアメリカ中の人が興味をもった。

二人を捕まえたウイルキイ部長はじめ検事やモーガン博士まで、その技術を讀んで減刑を嘆願した。

そのためかどうか、彼等は割合に早く出獄した。

テーラーは印刷局御用の下請製版業をはじめ、ついには大印刷会社の社長になり、ブレデルも大製版工場主になった。

獄中で作ったニセ札は、直接には減刑の役に立たなかったが、そのために評判になって結局は助かったのであった。

(了)

血染小曼陀羅

橋爪彦七

中島喜美・画

プロローグ

「媚薬のたぐいと心得ます」

そう云って、平賀源内は、主公の顔をあおいだ。

「媚薬？」

と、鸚鵡がえしに、小首をかしげた田沼主殿頭意次は、

「よくないものだの」

と、即座に云い足した、

おだやかな表情のなかに、眼は、油断のない知性に澄んで、ゆったりと脇息に凭ったすがたが、絹張りの行燈を漉してくる明りに、うしろへ大きく影をつくっている。

幕府の、筆頭老中である意次からの招きで、迎えの者といっしょに来た源内は、はじめて会う意次に、賄賂





取りの巨魁とのみ噂をする世間が、もう一と桁、奥のある彼を知らぬ迂濶さに苦笑さえおぼえた。
(微祿から出て、異数の出世をする人物だけのことはある)
そう思う。

今夜も、公儀御用達の豪商で異国のものをあきない、長崎表に出店まである山城屋周蔵が、秘密に贈ってきた不思議な薬物快竜丹が肥前の国佐賀の城主鍋島家から出るというので奇妙な作用のある薬物の性質上、ふと、源内に聞くことを思いついたと云うのである。

その、奇妙な作用のある快竜丹は、白い粉末で、それを煙管の火皿にふりかけ、煙草といっしょにふかすと、心神が恍惚となってむやみに昂奮をおぼえ、忘我のさかいに遊ぶという不思議なものだった。その性質の鑑定をとい

清らかな織江の裸形に秘めた父の遺志を老いた陶工の眼は果して見抜くか？

特集 女間諜・女忍者

うのが、源内への注文だった。

「第一、ひとたび味わうと、必ずあとをひく。しかも吸引の後に襲われるのは烈しい疲労で、それでいて、あとをあとをと望む。儂など、一度用いて、これはおかしいと止めたからよいが、無知な町人や百姓どもに拡がったと致すと、まず、疫病より怖ろしい結果をまねく、そうであらうかの」

肯綮に価するはなしなのである。

「仰せの通りです。媚薬のうちでも、これなど、一刻の快感が、やがて幾倍もの情気をさそい心神を情弱にむしばむ作用のある薬物、益のないものと存じます」

後世に本朝科学者の先達として名を残す平賀源内が、該博な学究者としての答えなのだ。

「で、この薬物が、はたして鍋島藩にて調製されるであらうか？」

「さ、その儀は——」

源内、考えて、

「しかとはお答えいたしかねますが、ただ、肥前の腰ヶ嶽、黒髪山の辺に、幾多の薬草が採集されるとは聞いております」

そして彼は、佐賀の鍋島藩で、そうした妖しい媚薬が製されるだろうかという問いに対しては、可否の返事をほかしていた。

だが、聴く方の意次は、何か要領をつかんだらしく、くどくも問わず、源内を帰らせたのである。

（妖薬流布の一件を以て、封邑三十五万七千石の鍋島一藩を、財政の罪名によってたたきつけたなら……）

これなのである。

一見、私利利欲の権化のように見られる田沼意次は、反面、為政者

として、幕府——公儀の財政が、苦境にあることをよく知っていた。

（なんとしてでも、幕府の富源を見つけねばならぬ！）

そう考えぬいていたおりも折——忽として彼の胸に、西国の大藩鍋島家没収の策がうかんだのである。

（屈竟の口実——）

と、翌日、登城すると、黒鯨組の伊賀衆愛甲頼母をひそと呼んで、「肥前一国の情勢を残りになく、ことに薬物の製剤の有無は、入念に取り調べて帰府いたすように」

と、命じて快竜丹の一件をはなし、急ぐぞ——ともつけくわえた。意次にすると、これは、彼が一代の幕府への奉公のつもりだった。

むろん、柳営の御医師や典薬などの吐く頼間的な説など叩くのでなく、当代の科学者平賀源内の鑑定を信じ、肥前の国に薬草ありと聞いただけで、それを妖薬快竜丹に結びつけ、鍋島家手入れの機会を握ろうとする悲願——

愛甲頼母は年齢不惑、老中の命を受けると何らの遲疑もなく、一人娘の織江という、今年十九の美しい女性を伴って、ただちに、江戸をあとにした。

山目付の眼

「お父さま、お疲れでございましょう」

「はははは何を云う、お前こそ、女の足でさぞくたびれたであらう」

「いいえ、わたくしはそれほどはございせんが、江戸を出るときとこの頃と、お父さまの顔もとに、何やらやつれが見えますようで」「気のせいじゃ、少しは旅やつれもするであらうが、なんの——とは

云え南の国は夏がはやい。江戸をたつたは春のなかば、船路の便で参つたにせよ、思えば長途の明け暮れであつたの」「お父さまの大切になされたあの鶯——いまごろ、どうしていますやら」

「うむ、あれか……」

感傷が、ふっと、二人の会話を奪う。

そこは、九州も、山また山の鍋島領であつた。肥前国西松浦部の大川内村——村とは名のみで山深い峡谷、青々とした翠いつたいに包まれている山ひだの間々に、点々と葉葺屋根の民家が見える。——その、樹林の崖の草に腰をおろして、巡礼の親娘が、脚をやすめていた。

云うまでもなく愛甲頼母と娘の織江である。もう二た月も前に江戸を出て来た二人だが、便船——馬——駕籠——と、できるだけからだをいとおつてきたはずなのに、厳しい使命を帯びる頼母は、やはり疲れの翳が濃い。

「織江、どうじゃ、この辺で乾飯でも喰んでは？」

「あ、そうでした、陽がもうあんなに高いのに——お父さま、見えましょう、あの谷間の水。あれを掬んで参りますうち、お父さまはその包みでも解いて……」

歩き馴れて、山馴れて、小鳥のように身の軽くなった織江が、崖を降りて草を踏んで、こんこんと湧いている清冽な谷間の泉を器に掬んで戻ってくる崖下——

そこまで来ると織江が、あッと叫んで器を抛り出し、

「どうしたのですお父さまッ」

と、草の上に伸びている頼母のからだに飛びついた。

特集 女忍・女間諜

「お、お父さま——ッ、しつかりしてッ、お、お、お父さま——ッ」
囁りついて、ゆすぶって、声をかきりに呼びはしたが、父は、頼母は、重く瞼を半眼にしたまま、愛しい織江の声にこたえることはできなかった。

「お父さまア——ッ」

織江は、父の首を抱いた。そして、せきあげてくる涙の顔を、頼母の顔にすりつけた。

「こ、こ、こんな姿に……お、お、お父さま——ッ」

だが、いったん肉体から離脱した頼母の魂は、いかに織江が必死に叫んでも、もう呼び戻せるものではなかった。

「う、う、う……」

絶え入るほどに泣く織江が、肩を大きく喘がせて、慟哭を、やつとしずめようとしたときだった。

「これ」

と、うしろで声がかして、

「何をしておる？」

声と、気配に、織江が、はッと振り向くと、立付袴の山目付、鍋島家の山役人が、のっそりそこに立っているのだ。

「あ、あの……」

と、織江は咄嗟に口籠って、

「ごらんの通りの巡礼でございますが、つい山道に迷いまして、ここまで参りますとたった今、ち、父が、突然こんなになってしまいました……」

ほろ、ほろ——と、頬に涙の糸を曳く様子が、偽りとは見えすいじらしかった。

山目付は、

「それは——」

と、しゃがみこんで、頼母の脈をひいてみたり、臉を開けてのぞいたりしていたが、

「食あたり——とも思えぬし、卒中だの」

そして、崖から下り落ちた菅笠を見て、

「同行二人……とあるが、お前はこの仁の娘に相違ないか」

「はい……」

「して、いずれに参る道筋であつた？」

「あの……牧島村とやらの万明山円通寺へ」

無言で、山目付の眼が、キラ——と光った。

「うろんな女ッ、円通寺は方角がちがう、親娘両名、他国の廻し者だろう」

「い、いえ、それが……山道に……」

「暗いッ！」

と、山目付が恫喝したとき、傍の灌木の繁る小径から、薄ものの道服まがいの短いのを羽織った男が、しずかにこちらへ近づいてきた。

色鍋島の元締

「なんですえ、羽鳥さん？」

そう云う男へ、山目付は、



「これは——」

と、会釈して、

「ただいまここで、不審な女を見つけましてな」
云いかけるのを、皆まで聞かずに、

色鍋島

「や、行き倒れではないか」

つかつかと側へ寄って、手に持っていた寒竹の杖を織江に渡し、頼母のなきがらを抱きおこした。――が、すぐもとどおり横にして、

「いかん」と、首を振った。

「何か羽鳥さん、それで、この巡礼娘に不審をうたれる？」

「左様、山役人の羽鳥光四郎、一と目見れば正邪の見分けはつく、たとえ、どんなにしおらしく扮しても」

「これア強い御意見じゃが、見ればうら若い娘が、俄かに父の死に遭って途方にくれている様子、さまで目に角をたてずとも――」

「いや、法です、他国他領の廻し者である場合、その論議が山目付の役目」

「は、は、は、は、論議けっこう、法も掟もけっこうじゃが、たかが巡礼、ことに死者を前に置いたまま掟呼ばわりでもござるまい。ここはわしが預かろう、大川内山陶工の元締牧三蔵が、娘も、仏も、引き取るとしよう」

「……」

「おいやかな？」

「そ、そうではないが」

と、けわしい表情を無理にゆるめて、

「あとで、城内から苦情が出て、拙者はかかりあいませんぞ」

「大丈夫、わしも色鍋島でちつとは知られた三蔵じゃ、羽鳥さんに御迷惑はかけん」

云い切って、

「巡礼衆、すこしの間、ここで仏様の香をしいな。いま、男手をよこすからの」

云い聞かせて、元の小径へ戻ってゆくより先に、山目付の羽鳥光四郎は、ガサ、ゴソと、笹原を踏んで歩き出していった。

しばらくして、陶工三蔵の弟子とも見える四五人が、戸板を吊ってやつてくると、織江を案内して頼母の遺骸を運んで行った。

陶工牧三蔵の住居は、ほど近い山峡の盆地にあった。さらに、それを中心にして四五十戸の家が、藁葺屋根の下に、荒壁や、蔀や、戸袋を見せていた。

そのいずれもが、三蔵の弟子も同様、捻土方や窯焚や、下働きをする鍋島家の御用工人の住居だった。

三蔵の住居は、これは土塀に囲われて、母屋のほかに細工部屋の棟が、鍵なりに二た棟も続いていた。

窯は、山間の盆地に築かれて、十箇所あまりも塗り土の肌を見せ、中には、白く煙を吐いているのもあった。云うまでもなく、鍋島家が誇る御止窯、將軍家へ献上の逸品や、城内におさまる陶器その他が焼かれる場所で、諸国に出てゆく鍋島焼は、ことごとくが、役人の眼を通る掟なのだ。

織江は、この三蔵の住居に引取られて、屋敷の広さや、部屋々々の飾りつけの華麗なのに眼を見張った。

それに、もう一つのおどろきは、牧三蔵の日常のただしいことであつた。連れ添う妻に先立たれて、血筋もなく、枯槁にも似た寂寞でいて、何か、しつとりとした慈味をおぼえる生活だった。

それは、彼が、天下にはこる鍋島焼の神技を身につけている心の厚味とでもいうのであろうが、この人にして、あの絢爛な色鍋島の名品を生む元締――と、うなずけるものがあつた。こわせば、七彩の焰を吐くかとおもえる色絵の秘法は、むろん彼が、鏝身彫骨の修業にもよ

るだろうが。

織江は、三蔵の偉大さに敬服した。そしてこうした人のふところに抱かれていることは、やがて、父の仕果し得ずに終った使命を、自分が継げるという確信がもてた。

李三平の秘法

夏が過ぎ、秋がきて、ひと霜ごとに南国の山にも、紅葉の色が、燃えるように眼立ってきた。

もう六十に手のとどく齡でいて、まるで壯者をしのぐ若々しさをたもっていた三蔵が、急に老いを見せてきたことはどうしたことか。だが三蔵は、なぜか極力それを見せまいとして、時には、ひそかに苦悶する様子もうかがえるのだった。

「織江——」

三蔵は、こう親しく呼んでいた。

「どこへも行くな、やがて、わしの跡目をつぐはどの婿殿を見つけよう。そしてお前は、父御が骨を埋められたこの山で、よい嬰兒を産むのだ」

機嫌のよいとき、そう云ったりして、肉身とかわりない愛情を示した。

——が、そう云われる度に、織江は、焦燥を覚える。

（亡き父の使命——そのうちにも、父の頼母が口に出していた妖薬快竜丹製剤の拠点が、鍋島家の創製として佐賀城内にあるのかどうか？ 知りたい、それを——）

思うと、女性ながら、心がはやる、血がおどる！

そしてまた、幾日か過ぎたある日、佐賀城内から、藩主肥前守斉正の近侍日出島右門が大川内山に訪れた。

客間に通した右門に、三蔵が会うと、丁寧な挨拶ののち、右門が、「ときに三蔵殿」

と、膝をなおして、

「いつぞやお頼みいたした悲母観音の尊像、もはや出来いたす頃と、殿よりの御言葉でござるが？」

と、腫れものに触るような調子である。

「いかにも」三蔵はうなずいた。

「殿様より、特別入念にとまで御言葉があったという観音の御像、日限から申せば焼き上りの頃です」

「では、すでに窯出しもすんで？」

「とんでもないこと」

と、遮って、

「御像のかけらも出来ていません」

「とはまた、あまりの緩怠ではないですか」

「あいや、お言葉中ですが、この三蔵の焼く陶物は、大川内山焼の先祖で韓人の李三平から伝わる秘法、まして入念にともあれば、そう易易とは仕上げられぬ」

「……」

「しかも御城内には近頃珍客が見えているそうじゃが、そんな客人にでも贈るためなら、三蔵、あらためてこの窯はお断りするかも知れませんぞ」

「えッ？」

「聞けば、奇妙なはたらきをするあの快竜丹が、いまでも御重役長門様

特集 女間諜・女忍者

の御手元にあるとのことだが、その珍客とかが又そろそろ快竜丹をとどけにやって来たのではありませんか」

「とんだことを——」

と、右門は手を振って、

「あれは、どこまでも国老長門様の——いや当藩の秘事、滅多なことを申されては困るが、決して他より持込まれる薬物ではない、ま、ま、それはとにかく、噂では、こちらにもちかごろ美しい女性が、江戸表から参っておられるとのこと、それやこれやで、築窯がはかどらぬのではありませんか」

聞くと三蔵が、大口を開いて、うわはッはッはッと笑って、

「おたずねの女は、江戸そだちのわしめ姪、お止窯の三蔵の家でも、肉身の姪が遊んでいて悪いという法はありますまい」

「はて、ではあの……姪御？」

「左様、一犬嘘を伏えて何とやら、よしない噂はお取消しをねがいたいものです」

「そ、そうでしたか、そうでしたか……」

右門は、きまり悪そうに、横を向いて苦笑に紛らすのだった。

乙女ごころ

織江は、全神経を耳にしていた。

ふと、何の気もなく来かかったこの部屋で、次室——客間での、日

出島右門と三蔵の会話を立ち聴いてしまったのである。

快竜丹のこと、自分のこと——

右門は、快竜丹のことを、重役の鍋島長門の秘事ともいい城内の秘事とも云った。それに対して三蔵は、自分のことを姪だと披露している。

(どちらも狸だ……)

織江は、そう解釈した。だが、正直に聞いてよいこともあった。右門が、話の続きに、

「……いや、御疑念ばらしに申しあげるが、かの客人は、王寧と申す仁で琉球王の使節でござる。何か、將軍家に謁を乞い、琉球王室と公儀と、和親を結ぶ条約の使命を帯びるとかで、生憎、島津侯が江戸表参勤、ために当藩によって公儀への手続きを履むための逗留と聞いています」

と、佐賀城内へ滞留の賓客について語ってもいた。

それにしても、主客が偽装しての対話は、偷み聴く織江に、そのはしばしが、何かの指教をあたえるようでもあった。とにかく、右門の話は、しばらく措くとしても、三蔵が自分を姪だと偽らねばならなかったことだけでも、この大川内山の一劃が、他人の足を入れられぬ御止山となっていることは事実だった。

右門が、むなしく帰って、中一日おいた日のことである。

風もなく、空は碧く澄んで、小春日の暖かさ——織江が、三蔵の母屋の裏山に出て、そぞろ歩きをしていると、

「織江」

と、三蔵の姿が、うしろに見えて、伴っている異装の人を指差して「このお客人を、八号窯のうしろの亭へ案内なさい。あそこには、勢

至菩薩や毘沙門天、唐鬼人形などの染付けをしたままのがある、お目にかけて——わしも後ほど行くから」

そう云い捨てて、踵をかえして行ってしまった。

織江は、残った客の服装を見て、

(…………?)

ふと、胸にくるものがあつたが、男は、しずしずと歩んで来て、

「あなた、織江さん？」

と、呼びかけた。織江が、

「はい」

と、答えると、

「わたくし、琉球の王寧です、あなた、たいそう美しい……」

よどみのない、こちらの言葉でのお世辞である。織江は、これが一昨日、右門のはなしていた使節だと頷くと、ちよつと羞かみながら、眸を笑わせた。

傍の、雑木林で、しきりに鵲の啼くのが聞こえる。二人は肩を並べて、かさこそと落葉を踏んだ。織江は、うつむきがちだった。見知らぬ、それも異国の若い人と歩くということが、乙女ごころに、一種のときめきを覚えさせた。

なおそのうえ、佐賀城の賓客という王寧の身分にも、気がひけるのだった。——が、このとき、織江の胸にうかんだのは、

(この王寧に侍いて、佐賀城に行ったら…………?)

と、夢のような空想だった。

王寧は、相手の気持などには構いなく、

「鍋島の人びと、みんなよい人です」

と、云って、彼が、色鍋島の工房を見たいと云ったら、すぐ許して

くれたことなどを話した。

「王寧さま」

「え？」

「わたし、お城を一度、見たいのですけれど…………？」

「それ、どういう意味？」

「あの、いつもお話に聞いているばかり、それでは、つまらないんですもの」

「そうです、そうです。聞くことより、見ることの方が確かです。あなた、とても賢い」

王寧は、そう云って、もう一度も二度も来るから、そのうち、佐賀城へも連れて行こうと約束するのだった。

生き身の肌

その日、王寧が駕籠で帰ると、夜に入ってから三蔵が、

「仕事だ」

と、急に細工部屋へ消えた。

出入りを許されている織江が、茶を淹れて行くと、振り願った三蔵の顔が、妙に怖く見えた。

「織江、ここをいじらなかつたか？」

細工台の抽出を、むやみに掻きまわしながら云う。

「いいえ……」

素知らぬふりをしたが、彼女の胸は、どきんとした。——と、云うのは、いつか三蔵が苦しそうな息づかいで、そこから急いで畳紙を出し、白い粉薬を嘔みくだしたのを見た。その後も何度か、そうした現

場をちらちらと見かけて、

(どうもおかしい……?)

と、つい今日のこと、昼間のうちに、その畳紙を、ためしにかくしておいたのだった。

「薬ッ」

三蔵が叫ぶ。まるで刺すような声だ。

「くッ薬ッ……」

血の気のあせた顔がゆがむ――

「苦しいッ、あれがないと、あ、あ、あの薬がないと！」

三蔵は、抽出という抽出を、のこらずぶちまけた。そして、わなわなとふるえながら、やたらにその辺をひっくりかえした。

ぜいぜい呼吸をあえがして、飛び出しそうな眼をして、あれという間に乱暴が始まった。

「くッ、くッ、苦しいッ、体が折れるッ、骨が裂けるッ、薬ッ、薬ッ

薬ッ……」

叫びつつ両鬢を引ッ掴んで、白髪まじりの毛を毛る。

(あれだ！)

と、織江は、おぼろげに、快竜丹の作用だと想像をした。

(薬物のせいだ、あの薬物の気がきれると、こうした発作がおこるのだわ――)

突然、三蔵が、手元にあった獅子頭の香炉を叩きつけた。

「くッ、くすりだーッ」

と、また、別の素焼を投げつける。

織江は、両手で胸をおさえていたが、いきなり三蔵に飛びつくと、

「いけないッ、小父さま！」

と、必死にそれをとどめようとした。

「お、織江！ お前だ。お前をおいては、あれに手を触れる者はおらぬ。ど、どこへやった！ あの薬を……」

のどから絞り出すように叫びながら、織江に向き直った。

逃れる気なら逃れ得た。が……。

織江はふと立ちすくむ。三蔵の身が気づかわしかった。ましてや、

あの薬がどのような意味を持つか、どこから来たものか、本能にも似た使命感が、織江の足をためらわせたのであった。

もはや、三蔵に慈父のおもかげはなかった。

ものに憑かれた腕には思いのほか力がこもって、織江を襲った。帯を、着物を、容赦なくはぎ取る。

あらわな肌をかばいながら織江は逆らい続ける。しかし、常ならぬ狂気の三蔵の前には、あがらい得なかったのだ。

やがて……

梁から吊られた織江の、乱れて長い黒髪は床に垂れ、三蔵の荒々しい手が、グイグイと引きたくる。

「いえ！ いわぬか、織江、いうてくれ……」

猛りつ、すかしつ、果ては哀願の響きさえまじえて、かき口説くのだ。

「寒い」

と、突然、三蔵が、別人のような声で呟いた。

「う、う、寒い……さ、寒い……」

ばた――と倒れた三蔵が、俄に、ぶるぶるとふるえだした。

織江は、さっと顔色変えた。三蔵の激しい変化に、胸轟かせて、しばしはじつと見まもる。もはや正気もないばかりにうちふるえる三蔵

だった。

織江はきつと唇噛みしめて、身悶えして、いや、身悶えながら、縄を抜けようとするのだ。力限りにいましめた縄目だが、あらわな白い肩を腕をくねらせるうち、するりと脱けて、床の上に立っていた。

織江は、板敷にころがった三蔵のからだへ、のしかかるようにかぶさった。

——が、三蔵のふるえはとめどなく続く。

「さ、小父さま」

生き身の肌を押しつけて、三蔵に、悪寒と闘わせようとした。

「う、う、う……」

三蔵の目に、きら——と涙が光った。彼は、若い女の肌にひしと抱かれていたのを知った。

彼女の肌が、悪寒を防ごうとしてくれているのも知った——。

織江の裸身

いまその光景を、陶戸のそとに取り付いて、ここに一人、戸の隙間から、覗こうとしている黒い人影があった。

「畜生め、なんて堅え戸だろう」

声には出さず、こころのうちに呟いて、どこか隙間の出来ぬものかと、必死の努力をつづける影——

その影の黒装束の覆面をはがすと、なんとこれが、長崎奉行所手附同心喜多見主膳の配下となつてゐる目明しの長次、江戸で磨いた十手さばき、御用道具の扱いには、筋金入りの素ばしこい男だ。

彼は——奉行堀丹後守が、江戸から長崎へ任につくとき、見出され

で、小者の一人に加えられてきた人物で、三十三四、いまが目明し稼業の盛りの年輩だ。

一日、奉行丹後守の令として、

「江戸表より早継ぎを以て公儀の使者が参つた。鍋島藩にひそと手を入れよとの厳令、要旨は、妖薬創製の秘事を衝けとある。至急に致せ。長次一人を召連れて、構えて他へ洩れぬように——」

こう、喜多見同心がうけたまわつたものだった。そして喜多見は、「そういう秘事には、鍋島焼の御止山こそ怪しい！」

と、長次と二人、軽装、大川内山を目指して、陶工牧三蔵の身边をまで、嗅ぎ廻つていたのである。

云うまでもなく、それが、幕府隠密の愛甲頼母とは別動隊の趣意で老中田沼主殿頭意次の指令となつてきていたわけ——

とは云え、長崎奉行所が、表面鍋島の領内へ捕吏を送ることはできない。したがって、喜多見同心も長次も、昼は、山目付などの眼を忍んで、夜間だけの行動である。

で、長次が、なおも一心に、三蔵の細工部屋を覗こうと苦心していると、

「長次」

と、背中をそつと突いた喜多見同心が、

「人の匂いがする、引揚げよう今宵は」

「旦那、そいつアいっそう拙うござんすぜ、三蔵はたしかにこの裡に居ります、とてもものことに、飛びこんで見ちゃ？」

「待て、短気な——それよりも」

と、喜多見が長次の耳元へ何かささやくと、二人の影は、右と左に鮠のような素速さで消えてしまった。

その後——ほんの一瞬の遅速。

ドン、ドン、ドン……

と、細工部屋の陶戸——いま長次たちの立っていたところの戸を叩いて、

「三蔵殿、三蔵殿ッ」

と、大声に喚いてきた者がある。うちからは織江の
声がして、

「どなた？」

と答えると、声の主は山
目付の羽鳥だと云って、

「お止窯を覗きまわる曲者
がある。急いで手配をして
貰いたい！」

投げつけるように云って、
すぐにどこかへ飛んで行っ
た。

部屋では織江が、そのの
気配に耳を澄ましていたが、
ふと気づいて、あわてて着
物の前を合そうとすると、
悪寒の薄らいだ三蔵が、
「待て、そのまま——」

と、とどめて、

「よい機じゃ、慈母観音の

下図に悩む三蔵へ、お前の姿を見せてくれい」

「えッ？」

「一糸まとわぬ素肌のお前を、わしのこの眼に灼きつけさせてくれと
いうのじゃ」

「……?」



織江は、はッとなると、呼
吸をつめて、凝然と、三蔵
を見つめた。不覚にも、
総身の毛穴が、そそけ立
つ——

だが三蔵はと見ると、
爛とした眼に血の色を
滲ませて、端坐の膝
をかたくそろえ、じ
っと織江の返事を待
つ——その様子が、
いまこそ芸術の真
髓に触れようとす
る、金剛不退転の
姿なのだ。

織江は、こころ
の目で、それを見
た。蒼ざめた
頬に、かすか
な紅味がさし

てくると、やさしい眸がほほ笑んだ。

「小父さま——。どうぞ」

と、肩からしずかに衣類がこる。そして、ただ一と布の湯具も脱れた。

三蔵は、声なく、燭台をとって、光りの射す場所をきめた。急いで、細工部屋から、白紙と矢立を持ってくると、鋭い凝視の刻をきさむ！

一線——紙面におとすとまた一線、加えては消し、消しではさらに加え直す。

刻、刻、刻——真に製作意欲の最高潮！

深夜——裸身の織江の立ち姿を見て、一心にそれを写す三蔵の筆の穂先からは血の滴りが落ちるかと思われ、やがて——

筆をおいた三蔵は、ほーッと全身で息をして、片手づき

に、下図と織江とを見くらべていたが、

「これだーッ」

と、腹の底から揺りあげるような声をあげた。

深夜の血風

折から——

またしても陶戸のそとに足音がして、

「牧さん、牧さん」

と、三蔵を呼んできて、

「屋敷のまわり、悪者が——」

特集 女忍・女間諜

織江が、

「あッ、王寧さまです」

急いで、袖に手を通して、帯を結ぶ間もどかしそうに、

「はい、ただいま——」

と、陶戸の端に手をかけるのを見ると、悲母観音の下図をたたんだ三蔵が、

「しッ！」開けるな——と、眼で制した。

戸外では、

「早くッ」

と、いらだつような声——その声の主の後へ、ぬッと黒い人影が立つ。

（おや？）と、はやくも感づいて、ふりかえる彼の真ッ向へ、びゅーッ！ 烈しい剣風が縫れてゆく。

「うわッ、だ、だれだッ——」

躲しそこねて、右肩に傷を負いながら、声をうわずらせて、

「待て、待てッ、はやまるな、わたしは琉球の使節だぞッ」

「なに？」

「あやまったことをして後悔するな」

よろ——となりながら云うのへ、敵は一と足踏みこみさま、

「偽り者めッ。琉球の使節が二人居るか！」

一閃、弧を描いて、剣は、相手の胴を咬む——そのときだった。

陶戸を排して、陶工三蔵が、姿を見せると、背後から、織江も、紙燭をにかけてつづいた。

「おお、王寧殿」

三蔵が、声をかけると、王寧は、足もとに倒れて断末の喘ぎを見せ

ているのを指さして、

「この男、長崎奉行所の廻し者です」

「え？」

「この様子、うかがっていました」

「……？」

「わたしの名を騙って逃げようとした、嘘をつく、罰です」

王寧は、剣を撫して云うのだった。しかし三蔵にせよ織江にせよ、最初、王寧の声いろをつかつて、陶戸を開けさせようとしたこの男が長崎奉行所の同心喜多見主膳であるということは、知るよしもなかった。

とは云え、深夜の客の血腥い闘争は、お止窯大川内山といったいに、何か、凶事のおこる前兆なのではあるまいか？

風が出て、山嚮の夜気が、三人の、肌につめたくしみてきた。

「冷える、王寧殿をとにかくあれへ——」

三蔵が、織江に顎をしゃくって、

「わしは、この始末を、男どもにいいつけてくるから」

「はい」

と、織江が先に立って王寧も、三蔵のすがたも、細工部屋の方へ、吸いこまれて行った。

ところで、目明しの長次は、いったいどうしたろう？ 彼こそ、今夜の出来事を知っている、ただ一人の存在なのに……

マリア観音

そのことあった翌日から、陶工三蔵は、細工部屋に籠りきることと

なった。

裸身の織江を写しとった下図をにらんで、慈母観音の製作の、精進がはじまったのである。

細工部屋の陶戸を、びったり閉めきって、素地から仕立て、轆轤へと、一心不乱の篋が動く。次が釉薬、染付という順——

三蔵は、まるで仕事の鬼だった。

食事のとき、僅かの間、織江が顔を出すだけで、あとは三蔵一人ツきり、そして、仕事部屋から出た彼の相は、別人のように、げっそりと頬の肉を削いでいた。

「頼むぞ」

と、窯焚き職人に、精血をそそいで仕上げた観音像を渡すと、

「承知しました」

と、意気の合った火入れ！

たちまち、御用窯は火をはらんで、夜に入ると窯肌が真ッ赤になり高熱の火炉が観音像をしっかりと抱いていた。

それはとにかく、思いがけないことが一つ——三蔵、あれほど人目をぬすんでまで用いていた快竜丹の紛失を、ぶつりとも口にしないことである。むろん、織江が、心あって、それを取りかくしたとは承知の上だが——

ところが、織江にすると、蝕まれかけた三蔵が救えて、

「よかった——これで」

とは思うが、それといっしょに、薬の出所？ という考えが残る。その実体をつかまぬうちは、地下の頼母に、

「御安堵くださいお父さま！」

と、晴れて告げられないのである。

(どうしよう……?)

織江は、快竜丹の畳紙を肌を抱いて、胸を痛めた。――が、山の事情は、彼女の焦燥などとは別に、熱を冷した御用窯の取り崩しがはじまり、その窯あとから生れたのは、目覚めるような悲母観音――彫刻の巧緻、染付の絢爛、さらに焼上り無類という色鍋島の絶品だった。だが、その御像の胸に、さんらんと輝いている金色の十字架はどうしたことから?

「あッ、十字架!」

窯分けの一人が叫んだ。すると三蔵は、うぶの観音像をうやうやしく捧げて、

「みんな、よく聞いてくれ」と、冒頭して、

「これア、悲母観音の御姿ではない――」

「ええッ?」

十人あまりが顔を見合すのへ、

「胸のクルスが何よりたしか、聖母マリア様の御相なのじゃ、いいかい――」

と、三蔵は、一同を見まわして、

「今度の御用窯ア最初からの嘘、御重役の長門様の話では、殿様お望みとのことだったが、これは長門様が江戸の山城屋と打った芝居、そうでなければ、なんで御禁制の十字を胸に飾る注文などするものか、だがわしは、この窯ア真剣だった。ありよう云うとこの御像が長門様の手から山城屋に渡り、快竜丹という不思議な薬と交易になる。それがどッと長門様の手元にくると、それからどえらいことが起る。危なく巻きこまれるはずのわしが、途中で気づいたということは、山代々の陶器師の霊に、まだまだ見捨てられなかった証拠――」

綿々、つづく三蔵の話、聞く者は、一様に肅として、唳ひとつたてようとしなない。

王寧も居た。

織江もそこに並んでいた。

宿望の快竜丹の出所は知れた。だが意外にも、いま、三蔵の云うところでは、それが江戸表の豪商山城屋周蔵なのである。

織江は、ほうとなった。そして空虚な眸を、三蔵の手にあるマリア観音の御姿へ、いつまでもいつまでも流していた。

ただ、迂濶と云えば云えるのだが、この一分始終を、つい傍の、松薪小屋の隅ッこにかがんで、長崎奉行所の目明しを勤める長次が、長い耳で聞いているのを、誰も、心づかなかったことである。

エピソード

幾日たったか――

大川内山の火炉を胎内として、世に出でたもうマリア観音の鍋島焼は、なぜか佐賀城の宿老鍋島長門のもとへ届けられなかった。

その一日。

「御書面です」

と、若侍が、一通の書状を差出すのを、閉門中の鍋島兵庫は手に取って、

「いま来たのか?」

と、差出し人の名を読みながらたずねた。

「は、在方の若者が持参いたしましたが」

兵庫は、抜くと眼をさらしていたが、だんだんけわしい顔になって

眉を寄せた。黙々と眼を閉じて沈思ののち、

「臯さうを呼べ」と、若侍に命じた。奥方の臯が、それへ出ると、

「登城いたす」「おつつしみのことは？」

「だいじない、佐賀三十七万石のお家にかかわる大事じゃ」

「はい」

「下城いたさぬときは運命と思え」

「はい」

「その節は、召使共を——かねて申し聞ける通り下に厚く、よいか」

「はい」答えているが、奥方の手も、からだも、こまかくふるえているようだった。

家老席鍋島兵庫は、こうして、慎み中の身を、押して登城した。

重役の詰所へ来て、上席の同姓長門を見つけると、つかつかと側に寄って、

「奸物！」と、斬りつけた。十分に覚悟の上だし、腕もすぐれていたし、長門は二言とたてず絶命した。

鼎の沸くような騒ぎの中で、平然と処分を待つ兵庫は、懷中してきだ書状を、係の役人に差出すことを忘れなかった。それは、さつき屋敷で見た大川内山の陶工牧三蔵からのものだった。それによれば——

宿老の鍋島長門は、太守肥前守齊直に快竜丹をすすめて、徐々に寿をちちめ、主家横領の非望を遂げようとする事実が、こまかく指摘してあった。

裁許は、齊直の即決で、兵庫の閉門を解くとだけ。

長門を殺害に及んだことについては、咎めはなかった。

それはいい。だが、翌日、兵庫自身が馬を飛ばして大川内山に来たときには、牧三蔵の屋敷は、空家になっていた。

「去いなしたか……」

鞍から降りた兵庫は、低回して、三蔵の退去を措しがった。

その頃である。長崎奉行堀丹後守の旨をふくんだ目明しの長次は、江戸にむかって、馬関から、陸路を、中国筋へ出てきていた。

それは、老中田沼意次へ、つぶさに事情をしたためた書状を届けるためで、その意次が、ここ数日に、老中を罷免されるなどとは、夢にも知らぬことだった。

天明六年秋の末——

長崎の港を出帆するオランダ船が、黄色い帆を、潮風にはたはたと鳴らしていた。三彩塗りのその船の甲板に立って、じっと陸地を見ているのは、王寧と三蔵とであった。かたわらには、織江の姿も。

琉球の使節王寧——どこかに暗い翳があると思ったら、彼はいま、使節としての志を得ずに、失意のまま帰るのだった。その王寧が三蔵に、「——芸術は広い、そしてもっと大きい。あなたの芸は、佐賀城の太守に制圧されて、そのまま滅びるものではない。わたしは惜しみません。行きなさいオランダへ、あの国は自由です」

と、海の彼方の新天地をおしえた。そして織江にも、

「あなたも牧さんと一緒に行くのです。あなたが忍者の役目として、復命をする幕府の偉大な方は、もう失脚の人となりました。行くのです。そして牧さんを助けて、日本の芸術を、もっともっと研くのです」

さらに新しい彼女の人生の、すこやかな歩みを念じるのだった。

附記すれば、国禁を犯して快竜丹を国外から求め、これを種に、巨富を積んだ山城屋周蔵が、何の取調べもなく斬罪に処せられたのは、目明しの長次が、江戸の土を踏んで間もなくのことであった。

極

刑

秘

抄

鈴木和夫

東 桂 史・画

★品物扱いの罪人達には、むごたらしい刑罰が数限りなく用
★意されていた、果ては自虐の快に酔う者すらなかつたか！

死刑の種類

古代日本の死刑の公刑は、絞と斬の二種であつた。

鎌倉幕府の時代には、絞首の刑が絶えて、もっぱら斬首の刑のみが行なわれていた。

このあたりまでは、同時代の諸外国の例に比べると、大変穏和な感じである。

ところが、足利幕府の末期に至ると、いろいろと残酷な極刑が考案され、専売公社のキ

ャッチ・フリーズではないが、むごたらしさの点で日本の刑罰も、世界的水準を行くようになった。

磔刑、鋸挽き、牛裂き、火あぶり、釜煮が

随時に行われるようになったのである。

徳川幕府で定めた死刑の種類は、下手人、死罪、斬罪、獄門、磔刑、火刑、鋸挽き、で

ある。中でも最も軽いのは「下手人」で、これはただ首を斬られるだけの刑である。囚人は「ためし物」に供されず、死骸の埋葬が許された。

「死罪」は町人の打ち首だが、時として「試し斬り」に利用され、死体は埋葬を許されな

い。「斬罪」は士分以上の者に科する打ち首で、ためし物にされることがなかった。

「獄門」も打ち首だが、首を梟架する附加刑がつく。磔刑は十字架に縛り、槍で突く。

江戸では小塚原、鈴ヶ森。大阪では千日前、飛田。京都では粟田口等がその刑場である。

「火刑」は火あぶりである。「鋸挽き」は竹製の鋸で首を挽き、次いで磔刑の執行は、軽い者は牢獄の内で行なう。江戸の場合は伝馬町牢屋敷の内である。重罪の者は特に設けられた刑場でお仕置きを受けた。見せしめのために公開した訳である。

重罪の者には市中引廻しの附加刑がつく。罪人は裸馬に縛られ晒し者となりながら曳かれて行くのである。シネマスコープの二本

立を七十円也で見られなかつた江戸の人々には、こういう事柄も一種の娯楽となつていた——と云うと、どうも無頼な記述となるのだが、そんな傾向は確かにあった。瓦版氏の活躍や、口から口への大衆伝達で、江戸のマスコミ仕掛けも案外スピーディなものであった。

「おう、今日は八百屋お七のお仕置だによ。こいつを見逃がしたんじゃあ江戸っ子の名折れだぜ。末代までの語り草だあな。おう、おっかあ、弁当こしらえてくん。伝馬町から品川鈴ヶ森までの道中だ腹が空くといけねえ」

「何も一日がかりで小娘のお仕置きを見にくこたあないやね、中入り後におしよ」

「何でえ、その中入り後ってのは？」

「鈴ヶ森の場だけにおしよ」

というようなりとりが、オンボロ長屋の井戸端あたりで展開されたであろう。



の、八日、十日、十二日、十四日、十七日、二十日、二十二日、二十四日等である。

これらの日は歴代將軍の忌日に当るので刑の執行を停止した。と云っても予定をズラすだけだから大した変りはない。

罪人の方でも、市中引廻しの附加刑を「こる八代吉宗と十四代家茂。二十二日は十二代世の見おさめができる」という理由からか家慶。二十四日は三代家光の、それぞれ忌日なのである。

そして、中には羞恥の底に不思議な虚栄心を抱く囚人もあった。いずれにしても、残酷な一種のショウだったのである。

死刑の公休日、というものがあつた。毎月

また、安政五年七月六日に十三代家定が死んでいるがこの將軍の發喪は八月八日に行われている……と、まあ、以上は些か余談に傾いた感がないではないが、時々、時代もの小説の中で、家康の命日に美女が磔にかけられたりする事があるので、何らかの参考に供したいと思うのである。

参考ついでに記すと、徳川家継という將軍は五歳で將軍となり、八歳で死去した。割合に有名な話の筈だが、どういう間違いでか四十男の好色な家継が出て来たので、筆者は胆を潰した覚えがある。そういうショックは精神衛生上よろしくない事である。

打ち首

打ち首の中で最も軽かった「下手人」は、単純な殺人犯の場合である。

金品を盗む目的によらずして殺人を犯した者、などがこれに概当する。

無論、主殺し、夫殺し、親殺し等は、いかに発作的犯行でも「下手人」という訳には行かない。それらは大変な極刑なのである。

心中の片割れなども「下手人」として打ち首になった。

「御定書百箇条」には、

男女申合せ相果て候ものゝ事。

享保七年極

一、不義にて相對死

いたし候もの死骸取

捨弔を為し間敷候

但、一方存命に候は

ば 下手人

とある。二人とも失

敗に終った場合は、日

本橋で三日間晒し者と

され、非人に下される。

一人だけ生残った場

合は、殺人者とみなさ

れ打ち首になったので

ある。

「死罪」に相当する罪

科はすこぶる多い。

「御定書百箇条」には、

姦通罪の分だけでも、

一、密通いたし候妻

死罪



一、密通の男

死罪

一、密夫を殺し、妻存命に候はゞ、其妻、

死罪

一、夫有之女得心無之に押して不義致し候もの

死罪

一、主人の妻と致し密通候者 男は引廻しの上獄門 女は死罪

但、妾と密通いたし候においては、男は引廻しの上死罪 女は死罪

一、主人妻へ密通の手引いたし候もの死罪

等々とある。

十両以上の金、または品物を盗んだ者。人を誘拐した者。辻斬りをした者。人家に忍び入り、または土蔵破りをして強盗を働いた者。偽造文書を行使した者。直訴の発起人。官府を欺騙した者。人の依頼を受けて放火した者。

三百両以上の金を収賄し、あるいは自己保管の官品を盗んだ官吏等々も死罪である。

「十両で首がとぶ」というのは「御定書百箇条」から出た言葉である。

山東京伝の下男が十両を盗んで召捕られた際、京伝が被害金額を九両三分と申し立てて

下男の命を救った話は有名である。

ところが、官吏の収賄は、二百九十九両三分二朱までは首がつながったのだから、何とも手前勝手都合のいい話である。

「御仕置例類集」には、五両余りで死罪となつた女の例が記録されている。

寛政八辰年九月

戸田采女正御差図

御勘定奉行根岸肥前守掛

一、羽州大山村重右衛門姉いね致し盗候一件酒井左衛門尉御預所羽州田河郡大山村無高百姓重右衛門姉 いね

右の者儀、横内村与助、後田村次左衛門宅手落の因に候得共、右簀垣を破りて這入り衣類品々盗取り、其の外高寺村長右衛門外六ヶ所百姓家留守の様子故、立寄り有之戸を明け這入り、又は雇はれ候て、家内の者見世に罷在候時分を見合、衣類度々に九十一品盗取、質入れ致等、右代金五両一分余不残酒食に遣ひ捨て候段、不届に付入墨の上百日過怠牢。

御差図 死罪。

右御仕置付(下略)

とある。奉行は入墨の上百日の入牢を科そ

うとしたが、死罪の指図が下つたので執行したのである。

この文中に「御差図」とあるのは、時の老中戸田采女正氏教の指令である。

当時は、諸国の代官所はもとより、將軍家お膝元の江戸町奉行でも、判断に迷う事件があると、自分の意見書を添えて「何々の仕置可申付哉、御伺」と云つて上層部へ問い合わせたのである。

この女囚の場合は、金額から云えば「入墨の上重敲」くらいの刑量に相当するのだが、度重なる犯行を「ヴェテランのプロ級」と見て、上部へ伺いを立てた訳である。

根岸肥前守は大岡越前守や遠山左衛門尉と並び称される名奉行だということになっていく。本来ならば、こういう時に迷わないで巧い解決をする者こそ名奉行なのだが……どうも苛酷な結果となつたようだ。

死罪の囚人を牢から呼び出す際の模様を、文献「牢獄秘録」は次のように伝えている。

死罪もの打首有之時の事

一、死罪もの有之時は、前夜町奉行より牢屋しき石出帯刀の玄関に申来る。打首一人ならば半紙一枚二人ならば半紙二枚と人数

だけ半紙来り、何の国、無宿誰と書付来る。是れを張番薬部屋懸り、是れを写して、翌朝薬を牢内へ遣はす時に、此の書付を小さくして、名主へ遣はす。是れ名主より頼にて貨物ある故也。

一、鑑番さやの内に入り、大牢と声を懸ける。名主内よりヘイといふ時に、御仕置者があり、何の何之守殿御懸りにて、武州埼玉郡柏原村無宿亀五郎年二十一歳、八月二十六日の入牢といふ時に、名主「おりましたア」何の何之守様御懸りにて、武州埼玉郡柏原村無宿亀五郎年二十一歳、何月何日の入牢外に同所同名は御ざりませんといひながら、キメ板を、牢内板の間へ打付るなり。時に御仕置ものを兩人して両手を捕へシツ／＼と云ひて、留口へ押出す也。時に張番脇より切縄を懸ける。縄かけ相済みて揚り屋前縁頬に腰をかけさせ、張番縄を取居る（下略）

一、牢内に御仕置もの有之時は其夕方より牢内一同に題目を唱ふる事也。但し牢内にては念仏法度なり。これ念仏にては往生して、題目にて助かるといふ説なり。日蓮上人由井ヶ浜にて助かりしといふ古事を用ひ

て、題目を唱へるは、助かりたしといふ心のよし。

一、死罪の内、引廻し、獄門、死罪は科人の方にては悦ぶなり。これ娑婆の見をさめに、一度世間を見るといふて悦ぶ也。

こうして、後手に縛られた囚人は、縛尻を非人（乞食）に取られて、刑場へ曳き立てられる。こうなると、俱梨迦羅紋々の刺青を施した兇悪な男囚が泣き叫ぶような事も起る。

逆に、うら若い女囚が少しも悪びれず歩を進める事もある。

殊に明治四年九月二十九日に二十七歳で処刑された夜嵐お絹や、明治十二年一月三十一日に二十八歳で判決を受け即日処刑された高橋お伝などは、毒婦と呼ばれるだけあって落着いたものだった。高橋お伝は、泣き叫ぶ男の放火犯の後から曳き立てられ「何だねえ、男のくせにみつともない。女の妾でさえこうしているんだ。しっかりおしよ！」と嘲笑を浴びせたほどだったが、ギリギリのドタン場へ引据えられてからはさすがに生への執着が湧いたのか「亭主の市太郎に一目逢わせて！」と、見苦しく暴れた。

こうした打ち首の死刑が廃止となったのは

明治十四年七月二十四日の事である。

さて、囚人は刑場へ曳かれる途中、地獄門の所で額に半紙を縛り付けられる。この半紙は、前夜町奉行所から届いた半紙で、眼隠しとして用いられたが「送り状」としての意味もある。まるで品物扱いなのである。

刑場はドタン場と称し、血溜り穴の前に俵が置かれている。非人は囚人の膝をまくり、俵の上に着坐させる。そして、首へ掛った縄を切り、襟を揚げ肌を露わとする。次いで、囚人の拇指をグイと上へ引く。囚人が前のめりになり首が延びた瞬間、刀が一閃して首は胴を離れる。非人は死骸を抑えて血液が充分に迸出した後、俵へ入れる。検死の役人達が去ると、非人は死骸の衣類を剥ぎ取って自分の所得としてしまう。夕方、裏門から死骸を入れた俵は担ぎ出され、千住、あるいは回向院へ埋棄される。

ただし、女囚の場合は、引き据える際に膝をまくらず、衣類も夕方になってから剥ぎ取った、とあるが、大した違いはないようなものだ。

首斬り役は、同心の外に、歴代世職の山田浅右衛門が勤めることになっていた。山田浅



右衛門は役人ではなく、えて大名なみの生活をしていた。

幕府からサラリーも貰っていない。これは非衛門丸」「人丹」という丸薬を死骸の生肝か公式のもので「御公儀様御用」と称する刀剣の試し斬りを請負うのが仕事であった。

もともと、幕府からの試し斬り依頼は一年に二三回ぐらいのもので、手当も一刀について十両とされていたが「將軍家刀剣御試役」の肩書がものを云い、御三家をはじめ、諸大名や旗本、陪臣の武家などから、試し斬りの依頼は山積し、依頼料も二十両、三十両とブレミアがつくありさまで、まさに門前市をなし、浪人ながら一万石以上の収入があり、溝ノ口に下屋敷なども構

えて大名なみの生活をしていた。この他、副業として「山田丸」別名「浅右衛門丸」「人丹」という丸薬を死骸の生肝から製造し、肺病の特効薬と称して販売していた。助からないのは罪人の方で、斬られたり、剥がれたり、肝を取られたりでは、まさに浮かばれない。

山田家は、斬首役としての初代浅右衛門吉時が、享保四年八月六日にこの仕事を得て以来、明治十四年の斬首廃止まで、九代にわたって首斬り役を担当した。

なお、試し斬りは生きた罪人を斬る場合だけではなく、死骸を更に斬る事もあった。試し斬りとしては、この方が本格なのである。土を長方形に二尺ばかり盛り上げた組板のような場所に屍体を置き、切れ味を試すのである。

陰惨な事柄だが、徳川時代の二大飢饉と呼ばれる天明、天保の大飢饉の時などは、一般市民の間でも、紹介を憚るような鬼気迫る惨状がくり拡げられたらしい。

天明八年戊申弥生という日附で書き残された「飢歳凌鑑」と題する文献には数々の恐る

べき事柄が蒐録されているのである。

まして牢屋敷に働く非人がどんな行為をしたかは想像にかたくない。

首が無い事などはほとんど問題にならなかったのかも知れない。

獄門の場合は、打ち首の後、死骸を捨てずに、首と共に水で洗ってから俵に入れ、刑場の獄門台で三日間晒したのである。首が取り捨てられた後でも、人別罪状を記した捨札だけは三十日間も立てておいた。

なお、梟首は徳川初期には牢屋敷の門前行なつたので「獄門」の名が生れたのだが、後に鈴ヶ森、小塚原等で晒されるようになって、やはり獄門と呼ばれていた。

「金沢藩刑法者抜書」には、幕府で定めた死刑以外の処刑法が記録されている。当時は、各藩によって自治的な刑も存在し、釜茹で、牛裂き、生つり胴などの残酷な刑が行われる事もあった。

以下は生つり胴の例である。

丹羽織部草履取

浅野川於河原生つり胴 彦 助

御馬捕市郎右衛門妻

同 刑

み つ

右市郎右衛門儀、寛文五年江戸詰の内、みつ儀彦助と致密通罷在、市郎右衛門、江戸より罷帰候の上、みつ儀駈落仕り、大衆免町に罷在候渡辺半兵衛小もの久助方に隠れ致申候事。

この「生つり胴」というのは、甲斐の大守の武田信虎（信玄の父）が愛妾を疑って不義を責め、無実の女を敢えて処刑した時の方法である。

御馬役市郎右衛門の妻みつは、夫が江戸詰の留守、肌淋しさによるめいた、男は身分の低い他家の草履取りだが、燃えるような恋となり、夫の帰国に当って、男を誘って駈け落ちをした。男の知り合いの久助という者の所へ匿まって貰っていたが、ついに発見され、縛られた。

武士の妻たる身が、草履取りと姦通をした上、駈け落ちの果てに縄目の恥を受けたとあっては、もはや夫の手の及ばない問題であり自分は許そうと思っても体面上それはできない。刑は生つり胴と断罪が下る。市中目抜き

の場所三日間縛られたまま生晒しの恥辱を与えられ、河原の刑場へ曳かれる。

上半身の囚衣を剥がれた上で太縄で後手に

縛り上げられ、台へ吊られる。役人の刀が胴を斬る。この刑は斬り手が凄腕である事が要求される。それは、一打ちで下半身を切り離す為である。腰から下が地に落ちると、女の体は頭の重さで回転し、切り口が上を向く。

役人は、すかさず首を刎ねる。

体が鮮やかに三つとなり、見物の群衆はどよめく。検死の役人は「お見事！」と声を掛けるが、斬られる方はたまったものではない。

この事件は、徳川の刑法、すなわち「御定書百箇条」に照らして明らかに過重だが、当時の姦通罪は実夫が成敗する事も許されたほどで、公刑と私刑が接近していた。だから江戸を遠く離れた金沢藩などでは、こういう残酷な事も行われた訳である。「金沢藩刑法者抜書」には、他にも残酷な処刑の例が記録されており、さしずめ「金沢藩は鬼より怖い、釜茹で生つり胴の音がする」というようなものである。

ところが、江戸というのは不思議な所でどういう風の吹き廻りしか「御定書百箇条」より軽い刑が、將軍家のお膝元で行われる事もあった。「御仕置裁許帳三」には、

寛文四年辰七月二十七日。

一人伊兵衛 是は茨屋町久右衛門店髪結長

ろう。

兵衛手間取、主人長兵衛女房と密通仕り一所に臥り罷在候を、長兵衛見付、剃刀にて

血まみれの姿で縛られた二人を番所へ突き出す。そして、入牢。文献中に「入」とあるのは入牢の事である。長兵衛の方は、現代ならば傷害罪に問われるが、当時は「密通の男

吭を掻き、其上御訴訟申につき、入。右の者、辰八月四日、森川小左衛門殿へ渡り死罪。

女共に、夫殺候はゞ、於無紛は 無構」とされておられ、殺しても構わない立場なのである。

同日

一人女たま 是は右長兵衛女房、右の伊兵

衛と臥り罷在候を、夫見付け剃刀にて吭を

掻き候につき、入。右の者、同辰八月二日死罪。

傷つけたのみで訴を起したのは「引廻しの上獄門の辱しめを与えてやろう!」というつもりだったのだろう。しかし、奉行は数日後ただの死罪を申渡した。コキユの長兵衛はアテがはずれて一件落着……という次第なのである。

と有る。ところが「御定書百箇条」には、

一、主人の妻と致密通候者 男は引廻しの上獄門 女は死罪

とされている。この事件の髪結職人伊兵衛という男は、主人の妻と密通をしたのだから「引廻しの上獄門」が通り相場なのである。

磔刑に相当する犯罪は、大略次の通りである。

磔 刑

髪結床の亭主長兵衛は、女房と使用人が寝

一、姦通の上、夫を殺害した女

ているのを見て、商売物の剃刀を使い、二人

一、主筋の人間を殺害した者

の吭、即ち咽喉首を掻き切った。縛り上げて

一、親を殺害した者

から切ったのか、それともグッスリ寝込んで

一、関所破り、及びその案内者

いるところを切ったのか、いずれにしても生命を絶たぬ程度に切った点が熟練のたまものであり、さすがに経営者の貫祿というものだ

一、女を誘拐して売り飛ばした者

一、贖金を製造した者

磔刑にかけられる者は重罪の囚人だから、市中引廻しの附加刑がつく。

裸馬の一行が刑場へ到着すると、六人の非人が担当で、御仕置者を馬から下ろし、地に横たえた磔柱に抑えつけ、縛りつける。

磔柱の形は、男の場合は横木が二本ある。すなわち、大の字型に固定する訳である。

女の場合は、腕を縛る横木が一本だけで、足は柱に固定する。すなわち十字架型であり男と違って足を上げさせないのは「お上の御慈悲」という訳だろう。

非人は左右に廻って、手首、上膊部、胸部を三箇所、襟縄、胴縄、太腿、足首、と嚴重に縛る。そして囚衣を左右の脇の下から腰のあたりまで破った後、柱を起こし、その根本を三尺ほど土中に埋め、踏み固めるのである。突き手は、白衣股引姿に縄だすきの二人の非人である。

検死の役人が磔柱の十間ほど前で、床几に腰かけており、用意が済むと、処刑すべき旨を非人頭の弾左衛門に命ずる。

槍を手にした非人は左右から「アリヤ、リヤア!」と素突きを試み、囚人の眼の前で交又させる。普通の者ならこれだけで気が遠く

なってしまうという。次いで左側の非人が、囚人の右の脇腹から肩先まで貫き、槍先が一尺余り出ると、一捻り捻った後に抜く。捻ると流血が槍の柄に伝わらぬ、という理由によるが、実際は哀れな犠牲者の生身をえぐるのである。

以下、同様にして左右から次々と突くこと二十回、乃至は三十。鮮血は淋漓として迸り内臓がはみ出し、その残酷なること、いかなる剛胆者も、顔色を変えるほどだったという。

囚人が悶死すると、弾左衛門は死骸を改め検死役人に伺った上で、左右から咽喉部にとどめの槍を刺さしめ、死骸はそのまま三日間晒しておくのである。

なお、磔刑を宣告された囚人が処刑前に牢死した場合は、その死骸を塩漬にし、執行の当日まで保存して定法通り磔刑にかけた。

映画の時代劇には、磔刑のシーンがたびたび描かれるがリアルなものはほとんどない。

映画では二枚目の神出鬼没氏が必ず助けに来ることになっているから、槍で突く場面などはもとよりないが、その前の情景が全然リアルでないのだ。男も女も差別なく一様に十

字架型である。男女同権という訳でもなからうが、おまけに足を乗せる台が設備されていたりする。体を動かせば手首も足首もカンタンに抜けそうな縄のかけ方で、二枚目氏の駆けつけを待たずとも自分で逃げられそうである。

だから悲壮感も盛り上らないし、恐怖感も迫らない。

欧米の宗教ものスペクタクル映画(?)等がわりあいリアルなのに比べると、トンと間の抜けたものばかりである。

もっとも、俳優諸君の身になってみれば、間抜けな処刑シーンでガマンするのがヒューマニズムというものだろう。

ところが、一人だけヒューマニスティックでない映画作家が日本にもいたのだから、案外世の中は広いのである。故溝口謙二監督の晩年の作「近松物語」がそれで、栗田口刑場に晒される処刑後の男女の磔は、まさにリアル。

夜の場面であり、凄絶な鳥の声なども入ってドキリとさせるものがあつた。この映画のラストシーンは、長谷川一夫の茂兵衛と香川京子のおさんが、裸馬に背中合せて縛られて

刑場へ曳かれるのだが、手が縛ってないので二人が握手しているという妙な演出。さすがに凝り屋の溝さんも大スタアには遠慮をしたのか惜しいことであつた。こういうのは、撮る方も撮られる方も職業意識の欠如と云うべきで「駄上品」とも称すべき事だろう。

フランス革命の渦中の恋を描いた仏伊合作映画「愛は惜しみなく」では、ヒロインの女優が牢獄で髪を切られ、後手に縛られ、襟を裂かれる場面をリアルに演ずる。刑場へ赴く囚人馬車の中で、相愛の男女は互に相抱く事もできぬ姿のままに最後の接吻を交わすのである。

かくして悲壮感も盛り上る——という仕掛けである。

「御仕置例類集 十」には、無宿者と姦通した人妻が、実夫殺しに協力した罪で磔刑に処せられた例が記録されている。寛保三亥年七月の事件である。

松平和泉守殿御差図

一、遠州昆沢村久蔵外一人致変死二候一件
(中略)

井上武三郎領分遠州錦知郡昆沢村百姓久蔵
女房 ちえ

右の者儀、夫有^レ之身分にて、無宿梅流と密通の上致^ニ駈落^一、附添へ歩行、三州千田村修驗智泉方に致^ニ止宿^一、夫久藏儀伴久次郎を召連れ尋参り、立帰候様申聞候をも不^ニ相用^一、却て梅流と同意致し、久藏を途中にて可^レ為^ニ殺害^一旨申合せ、久藏を欺き、智泉方立出、往来も無^レ之山道の方へ致^ニ同道^一、同国明川村地内字石神坂にて、久藏背負致候行李の荷縄を引留め、働き不^ニ相成^一候様にいたし、梅流儀久藏肩を突き、剩へ久次郎をも梅流打殺候を乍^ニ見留^一其場を立退き、梅流に附添ひ歩行候段、重々不屈至極に付引廻しの上磔

右御仕置附(下略)

とあつて、これはまさに重々不屈至極で弁護の余地が無い。

梅流というのは、野州無宿の三次郎というやくざな修驗者で、よろめく相手が悪かったが、女の方も相当な毒婦である。夫の百姓久藏が連れて行った久次郎というのは、多分物心ついたばかりの子供だろう。

しかし、毒婦には母性愛の片鱗もなく、詐弁を弄して騙しうちにしたのである。女房を探す男がなぜ行李などを背負っていたのか？



これも女房側のトリックと推理できる。つまり、行李とは家出用の衣類が入った女房の荷物なのではあるまいか。省略した部分の一章には梅流が「跡より附参り云々」とあるのだが、行李を背負わせておけば格闘もできかねる訳で「ねえ、お前さん、妾が悪かったよう家へ帰るから荷物を担いでおくれな」という具合に背負わせたものと思える。

哀れなのはお人好しの亭主で「お前が戻ってくれさえすりゃあ文句はねえすら。さあ、行くべえ」か何かで、安心していううちに淋しい山道の方へ誘導されてしまい、親子もろともあえなく命を落した、という次第である。こういう女は立派に磔刑の有資格者で、同情の余地なしだが、逆な例としてはなはだ哀

れな娘の事件が「刑名副律」にある。

寛保二年戊午十二月御仕置

駿州竹源村七右衛門妹 なつ

此のなつ儀、同国中土狩村伴七方に勤居候

内、伴七伴七郎兵衛と密通の上、懐胎いた

し候処、其後暇被出候以後、懐胎の儀七郎

兵衛へ申聞かせ候ても、不相構候間、殺

し呉れ候様可申聞と存じ詰め、伴七方へ

参り、同人甥仁平次へ右の趣咄候得ば、一

人相果候はば、大死に候間、七郎兵衛を一

大刀恨み、相果候様仁平次申教へ候故、七

郎兵衛へ疵付候儀、元主人の儀に御座候間

重々不届至極に付、引廻しの上、其所に於

て磔可申付哉と相伺御差図、

重罪のものに候得共、懐胎の事に候間、其

所に於て獄門。

つまり、主人のドラ息子と密通し、妊娠し

た女が、無情にも暇を出された。その後男

に妊娠の事を話したが、「誰の子だかわかる

もんか」という調子で取りつく島もない。「そ

れなら、いっそ一思いに殺して！」と思い詰

めたのを無頼派の甥が、叔父の財産を狙って

かどうかかわらんが「何も一人で犬死するこ

たアねえやな。無理心中へ持ち込みなよ」と

たきつけた。それもそうだと考え直した女は

男に傷を負わせたが、取押えられて入牢。懐

胎の身だから磔は免がれたが、獄門に処せら

れた。

という訳である。男共には何の御咎めもな

い点が現代にも通ずる事件だが、それにして

も獄門とはおどろくべき極刑である。

主人尊敬の趣意に基づいて立法された江戸

期の刑法は、つまりは「下剋上」を防ごうと

する徳川家擁護の政策から出たものだったの

である。それをよいことに女を弄ぶ不埒な主

人が、昔はいくらでもいた訳である。

火 刑

火刑は放火犯にのみ行なった死刑で「眼に

は眼を、齒には齒を」という考え方が含まれ

ている。ただ、徳川幕府が火災に神経質だっ

た事は確かで、現代でも日本の街は外人の眼

から見ると「木と紙でできている」と云うほ

どだから、江戸の街などはまさに八百八町オ

ール竹の家みたいなものだ。

「火事と喧嘩は江戸の花」などと云っても、

やはりあまりかんばしい花ではなく、悪くす

れば一望千里の焼野原と化してしまう。

だから幕府は放火犯を非常に憎み、「火あ

ぶり」の極刑と定めたのである。

放火の教唆者、物品掠奪の目的で放火した

者、怨恨嫉妬により放火した者、等、いずれ

も市中引廻しの上火刑に処せられた。

裸馬が刑場に着くと、非人が馬の背から囚

人をおろし、縄つきのままで罪木に乗せ、腰

部、大腿部、足首、と縄を掛け、柱に縛りつ

ける。縄は太縄で二重に掛け、緊縛した後泥

を塗り込み、さらにその上を細縄で幾重にも

捲きつける。次に首縄を切断し、太縄に代え

て二重に縛る。

固定が終ると、茅、及び薪を柱の根元に四

方から積み、最後に茅一把ずつ結んだままを

二重三重に積み上げて、茅屋根に似た形を造

る。

役人の命令が下り、非人頭の弾左衛門が火

を移せと指図する。

非人は茅三把を手にし、風上から火をつけ

る。燃え盛る紅蓮の炎に、囚人は生地獄の苦

悶を続ける。

炎が肌を焼くころには、すでに絶息してい

酸化炭素を吸入するので窒息死となるのである。

火災の時、俗に「煙に巻かれて死ぬ」というのも、同様の条件により絶命するのである。

囚人が死亡すると、燃え残りの薪を取り払い、非人が左右から四、五把の茅に火をつけてとどめとした。

死骸はそのまま三日間放置し、晒し者とした。

火刑と云えば、西洋ではジャン・ダーク日本では八百屋お七が有名で、美女の極刑としての双壁となっている。

マドモアゼル・ジャンの方は、天下国家の大義名分だのために行動しての結果だったが、お七坊の方は、およそ他愛ない動機による愚劣な行動だった事は衆知の通りである。

八百屋お七の伝説は、諸説まちまちだが、その真説として「我衣」は、こう書いている。

（加賀宰相殿の足輕に、山瀬三郎兵衛と云ふ者あり。浪人して太郎兵衛と改め、丸山本妙寺門前に八百屋店を出し、青物商売をいたしける。子なき事を愁ひ、旦那寺駒込

吉祥寺の七面大明神へ深く祈願して、歩みを運ぶ。仏力の誓ひ空しからず、妻妊娠して、女子を設く。是れ偏に七面の加護なり

とて、名をお七と付けたり。生れつきさかしく、手跡なども良し。下略）

しかし、お七の容色は、美しい方ではなかったとして、

（お七は一体太り肉にて、少し疱瘡のあともありしといへり。色は白かりけれども美女に

てはなかりしといへり。云々）

と述べてあり、結びの文句は、（御老中方にても不便に思召けれども、是非に及ばず、御法の通り千住に於いて、吉三諸

ともに同罪にぞ及びける）

というのである。文化八年の事件で、常陸無宿の広岡小僧と榊五郎という盗賊が、放火の罪で火刑に処せられた記録があるが、格別に異色な内容ではないから省略する。

鋸挽き

これは最も残酷な極刑で、主殺し以上の大逆罪に適用されるものであった。

戦国時代には、謀反人への刑としてたびた

び行なわれ、「三河物語」などにも、その様相が記録されている。

江戸時代の鋸挽きは、市中引廻しの上、繁華な往来へ二日間晒し者とし、諸民の随意に囚人の首を備え付けの竹鋸で挽かせた。江戸ならば、日本橋南詰の広場で、三尺四方の穴を掘り、晒し箱を埋め、箱の中へ囚人を縛りつけ、首枷を嵌めて首だけ出させ、望みの者に挽かせたのである。

三代將軍家光の頃には、七日間かかってようやく挽き殺した例があったというが、あまりの残酷さに、その後は挽く者がなかったので、後にはただ形式的に行なうようになった。

享保六年の布達に、

「一日引廻し、両の肩に刀目を入れ、竹鋸に血をつけて側に置き、二日晒し、挽くべき者有之時は挽かせ候事」とある。

夕暮になると囚人を晒し箱から出し、首枷をはずして、非人の担ぐモッコウに乗せ牢屋敷へ戻る。

こうして二日間の晒しが済んだ後、磔刑にかけたのである。

能 謀
作 報
戦 官

間

謀

散

華

藤 見 郁

美 濃 村 晃・画



ねっとりとからみつく白い肉の異に、みずから
陥ち込んで悔いなき忘我の一時！ 祖国も使命
も、すべては女体の前に捧げる犠牲だった！

燃える情火

張道成は、さっきから窓の外を眺めている胡明華の肩を、背後からそ
っと抱いた。

白い、まるい肩である。一滴水を落せば、はじいて転げ落ちそう
な、あぶらみの肌。

襟足のこまかいウブ毛が、張の情感をやるせなく誘う。

「明華……」

背後から腋の下に手がさしこまれ、明華の胸のふくらみ
を張の指先がネットリとまさぐる。

「なに？ 張さん……」

その指の上に、自分の白い指をからませ、明華は
男の胸に背をもたせかける。

「私は、お前を……」



云いかける男の言葉に、わざとかぶせて、
「キレイな景色……ほら、海の上にあんなに
船が……。まるで蝶の羽のように白い帆を張
って……」

「窓わくにつかまるとペンキがつくよ。今日
塗りかえたばかりだから……」

「向う岸の九龍半島が、まるで、夢のように
霞んでいるわ」

「ここから眺めると、あの地区に、鴉片と、
売春、乞食や殺人が、毎日繰返されていると
は、ちょっと信じられない。平和な風景なん
だがね……」

——ビルの畳み重なる海岸べり。内海をは

さんで対岸九龍の時計塔のある九龍駅などの
景観が、この少壮貿易商の洋館の窓から、ひ
と眼で見おろせる。
静かな内海を、虫のように泳ぎ渡る青い連
絡船。

ヴィクトリヤ山の麓の小高い丘に建つ、小
さいながらも瀟洒なこの邸にも、やがて夕闇
が静かに寄せてくる。

「ああ、街にネオンがつきはじめたわ。私、
もう帰らなくちゃ……」

明華は、新巴里舞厅ナンバーワンの踊り子
である。伸びきった姿態、東洋人離れた美
貌と才気に惹かれて、彼女を追いまわす客が

欧米人の間に、ことに多い。

若い貿易商張道成も、明華の魅力に心をひ
きずりまわされている一人であった。

「——明華、お願いだ。今夜は泊っていつて
おくれ。この家の中には、私とお前のほか、
おととい田舎から出てきたばかりの女中が一
人居るだけだ。私はもう、お前なしでは、一
晩だってガマンできないんだ!……」

「泊るなんて、そんなことはできないわ」

「何をあげよう。ルビー? 昨日、シスコか

ら素晴らしいエメラルドが手に入
ったんだ。それとも、やっぱりダ
イヤ……」

「宝石は、もう沢山あるからいら
ないの」

「それじゃ、何が欲しい?」

「私の欲しいのは、あなたのその
胸のポケットにさしてある万年筆
……」

「まだこれをあきらめないのか。
駄目だ。これだけは駄目だ。ゆる
しておくれ……」

張は苦しげにうめいた。その表
情をチラと見た明華が、男の首に
腕をかける。真赤な唇を張の鼻さ

特集 女間諜 女忍者

きに寄せ、熱い息をフウツとふきかける。悲しげな声で、あえぐように、

「それをくれないければ、私はあのヒモと一生離れられないんだわ……」

「いつもお前が話しているアメリカ人のことか?……」

「そう……。九龍城の鴉片ボス、ブラット・フォード。怖ろしい男よ。いくら逃げても追いかけてくるわ。殺し屋の子分が三十人もいるの。その万年筆さえ手に入れば、私ときれいに手を切ってくれるというの……」

「……」

「張さん! そんな古ぼけた万年筆なんか、フォードにくれてやり、私とあなたと二人きりで暮しましょう。誰にも狙われない平和な町で……」

「お前は、この万年筆の値打を知らないからそんなことを云うのだが……」

「張さん! あなたが私を本当に愛してくれているのなら、私の願いもきいてちょうだい……」

明華は、張の胸に顔を押しつけ、部屋の隅のベッドにまで寄りたてる。男の身体から力がぬけて、無抵抗にベッドに腰をおろす。

張の胸が、女の髪の匂いにむせる。男の顔

に懊悩の色が濃い。心の中で、この強烈な誘惑とたたかっているのだ。

明華は全身で張を仰向けに押し倒す。大きな赤い唇が、ヒルのようにベチャリと張の唇に吸いつく。

「張さん! 私、あんたが好き! あんたのためなら、死んでもいい!」

身を揉む女。胸をはだけ、張の頬のあたりに激しく押しあてる。

「明華!……」

耐えきれず、張は女の厚い背に手を廻す。狂ったように抱きしめる。

「張!」

それを待っていたように、明華は身をくねらせ、あえぎとも悲鳴ともつかぬ咽喉の奥の声をあげ、燃えあがる情火に油を注ぐのだ。

(地獄へおちろ!)

張はうめいた。

(おれはこの女のほかに、何もいらない!)

この女が、おれのすべてだ!……)

女中秀芳

ワナと知っていた。知っていたが、このめくらめく魅惑の前にひざまづく張である。

ベツトリと、額に汗をかいていた。

身を責める後悔……しかし、腕の中の白い肉を、もう離したくはない。

「明華! お前はもう、完全に私のものだ。もう誰にも渡さない!……」

「私だって、私だって!……」

「何も知らないお前を手先に使っている、あんなアメリカ人のボスとは、もうハッキリと手を切るんだ!」

「ええ、もちろんよ!」

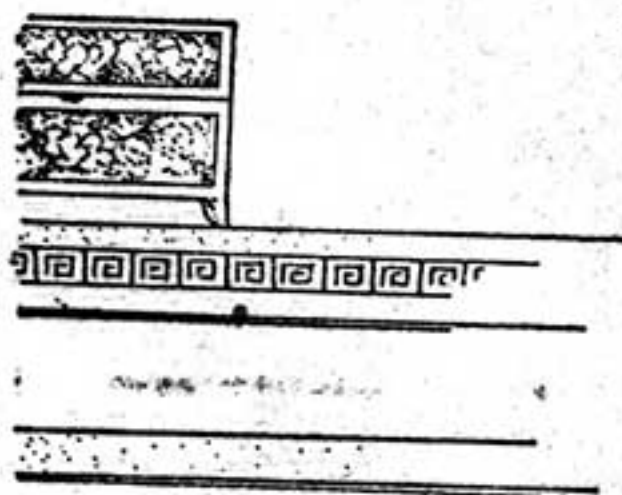
再び、ひしと抱き合う二人。

その時、明華の耳に、コトリ、とかすかな物音がした。

びくりと起きあがると、怖ろしいすばやさでベッドをおりた明華が、ドアを突きあける。

「誰?」

あわてて、廊下を逃げていく娘の姿――



「お待ち！」

鋭い声。追いかけて娘の襟がみをひつつかむ。そのまま、ズルズルと部屋の中にひきずりこんだ。

「張さん、この女は誰？」

「なんだ、汪じゃないか。この女は、おととい雇い入れたばかりの女中だよ」

「怪しいわ。私たちの様子を扉の外で立ち聞きしているなんて！」

「湖南の片田舎から出てきて、まだ礼儀も知らない小娘だよ。そんなに怒ることはない。お前も早く謝りなさい」

「ハイ、どうもすみません。でも、わたし、立ち聞きなんかしていたわけじゃねえです。ただ廊下を……」

「お黙り！ そんなら、なぜ逃げた。」

お前は本当はどこの誰なんだい！」

「わたしは本当に、おととい王大仙の周施屋からこちらにまわされて来た者で……」

色の黄い女中は、眼をまるくして手を横にふる。首のあたりにも垢が浮いていそうである。

「フフン。張旦那の眼はごまかせても、私の眼はごまかせないよ。いま白状させてやるから、そう思いな」

明華の眼に、残忍な

光りが燃える。

女中、汪秀芳

の咽喉をつか

むと、グイ

グイしめ



あげる。

「く、くるしい！」

悲鳴をあげる秀芳。明華が手を放して、ふと指先をみると、黒い煤のようなものがついてる。

「ホレ、ごらん。色の黒いのは、何かを塗って、わざと汚しているんだ。怪しい女！」

「ち、ちがいます。これはさっき、庭でゴミ

を燃していた時についた煤ですよ」

「お前、誰に頼まれてこの家をさぐっているの。さ、白状するんだ！」

明華の細い眉が、ピリリとふるえる。荒々しく秀芳の手首をつかみ、うしろへ力いっばいねじあげる。

「痛い！」

左右の手首を、あり合わせの布紐で一つに

特集 女間諜・女忍者

くくる。その余りで、腕から胸へとギリギリ縛りつける。

「ゆるして。こんなに胸をきつく縛られては息ができねえです！」

秀芳の抵抗も、憎悪に燃えた明華の形相に圧倒され、なすがままに小突きまわされる。

「張さん。あなたのバンドを貸してね」

洋服ダンスの扉をあける。

「どうするのだ私のバンドを？」

「鞭にして、こいつをなぐるのよ」

二、三度ヒュウヒュウと空に鳴って、秀芳の太腿に、皮のバンドがビシリ！とふりおろされる。

「ひいッ……」

腰のまるみに、ビシリ、ビシリと鳴る。足を伸び縮みさせ、歯を喰いしぼる秀芳。

「痛い？ 痛ければ云いなさい。なんの目的でこのお家に住みこんだの？」

「お金が欲しいからですよ……」

「フン。私たちのことを、外の誰かに知らせ、沢山お金をもらおうっていうんだね」

「そ、そんな……」

女中の髪を毛をつかみ、明華は床の上をズ

ルズルひきずりまわす。

「ああっ……」

裾が乱れ、白い脛が、上のほうまでまくれあがったまま、秀芳の身体が苦しげにのたうちまわる。

「ホラ、張さん、ごらんなさい。こんなに白い脚をしている百姓の女がいるもんですか」

「うむ……」

白い太腿が、苦痛と恐怖にこまかくふるえている。

「旦那さま。ゆるして……」

哀願する女中の眼。室内履きの明華の足が秀芳の乳房を踏まえ、グイグイともみねじる。

「——明華、それくらいにしておきなさい。

そういえば、怪しいフシもないではない。私が後で、ゆっくり調べてみる。楽しい夜に、そんなむごたらしいことは、もうやめよう」

「強情な女だから、よっぽどひどい眼に合わせないと、とても口を割りそうにないわ」

明華は、額の汗を手で拭った。最後にもう一度皮バンドで秀芳の頬をビシリとなぐる。

「ひいッ……」

そして秀芳は、後ろ手に縛らせたままの姿で、女中部屋の中に投げこまれた。

その夜、明華は十一時ちょっと過ぎに張の邸を出た。

自分の運転する自動車で、市街へ帰るのである。張の邸のある丘を下り、両側に雑木林の茂る道を十分も走れば街に入る。

邸の前で明華を見送る張のポケットに、もう、れいの万年筆はなかった。

張は、明華が車に乗ってから、手を握りしめて、

「明華、私はお前のために、命よりも大事なものを失ってしまった。今夜は眠れない。おねがいだ。明日の朝まで、ここに居てくれ」

「駄目。一刻も早く、フォードに逢って別れ話を決めたいの。もう少しの辛抱よ。ガマンしてね」

「明華！……」

張は女の二本の腕を名残り惜しげに愛撫する。肩からむきでた腕は、一点の傷もなく、むっちりと白い。

「さあ……」

いつまでもねばりつく男の手を払って、エンジンがかかる。

車が動きだす。見送る張。

尾灯が次第に遠くなり、やがて闇の中に没する。

「明華……」

せつない思いで、張はつぶやいた。

だが――

それから数分後、明華は車の中で、何者かのために惨殺されたのである。

明華射殺

翌日の早朝、シリシリと鳴り続ける玄関の呼鈴に、張は眠りをさました。

パジャマのままドアをあけた張の目の前に、香港警察の係官二名が、いかめしい制服姿で立っていた。

「えっ、明華が殺された？」

張の顔から、みるみる血の気がひいた。

「そうです。自動車の運転席に腰をおろしたまま、背中から心臓へ、一発のもとに……」

「拳銃ですか？」

「そうです。死亡の推定時刻は、昨夜の十一時半ごろ。……何かお心当りは？」

係官の眼が、鋭く、張をみつめた。

「場所はどこです？」

「それが……すぐこの丘の下、雑木林にはさまれた道で……」

「それじゃ、この家を出てから、すぐだ」

「すると、昨夜、胡明華は、あなたのお家に

遅くまで居たわけですね？」

係官の眉が、陰しく寄った。

「そうです。十一時ちょっと過ぎに、彼女はこの家の門を出ました。明華の車の尾燈が見えなくなるまで、私は見送っていたのです」
その時、庭に出て、あちこち歩きまわっていた係官の一人が近寄ってきた。

「被害者が昨夜この家に来ていたということとは間違いありません。女の右ヒジについていた緑色のペンキと、同じペンキが、この家の窓わくに塗ってあります。ええ、塗りたてです……」

「明華の腕にペンキが？ そんなことはない筈です。昨夜別れる時には、彼女の腕にそんなものはついていませんでした……」

「ホホウ……。で、失礼ですが、あなたと胡明華のご関係は？」

しかし、これはすでに係官のほうで知っているはずだった。

張は黙った。

（明華を殺したのは誰だ？ あの万年筆はどうなった？……）

「何か、盗まれたものは？」

真剣な表情で、張は聞いた。

「ハンドバッグの中に、かなりの所持金が、

そのままになっていたので、物盗りの犯行とは思えないのですが」

「……私が一番怪しいというわけですね。新巴里舞厅のマネージャーにお聞きになったでしょう。近頃、もっとも明華を追いまわしているのは私だと……。しかも女がなびかないので、私が焦っていることを……」

張は、青白い微笑を浮かべた。

二人の係官は、注意ぶかい眼で、張の言動を見つめていたが、その他二、三の質問をすると、ひとまず引き上げていった。

――（明華！ お前は誰に殺された。誰に射たれたのだ！……）

――ブラッド・フォード！ 明華のヒモだという、そのアメリカ人の鴉片ボスが、昨夜彼女の車を待ち受け、車を停めて射ち殺し、万年筆を奪う……。

――あるいは、そのほかにも、あの万年筆を狙う誰かが？……

彼は、急に咽喉の乾きをおぼえた。

朝早く警官に叩き起されてから、いままで一杯の茶も飲んでいない。

「秀芳！」

呼んでから、彼は思いだした。

縛りあげて、女中部屋に投げこんでおいて

ままなのである。

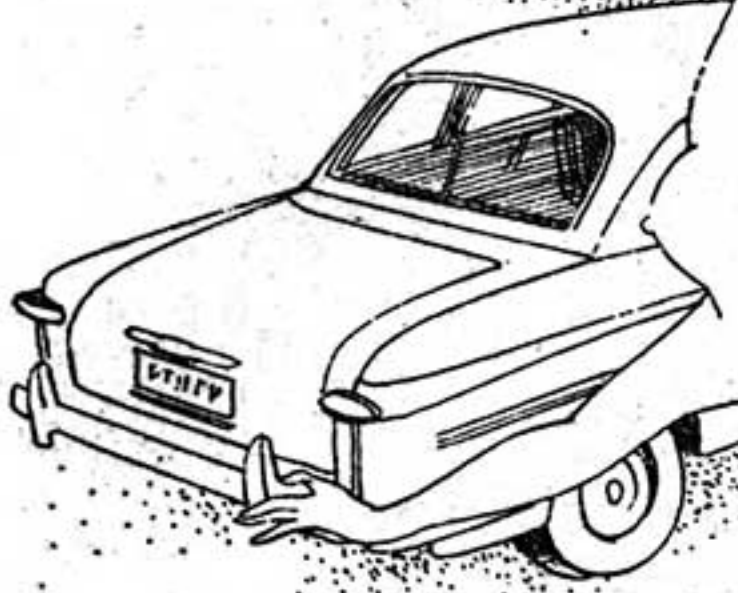
(少し、ひどい仕置だったかも知れぬ……)

彼は、女中部屋の扉をあけた。

「秀芳！」

昨夜のとおり、後ろ手に縛られたまま、女は膝をまげ、海老のように背をまるめて眠っていた。足首を一つにくくった縄もそのままに、昨夜の責めに疲労してか、ぐったりと眼を閉じている。

張はその縄を解き放った。眠たげに眼をこすりながら、のそのそと起き上る鈍重な女の動作を見てみると、彼の



晁

胸に急にムラムラと怒りがこみあげてきた。(フタ女！)

ピシ！ と、女中の横面を張り飛ばした。キョトンと主人を見上げる鈍い眼が腹立たしく、足をあげて女の胸を蹴りつけた。

「しっかり眼をさまして、湯でも湧かせ！ おれは咽喉が乾いているんだ！」
「ハイ。旦那さま！」

秀芳は、台所にすっとなでいく。

何もかも腹立たしいのだ。張の蹴りたかったのは、むしろ自分の胸であった。

自分の居間に戻った張は、がっくりと椅子に腰をおろした。

明華が、もうこの世にいないということが急に現実感となって、彼を襲った。

(——祖国を裏切り、愛する女を殺されたおれは、これから、どう生きていったらいいんだ！……)

死のオルゴール

扉があいて、盆の上に茶をのせた秀芳が入ってくる。

「遅くなりました」

卓子の上に置く。ガブリと張は飲んだ。一口飲んで、卓子に戻す。口がまずい。

秀芳が、じっと扉の前に立っている。張はそれを見ると、イライラと叫んだ。

「どうしたのだ。そんな所に突っ立っていないで、早く朝飯の仕度でもしろ！」

しかし、女中の身体は少しもゆるがずに、張に視線を投じている。

「秀芳！ あっちへ行け！」

彼は努鳴った。

「旦那さま……」

秀芳の口が、静かにひらく。

「これを、お返し致しましょう……」

掌をひろげる。中には、軸のふとい、古ぼけた万年筆……。

「そ、それは！」

「旦那さまでございましょう？」

万年筆をつかみ取ると、軸の真中を左右にねじる。二つに離れる。中は空洞。

「ない！」

「中の書類は、私が頂きました。大陸側沿岸に集結された米軍兵器の秘密情報……」

「秀芳！ お前、やっぱり……」

うなりをあげて秀芳につかみかかる張。

二、三步退いた秀芳の手に、拳銃が光っている。銃口は、ピタリと張の胸を狙う。

「あわててはいけません。旦那さま……」

「き、きさま！」

「旦那さま、私の話をよくお聞きなさい。……」

昨夜、あなたと別れた明華は、車を走らせて丘の下まで行くと、そこで車を停めたのです。そして、今度は歩いて丘をひき返し再びこの邸の庭に現われたのです……」

「そんなことが……」

「あなたから機密書類を奪い、さらにあなたの命をも奪い去るためです。……明華は庭に忍びこむと、窓の外から部屋にいるあなたに向いて、拳銃の狙いを定めました。ヒジをその窓わくにのせて、ピタリと照準をつけたのです……」

「ウソだ！ あの明華が、そんなことを！」

叫びながらも、張はさっき警官の云った言葉、電光のように思いました。

「——女の右ヒジに、緑のペンキがついていた……」

（ああ！……）

手ひどい裏切り……張はガックリ片膝を床に落した。

「——ところが、引金をひこうとした瞬間明華の背中にも、ピタッと拳銃が押しつけられていたのです。明華はそのまま両手を上にあげました。そして、銃口を背中に突きつけ

られたまま、再び丘を下り、自動車を置いた所まで歩かされたのです……運転席に腰をおろした時、背中の拳銃が鳴って、明華は死にました。——そうです。台湾からの女スパイが、一人消えたのです……」

「明華がスパイ……そうか。……そうだったのか」

「鴉片ボスのヒモがいるなどというのはウソです。あの女の背後のヒモは、鴉片よりも、もっと厄介です。そんなウソを、情痴に溺れたあなたは、見破ることができなかった。みじめと云おうか、哀れと云おうか……」

「お前は誰だ！」

「明華から、大事な万年筆を取り戻した女です。つまり、あなたの命を、一度は助けた人間です……」

「しかし、お前は、縛られたまま女中部屋に放りこまれて……」

「私たちが厳しく訓練された教程の中に、身体を縛った縄から抜け、また自分で自分を縛る技術があったのを、あなたは忘れたのですか？」

「そ、それでは？……」

「そうです。北京秘密諜報部直属大尉、呉白蘭です」

「ああ！……」

「貿易商として動静を探り、機密情報をつかんだ功績は認めます。しかし、女の誘惑に負けて、それを奪い返される醜態を演じたのは明らかに任務放棄です。ゆるされることではありません」

「呉大尉！……」

「裏切り同志！ 私は、涙をのんで、あなたを射殺します！」

銃口が火をふく。

「わッ！……」

と、両手を上にあげて、張はのけぞる。床にくずれる。十本の指が、虚空をかきむしって悶える。

「呉大尉……最後の……最後の報告を致します……」

苦しい息を吐きながら、張は呉白蘭を見あげる。

「なんです？……」

白蘭は床に膝をついた。

「……呉大尉が、いま持っている書類は、偽物です……」

「え！何だって？……」

「偽の情報を万年筆に詰め、明華に持たせたのです……」

「それでは！」

「……本物は、あの棚のオルゴールの中に、しまっており……」

「そ、それを、どうして早く云ってくれなかったの！ ああ！ 私はたいへんなことをしてしまった！」

「そんなことはいい。早く、早く書類をだして……」

白蘭は棚に駆け寄る。オルゴールを探す。

宝石函になっているフタをあけると、トロイメライの曲が、静かに流れはじめた。

「見えないわ。もっと奥かしら？」

「一番奥の、機械の間に、はさまっているのです……」

云いながら、張の手が、必死に机のひきだしをあける。中の固いものを握る。それをかまえる。

「ダーン！……」

呉白蘭の背中に、轟然と拳銃が鳴った。

「ううっ……」

のけぞった白蘭が、鬼のようなすさまじい形相で、張をふりかえる。

「明華……明華の仇……」

一言つぶやくと、張の息は絶えた。

射ぬかれた白蘭の心臓から、血がジトジト

とひろがっていく。

部屋は、死の静寂……

トロイメライだけが、あまく、やさしく鳴っている……

男性の悩みに

最新の福音

男性器発育不全に悩む方は郵券封入本誌名をお書きの上御手紙下さい。自宅に居乍ら解消の良法スグ御知らせ致します。

兵庫県前ノ庄局区内本条・元祖井上

ハガキで申込みれば現本すぐ送る
代金は本を受取ってからで結構

幸福な結婚は本書から



ヴァン・デル・ヴェルデ著

原価 一四二円

定価 一八〇円

送料 二〇円

世界で一番くわしい性学。夫婦の性医学から性愛の技巧までを図解。奥を赤裸々に説明、結婚生活の深と家庭の幸福をはかるオランダの名医ヴァン・デル・ヴェルデの名著

東京都渋谷区笹塚町一一一〇
株式会社近代社 裏窓係

あじふい

痴人春夢

卵 精 無

なぜ大人になってしまうんだノ 桜ん
ぼの唇とうぶ毛の生えた頬を捨てて…



子 杏 堀

幼女像

俊樹は、汚れた作業ズボンからおが屑を払い落しながら、ぶらりと木工所を出た。屋並が尽きたところの小さな空地に、一固まりの子供が紙芝居を囲んでいた。

赤いベレーをかぶった小男の紙芝居屋が、浪花節のような口調で説明している。黄色い金切り声やドスの利いた悪漢の声を使い分けて進行させる。語り慣れた口調は、通りすがりの大人をも、ちよつと微笑まじりにふり返らせるのだ。

まして、子供達は一心不乱だ。近づいて行く俊樹などには一顧も与えない。

その盲点を利用して、俊樹はぐると回って紙芝居屋の後に立った。子供達の顔が正面から眺められる位置だ。かくれみのを着ているように、今や彼は誰にも見られていない。

ゆつくりと、小さい顔を一つ一つ眺めた。

彼は子供好きといわれていた。しかし、ただ世間でいうところの子供好きではない。

子供の中には、時に彼の求めるものが混っていたのだ。

きょうも……。

彼の視線が止った。

一人の少女だ。

黒い房々した髪が後で一つに束ねられて、丸い白い額がむき出しになっている。眼は黒く澄んでいきいきしている。子供らしい魂がすきとおった水晶体からそのままのぞいているような眼だ。短いスカートから膝頭をむき出してすんなり伸びた足は、生い先の確かさをしのばせる小さな逞ましさだ。

七つか八つか……。飴をしゃぶっているらしく、片頬をブクとりふくらまして、余念なく画面に見とれている。

むろん、俊樹以外の人間から見てもかわい

らしい女の子だと思ふに違ひない。けれど、このかわいらしさは、俊樹にとってはこの世における最高の純粋さ、美しさだった。

彼はポケットから手帳と、ちびた4Bの鉛筆を取り出すと、女の子の顔をスケッチし始めた。スケッチといつても、丸いりんかくを描いて、ぽつとうるんだような黒い眼、棒のような眉、鼻筋の線、小さい二つの鼻の穴を二つの点で代表させる。これだけでいいのだ。

「さあ大変！ 悪漢にさらわれてトランクに入れられたユメ子嬢は、いったいどうなるでありませんか？ あとは明日のお楽しみ！」

子供達ははじけるように口々にさえずりながらちりぢりに帰って行く。

あの女の子も、キャッキャツとはしやぎながらかけて行った。

俊樹はむつつりと唇を結んで木工所へ戻るのだ。

うらなり

彼は、パステルをつかつて一心に描く。

丸い岡が紫と緑にたそがれ、卵の黄味のようにとろりとあたたかい夕日が、岡の端に落

ちかかっている。

岡の手前に子供が二人、夕日を見ている。筒袖を着て、のどに白いものを巻いた腺病

質な男の子、これは俊樹自身だ。

もう一人は目の大きい女の子。お下げの先に真っ赤なりボンをつけて、元禄袖の着物を着ている。

幼い俊樹の幼い恋人、ナオ子だった。

頭のいい、勝気な子で、机を並べている俊樹を、弟のようにかばってくれた。

同じ年だが早生れで体も弱かった俊樹は、すべてにいくじがなくておどおどしていたから、いたずら小僧達の迫害の的だったのを、幼い女王はいつも後にかばってくれたものだ。

われながらくやしい、みじめな幼年期が、この女王あるが故に美しく甘やかされた思い出となっていた。

かわいらしい少女は美しく成長した。

髪の毛は艶を帯びて、肌はきめこまやかなままにしつとりと、白い脂肪が皮下にみちて行く。すんなりした手足が丸みを帯びて来て胸のふくらみはセーラー服の上からもそれと知れるようになる。

「ナオちゃんもめつきり色気が出て来たね」

と、近所の男達の話しているのを耳にした時、少年は齒を食い縛ってかけ出した。

草原を馳けて馳けて馳け回った。

踏みにじったやわらかい青草の上にごろりと寝ころぶと、草の汁と土のしめった匂いがした。

もうおしまいだ！

ナオちゃんはもうおとなの目を引くような普通の女になってしまったんだ！

ジーンと涙がわいて来た。

もう彼女の目は女の目だった。

そして、その目は決して俊樹には向けられなかったのだ。

青白い腺病質の無口な少年、日かげで育ったような弱々しさ……。

そんな彼に、異性としてのまなざしを向ける道理はなかった。

（仕方がないんだ。僕にはナオちゃんを幸福にするような、世間並の能力がないんだから。それに、もうナオちゃんはあんなに変ってしまった……）

それから俊樹は、幼いナオ子に似たおもかげを、幼い女の子に探し続けた。

彼は一心にパステルを塗り重ねる。赤。緑。

そして黒。

.....

そこは、節穴のある板戸だった。

俊樹は、そっと節穴の前にかがんだ。

板戸の中にだれがいるかを、彼は知っていた。知ってはいたが、悪いこととは思わなかった。

いつも兄が入っている時は、その穴から風呂場をのぞいて話しかけたりからかったりして遊んでいたものだ。兄もふざけて、節穴めがけてザブリと湯を浴びせたりした。俊樹はさっと飛びのいて笑う。愉快なゲームだったのだ。

中にいる人は、まだ俊樹に親しい人ではなかった。だが親しくなりたい、かわいがってもらいたい人だった。罪のないいたずらっ気から、その時ものぞいたのだ。

けれど、継母はそう受け取ってくれなかった。来たばかりの美しい、若い母は。

節穴に目を見つけた時、母は激怒した。

湯気に包まれた白いつややかな、母の美しさが眼の底に残っているのに、その母の思いがけない怒りに会って、彼は途方に暮れた。

「こんな恐ろしい子を見たことがない」

憎々しげに云い放つ母の語調から、彼は冷

たい永遠の壁が、彼と母との間に立てられたのを感じた。

母が美しかっただけに、その眼に見抜かれた自分で意識しない自分の醜さが、えぐり出されたように、はつきりと彼につきつけられたのだ。おとなの女の鋭さ、おとなの権威が彼を反撥させない圧力で押えつけた。

その母も、そして父も、今は亡い。

小さい木工所を父から引き継いで、やりくりしながら兄は商業学校を出してくれた。

健康がすぐれない上、引っ込み思案のうなり小僧は、休み休みやつのことで卒業したが、小さい事業所や商店に勤めては見ても長くは勤まらなかった。

結局は兄のところで力のいらぬ仕事を手伝いながら、小づかいをもらっている。

商業を出たら帳簿ぐらいは任せられると、あてにしていた兄も、いっこう彼があてにならないのを知ってがっかりした。

しかし、もともと弟思いの兄だったから、家業を手伝わせてどうやらほかの者と折り合いくよくやっていくれればいいと思うらしかった。

成行まかせに人の与えてくれる環境の中でたいしていじめられもしないで暮せれば、俊

樹はそれで満足だった。

にぶいねずみ色にくすんだ人生に、美少女へのあこがれと画だけが彼の光りだった。

時々、ぶらりと外へ出て画をかくている彼に、渋い顔をしながら兄は、

「何だ、お前の画は。小学生の方がちつとはマシなものを描くぞ。これじゃ人様にも見せられやしない」

と大声でいう。

でも、その底にあたたかいものがあるから俊樹は、ニヤリと笑って描き続ける。

小 心

その俊樹の画が、ふと高名な画家の目に入って、ある雑誌に紹介された。

奇妙な抒情と幻想のあふれた作風に、世人はとまどいしながら心をひかれた。病的な陰影に魅せられる者もあったが、日ごろ画に関心を持たない人々にもうったえた。

母の乳の甘い匂いを、かび臭い物置小屋でのかくれんぼを、遊び疲れて帰るわが家の黄色い電燈のうるみを、そして、おずおずした幼い恋と少女の固い乳房を……。

忘れていた幼年への郷愁をよびさまされたのだった。

俄然、彼の絵は反響を呼んだ。

個展が開かれた。

画集が出され、美術雑誌で論評され、木工所の片隅に人が尋ねて来るようになった。

俊樹はとまどっていた。

俊樹にとっては、相変らず世間はきびしいおとなの集りだったから、一時の気まぐれから醒めた時、前よりも一そう冷たく彼を突放すだろうと思えなかった。

孤独な思いは、ますます画に立てこもらせた。

今までの暮らしを改めることなど思いもよらないが、少し余分の小づかいが手に入るようになったのがうれしかった。

薄暗い、あまり人の来ない時の喫茶店で、コーヒーを飲んでほんやりしていることを覚えた。

こたごたした木工所、地続きの住居にあてがわれた三畳の小べやにはない、おちついた静けさがあった。

喫茶店ロビンは間口が狭かった。あまり明るくないからよかったが、俊樹は人々から見られないようにうつ向いて、あいている席を探す。席があいていない時には、悪いことでもしたように顔赤らめてコソコソと出て来る

のである。

その日は、一つもあいていなかった。

すこすこ帰りかけた俊樹に、

「先生、よろしかったらここへいらっしゃらない？」

呼びかけたのは十七くらいの少女だ。

先生と呼ばれるのには、このごろ少し慣れて来てはいたが、見知らぬ美少女にそう呼ばれると、自分のこととは思えなかった。

「ね、先生、おすわりになってよ」

命令するように、調子を高めながら細い指先を腕に触れてくる。気をはかりかねてどきまぎする彼に、笑いかけるのだ。えくぼがかわいらしい。

見えない糸にたぐられるように、俊樹は向い合ってすわった。

こんな美少女に向うから声をかけられるなんて……生涯ありそうもない幸運にくすぐらわれているようだった。居心地がよさそうで足もとがきまらない不安さ……。

理由のわからない贈り物が高価であればあるだけ、贈り主の真意がわかるまで惑わずにはいられない。

「先生の画に出てくる女の子ね、あたしにそっくりだっていわれるのよ。ね、似てるでしょー」

首をかしげてにっこりする彼女は、そういわれれば目の大きいところは似ていないでもなかった。ほっそりしたきゃしゃな体つきと、勝気そうないきいきした表情は、美しさが頂点に達して熟しきらない、まだ官能を意識しないような清純さだった。

ユミ子

少女はユミ子といった。俊樹が名士(?) になってから二三度雑誌社の人に連れられて見に行ったN劇場で、一度は楽屋へ見学に入ったので、サインをせがまれて当惑したものだ。その時、彼を囲んだダンサーの一人だったのだ。

ユミ子は肖像画を描いてほしいといった。

俊樹は喜んで引き受けた。

日ごろアトリエにしている木工所わきの物置も、すすけた三畳間も、彼女を描く場所にはふさわしくなかった。

近くの林を思いついた。

少女は気まぐれのようにやって来た。

休演中はひまがあるけれども、出番の時は時間の余裕がないのだ。俊樹はいつでもやりかけの事を放り出して肖像にとりかかった。

もつとも、彼はモデルがいらなかったの
ある。ユミ子のイメージはくつきりと胸に描
かれていたから、目の前にいない時の方がむ
しろ鮮明に浮び上ってくるのだ。

だから、ユミ子がいる時はほとんど画は進
まず、ユミ子を眺めながらとりとめもないこ
とを考えている。

それでもやがて画はでき上った。

そのころ、ユミ子は洗いざらい彼に自分の
ことを打ち明けていた。

彼を牽制する意味があるかどうか、恋人の
ことまで話した。

不思議に俊樹は気持を乱されなかった。

目の前にいるこの少女が、口先だけで恋を
しているといっても実感にならないのだ。

桜んぼの唇、うぶ毛の生えた頬、胸も腰も
かすかなふくらみを見せてはいるが、まだ未
熟に固かった。兄のように微笑しながら聞い
ていた。

画ができてからもよく遊びに来た。

せがまれるままに町へ出て映画を見たり、
ちよつとしたものを買ってやつたりした。

俊樹はそれで満足だった。ユミ子の彼に傾
けている信頼は、妹が兄に抱くようなものら
しかった。このままで、ユミ子が一生いてく

れたら……。

その期待は破られるのが当然だった。

だが、時が早過ぎた。

知り合ってから半年もたたないうちに……

ある日ユミ子からの手紙を受け取って、貪
り読んだ俊樹は、蒼い顔で病院へ走った。

使者

「どうってこたアねえよ。あのコとオレはヨ
ロしくやってるんだ。他人がクチバシ入れる
ことはねえだろう」

「今後どうするというんだ。ユミ子は自殺し
かけたんだぞ」

「知らねえよ。うそつけっ、そんなこと……」

チンピラやくざ気取りの青年は、さすがに
ひるんだ目を伏せたが、居直るように低いだ
み声で、

「兄さんはどんな友人だか知らないが、オレ
とユミ子は好きだったんだ。女の子をかわい
がるコツはオレ、よく知ってるんだ。オレは
その点じゃユミ子に後悔はさせてねえつもり
だ。それに、オレ、何もユミ子を捨てるの何
のといってるんじゃないよ」

彼のいうところによれば、ユミ子と彼は、
はじめから将来を誓ったわけではないが、お

互い好き合って仲よくしている。そのうち女
の子は両親がうるさくて、二人の仲をとんで
もないやくざな結びつきだと事ごとにおどし
つけたから、このごろめつきり悩んでいた様
子は様子だった。

しかし、かわいい子にそんなに辛い思いを
させる気はなかった。それが気休めになるな
ら、結婚してやるといったってよかったんだ、
それを、一人でメソメソして清算するの片を
つけるだのと力むから、扱いかねてしばらく
遠ざかっていたまでだ、という。

事もなげな単純さに、俊樹は呆然とした。
いったい、何ということだろう。

彼自身は何の役に立ったんだろうか。

ユミ子は、彼に男のところへ行ってくれと
頼んだ。頼んだことばとはうらはらに、捨て
きれない愛着を伝えていたのを、気がつか
なかった俊樹は何という間抜けなんだ。

のめのめと帰れるか！

この男をはり倒してやりたいと思った。
唇を噛んだ。しかし手はふり上げなかつ
た。

俊樹はのめのめとユミ子のもとへ報告に行
った。

「じゃあ、賢さんは私のこと、捨てるつもり

じゃないのね！」

バツと顔を輝かした娘。目の回りの疲れた表情が瞬時にけしとぶ。

（なぜお前は、死んでしまわなかったんだ……）

フリージャの花瓶の水をとりかえて来ると、白い花の一つ一つに鼻を寄せて、かいで見ている。

「レモンのお汁作って」

甘えた声を出す。俊樹がこしらえて来ると吸いのみを傾けてチュウチュウとうまそうに吸い込み、みち足りた吐息をする。

その幼いしぐさの一つ一つが、俊樹の胸をしめつけた。

（僕はいったい何だ！僕はユミ子をかわいがっている。かわいがってはいけるけれども愛してはいない。いや愛していないといえるだろうか。僕は賢のように愛せないのだ。）

賢の一言は、しかしユミ子をあんなに喜ばせ、希望をとりもどさせた。

僕がユミ子に与えるものだけではすまないのは、よくわかっている。だが、どうすればいいんだ？

僕はするいんだ、卑怯なんだ。

自分の愛する形のままでいてもらいたいと

望んでいるだけで、女が自分についてくるのを期待したって絶対に報われるはずはないんだ。

ユミ子がいっつのまにか一人前の女になって一対になりたがった。それだけの話さ。

僕は傍観者だ。……）

俊樹は、ドアにノックを聞いて、だまっで立ち上った。

（賢！）

やはり賢だった。俊樹はろくに彼の顔も見ずに、目をそらしたまま入れ違いに病室を出た。

めんどり

ユミ子と賢は、安いアパートの一間を借りて同棲した。物固い親達がいいたから、形ばかりの式も上げたらしかった。

キャバレーのバンドでドラムをたたいているといふ賢は、真っ赤なシャツに薄色のズボンといったような姿で時々外で出会った。

結びつきまでの一幕に一役買った俊樹に対してだけは、賢も一目おいた形で、大股に近寄ってはあいさつした。

それから数ヵ月……

俊樹はまた開かれる個展の準備などで、気

ぜわしかった。おかたは人の世話で運ばれるのだが、彼は彼なりにあれこれと気苦労を重ねなければならなかった。大切な作品に人の手の触れられるのも心配だったし、ことに、自分の内心の隠しておきたい部分を描いた作品などは、出そうか出すまいか容易に決断ができなかったのだ。出さなければ数が足りないらしいし、出すとなればせめて順序でも違えて、心を人に読み取られまいと思うのだ。

そんなこんなで、彼が加わると仕事はかどらないといわれて、今はあきらめて木工所の片隅にぼつねんとしている。

そんなある日、突然ユミ子がたずねて来た。

「どうしたの？」

美しく化粧している。目がきらきらしていると聞いたのは、涙だった。

空地を抜けて、小さい林に入る。

「賢さんが、いなくなったの……」

人影が見えない林の中だ。真昼の空は遠く、樹々の間からのぞいている。

女ができて、一月ぐらい前から外泊がちになったのだという。そしてここ一週間帰らないところへ、女からの使いが来て、切口上で

金と手紙をおいて行ったのだ。

「女の人は、バーのマダムなの。金回りがいいから、男をひっかけてあやつるのなんて何でもないので。私にとってはたった一人の人なの……」

くやしそうに語尾を吊り上げて叫ぶと、ううと泣き出した。

まだ少女のままの姿である。

（だからよせばよかったんだ）と軽くいつてやることもできないし、それなら何というべきか、（きっと帰ってくるから心配するな……）か？

空々しい、そんなことがいえるものか。

（あの男のことだ、帰って来たって先のことばかりやしないよ）

それが一番確かな忠告に思えた。

次第に俊樹は途方に暮れて来た。

そこで、思いついただけのことはみんないってみた。

ユミ子は彼の一言ごとに泣き、むせび、怒り、さらに泣いた。

日さしが黄ばんで来た。

彼はもてあましたながらもあわれみで一ぱいだった。

「さ、帰ろうよ。ロビンでお茶でも飲もう」

泣きじゃくりながらユミ子は、体中でいややをした。

その動きが何となくけだるく、どこか変った気配に俊樹は気づいた。

ユミ子は妊娠していたのだ。

それと悟った時、俊樹の中で何かが燃え上った。

とめどもなく狂い出した炎は全身を灼き尽して、脳髓をかけめぐった。

（ああ、やっぱりこの女は、ただの、ふつうの女なんだ！）

醜くふくらんだ体を隠しもせず、のめのめと僕の前に姿を現わすなんて……

いくらあたためても孵らない卵を、それと知りながらあたためていた自分の愚かしさ。

やがては新しい生命になるべく母鶏に抱かれ、いる卵への、無精卵のいわれない嫉妬か。

俊樹はわれを忘れていた。

ユミ子につかみかかった。

しかし彼女は抵抗しなかった。俊樹の指先の殺意には気づかないのか、むしろ俊樹の腕の中へもたれかかって、あどけない口調でささやくのだ。

「俊樹さん。やっぱり、あなたが一番あたしを愛してくれていたのね」

感傷的な甘いことばに、思いがけぬ動作が伴った。

桜んぼのような唇をさし出したのだ。

生れてはじめての感覚にひたりながら、かすかな音を立てて卵の殻が割れて行くのを、

俊樹は人ごとのように感じていた。

ハガキを下さい！

目録を無料で直送します

★あまとりあ社では、皆様にじゅうぶん楽しんでいただける、数多くの単行本を出版しております。

★出版目録を見るだけでも、結構タノシメます。ハガキに、あなたの御住所とお名前を、ハッキリ御記入の上、〃裏窓六月号で見た、目録送れ〃とだけお書きになって、スグお申し込みください！

無料で目録を送ります。

★また、編集についての御希望等も、お知らせいただければ幸いです。

★申し込み先

東京都中野区江古田一〇二三〇二

あまとりあ社

新・本朝若風俗

卯の花くだし

大門 正人

木原 三樹・画

匂う湯屋

ふくよかな香りが、湯殿いっぱいになりたちこめている。

木沢四郎右衛門は、衣を脱ぎかけて、立ちつくした。

「……ふむ、この匂いには覚えがある……」

言葉にならず、胸につぶやくと、皮肉な笑いが、頬をゆがませた。

やがて春も逝こうとする。日の暮れ刻。泉州堺の豪商膳脂屋の、店先きには遠い、湯屋形には、ひそやかに薄暮の気配が訪れはじめていた。

木沢四郎右衛門は、微笑を消すと、直垂の袖を肩からすべらしていった。いく度となく槍ぶすまの下をかいぐり、太刀をふるって鍛えあげてきた屈強な体軀。すでに三十の半ばを越えていた。きびしい明け暮れが、男盛

りの年齢に、渋さといおうか、風格といおうか、頼もしさを備えさせていた。

甘酸っぱいその香りは、引戸で仕切られた蒸風呂にたきこめた香の匂いであつたろう……。当時、室町の末には、蒸気でむされる風呂と、身体を湯にひたす湯屋とが別れていた。密室の湯気に坐して汗を発し、そして、その汗を引違戸で隣合った陸湯に浴して流すのが、定法であつた。そして入湯には、風趣

の粋を凝らすことも……。季節、季節の木の実を、また素麺、魚介を供して、酒をくませる。ときには湯屋形で茶をたてさえしたものだ。その酒肴の世話を、小湯女がした。いずれも十七、八にも満たぬ年頃の女たちだ。垢搔女ともよぶ……。

が、木沢四郎右衛門は、「ただ埃を落し汗を拭うだけでよい——」と、脂屋形における酒肴も小湯女の世話も、固辞したのだった。



木沢四郎右衛門は、和泉の国の守護大名畠山政長の郎党だった。晩春の半日を堺南社の商家を訪れたのも、ただの遊山のためではなかった。運用金一万貫の調達が目적であったのだ。ひと口に一万貫というが、大永八年に傾城局を創設した幣府は洛中の辻々に立って男の袖をひく遊女たちから、一年について十五貫の税を強いた。十五貫は今日で約三万円見当だから、一万貫といえは二千万円にもなるうか……。

午下りの数刻を、木沢四郎右衛門は膳脂屋助次の私室で相対して過した。多くの口を利き交しはしなかった。山水図の水墨画の屏風を置いて、膳脂屋の主は、台子の脇でしずかに茶をたてた。考えているのだった。即時に一万貫の錢を……。豪商といわれながらも、これはひととおりの問題ではなかった。

が、長い沈思の後に、助次はうなずいた。「木沢様、しかとお引受けいたしましょうが、ここ旬日ほどの間をお貸しくだされ」

木沢四郎右衛門は、唐来物の茶碗を静かにおくと、眼顔で応じた。默契が成ったのだ。

★武運一すじの男の前におやかな童子が、香料と湯気を透して息づいているではないか！



「……すでに湯屋の仕度もできておりましようほどこに、ひと風呂おめしくください」

膳脂屋は、はじめて固い表情を崩した。

座をたつと、案内されるままに四郎右衛門は渡り縁を踏んだ。中庭に咲きさかる木蓮の厚い花弁の一枚がポトッと落ちた。

なにを連想したのか、木沢四郎右衛門はニツ——と、一瞬苦い笑を口辺にのぞかせたのは、その時だった。

「主どの、湯はいただが、酒肴の心くばりをなされるでないわ。まして、力かなど不要でござる……」

力カとは湯女のことだ。

「お心うちのほど、膳脂屋とくと心得ております……」

こんどは、膳脂屋の方で、四郎右衛門の言葉に応じて苦笑してみせたのだ——。

応仁の乱のさなかに端を発した、畠山政長と、同じ一族の義就が、それぞれの掌中に権勢を収めようと、相争いはじめて、すでに十年余になった。

八代將軍足利義政の補佐を勤めた畠山持国の実子が政長であり、義就は養子の身であった。政長は摂津に拠り、義就は河内の国に陣

をおいた。その一門同族の争闘の舞台は、山城を犯し、ついに三十六人衆を指揮者に国人衆の一揆により排斥された。山城の国一揆がそれだ。その統治は明応五年まで保たれはしたが、畠山一族は堺に移って、前にもました激しい鎬を削りはじめた。明応二年に敗戦をみた畠山政長の子息尚順は、紀州に退いたが根来寺の僧兵を頼んで、捲土重来を期していたのだ。あくる明応三年の歳旦、畠山尚順は大挙して堺に軍を進めて、相手方の義豊を潰滅し、和泉の国をとりもどした。

が、合戦にともない資金、軍資金の必要に逆られたのだ。財源といえば、堺の商人に賦課するより手はない。尚順は、その示威工作として、堺の南北二社の近辺に放火をしたくらいだ。

堺の豪商は、また、難を避けようと警固自衛の為に、牢人者を擁して備えた。

木下四郎右衛門が、このままでは軍用金賦課も徒勞に終ると、その調達かたを自ら買ってでたのだった。

「木蓮の花にも似た、湯に焚きこめた香の甘きかくわい……。まさかに、わしの心をば蕩かそうとでもするか——」

幅三尺に、丈五尺五寺の湯船に身体をひたした木沢四郎右衛門は、背を三寸ほどの縁にもたせかけて、眼を閉じた。

いましがた、薄暮に散っていった木蓮の厚い肉をもった花弁の白さが、思いかえされてくる。じいっと閉じた瞼の裏側で、花弁の白さが、一人の女性の姿へと変っていった。

その時——湯屋の戸口が、しのびやかにあいた。

外氣の流れこむ気配に、木沢四郎右衛門は底の浅い湯船に、サツと身を起していた。

——まさか、膳脂屋ともあろう人が、素裸の折につけいって牢人者を仕向けようとは、油断なく身構えた四郎右衛門は、うすらいだ湯気をへだてて、意外な人影を認めた……。

湯けむり慕情

「背など、お流しいたしましょう……」

敷居ぎわに、膝を折ってにじりよってきたのは、年端もゆかない童子だった。

渦巻きたゆたう湯気を透しても、その童子が、面を首筋のあたりにまで、濃い化粧で粧っているのが、見てとれた。

剃り落した眉、明より入来したとおぼしき白粉を厚く塗りこめて、格子を洩れる黄昏の

光のせいか、唇にさした口紅が、鬱金の、とき緑の色にさえ光った。

身構えたまま、木沢四郎右衛門は、ハッ……と、眼を見張った。まるで人形の如き童子——そして、すぐには、返す言葉が、唇をついてでてこなかった。

それが、心の隙となった。

童子は、つ、つ……と、湯屋のなかに身体をすすめてきたのだ。

四郎右衛門は、その童子のもつ艶美さに、心を奪われていた。

「わらわは、織丸と称ばれております。臙脂屋の主さまからの仰せで、こなたへおさりました故……」

あとは、白面のなかにつぶらな、漆黒な瞳をうるませて、じいっと四郎右衛門を凝視してくるのだ。

「うむ、おのれが背を流してもらおうか……なにせ、うちつづく戦陣の明け暮れとて、土埃に汗や脂がこびりついてもおろうぞ。小柄で掻き落すがよいわい……」

四郎右衛門は、ザブリと湯船をでると、織丸に背を向けて、目のつんだ簀の子に、どっかと膝を組んで坐したのだった。木沢四郎右衛門が、せいっぱいの挙措動作であった。

しずかに瞼を閉じる。

細長を脱ぎ、奴袴の膝の辺をたくしあげるのか、衣擦れの音が、ほのかにした。

織丸が真実、刺客として懷に短刀を秘めていても、背をみせた四郎右衛門には、不覚をとらない自信があった。

が、織丸は素足になって、湯屋に足をすずめてきたが、刺客としての、意志はないようだった。

布袋をもって、四郎右衛門の背を流しはじめた。手柔かにもみあげ、もみさげるようにした、手馴れた指の用いかに、四郎右衛門はいつかうっとりとした境地に陥っていた。明より渡りきたったものか、湯気に溶けこんだ甘い香りが四郎右衛門の鼻をついた。

ふと木沢四郎右衛門は、脊を流す艶冶な童子を忘れた。脊をもんでもらいながら、ところと一歳ほど前の出来事を想いだしていた——。

かねがね木沢四郎右衛門は、ふとしたことを端緒として臙脂屋の主と昵懇の間柄であった。その時はなにげなく、戦陣の余暇をかりて臙脂屋へ一タ、遊んだものである。折悪しく主は不在であった。彼四郎右衛門は用人に

進められるまま、酒肴にあずかったことがある。

ほのかに微薰を帯びて厠に立った。

酒を多分にきこし召していた四郎右衛門は渡り縁を伝っていきながら、ハッと身をすくませた。

今宵と同じく木蓮の花が、いまにもくずれんとして咲き盛っている頃のことである。

思わず、四郎右衛門は姿勢を正し、足音を忍ばせ、中庭を隔ててのぞめる一室に、眼を見はったものである。ほの暗くやがて暮れようとしている頃あい。

その一室に認めたのは、かねて顔見知りの臙脂屋の娘みち女の姿だった。束髪の頭を、床におしつけるようにして、優男ともつれあっている肢態であった。不義の情景が、薄暮の光を通して四郎右衛門の視野に、ありありと映ったのである。

四郎右衛門は音もさせずに、渡り縁の柱の陰に身をかくした。相手の男が、都落ちした貧しき公卿であることを知っていた。

臙脂屋の娘みち女は同じく堺で交易を業とする商家に嫁いでいたが、たまたまみち女の夫が薬種を求めるために、遣明船に同乗して家をあけていた。

当時、明に向う船は、帆を解き帰着するまで二年三年の月日を閲するのが、常であつた。夫の不在中、実家の臙脂屋に戻っていた娘みち女は、洛中を離れてそこに仮寓する公卿、なんでも樋口小路に住いたという優男に逢つた。

もう一年有半にわたる孤閨の寥、それに明に渡っていった夫はどちらかというところ、赫ら顔の醜男である。強壯の体軀を備えてはいるものの雅の心は、さらさらない。

それにひきくらべて、樋口小路の若い公達は、窮逆の身とはいへ、茶に、たて花に、連歌などの趣味も豊かで、そのたおやかな立居振舞いにすっかり魅せられてしまったものか……。

木沢四郎右衛門は臙脂屋の主に向つて、「主どの、そなたの業を保つていかれるならば、男か娘ごか……。いずれにしても犠牲を出さずばすみませんぞ……」

と、諫言した。

二日おいた夜陰——四郎右衛門は、南荘の米倉近い岸辺において、臙脂屋の娘を斬つた。息の根の絶えたことを確かめると、その死骸を暗い堀に蹴落したのだった。

人眼を忍んで立ちもどり、臙脂屋の裏木戸

をくぐると、湯屋の仕度がしてあつた。四郎右衛門の身体に残る、血の匂いを流すため、臙脂屋助次の心遣いである。

その折も人気払いをした湯屋に、唐来ものの香が焚き込めてあつたものだ。

木沢四郎右衛門は、しらじらと化粧した童子織丸に肩を揉ませながら、その時のことを思いおこしていた。

臙脂屋はただの寛容さから若公卿を仮寓させていたわけではなかった。明より届いた薬種、粧具を内裏へ売りこまんがためである。一貫した商魂が、実の娘を犠牲にたてたのである。

その一事が、木沢四郎右衛門に、この男ならば軍用金の調達に応じるだろう——という確信を持たせた。

その頃、畠山一門の同族争いの軍用金供与を拒否したために、放火に逢い、商家の主は主で非情の刃に倒されたためしも、十指をこえていた。木沢四郎右衛門は畠山尚順の軍用金、一万貫の代償として臙脂屋の商を護ることを約していた。

黄昏の気が、ひととき濃い。

四郎右衛門の脊を揉み終ると織丸は、手桶に汲みこんだ湯を、くり返しくり返し逞ましく筋肉の盛りあがった脊にそそぎかけた。飛沫が散った。

「そなた、衣が濡れはせぬか……」

四郎右衛門は、頬をほころばせて、はじめて頭をめぐらした。

「ほれみい。そのように濡れておるわ。そのうえ、夜氣にあたつては風邪などひくぞよ」

「ほんに、寒うござりまする」

四郎右衛門がめぐらした、視線のすぐ傍で答えるように織丸が笑い返した。

「お武家さま、わらわも、湯にひたつて、温たまりとうござりまする……」

咲き盛る卯の花が、風に揺られて散り敷くような、さわやかな笑顔であつた……。

かげろふの涙

翌日、木沢四郎右衛門は堺を去つた。

高師浜にそつて、道を南にとつた。

午後の陽に波の面は、きらきらと輝き、淡路島の島影の向うに、層をなした雲が、もはや夏のおとずれを示している。

木沢四郎右衛門の後に、織丸がつき従つていた。臙脂屋の主から、こまごまとしたお側



の用など申しつけられるがよい——と贈られたものである。

三里ほどの道程を、一気に歩きつづけてきた。汗ばむほどの陽気のよさ。

「喉がかわきはせぬか……」

手の甲をもって、額の汗を拭うと木沢四郎右衛門は、織丸を振り返った。

「そのあたりの漁夫の苦などうて、水などもろうてまいりましたまうか……」

じつと四郎右衛門の面を見上げてくる、少年のまなざし——。夜とは異って、うっすらと刷いた、白粉を通して紅潮した頬が美しい。

見つめてくる視線も

昨夜あったことが嘘のように清々しく、澄んだ色帯びている。

四郎右衛門は、ふと、気持がとまどうのを覚えた。

もう、ここ三年この方、彼は女色を断っていた。

四郎右衛門とて畠山將軍の、郎等を引き連れて、相手万の示威のために諸所に、放火を下知して廻ったためしがないわけではない。

しかし、機会を眼の前にしながら、家を追いたてられ、囚虜となった女たちに、指一本触れたことはない。また堺の町を訪れても市の町、湯屋町にある茶屋にあら、橘女と呼ばれるあそび女を相手に過したこともなかった。

判然とした理由があつてのことではない。武運ひと脇に、おのれの人生を賭けて、異性を近づけることが、いっしか彼の禁忌になっていたのだ。

それを察知して四郎右衛門に、美麗な童子を差し出した、臍脂屋の主の心遣い。

海からの微風が、織丸の身体から発するかぐわしき香をのせて、四郎右衛門の臭覚を刺戟した。

細長の衣に焚きこんだ香の匂いか……それ

とも、面から首筋へと装った白粉の香か。

いかぬ、気迷うてはならぬわい——。

四郎右衛門は胸のうちにつぶやいて、つと織丸の面から視線をそらした。

四郎右衛門の視線が、織丸の胸のあたりにいつて止まると、厳しく光った。細長の袖でくるむようにして、織丸が胸に抱えている文宮、その中には軍用金としての錢一万貫を調達する、誓文書が収められているのだ。

四郎右衛門は、役目の大事を想った。

「道はいまだ半ばじゃ、先を急ぐぞ」

つきはなすようにいうと、和泉大津の岬を右にのぞんで、信太森へと足を向けていった。陽のまだ高いうちは、新緑に覆われた樹間の道をえらび、昼夜をとわず歩きつづけて、日根野の里へ達しようという心算を立てていた。

和泉に近い紀伊の国、吉野川の北岸にある根来寺の僧兵どもが、畠山尚順に呼応して葛城の峰を越え、屯ろしているはずであった。

樹間にはいつて次第に道はのほりとなる。

ささやかな丘陵の曲り角にさしかかると、木沢四郎右衛門は、ひた、と足をとめた。踵をかえすと、木の間ごしにのぞめる海原へと視線を投げた。

堺から深い出入りもなく続く汀の線が、大津の岬で切れて、和泉灘へと移る。その地勢を四郎右衛門はしかと、胸にとめた。

五日後の夜、膳脂屋助次は、軍用金五百貫を、海路をもって大津の岬へつけ、引き渡すことになっていた。

四郎右衛門は畠山の郎等、それに合わせて根来寺の僧兵百はいる、と考えこんでいた。「なにを眺めておさりますか……?」

織丸は四郎右衛門の傍に身を寄せてきた。「うむ、なんの、そちの知るところではないわ」

四郎右衛門は首を左右に振った。そして、きつく唇をむすび、渋い表情になると樹間に向って足を進めた。

年端もいかぬ織丸の身をいたわって陽をさけ、信太森へと迂路をとったわけではない。服装を庶民の姿になし、いりこんできている足輕間者の眼をさけ、いかにして膳脂屋の供与した軍用金を、無事に運びおおせるかに腐心していた。

森の奥深くと足を早めていきながら、文宮を抱いてつき従う童子の存在が邪魔になりはせぬか——という憂慮が、四郎右衛門の心をかすめて過ぎた。

この童子は真実、おのれに惹かれて従ってくるのか、それとも……ただひたすらに膳脂屋の主のいうなりになっているのか——。

重苦しいわだかまりを抱いたまま、さらに小半時も、歩いた頃だった。

樹立ちが切れて、低い丘のなだらかな陵線が、豁然として眼の前に展けてきた。

「織丸とやら、暫時、足を休めて昼餉の飯など使おうかの……」

四郎右衛門は、おだやかな表情に返って、足を停めた。とはいっても、眼の配り様に、いささかの油断もない。

「行く手に、人の気配がする。見てみい、あれを……」

ゆるやかな丘の傾斜の向うに、一条の煙が澄みきった午下の天空へと、陽炎のようにたちほっている。

「まあ、よい。ともあれ腹を拵えることじゃ……」

と、四郎右衛門は道の端に、どっかと腰を据えた。

「織丸、あの煙をなんと心得るかな……?」
「は、はい。おそらくは南都（奈良）に由緒あるお方が、野だての茶を喫しておられるかと存じます……」

「ふむ、それならばよいがの……」

春草の上に膝を崩して、にじり寄る織丸。

が、四郎右衛門は、じっと煙に眼を凝らしていた。

「……風流人の、ただ好趣にまかせた点茶の遊びならよいが……」

呟くように口洩らした四郎右衛門は、野だてを装っての、義就がたの間者という、疑念をもっていたのだ……。

「わたくしめが、様子を見てまいりましょうか……。それに、齋（食事）のあとの湯など乞うて参りまする」

たちあがった織丸を、木沢四郎右衛門が、きびしく遮った。

「待て。わしがゆく。そなたは、ついてくるがよい！」

腰に佩した太刀を改めると、四郎右衛門は隙のない足どりで、丘の小路を踏みだした。数間もいったところで、ふと、足をゆるめると面を前に向けたまま、

「織丸、そちの生国は、大和の国でもあるのか……？」

その語気は険しさを含んでいた。

「いえ、異います。はるか西国の備後にて、道の端に置き捨てられてあった赤児であった

わらわを、臘脂屋さまが、お拾いになられたとか聞いております……」

四郎右衛門は、その言葉が耳に入らないかのように、応えも、うなずきもしなかった。まして振返ろうともしない。

もし、その時、首をめぐらしてみたならば織丸の面上に、狼狽の気が漂っているのを認めたことであつたらう……。

野だての人

若草の萌えさかる丘の巒をこえると、木沢四郎右衛門は足を停めた。

三坪ばかり、平坦をなした鬼芝の窪みに、ふすべ茶湯の釜を据えて、粗朶を手にした道服姿の男が、手を休めて静かに、四郎右衛門を見あげてよこした。四十余りの、精悍な顔をしている。

眼と眼が合った。キラ……と、火花を散らすような一瞬――。

だが、道服姿の男は、視線をはずすと、手にした粗朶を釜の下に投げ入れた。

「遠慮めさるな。一服進ぜましょう……」

男は空いた掌で、場所を指し示しながら、皮肉ともとれる微笑を浮かべた。

「なんぞ御懸念のことでもあるのかの……」

それがしは、堺にて珠光さまに茶の道を習うた者。誉田屋宗宅にておさる。南都に召されてまいる途すがら、しばし野がけを楽しんでおりますまでじゃ」

「それがしは、畠山尚順に仕える者……」

四郎右衛門が、つたつたまま名乗ろうとしたときだった。

「……存じておりまするわ。臘脂屋どのと、かねがね御昵懇の木沢さまにてござりましょう」

誉田屋宗宅は、からからと乾いた声で笑ったものだった。

「……御推察どおりじゃ。大和の国へ向うには、河内、すなわち御身の敵方の地を過ぎて参る。が、それがし畠山御一族の争いの、いずれにも加担いたす者ではおさらぬ。相逢う者のすべてが、敵であり、また味方でもありませんようかな……。御安心めされい。そして一服、心気を憩われるがよいわ」

宗宅の言葉に、いつわりはなかったらう。そして、一種、人生の諸事を行雲流水と諦めきった虚無の匂いがあった。

「さ、湯もたぎってまいった様子。おう、お連れのかたがおさったか。麗わしく粧いつくされた童子にておさるな……」



四郎右衛門の身体越しに、織丸の上へ注ぎかけた宗宅の眼が、なにを思ったか、ギラッと光った。

しかし、その見咎めるような眼の輝きを消すと、表情のない落ちついた顔になって茶柄杓を手にした。

湯を唐物の茶碗にそそぎながら、独り言するように呟いた。

「師の珠光さまの言葉に——藁屋二名馬繫ギ

タルガヨシ——というのがおさる。木沢さま。濃い茶を喫して、心気の曇りを払われることでござりまするな……」

「ほほう。これはまた、禅問、公案にも似たこと……」

四郎右衛門が、誉田屋宗宅の真意を図ろうとじいっと視線を定めた。

ふた膝ほど間を置いて端坐した織丸の面に眼に、周章の色が、再度走った。

野がけの釜の前に坐って、やがて半刻がたとうとしていた。

「さて、このあたりで、お別れといたしますかな。道具を始末いたす水が無いわ。そうじや、その童子に、泉の水を汲んできてもらいましょうかな……」

織丸が竹筒を携えて崖をくだっていった。

と、誉田屋宗宅が、キッと鋭い眼を、木沢四郎右衛門に向けてきた。

「木沢さま。色道の愚は、女犯も衆道も同じことでおざりまするわ……。堺にてせっかく調達の軍用金も、無に終わりまするぞ」

「な、なんと……。そこもとはいかようにして、その事を知っておられるのか？」

「現世の欲も投げて、心を静かに、時の流れ人の移り変りを眺めておりますればじゃ。いくの国境も心おきなく飛び交う小鳥と同じこと、無心には、なにもかも聴えてまいりする。それ、いまの童子が坐してあった後にある文篋を開いてみられるがよい……」

四郎右衛門は、片膝たてると手早く文篋の紐を解いた。その蓋に手がかかる。

四郎右衛門と、誉田屋宗宅の、四つの眼が文篋に注がれた。

蓋が開かれた。黒漆を塗った底が、天日に

さらしだされた。無いのだ。臘脂屋の主が、自らしたためた錢一万貫調達の誓文書。畠山尚順宛の、親書が消えているのだった。

「ハ、ハハッ……。その書状は、あの童子の肌身に移っておりましょうぞ。油断でしたな木沢さま……」

「うぬ。怪しいとは思っておったが……」

すつくと立ちあがった四郎右衛門に、

「さ、崖下の泉に、行ってみなされ。あの童子は、あるいは、ここへ戻ってまいらぬかも知れませぬぞ……」

と、宗宅が声をかけた。冷く、抑揚のない語調であった。

「……では、このまま失礼いたす。無礼の段おゆるしめされい」

「なんの……。だが、お忘れ召さるな。わたしはな、木沢さまに味方だていたしたのではござらぬ。ただ、心を無にしての直覚、それを驗してみただけのこと……」

四郎右衛門は、無言で一礼した。そして、空の文宮を鷲掴みにすると、萌えさかる草を踏み碎いて、崖の斜面を走り降りていった。

卯の花くだし

たけ高くそびえたつ崖下の樹間に、織丸の

姿はなかった。

木沢四郎右衛門は、心を配って湧水の畔の湿地に足跡を探った。湧水は、地面のくぼみからくぼみをと伝って、小さな沼沢をつくっている。足跡はその縁で絶たれていた。しかも、水辺の芹が乱れて、赤土がむきだしになっている。水面には、竹の筒と草履の片足が浮いていた。それが、織丸の動転した心情を物語っていた。

「たわけ者めがッ！」

木沢四郎右衛門は、水面に吐きだすようにいった。おのれへの怒りをもこめてである。その声音が、下枯の若葉を、地上の草の葉末を、そよとも揺がさぬ深い樹間を縫って、遠ざかり消えていった。

その後に、一層重い静寂がかえってきた。

織丸は、敵方畠山義就に通ずる者であったのか？ また、それとも軍用金一万貫の賦課から脱がれようとした、臘脂屋の老獺な才覚によるものだったろうか——。木沢四郎右衛門は、水辺に佇みつくして、深い疑惧に襲われたのだった。

織丸の土にまみれ、沢の水に濡れそぼれた姿を、四郎右衛門が見出したのは、すでに晩

春の黄昏が忍びよる森のはずれであった。

それも織丸一人ではなかった。幹の太い樹のかげに、ひそむようにして、織丸の傍にいるのは一見牢人と分る風態の男だった。

二人の前に、木沢四郎右衛門は、ぬっと立ちあがったとき、彼の手には、鞘を払われた太刀が、しっかと握られていた。

「うぬッ！」

牢人態の男が、四郎右衛門の姿を認めて、パツととびすさった。

が、その足は、地を踏むことなく、数歩、泳いでとまった。

呻きのかわりに、唇の端から赤黒い血を吐いて、どうと打倒れたのだ。つづいて、歪めた面の、鼻梁から下顎へかけて、プツ、と血潮が吹きだした。

飛びすさる瞬間に、四郎右衛門の白刃が、力いっぱい走っていたのだ。

「やはりそうか。臘脂屋の胸のうちは、これで読めたというものじゃ……」

草に、その体軀を斜めに横たえてこと切れしている牢人者の顔を、四郎右衛門は知っていた。臘脂屋が、その商いを保持する為に、何人か擁している警固の傭い牢人の一人であったのだ。

四郎右衛門が眼を移した。そこには、おびえきった織丸がいた。

沼のほとりに足をとられて、ころげながらも、胸から上は水にひたらずにすんだものとみえた。多少、髪に乱れはあったが、白粉で粧った面は、すこしも損なわれていない。

泥と水に汚れた小袖、ただおびえきった美しい面が、かえって痛々しい艶治さだった。

四郎右衛門は、頬をひきつらせて太刀を腰に収めた。

「織丸、起つのじゃ。この空身の文宮をもつて、歩くのじゃ。よいか。もと来た道をな……」

斬られない——と、覚ると織丸は、よろめく足で、たちかけて、がばとそなたおやかな身体を、木沢四郎右衛門の胸になげてきた。

「恐しゅうおさります！」

四郎右衛門は答えなかった。唇を噛んで、すぐ眼の下にある美形の面を見おろしていた。

ふうっと、香料とさわやかな肌の匂いがいりまじって、四郎右衛門の鼻をかすめる。四郎右衛門は、ぐいと織丸の襟もとを掴んで押しやると、

「行け！ 堺へと、戻るのじゃ！」

と、吐きだすように言った。

「いえ、戻ることは許されませぬ。お願いでござりまする。このまま四郎右衛門さまの御手をもって、御成敗くだされたく存じます」
織丸は、四郎右衛門の手首を握りしめて、すがるように叫んだ。

「たとえ、堺に戻りましても、待ちうけておりまするのは……、死とさだめられております。いやです。どうせのこと、死ぬるならば、あなたさまの御手にかかりとうござります……」

「うむ……」

四郎右衛門は、哀願する織丸の眼を、面を喰い入るように見いった。いつわりはない。

四郎右衛門は唇を、いっそう強く噛んだ。

「ようし、わかった。おのれから身を離すのじゃ！」

「は、はい……」

織丸の声が終りきらぬうちに、四郎右衛門の太刀が、シュツと薄暮のしじまを横に薙いでいた。

四郎右衛門の太刀尖は、織丸の小袖を裂き心の臓を断ち切っていた。

刹那のことであった。

草の上に、膝を、それから腰を崩していっ

た織丸の面に、苦悶の情は、微塵もかげつてはいなかった。

「哀れな奴めが……」

木沢四郎右衛門は、おのれの直垂の端で、ゆっくりと太刀を拭った。

織丸の亡骸を、樹の根もとの土を掘り、葬り終ったときには、もう、ながい晩春の日も暮れきっていた。

木沢四郎右衛門は、織丸の血を吸いこんだ誓文書を文宮に収めると、小袖の端をちぎって包みこんだ。

若草の葉末に二度、三度、足を滑らせながら、崖を走りのぼり、丘の腹を辿る道に出ると、木沢四郎右衛門は、飛ぶようにして高師浜への方角を急いでいった。

大津の岬にいれば、馬を求めるつもりでいた。三里の道を一気に駆けて、堺に入る。そして、織丸の血に濡れた誓文書を、臘脂屋の前にたたきつけてやる——。

木沢四郎右衛門は、唇を噛んで、小走りに走りつつける。

宵闇のなかで、道を覆う草が、さらさらと風もないのに揺れた。

(完)

船蛮南館女

絵草紙

歌川大雅 画と文

①「わっ、何をする」

「助けてくれーッ」

大波のように、すさまじい叫び声が、せまい小屋の中にまき起った。その大波のしぶきみたいに白く光ったものが、キラキラと小屋の中へなだれ込んだ。

刀だ、槍だ。

小屋の中の人足どもめがけ、ドッと襲いかかった。

「殿の命令だ、黙って死ね！」

侍たちが、わめきながら殺到して来たのだ。

ザーッと、血潮がたちまち壁へハネ飛びくだけ散った。まるで地獄の火のように赤く不気味な血の色だった。ハダカ蠟燭が消えて真ッ暗な中になまぐさい風が渦をまいた。侍たちは殿の命令と叫びながら面白そうに人足どもを斬って行く。

②「助けてくれ、さんざん働いたオレ達を斬るなんて、そんな殿様ってあるものか！」

一人の人足が、小屋の外へ走り出した。運のよい男なのだろう、白刃の下をくぐってひた走りに逃げる。

「おお！」

人足は叫んだ。行く手に提灯に取りまかれた女駕籠が見えたからだ。

「もしお助け下せえッ」

人足は女駕籠の前へ身を投げ出した。

駕籠の戸がサラリと開いた。切り髪の女性の白い顔。

「ああ楽光院さまだ。お情深かった先の殿様のお部屋さまだ。どうかお助けを！」人足は頭をすりつけた。

「見苦しい、斬り捨てよ」女の唇は冷たく動いた。

「見苦しい、斬り捨てよ」女の唇は冷たく動いた。



③「左京、あの騒ぎは何だ」

若き城主松浦老岐守は、家老左京をかえりみて眉をひそめた。

「人間の悲鳴ではないか」

左京は平然と、

「はい、この洞窟の工事にたずさわった人足どもを打ちとっておりまする」

「なぜ、そのようなことを」

若き城主の眉は、いよいよ暗くもった。

ここは、生月島の海岸である。

「下郎の口はさがなきもの、このたびの南蛮船改造の件がもしも幕府の耳に入らばお家の一大事、お咎めを受けるかも知れませぬ。故に一人残らず打ちとらせおります。もはや御心配はありませぬ」

左京はジッと老岐守の目をのぞいて、ニヤリとした。



④時代

は徳川

の中期天

下泰平の世

だ。父の宗勝

の急死で、若くし

て平戸の城主になった老

岐守は、さっそく許嫁の豊後中山藩岡

の城の息女藤姫の輿入を望んだ。

だが藤姫から（たとえ許嫁とは申せ

まだ親しく言葉すら交したことの無い

間、これで夫婦となっても円満にやっ

て行けるかどうか疑問です。そこで挙

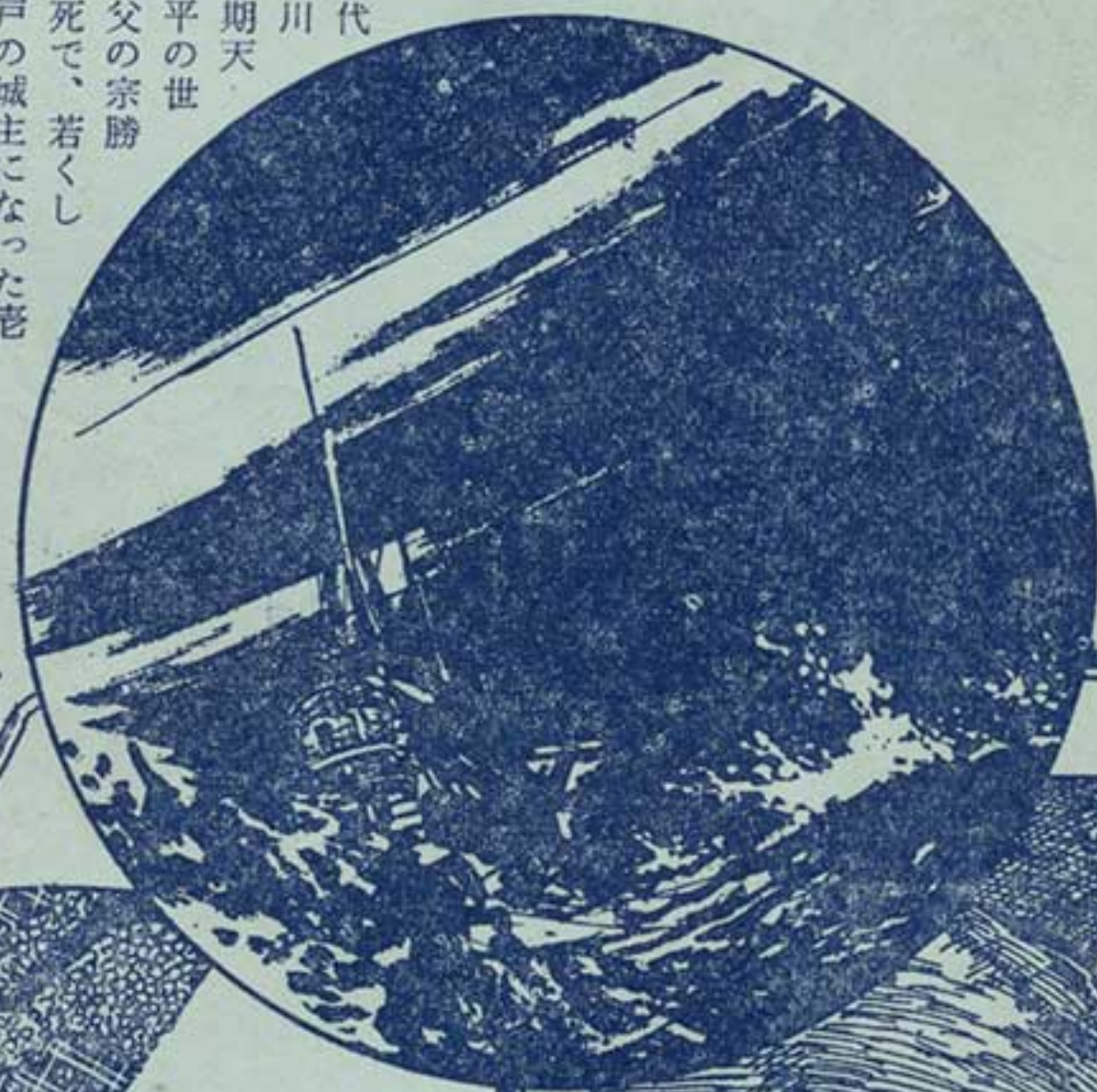
式の前に一度お逢いしてお互いの心を

知っておきたい」と云う手紙が来た。

「もともとだ。是非、あなたが私の城

へ遊びに来られることを望んでいる」

老岐守は、そう返事した。



⑤「何かすばらしいもてなしをしてやろう」

老岐守が、そう考えている折、ちょうどシメタ！と

云うような事件が起った。

それは、ある嵐の夜——この生月島へ南蛮船が漂着し

たのだ。烈しい暴風雨と闘ったのであろう、マストは吹

き飛ばされ、一人の船員もいない惨憺たる難破船だ。

「これは、よいものが手にはいった！」

老岐守は、この船を島の洞窟の中へ引き入れさせた。

「左京、私は夢みる如き南蛮の情趣が好きだ。ちよう

どよい、花嫁にも見せてやろう。さっそくこの船

を改造して南蛮の館とするのだ。立派に飾り、

竜宮城のようにしよう。私がどれほど美に対

して熱心な心を持っているか、藤姫に見せる

のだ」

老岐守は、こう然と云った。

「ふふふ、それは一段と面白うござります」

左京は、なぜか意味ありげな笑いを、その

太った頬に浮べた。

実は、胸に陰謀があったのだ。





⑥「この船には、七つの部屋がある、一部屋ごとに黄、赤、青と違った色をぬって飾り、さながら虹の國に遊ぶの心地を味わいたい、どうだ」
洞窟の中へ据えた南蛮船の中を歩きながら、竜崎守は云った。

「ホホホ、すばらしい御趣向。さぞ花嫁さまもお喜びなさいましょう」

後から口をはさんだのは、夜中ながら完成したこの南蛮船を見物に来た楽光院だ。たった今、人足の斬られる所を見たとは思えぬ落ちつきぶりである。

「その一部屋ごとに、よりすぐった美女をおき、舞をまわせるのも一興かと存じますか」

と、左京も知恵をつける。

竜崎守は、この太って醜い一番家老の厚い唇から、こんな名案が出るのは奇妙だと、苦笑しながら、

「ははは、そちはなかなかの軍師だ」

「ハハハ、裸女がよろしゅうござりますぞ。殿様はお若い、まして美しき花嫁をむかえられる御身、虹の如き南蛮船にて裸女の乱舞を見たなら、一そう若々しさに満ちあふれ、藤姫さまを満足させるに相違ありませんね」
「それこそ、竜宮城の美しさ！」と楽光院も口を添えた



⑦「ハハハ、うまく行きそうじゃ」と左京。

「殿とは申せ、あんな青い子供、町のたわれ女どもを船へ乗せ、尻ふり踊りでウンとたぶらかしてやるがよい」
これは、楽光院だ。左京と仲むつまじく酒などくみ交している。ここは彼女が殊勝げに引きこもっている城下はずれの庵室の間。

「殿が殺伐荒淫の暴君だと云いふらしてあるから、藤姫も恐れをなして来ぬのだろうが、婚約の儀が進み、そのうち嫡子でもできたら面倒だ。今のうちに殿を骨ぬきにしてやるのが得策じゃ、そして漂着した南蛮船を洞窟へかくした事を公儀へ訴えれば隠居させられるにきまっている。そこでワシとそなたの間にできた烏丸を城主にしようとは、何とうまい計略だの」「ほんに、もうお城はわれらの物も同様、アア早く大願成就したいのウ」

「イヤ、先君の急死についてまだ幕府の目が光っている昨今、うっかりはできぬ。いつ隠密が忍び込むかわからぬ。油断は禁物じゃ」
声は小さいが、たいへんな事を相談している。



⑧ 隠密！ 將軍は直屬のスパイを使って、各藩の秘密をさぐらせる。謀叛を防ぐためと、大名の落度を探り罰を与え領地を取り上げたりするのだ。だからどの大名も自分達の身を守るには隠密を捕え、殺してしまう事だ。スパイと大名の戦いは苛酷残忍、人目につかぬが火の出る如きすさまじさである。男も女も子供も親も苛責なき闘争であった。



⑨ 左京と楽光院の如きは先君に一服もって急死させ、さらに若き城主を悪計をもって追放しようとするのだから、隠密にはいり込まれたら今までの苦心も水の泡どころか首が飛ぶ。左京が壁に耳ありと恐れるのも無理もない。

「ホホホ、左京、男と云うものは案外臆病なもの、現在殿にすらわからぬ事が、何で、外からモグリ込んだ鼠のごとき隠密にわかるものか。そんな話は、せつかくのお酒がましくなるぞえ」

楽光院は、事もなげに笑った。

「なるほど、これは楽光院さまのおおせの通りじゃ、ハハハ、こんな話が肴では百薬の長も水も同然」

「酌をしてつかわすほどに、もっと近う来やるがよい」

ものうげに銚子を取り上げた楽光院。髪は切ってもまだ三十二、三。色香がブンブンと艶めいて匂う女盛りだ。顔のシワはのびしたが左京、目尻のシワはいやらしいまでに深くなった。

どちらからともなく、いつしか二人は体をすりよせ、ふふと笑った。

と、この座敷の床下に、カサリと動いた一個の黒影。白い顔がくらやみの中に浮いた。

「やっぱり来てよかった。たくらみおるワ」

かすかにつぶやいた声は、どうやら女。

「左京、今夜は帰ることはならぬぞえ」楽光院の淫らな声が、床下の冷たい空気をくすぐった……。



⑩ その翌朝、平戸の城下へ旅役者の群が来た。

「おっ、こりやスゲエ女がいるじゃねえか」

町の人々が目をそばだてたが、一座にまじって天女のような女役者が一人いたのだ。

⑪ 「うーむ、成程町の噂さの通りじゃ。江戸や京へ行っても一二を競う美しさだ。今夜わが邸へあの女役者をつれて参れ」

左京は家来に命令した。



⑫「これは御家老さま。お召しいただきました。女役者花之助にござります。」
何とぞ、ごひいきに、あずかりとう存じます」



⑬「うむ、可愛らしき女。近う寄れ、盃をとらすぞ」
「アイ。」
でも私ごときいやしき女が、お側に参っては、御身のけがれではござんせんか」
花之助ははじらいながらもにっこりと左京にすり寄った。
左京は相好を崩してわれを忘れる。
元来、女には目のない男。



⑭「どうじゃ。そちもいつまで旅役者をしていても何かと不自由であらう。わしの云う事きかぬか。望みの品を与え榮耀栄華のくらしをさせてつかわすぞ。フフフ、可愛い唇じゃ。そのふくらとした頬はお前の肌の柔かさを物語っておるわい。いつまでもかわいがってやるぞ」
左京は花之助の懷中へ手を入れた、着物の上から見ただけでは納まらず、マリのごとくフクラんだ乳を己れが手に握りしめたかったのであらう。左京の顔はいよいよ好色めいて赤くなった。
「これ、あまりはしたなきお振舞は、御身分にさわりましょうぞ」と現れたのは楽光院。その眉は嫉妬の炎に燃えキリキリとつるし上っていた。
「おッ、これは！」左京の腰はくだけた。

時楽光院が現れたので左京もシブシブ花之助を帰したが、楽光院はまだプブリプブリしている。
「左京どの、せっかくわいの間の子で城主にしようとするやきき、いやしき女役者にたわむれようとは、アンマリな仕打」
「いやそう怒るナ、これにはチト考えがあるのじゃ」
「ハテその考えとは……？」
楽光院はビッター左京に寄りそった。



⑩ザーツとおし寄せる波の響がにぶく轟き、昼なお暗き生月島の洞窟。

上げ潮を利用して南蛮船を中へ引き入れ、丸太で岩の間に固定させ、今では奇怪な館となったが、さらにその船内は七つの色にぬり分けられ、黄金の間、火の間などと名づけ最後の船尾にある部屋は、嵯岐守の好みで黒色にぬられ、そこに集められた調度品は、かねて自慢の金色に輝く異國の浮彫に飾られた物ばかり。しかも赤い洋燈の光りに照されたありさまは、「竜神の局」と嵯岐守みずから命名したその名にふさわしい妖艶な情緒がみなぎっていた。

他の部屋には、それぞれの女があるいは舞、あるいは唄と技を競う事となった。

藤姫から近日そちらへ着く予定との知らせがあったのに、最後の「竜神の局」にびったりした女が見つからない。

嵯岐守は、これぞ画竜点睛を欠くの恨みだとイライラしはじめた。そこへ左京が、「殿、うるわしき美女を見つけましてございます」

⑪「さっそく連れて参れ。七人の美女がある南蛮館の中で舞うありさまは絶景である。竜宮に天女が舞い下りた美しさである。」

私は藤姫に最上の美しさ楽しさを味わわせ、私と結ばれた事の幸福さを知らしめたのだ」

嵯岐守は、若々しい顔を輝かした。

花之助は、あれから左京の邸にいたのである。行儀作法を身につけると云う名目だが、左京の邸に立寄った嵯岐守は、一目みて花之助のしとやかさあでやかさに、一日も早く船館へ呼び寄せたいと思った。

「ふふふ、殿はまだ夢みる青二才。花之助を押しつけ色香に迷わせてやるのじゃ。その為にはわしは花之助を口説いたまでよ」

楽光院は左京の言葉に嬉しがり、「ホホホそうと聞いて私も安堵しました」



⑫「女なぞ、甘いものじゃ」楽光院と別れた左京は邸へ帰ると花之助を居間へ呼びよせた。

「どうじゃ。わしはお前の出世の為、殿へ正式にお召抱えを願うようにしたが、殿も大喜び。近日お目通りに参上する事となるが、いよいよお前も大名の側室となつて、身にあまる果報を得るかも知れぬ。女役者から大出世じゃぞ」

左京は舌なめずりしながら、

「だが——その前に、せっかく、骨を折ったこのわしに一夜の情もマンザラではあるまい」左京は今夜こそ逃さぬとグイと花之助を引き寄せれば、彼女はニッコリ「嬉しゅうござんす。まあ一コンいかが」と、仕度してあったのか、酒を出した。





① 花之助に酌をされて目尻を下げた左京、
「お前を殿にやるのはもったいないのだ。お前だから聞かせてやるが、今にわしが城主になるかも知れんぞバハハ」と得意そうに云った。花之助の目は、キラリと光った。
何刻だったのか——左京はハッと気づいた。いつの間にか眠ってしまったのである、花之助の姿も見えぬ。左京はアッと云った。

② 「連判状がない！」左京の顔はサッと青ざめた、寝てる間になくなってしまったのだ。老岐守を追放する隠謀に組する一味の連判状だ。
花之助に二三杯酌をされたのを覚えてるが——まだ頭がズキンズキン痛む——アツ毒を飲まされたのだ！左京は突然わめいた。
「うぬ、さては、花之助は隠密だったのか！」
左京は家来たちをどなりつけた。「早く捕えろ、あの女が邸から抜け出るのを知らぬとは何たる間抜け！」「ハッ」家来どもはあわてて走り出した。「何と云う事！それと申すも、あんな女にうつつを抜かすのが悪いのじゃ」騒ぎにかけつけた楽光院の眉は、またしても吊り上った。
「女隠密じゃ、あれを証候と押えられてはわれらの命はあぶない、早く打ちとらねばならぬ！」左京はもつれる舌で叫んだ。
「御家老、あの女は老岐守の下へかけこみ、殿と一緒に生月島へ渡りましてぞ」
「何！殿と一緒に——うむ、それもよし」左京はうめいた。



③ 暗夜にまぎれて、黒ふくめんが生月島へおりた。大洞窟の南蛮船を襲う左京一味である。
「かまわぬ。あの船へ火をかけ、殿も女も共に焼いてしまえ。公儀へは殿が発狂してかかる不始末をしでかしたと申し開きをするわい」
左京のこの恐い言葉こそひらめく白刃より凄かった。



④ 左京に眠り薬をしかけた毒酒をのませた女役者花之助は、ホホホと笑って連判状を懐中に抱きしめた。老岐守の後に従いながら、
「やっぱ、私が来てよかった」
彼女は人知れぬ謎の微笑を浮べていた

②「まあお殿様、なんとすばらしいお部屋でございます。」
私はこのような美しい所へ来た事はございません」
老岐守と共に、南蛮船最後の黒色の一間「竜神の局」へ足を
入れた花之助は思わず叫んだ。
「これこそ私が迎えようとする花嫁のための宮殿なのだ。お
前はここで踊って、わが花嫁を喜ばしてくれよ」
老岐守は、満足そうに云った。



③「私につかれ」
老岐守は、せまり来る黒ふくめんを斬り
はらい、花之助を抱えると船から飛びおり
た。満潮だ。真赤に染った海水は見るまに
黒い底へ二人を呑みこんだ。が、どうやら
老岐守は岩角で足を打ったらしい。

④「殿様し
っかり私に
おつかまり
遊ばせ」花
之助は老岐
守を助けた。

⑤花之助はジッと老岐守を見つめた。
「ハハ、なぜそのように、わしを見るのだ」
「申訳ありません。でも、殿様のようにお心づかいのおや
さしい方には、どんな女も心を動かされるもの」
花之助はため息をついた。

「いうな。今申した如く、私は藤姫と云う妻をむかえる身
なのだ」

こう云った時、不意に洞窟の中に荒々しい叫びが起った。
女隠密と老岐守を一挙に打ちとらんと黒ふくめんが乱入し
て来たのだ。老岐守のわずかな供の者は倒された。

「ややっ、船館へ火を掛けたな！」

老岐守の顔が赤く染った。

カッと燃え上った炎が気味わるく洞窟内を照した。火の
手は早かった。黒煙が渦巻いて二人を押しくるんだ。



⑥老岐守と花之助は、やがて一そう
の舟へ救われた。
「殿様、左京と楽光院は殿をほろぼ
しお家乗つとる計画でございます」
証換はこの連判状でございます」
花之助は肌にしっかりと秘めてい
た巻物をとりだした。
「うーむ、驚いた事だ。だが、美しい貴女が隠密だったと
はさらに意外な事だ。おそろく幕府の命令で我が身辺へ忍
び込まれたのであろうが、海中で私の命を救ってくれた貴
女、思は忘れぬ。江戸まで無事にお送りいたそう、我が不
行跡については、ありのままに將軍へお伝え下されよ」
老岐守は、いさぎよく服罪する決心であった。
「いえ、殿様。この船にいる者は皆私の家来。ひいては殿
の御家来とも申すべきもの、南蛮船の事は他へ洩らす者は
ありません」花之助は意外な事を云う。
「えっ」「実は私は公儀の隠密ではありません。殿様にお
逢いしようと思いましたが、藤姫でございます。殿の事につき
いろいろ怪しき噂が伝わり、私は心配のあまり女役者に身
を変え、あるいは床下にひそんだりして調べましたところ、
すべて左京一味のたくらみとわかりました」
「オオ、藤姫どのか！」老岐守はバツと目の覚めた心地で
改めて花之助を見つめた。
ぬれた肌を拭くため裸になったが、もはや何もかくす必
要もない二人である。いつしか手を握り合って、ニッコリ
して、また、力をこめて握りなおしたのである。



スマトラ奇談

蛇

使

いの

王

女

藤 琴 也

北 原 環・画



老婆の不吉な予言を私は一笑に附したが、美少女
ラリのただならぬ脅えは、やがて現実のものとなつた！

一 パダンの町

パダン・インドラジリ川——これは一九〇八年に英国の探検家サー・ヘンリー・ヒルバーン卿が、そのまま永遠に消息を絶てしまった呪うべき悲運の河です。

そしてこのヒルバーン卿のお墓のあるところがスマトラの高峰メラピ山で、ちょうど西の麓に建っているというのも、つまり有名な探検家を死へ誘った怨みの河が、この活火山に源を発しているからだろうと思われまふ。

ジャバのバタビアから船に乗って、スマトラのパダンに着いたのは六月のはじめ、これは十月から翌年の一月までの雨期を避けるために選んだ私の旅行日程でしたが、それよりもバタビアで雇った小女のラリが、やたらとパダン行を私にすすめたせいもあったのです。

着いてみれば、なるほどラリの云うとおりで、いかにもスマトラの西岸に陣どる商業都市らしい落着きようで、鏡のように小さなさざめき一つ見せない海面の美しさは、むしろ神秘的な匂いで私の心をすっぽりと包んでしまいました。緑とも藍ともつかぬその海底で優雅な乙女がただ一人ゆったりとからだを横

たえながら、静かにしとやかに手招きしているような、そんな錯覚さえしたほどです。

もっとも東印度諸島といえば、先史時代のマンモスの骨や古代人の顎の骨など掘り出された世界最古の土地だと聞いていますから、こうした謎めいた美しさなど至極当然のことかも知れませんが、しかし一緒についてきたラリでさえ、船べりに一人じっと立ち尽して先刻から感動の表情を一向に崩そうとはしないのでした。

ラリはユーラシャン系のスマトラ人で、ユーラシャン系といえば白人と土人の混血種族ですから、肌はチョコレート色かも知れませんが、その艶の美しいことと云ったら、まるで毛穴がないみたいに滑らかに輝いています。

髪は黒く長く、いや、なんといってもその眸の露のような潤いは、いつでも悲しい夢ばかり見ているのか、何か不思議な愛情を呼び起こすような、正直に云いますなら彼女のうしろから何度肩へ手を廻そうとしたかわからぬ私なのでした。

そのラリが腰巻で下半身を隠しただけの恰好で、はるか彼方に眼を投げたままじっと動こうとしないのです。

彼女に比べたら、私など生れてはじめてたずねたところですから、青年に似つかぬ感傷じみた物思いにとらわれたからといって、決して恥ずかしくはないはずでした。

だがこんな感傷も、やがて一時間もたとうとする頃、思わぬ事件がまき起ってふっ飛んでしまうことになるのです。

——その前にパダンの町について少しくお話ししておきたいと思います。

一六〇〇年頃から約二百年にわたってオランダ、イギリス、フランスの野望の的だったこの町、そして何度となく侵略の火に焼きつくされ、その度に発達して行つたこの町。今は商業の中心地として南北に大きな道路が敷かれ、この地方では珍しい白煉瓦の建物がずらりと建ち並んで、港から町へ向かつて延びているだんだら坂はまるで生ゴムの上を歩いているように柔らかで、その両側には大きな棕櫚の葉で編んだらしいコーモリのような笠をかぶった土人たちが、物々交換の市を開いていて、物珍らしげにそれを眺め歩く私たちを、向うでもまた物珍らしげに眺め返すのでした。

やがてここを過ぎると、ようやくパダンの中枢部へ入ります。ここには司政庁や司政官

の官邸、裁判所、警察庁、学校など隣り合わせに並んでおり、わけでも司政官庁の三階建の建物が一際目立っていかめしく聳え建っていました。

と、その時です。

「旦那さま……」と、急に物に脅えるラリの声をうしろに聞いたのです。振り返る間もない私へ向かって、

「向うからくる老婆がおりましよう。あれは手相や人相を見る呪い師ですが、声をかけられても決して返事をしてはいけません」と、

と、こう云うのです。

「なぜ……？」

「あの人のために、たくさんの白人が死んでいるからです」

「ほう……、それはいったい……？」

「わけはあとでお話します。ともかく黙って通り過ぎることです」

今までに見なかったラリの断定的な態度でした。

大体私は大学で東洋歴史学を担当している人間ですし、今回一年がかりでインド、インドシナ、そしてスンダ列島まで足をのばして歩く気になったというのも、イギリスの学者の間で比較的研究する者の少ない印度歴史を

探究して、支那歴史のように完成されたものをつくってみたいという学究的野心に燃えていたからなのでした。

ですから今のうちに謎めいたことを云われと、なおさら聞きたくなってくるのが今の私の心境なのです。

この心境が禍いして、予想もしない大波乱の発端となったとは……。

二 呪い師シガル

「うしろにいる娘は、あなたのなにじやな……？」

老婆の第一問はすいぶん不しつけなものでした。やがて疑うような眼に、ことさら皺を寄せるのを眺めながら、私は失敬な奴だと内心苦笑まじりで、やっぱりラリの言うとおりに黙って通り過ぎればよかったと、後悔しはじめていました。

——実は果せるかな。

「ちよっと、そこなイギリスの旦那……」

と、呼びかけられたのです。

「……」

黙って足をとめた私を、細長い指で手招きしながら、

「きてみなされ。あなたは勇氣と学識の深い

イギリスの方のようじやな……」

と、それは男とも女ともつかぬダミ声で話しかけてくるではありませんか。そこで、いささか狼狽したのは事実です。まず、私をイギリス人と見抜いたその眼の鋭さ。次に毛の根にまで響いてくるようなしわがれた声に対する好奇心。私はつい先刻のラリの言葉などすっかり忘れて、その老婆の前に立っていました。それから例の第一問だったので。

「僕の小間使ですよ」

「今から三年ほど前のこと。やっぱりその娘に似た女を連れてきたイギリス人がいたが」そこで、病的な声でひとしきり笑いたててから、

「やはり永久に、ここへもどらなかった」

私は本当に腹を立ててしまったのでした。

「バカな！ その人と僕と……」

「しかしパダンへくる白人は、必ずメラピ山へ行きたくなる。そのとき……」

老婆の眼は、まるで背裏をつくような不気味なものでした。私はここで、無理にも胸を張らずにはいられたかったのです。

「メラピ山は知ってるさ。だがそこへ行ってみようなんて、夢にも思っていないネ」

フフフという含み笑いは、まるでそんな私

の言葉など頭から信用してはいないようです。
「そうであればよいが、もし行こうと思った
ら、その娘は絶対連れて行かぬことじゃ」

「……」

不思議な焦躁と怒りの表情を剥きだしにし
て、私は返事もせずその場を離れたのです
が、なぜか胸のあたりに煮え湯でもかけられ
たように落着かないのです。

「ともかくホテルを探そう……」

浮かぬ声となって、私はわざと素気なくラ
リに話しかけましたが、ラリはすっかり沈み
きった表情で返事もしません。

「ラリ、あの老婆は氣違いだよ。大体メラピ
山へ行こうなんて……」

「いいえ」

今は冴えぬ顔色と変ったラリですが、それ
でも私の話を途中でさえぎったその声は、今
までにない強い口調でした。

「あの老婆はシガルといって、百年も生きて
いる不思議な呪い師なんです。耳は十里四方
の音を聞きわけ、眼は山猫のように暗闇でも
恐れないと云われています」

隙間風に顔を吹かれたように、私はだんだ
ん白々しい表情となっていくきます。

ああ、この娘はなんという馬鹿げた話をす

るのだろう。この文明の世の中に、いくらな
んでも話が唐突過ぎる。十里四方が聞こえる
耳、暗闇でも見透す眼、第一百年も生きてい
るなんて……、これではまるっきりアラビア
ンナイトではないか。といって相手が小娘な
だけに怒るわけにもまいりません。

私はつとめて冷静に、教え子のあやまちを
指摘するように、

「ラリ、人間の力には限界があるんだよ。シ
ガルについてのお前の話はともその限界以
上だネ。まるで昔の魔法使だ……」

と、突然ラリの眼が食いついてくると、あ
のまるくつややかな肩を小さく震わせながら
声は明らかに生氣を失っていました。

「旦那さま。シガルはその魔法使なんです……」

このひたむきな云い方に、私もいささか鼻
白んだ態度とならざるを得ません。

「ラリ、その話はもうようそう。僕たちの国で
こんな話をしたら、明日から狂病院で暮さな
きゃならない。ともかくホテルでゆっくり休
んで、スマトラの観光プランを建てよう……」

この止どめを刺すような云い方に、ラリも
今は黙って恥じるように伏眼となりながら、
やがてカモシカのようにどこかへ走って行き

ました。もちろんホテルを探しに行ったのに
違いありません。いくらパダンの町といって
もわれわれ観光客をとめる宿は、せいぜい二
三軒ぐらゐのものでしょうから、いつときこ
こで待っていれば、すぐ帰ってきて、
「旦那さま、よいところがありましたよ。壁
の色がとっても綺麗……」

といった調子で、睫毛の長い夢見るような
瞳で、お椀のような乳房のゆらめきを押さえ
ようとせず、私の手から旅行カバンをひっ
たくるようにして、何回も何回もうしろを振
り向いては可愛い笑くぼをつくって見せなが
ら、きつとホテルへ案内するに違いないので
す。……はて？ それがどうしたということ
か。待てど暮せどいっこうに……。

三 ラリの手紙

深い疵が心に残って、むやみやたらと胸の
中を痛めつけるように、私はいても立っても
いられない気持で部屋の中を歩きまわってい
ました。

ホテルの窓越しに、真暗い巨大な影がちょ
うど羽をひろげた鷲のような恰好で私の目を
奪います。これが今日、街頭でシガルという
老婆が云ったメラピ山なのです。その山の上



に真黄色い月が、大きくまんまるく、そのくせ死んだようにいっこうに動こうともせず、なまぬるい光りを落としていました。

「フーン。あれがメラビ山か……」

ひとり言を洩らしながら、眺めるともなく眺めていますと、いきなりうしろから肩を叩く者がいたのです。のど輪をしめられたような驚きで私はびっくりと後をふりむきました。

だが、これはなんと
いう怪奇！

うしろには誰もいないばかりか、一トかけらの影さえも映っていないのです。

私は勢いよくドアを開けて廊下を見ましたが、これも所詮はムダ

なことでした。なるほど誰か入るとすれば、きつとドアをノックするでしょうし、ノックしないまでも一人部屋の中へ入れば、いくらかでも足音がするはずでした。だったら今のは夢か。いいえ、決して夢を見たわけではない……というのは、今こうしていても、右の肩先に叩かれた時の感触がまざまざと残っているのですから。

私は二の句がつけぬこの驚きを、精一杯の勇気で踏んばって、もう一度部屋の中をぐるっと見廻しました。

そして、また全身に針を刺されたような腹底から震え上った驚きにであわなければならなかったのです。

誰が、いつ、持ち運んできたものか、机の上に置かれたもの、それは一通の封書だったからです。誰か二、三分前までなかったものです。つい先刻まで、この机の前を行ったりきたりしていた私ですし、かといっていくら自分の眼が信じられないと力んでみたところで、現在こうして机の前にきちんと封筒が置いてあるではありませんか。

突然、私は気違いのような手つきで、その封筒を両手にしっかりと握りました。この謎の正体をつかもうとでもするような、そんな意

気どみだったのかも知れませんが、その実はなにか眼に見えない相手に対して、今のこの脅えたひるみを覗かれたくないという奇妙な強がり働いていたのに違いありません。

こうして、うつろになった自分の体に言い聞かせるように、私は封筒の中味をとり出すのです。

しかし、これが思いもよらぬラリからの手紙だったとは……。そうです。明らかにラリの字で書かれたラリの手紙なのでした。

胸壁の中で心臓が二度三度と回転したような驚きとはこのことでしょうか。しかもその文面を読んでいるうちに、私の全身が次第に逆毛だって、いい知れぬ悪感に襲われてきたことでした。

……月がメラピ山の西の端にかかる頃、ランダという男が、旦那様の許を秘かに尋ねます。この男は呪い鳥という猫のような顔をした鳥を、いつでも肩にのせていますからすぐわかります。この男のいうことを聞いて私を助けてください。でないと、私は明晩全身の血を絞りとられて、ミイラ漬にされてしまいます……。

私は何か切迫したものが、虎口を開けて身近にしのび寄ってくるような緊張と同時に、

例えようもない焦燥にかられてすつくと立ち上りました。つまりいても立ってもいられない気持でわやわやとしているのですが、だからといってどうすることもできない今の私なのです。いったいラリがどこにいるものやらそれでなにをされているものやら。

ただこの文面から推察できることは、確かに彼女は私から逃げ去ったのではないということでした。それにしても、これはどうしたということか。あのラリの血が全部絞りとられるなどと、なにかそんな悪いことでもしたのだろうか。土人は法律よりも私刑を好むとは前から聞いていたが、それではきつと何かの私刑に会おうとしているのだ。

仮に悪事を犯したのならそれでいい。これは警察へ早速届けて救い出さなければなるまい。もうこうなると、そのランダという男のくるのが待ちどおしいばかりです。

四 ランダの話

南の海の見事さは、とても上手に云い現わせません。月光を弾ね返すキラキラとした小波は、緑に映り黄に映り、そして浜辺のあたりまでくるとメラピ山の噴火を映して真赤に染まります。やがてそれが打ち返す時は、ま

た黄から緑へと照り映えて沖の方へもどって行きます。しかしはるか彼方の海面にボツンと浮いている月影だけが、まるで一人残された死人のような色で揺れていましたが、それがなにか不吉な前兆のように、妙に私の心をとらえていました。

何度も何度もメラピ山の月と、その海面の月を見比べながら、こうしてランダのくるのを待受けている私なのです。

——と、やがて全身が糊で固くついたようにこわばりました。突然メラピ山の月が西に大きく傾いたからです。と同時に、眉に火がついたように立ち上った——というのは、鮮やか過ぎるほどの正確さでドアの引手が音もなく外からぐるりと回転したのに気づいたからでした。

だが入ってきた男を見つめて、私は思わず身をかわずようにあと足を引いたことでした。白眼のかったモズのような険しい眼つき、とがった頬骨は何年も風雨の中でさらされてきたものが、一皮剥けてしまったように、すっかり黒ずんで見えます。しかも生れてこの方陽の目も見ずに暮してきたのでしょうか。骨と皮ばかりに痩せこけたその上、茶褐色の肌色は上から下まで余すところなく皺の目が

刻みこまれていました。

これが本当に、ラリの手紙に書いてあったランダなのだろうか。いや確かに間違いはない。その証拠には、左肩にちょこんと止まっている小ネズミほどの大きさの鳥が、しきりと首を前後左右に振っていることでもわかります。

「私ランダでございます」

その男は、その人相とはおよそ似つかぬ丁寧なお辞儀をして、

「この度はあなた様に思いもかけぬ御迷惑をおかけする結果となりましたが、何分とも宜しくお願いするよりほかにございません」

と、これは驚きといった鄭重な言葉で話しかけてきたのでした。

私が全く調子の違った口調で問い返したのも無理ではありません。その声の品のよさとその態度がまるで一流の紳士のような隙のない厳肅さなのですから。

「あなたは……」という言葉が思わず口をついて出たほどでした。

「あなたがランダだというのは間違いなさそうですね、しかしラリはどうしたというのです……」

薄黒くたるんだ下眼瞼が、二度三度としょ

ぼついたと見えると、思いつめたように、ランダの眼が白く光りました。そして、

「サー・ルース・ホプキンス様」

と、どこから聞いて知ったものか、いよいよ奇怪なこの男は、いとも丁寧な態度で話しかけてくるのです。

「なにも御存じないあなたさまに大変申し訳ないことですが、どうしてもメラピ山へ登って頂かなければならないのです」

「えっ！ メラピ山へ……？」

「そうです。メラピ山へ行つてラリ様を救えるのはあなただけです……」

「ランダ……くわしく話してくれないかね。僕の頭の中はすっかり混乱してしまつたようだ」

「ごもっともなこと。あなた様はこのスマトラの大王国であつたミナンカボウ王国を御存じでございますか？」

「よく知っているつもりだが」

東洋の歴史学を専攻したものなら、スマトラのミナンカボウ王国を知らないものはないはずでした。これはパダン高原を中心にして栄えた国で、この地方のパダク族とならんでオランダ統治に抵抗した一大民族なのでした。しかもパダク族は人食い人種で強い奴隷

制度のもとに発展したのに比べ、ミナンカボウは回教徒が多い母系家族の土人たちですから、性質も温順でスマトラではもっとも文化の進んだ人種だったのです。

それにしても、ランダはいったい何の思いつきで、今のこの場所にはおよそ縁遠いこんな話など持ち出したことでしょうか。

「そのミナンカボウの王族がオランダ人のワナにかかつて、財宝のことごとくをとられたのが今から百年も前のことでした」

「……」

「つまりこのパダンの町は、われわれ同族の怨みと呪いの町なのです」

突如、ランダの額から血がひいて、その皺がミミズのように動いたのです。

「王族のものは再三、オランダ人の非を訴えて、せめて半分だけでも返してくれと頼みましたが、彼等は卑怯にもパダク族と手を結んで、われわれ王族の惨殺を図つたのです」

「……」

「だがそのオランダ人も、まもなくこのパダンを襲つたフランスの海賊どもに殺された揚句、宝物まで盗られてしまいました。その夜のことに、勝ち誇つて飲み明かす海賊をめぐって、ついにわがミナンカボウの一族が財宝

奪還のために立ち上りました。」

一七一四年ごろからこのかた、このスマトラは血と血の争いの連続でした。オランダ、イギリス、フランスが入り混って、それぞれ勝手放題に土地を占領し、住民を騙しては古代から伝わる金、銀、油田、ゴム島などを手に入れようと夢中だったのです。

味方もたくさん死傷者を出しましたが、どうやら財宝だけは奪い返すことができ、命からがらメラピ山まで運んだのですが、運悪くその日の明け方、なぜかあの山の火神が怒りだして、ものすごい火煙と共に、岩も木も噴き飛ばし、悲しいことながらミナンカボウの若者たちは財宝ともども土の中に埋まってしまうこととなりました」

「では、なにもかも見失って……」

「しかし、その場所からようやくと這い出した一人がいたのです。だがその幸は不幸と変わった、というのはパダク族に助けられたからです。それから四十年の間メラピ山の洞穴へ閉じこめられましたが、ようやく逃げだすことができたのです。でもパダク族のものはまだ財宝をあきらめておりません……」

思いなしか、ランダの頬を伝って、露のようなものがほろほろと落ちて行くようです。

その若者というのは、どうやら……。

五 蛇使いのラリ

夜が白々と明けて、メラピ山から噴き出す灰色の煙が絵に描いた一筋の糸のように、西の空へとゆっくり流れて行くころ、ランダの複雑多様な物語が終わったのでした。

そして夢ともつかぬこの話は、私の胸の中

で異様な色模様を描きながら、しっかりと固く噛みしめられていたのです。

「そうでしたか。で、ラリは確かにその場所を知っているのですネ……」

「はい。あの方はミナンカボウ王族の血をひくたった一人の王女でございます。それを知っているのは恐らく呪い師のシガルだけなはずです……」



「えっ！ シガル……」

私は思わず眼を吊り上げました。

「そうです、あのシガルはパダク族の一人でわれわれの財宝を狙っているのです」

「フーム」

昨日の昼間、そのシガルが私に言った言葉が二瞬のすばやさで耳許に甦ってくるのです
「パダンへくる白人は必ずメラピ山へ行くようになる……」

俄かに、胸の中が乱れて、からみついていた薄暗がり、だんだんと眼の前で開けて行くような感じに打たれていた私でした。

「ランダ……。今まで何人ぐらいメラピ山へ登ったかネ……？」

「私の知っているだけで十数人はおったようです。しかし生きて帰ったものは一人もおりません。それだけにラリ様のことが心配なのです」

絶望とも悲しみともつかず、ランダは両の拳を震わせながら、メラピ山を睨みつけるのでした。

「ともかく……。お前を尋ねて私のところへ行けと知らせた者は誰かネ……？」

これだけが先刻から解けぬ謎だったので。それに皮膚の下で神経が冷たくなったほ



どのあの不思議だけは、どうしても知っておきたい。ランダの眼がたちまち大きくなりま

すと、やがて私を見すえました。
「ラリ様は蛇使いですから、蛇に手紙を運ばせることもできます……」

「な、なんだって……？」

心臓がどきりと縮まりました。あの美しいラリが蛇使い……。すると私のうしろから肩を叩いたのは蛇のしっぽか、それとも鎌首か。だが、そう思いながらも、私は蛇のことより、蛇のようにぬめぬめと美しいラリの柔肌を思い浮かべていたことでした。

そして、妙に怪しい焰でその胸底がだんだんと切なくなっていくのを押さえきれなくなるのです。

「ランダ、お前はメラピ山へ案内してくれるか」

急に気色ばんだ声を放った私を見て、この

男はきつ

と腹のうちを見抜

いたのに違いありません。

にっこりと笑いました。

「もちろんでございます。ラリ様をお救いくださるのはあなた様しかいないのですから……」

六 呪い鳥

その高さは二八九一米。何千年も前から噴火し続け、土人たちは怒りの神と呼んで恐れしているメラピ山。しかもこの山で死んだ何百人の血と肉を覚えて獣たちは、うっかり人間など見かけようものなら、すさまじい勢で飛びかかってくるというのです。

いや、それが木の胴ほどの大蛇やバブーンという狒々に似た猿なら、まだ銃で倒すこともできるでしょうが、木の上から夕立のような音をたてて落ちてくる何千という蛭の大群に出会ったらひとたまりもあらうはずがありません。私とランダは足音をしのばせて草木をわけながら、静かに静かに登って行きます。
「ランダ、ラリのいるところが大体わかって

いるのかネ……」

「はい……。まもなくこの呪い鳥を放ってやります。この鳥がきつと探してきてくれると思います」

その呪い鳥というのが、また奇妙な鳥でした。これで飛べるのかと思うほど小さい羽、そのくせ顔だけがやたらに大きいのです。そして猫のような銀色の長い鬣をのばして、いつでも首を振っています。それにも増して不思議なことは、鳥とはいいいながらいっこうに鳴き声を上げないことでした。

「しかし、これほど広い山の中で……」

「その御心配はいりません。この鳥は、だから呪い鳥と呼びますので。それにラリ様のお顔はよく知っていますので、すぐ見つけだすに違いありません」

ランダは自信に満ちた声で、その肩から鳥を放ったのです。

しかし溜息のするような不安がチラッと心の奥を掠めました。私の常識では信じられぬことが、この人たちの間では、何よりも大切な信念となっているのです。

しかし、私が半信半疑の寒そうな眼つきでじっと座っているというのに、ランダは今や遅しとばかり、四方八方へ眼を配っている様

子です。

それを眺めながら、私はなぜか顔を後へ引く思いです。そしてあんな奇妙な鳥に頼っている間に、ラリは殺されてしまうのではないか……という火のつくような予感で、思わず狼狽してしまふのでした。

待ちきれなくなって、「ねエ、ランダ……」と、思わず立ち上ろうとしたときです。

「おお……！」

という歓喜の叫びが、私の耳を突きました。ハッとして仰ぐ私の眼にとまったのは、得意満面の表情なのか、眸を大きく見張って、奇怪な首を左右に振っている呪い鳥、しかもくちばしならぬ、あの猫のような口先には何やらしっかとくわえています。

「旦那さま。これはラリ様の髪の毛に違いありません……」

のっぴきならぬ勢で、私の前に差し出した一本の髪の毛、ああそれは見紛うべくもないラリの黒い長い髪の毛でした。

弁解とも謝まるともつかぬ面もちで、私はしっかとランダの手を握りますと、呪い鳥を掌にのせて、頬ずりしてやりたい衝動に駆られたのでした。

「さア……。出かけよう……！」

と、その時です。

「グアオー！」という、つんざくような叫びをうしろに聞いて、私は思わず草の上にひれ伏しました。

「シッ！ 旦那様。あなたは立ち上って両手をひろげてください。バブーンです。バブーンは白人を恐れていますから決して飛びかかってきません」

ランダが耳許で囁やきましたが、それにしではあまりにすぎましい相手なのでした。バブーンと云えば何十人力という怪力と、人を騙すような悪賢い獣で有名です。果して立ち上っていいものか、どうか。しかし私は思いついて立ち上ると、両手を上にあげて、おいでおいでもするように、大きく振ってみたのです。するとどうでしょう。彼らはみな私の真似をしてあとすざりするではありませんか。

またしても常識では信じられない光景が展開されたのです。私の感覚は妙な重さに押しつぶされるように、不思議な麻痺状態に陥ち入って行きました。つまりこの獣たちは白人の持っている銃の恐ろしさを知っていたのです。それが白人を見たら逃げるにしかずという一つの本能をつくってしまったのです。

バブーンの中には土人の女連れこんで女房にしたり、部落の女に惚れて、山から毎日通って降りてくるものもいると聞いていたが、人間にも勝る彼等の智慧の見事さが、いま私の目の前で明らかにされたことです。

ともかく、こうして意外な機智でその場を切り抜けた私たちは、呪い鳥のあとについてまた上へ上へと登って行くのでした。

と、やがてびんとした小声で、ランダが囁きました。

「旦那さま。これから先は蛭の巣が多いのです。遠廻りをするとも明日の朝になってしまいますが……」

「しかし蛭の攻撃を避けるために何か工夫はないかな……」

私たちの足をせかすように、同じところを行ったりきたりして飛びまわる呪い鳥を眺めながら、ふと私の脳裏に浮かんだのは、街路樹についた毛虫を一本一本焼いて歩くロンドン公園の朝の風景でした。

「よし、物は試しだ。やってみよう……」

そして長い枝の先につけた布に火をつけますと、こわこわとこれを振り廻しました。

と意外——、いとも簡単なこの仕掛けに、これはまた奇妙な音を立てて、たちまち何千

という蛭が落ちてくるではありませんか。

しかし、この突飛な思いつきに、喜んだのも束の間のこと。前を行くランダを見失うまいとしてちょっと足を止めた私が、闇にすかして顔を突きだしたその瞬間、突然何者かに眼隠しされてしまったのです。

「あっ！」と、声を立てる隙さえないその素早い力が、今度は頭からすっぽりと袋のようなものをかぶせました。なんの抵抗する暇もなく、それこそメリケン袋に入れられた小猫のような態たらくで、私は軽々とかつがれてしまったことでした。

息づまるような怒りと戸惑う焦りで、身もこげんばかりです。しかしいくら袋のなかでのた打ち廻ったところでどうなるものですか。

やがて、力まかせに下へ叩きつけられて、そのまま気を失ってしまったのです。

七 メラピ山の私刑

いつの間にか、メラピ山から噴き出ている扇のような火がすっかり絶えて、代りに乳色の煙が空一面を蔽わんばかり、真上の月まですっかり隠してしまつて、それでもなくとも昼なお暗い山中の林は、ただむせ返るような煙

りの匂いが漂よいながら、先刻からしきりに地をゆるがすような地鳴りの音だけが、不気味に腹底を伝って響いてきているのです。

私は両手両足を一本棒のように上下に縛られて木の上から吊られておりました。

さて何分位たったのでしょうか。やがて、「ヒッヒッヒッ」

と、下から聞こえてきたのは、確かにどこかで耳に覚えのある声でした。

「どうじゃ白人、わしの云ったことがやっぱり嘘ではなかったぞ」

私は思わず息をついで齒を食いしばりました。忘れもしないシガルだったのです。

「メラピ山へ登るのはよいが、この娘がいては駄目なのじゃ。こりゃよく下を見ろ！」

おどけるようにのけぞってみせたこの老婆は、小気味よさそうに顎を振ります。云われるままに眼をみはって懸命に下を覗きますとこれはなんとしたことでしょう。

ちょうど人間が横になれるくらいの二本の木の間、左手と右足をそれぞれ目の高さに縛りつけられて、がっくりと頭を下へ垂れたラリの姿があったのです。

「あっ！」

と、顎をふるわせますと、

「こりゃラリ……。素直に知らせるのじゃ。言わなければ、まずあの白人を火あぶりにして……」

微かにラリの体が動いて、恨むようなすがりつくようなラリの横顔が、チラリと火明りごしに見えました。

だが、それを眺める私の泣きたいような、どうにもならぬこの歯痒さ……。その間にもシガルは次第にその正体を現わして、不気味な圧迫をあたりに漂よわせるのです。

「フフフ。お前の眼は愛の光りで二倍にうるんでいる。あの白人がそんなに恋しいか。それならさっさと云え。すぐに山から帰してやるぞ」

唖れた声は、言葉のはしばしから燃え上ってくるような執ようさで、ラリの前を行ったりきたりしています。

「さて強情な娘じゃ……」

歯を噛むような怒り声に、私はハッとして下を見ました。これはいったい何という残酷さ。右手の縛しめを解いて体を逆さに吊るしたのです。縛られていない右足が最後のあがきのように醜く宙を蹴って、やがてそれも大儀そうにだらりと大きくひろがりました。

血のたぎる憤怒で、私の全身は真赤に染ま

りましたが、しかしその私も肩がくだけんばかりの苦痛で、そろそろ気が遠くなりかけていたのです。

「ラリ！ これでも云わぬか。それでは死ぬより辛い苦痛を見せてやろう」

シガルの声が、急に胸を逆撫でするような気味悪い調子で響くと、力を失ってがくりとしているラリの縄をといて、私の前の太い大木へ向かい合わせに縛りつけたのです。

「よいか……。この白人がまもなく真黒になつてしまうのだ。よくみるがいい」

シガルの手に持ったタイマツの火が、やがて下に積み重なってある枯枝の上まできたときです。

「あああ、ああ」

それこそ言葉にならないラリの悲鳴があがって、そして、

「やめてください。やめて……！」

なるほど灌木の乾いた枝は一たん火をつけたら最後、油のようにメラメラと燃え上って消しようもないもの凄いい火力を発揮するのでした。いまやラリの張りつめていた抵抗も、いざ私の仕置を前にして、どうにもならず崩れてしまったのでしょうか。

「待て！」と、私は最後の力をふりしぼって

叫びました。

「絶対に云うな。お前の一族が何百年もかかって、たくさんの血を流した宝だぞ。一人の人間が犠牲になる位なンともないのだ」

「ヒッヒッヒッヒッ」

と、露骨な得意さを見せて、シガルは噛んで吐くような声を出すのです。

「ラリ、やっぱり云わずにこの男が黒こげになるのをゆっくり眺めるか……」

と、乱れた呼吸のなかで、突然靈感めいた暗示が、鋭く私の胸を衝きました。

「シガル、宝のありかを知ったところでもうムダさ。あの物凄い地鳴りを聞け。あと百も数えぬうちに、必らずこの山の怒りが天まで火を噴きあげて、われわれは岩の下敷になつてしまうのだ。さア！ 嘘かどうか……。シガル数えてみる！」

ギョッとして首をのびしたのが、夜目にもはつきりとわかります。そして醜く額を縮めると、明らかに怖じけついた叫び声を上げたのでした。

「畜生め！ 怒りの神は呪い殺してやるぞ！ ヒッヒッヒッ！ お前たちは仲よくここで死ぬがよい……」

ここまでは知っています。しかしそのあと

は全身の抵抗を失ってしまったって、私はガクリと顎を落してしまったのです。

八 スマトラの海

切って落したように、ランダが昂奮した口調で喋り出しました。

「ホプキンス様。するとこの私もいっしょにイギリスまでお供できるのでございますか……」

スマトラの海は、今日も小波一つない見事な美しさで、果てしなく眼の前に拡がり、鏡のような海面は黄に緑に波の彩どりを重ねながら、まるでこれからの私たちを祝福しているような気持さえするのです。

微かな、あるかないかの微笑が、傍に立っているラリの眼に浮かんでいます。

「もちろんさ……。君たちがロンドン見物をしている間に、私は大学に辞表を出して、今度はシンガポールにでも永住して、ゆっくりと研究でもまとめます」

しかし私の正直な本心をいいますと、今度の歴史についてのそれよりも、この奇妙な運命についてじっくりと考える必要があったようです。

自分だけのモノサシで人生を歩きながら、

なに一つ間違っていないと自負していた私でしたが、今やなにもかも狂ってしまったような、そんな気持が強かったからでした。

思えばぶちのめされたように顔が歪んで行く気持ですが、ただ一つだけ前にも増して自信を得たのは人間の愛情の尊さということでした。

物思いにとらわれて、しばらく風に吹かれていたのですが、

「でもねえ……」

と私はまだ納得できないことを口に出していました。

「お前が蛇を使って私のところへ手紙を持たせてよこしたというが、あれは……?」

若々しく美しい眼がにっこり笑うと、聞きとれないほどに舌の先がコロコロと、突然ラリの口の中で鳴り出したのです。

と、これはどうしたことでしょうか。船の上甲板めがけて、どこから這いだしたのか、数匹の蛇がぬらりくらりとこちらめがけて近づいてくるのです。

そして、いっせいに鎌首をもたげると、ラリの指先に魅せられたように、じっと眼を離さず、何やらうなずいている様子です。

それに気づいて物珍らしげに寄ってくる乗

客。

「キャッ!」と騒ぎたてる御婦人たち。

私はゆっくりとうなずきながら、胸の中の笑いを隠しきれず、ラリの両肩をしっかりと抱きかかえて、頬を綻ばせながらこう云ったのです。

「ラリ、素晴らしいネ。僕は蛇使いの王女さまと結婚するなんて夢にも思わなかったよ」
その時、例の丁重なお辞儀をして見せてから、ランダがいつになく浮き浮きした調子で金切声をあげていました。

「紳士、淑女のみなさま。スマトラは蛇の名産地でございます。これは決して皆さまを驚かすためでなく、この名物をじっくりと御觀賞願おうという、つまりスマトラのサービスでございます」

× × ×

この年から十五年過ぎた一九二七年、メラピ山が大爆発したという新聞記事を読んだ私たちは、六人の子供たちを連れて久しぶりにミナンカボウ宝物記念館をたずねるべく、シンガポールのメインストリートを車に揺られておりました。

女 乱
旅 世

雪

肌

密

書

葉 田 光

古 正 英 生・画

側 女 所 望

戌の刻、五ツ半の消灯の木が鳴って、姫路城内の灯は次々と消されていった。

城主、池田武蔵守輝政の寢所だけは、黄ばんだ燈芯が燃えている。宿直の小姓が二人、輝政の寢床に背を向けて、ぼつねんと端座していたが、輝政はまだ眠ってはいなかった。

彼は、カッと鋭い両眼を見開いて、高い天井を睨みつけるようにしていたが、何を思ったか、不意に寢床の上にむっくり起き上った。

「松尾を呼べ、早急に参上するように申し伝えよ」

輝政の不意の命令に、二人の小姓はぎくんとしたように、かがみ加減になって



姫路から駿府へ生き肌密書のひとり旅、罠に陥ちても襲われても辿り着けばよいのだ！



いた背をのぼすと、一人の小姓が立ち上
って、そそくさと寝所を出ていった。

ほどなく、打掛の絹ずれの音をさせな
がら、小姓に伴われた松尾が伺候した。

六十過ぎた松尾は、輝政の側室九人の局
を取りしきる老女である。半白の髪や皺
の多い顔は、年の深さを如実に物語って
いたが、若い頃の美形が偲ばれる。

輝政は、宿直の小姓を退出させると、
近々と松尾を呼び寄せて、声をひそめて
云った。

「松尾、新たに、若い側室を五
人欲しいのじゃが……」

「えッ……殿、ご冗談を……」
「冗談ではない。ここ一兩日の
間に、召し出してくれ……この
城中に若い腰元共がごろごろ
していよう、その中から召し出
せばよい……」

「それは、雑作のないことでこ
ざりまするが……すでに側室

特集
女問諜・女忍者

は九人おられましう……それに、太閤殿下がみまかられて一年近くたつ今日この頃、天下の雲行きはあやしくなっております……噂に聞けば、石田三成殿が徳川内府殿の権勢に對して、何やら不穩の策謀ありとか。いつ何時、天下が戦の場となるやも計り知れませぬ折、女子にうつつを抜かしてようござりするのか？」

老女松尾は諫め顔に云った。

輝政は血氣盛りの三十六歳だが、松尾にはいつも一目置いていた。というのは、輝政の正室は徳川家康の二女であり、秀吉存命中、秀吉の媒介で彼女を迎えた折、彼女に付き添って来た老女なのだ。

輝政はちよつと不機嫌な顔になったが、松尾に對していつになく激しい語氣で云った。「女子供ばかりの局の中で暮しておるそなたの耳にも入る天下の雲行きの怪しさを、この儂が知らぬとでも申すのか。馬鹿にするのもほどほどにせい」

松尾は、輝政の語氣の荒さに、ちよつと当惑した眼になった。

「天下の雲行きが怪しいからこそ、側室が必要なのじゃ」「え？……」

特集 謀間女、忍者女

「儂のいう意味がわからぬのも無理はない……では話して仕わそう」

輝政は一段と声をひそめて、松尾の耳元で囁やいた。

みるみる松尾の顔が緊張と興奮で紅潮したかに見えた。

「なるほど、殿の御賢策……松尾恥じ入りましてござりまする……では、早速、側室を召し出しましょうほどに……」

「松尾、そなただけにもらした大事ゆえ、滅多なことで他言はならぬぞ」

「御安心のほど願ひ上げます……この松尾、口がさけてもそのようなことは……」

松尾は、そそくさと退出していった……

夜伽ぎ菩薩

翌日、松尾の若い腰元たちを見る眼が異常なほど真剣になった。殿中の腰元溜りでは、四十人近い腰元がいた。町家から召しかかえられた女も数人いたが、ほとんどが、家臣の娘たちであった。みめよく、武芸の心得もあり、

しかも譜代の家臣の娘というのが、輝政の条件だった。

順序として、正式な側室の座におさまるには、夜伽の結果の如何によるのだ。一夜の伽をつとめただけでは、単なるお手付で、その後の沙汰のない場合も多い。伽のよさや女の顔や体のよさのみで必ずしも側室になれるとはかぎらない。その決定権はただ一つ、輝政の胸三寸にあることなのである。

最初に、夜伽の命を受けたのは吟だった。禄高千五百石、徒士組頭の村尾右衛門の娘であった。右衛門は小田原攻め以来の譜代の家臣であり、吟は丸顔の美貌で、京流小太刀の妙手であった。年齒は花のかんばせ盛りの十八。女にしては大柄だったが、それだけに、おおまかな艶情がみなぎっていた。

その夜、輝政は、宿直の小姓を遠くしりぞけて、吟を迎えた。この時代のならわしとして、夜伽の際も、小姓は後向きに侍っているものだったのだが、異例のことだった。

「吟、そなたは右衛門の娘だの……どうじゃ儂の側室になりたいか？」

輝政が云うのへ、伽衣に着替えた吟は、少し震えながら、形のよい唇を噛んでいた。「そなた、震えておるな」

吟は、未通娘の恥らいで、頬がかつと朱を呼んだ。君命とはいえ、ただ一言の松尾の口伝で、わが清らかな女の蕾を散らす矛盾に、惑い悩む風情だった。

「儂がそなたを側室にすれば、父の右衛門はどう思うであろうの」

吟は、家臣としての果報者よ、と欣喜雀躍するであろう、父の顔を臉に描いた。父は、輝政の命とあらば、火焰の中で悶死することもしとわぬ武士なのである。

輝政は石のように硬くなっている吟の体を舐め廻すように見詰めていたが、低くけわしい声で命じた。

「脱げ！……何をためらっておる、衣を脱いで、素肌を儂に見せるのじゃ……伽に衣は邪魔じゃよっての」

吟は蒼ざめて、すぐには衣を脱がなかった。「何をぐずぐず致しておる……恥ずることはないぞ。女子の妙を得た裸身は菩薩の相というではないか。儂はとつくりとそなたの菩薩の美形が拝みたいのじゃ」

吟は、輝政に威圧されるように、こまかく震える指で、伽衣の紐を解いた。

「見事よのう……じゃが、そのように屈んでいては、菩薩の美形がよく見えぬわ。立って

みい。儂の方をむいて立つのじゃ」

吟は、夢遊病者のようにふらふらと立ち上った。輝政はうっとり見とれていたが、惨忍な眼になって云った。

「そなたの体は、もう何もかも儂のものじゃぞ。誰のものでもない。儂だけのものじゃ。

……したが、儂の側室になるには、そなたのうわべに見える美形だけでは事足りぬのじゃ。そなたも聞き知っていようが、儂は幼少の頃より、父勝入齋の供を致し、千軍万馬の中を暮して来た男じゃ。血なまぐさいものに馴染んだ故か、物事はいわずもがな、女子でも、気性の強い者が好きなのじゃ……女子じゃとて気丈な者でなければ、心が満たぬ……そなたの気性をためすほどに、よいか。いかなる事があるうと声をたてるでないぞ」

吟は、輝政が何をもって試そうとするのか不安に心を震わせた。

「松尾、用意のものを持参れ」

輝政は次の部屋へ声をかけた。

柔肌烙印

間の襖が静かに開いて、松尾が銅の火桶を運んで来た。中には炭火が真ッ赤におこっている。

「吟、横になるのじゃ。なんのはずかしいことがあろうぞ。そなたはもう儂に肌を許したも同然なのじゃ。さ、はよう、仰のけに寝るのじゃ」

輝政と松尾の眼が、吟を威圧するように鋭しく睨んだ。

吟は、体中が朱に染まるような恥らいを押しこらえて、寝床の上へ、白い豊満な体を仰のけに横たえた。

火桶の真ッ赤な炭火の中に、焼印が突っ込まれていた。松尾がそれを引き出した。真ッ赤に焼け切っている。

「吟、覚悟はよいな。この焼印には儂の名が刻んである。そなたが儂のものである証拠をそなたの誰にも見せぬ肌に焼きつけようというのじゃぞ……」

吟はつぶらな黒い瞳が、恐怖に脅えて、張りさけるようにみはられた。

「……殿、あまりにも御無体な……あたくしがなぜそのような酷い責めを受けねばなりませぬのか？」

吟は、真ッ赤な焼印を握りしめた輝政をうらめしそうに睨んで、呻くように云った。

「吟、殿にさからうと容赦はしませぬぞえ」松尾が鋭い声で、たしなめた。

が、吟は、尚も叫んだ。

「あたくしも、魂のある人間でござります。

そのような牛馬のような扱いを受けたくございませぬ」

「黙らっしゃい、さ、殿、早く、吟に焼印をお当て遊ばしませ」

松尾の声にも、輝政は躊躇しているようだった。

「殿、容赦はいりませぬぞ。お家の為ではござりませぬか。殿ともあろうお方が、何を気弱な」

松尾は眼を吊り上げた。

やにわに、輝政の手から焼印を引ったくると、あっという間もなく、吟に躍りかかって、焼印を押しあてた。

「ひいッ——」

吟の喉から悲鳴がつんざき、彼女の白い肉身が弓のように引きつった。肌を焼き焦した臭が、輝政の鼻をついた。世の中に、これほど苛酷な仕打があるうか。彼は堅く眼をつぶっていた。

彼は、焼印を柔肌にし当てられた時の、悲痛に歪んだ吟の顔を見る勇氣はなかった。

吟は氣を失っていた。

「殿、なにを腑抜けておられます……すぐに吟は息を吹きかえしましうほどに……大事をお明しなさりませ……この吟奴、なかなかの氣丈ものと見受けられます故、大事を明か

しても御心配はいりませぬぞ」

松尾はそういった後、つい先ほどの鬼婆のような惨酷な仕打とはうって変って、甲斐甲斐しく、吟を介抱しはじめ、着物を着せた。

吟はやがて息を吹きかえした。

「吟、よくぞ辛抱してくりやったのう……殿はじめこの松尾の仕打を、うらんだであろう



が、みんなそなたを試したのじゃ、心は鬼に
してはいたが、殿もわらわも涙していたのじ
やぞ……傷は痛まぬか？」

「吟、済まぬ……この輝政を許してくれい」

輝政は、吟の前に両手をついている。

吟は、意外な二人の豹変に、不審な眼をみ
はった。

輝政は、やがて、きつとした眼になると、
重大な秘密を語ったのである。

女肌隠密

……慶長三年八月十六日、太閤秀吉が逝去
したあと、この偉大な統率者を失った天下は
ある不安な状態に置かれた。表面上は、秀頼
を擁して、徳川家康、前田利家、加藤清正な
どの大老株が、秀吉に尽したと同様の忠誠を
遺児秀頼に見せてはいたが、その内実は、徳
川家康の東軍側と石田三成一派の大阪方との
二つの勢力が拮抗していた。やがては、天下
を二分する大合戦が勃発することは必定の緊
迫した雲行きだったのである。石田三成が家
康の勢力範囲の延びるのを懸念して、家康打
倒の策謀を企んでいることは、目に見えて露
骨になって来ているのだ。島津、小西などの
武将が三成に組している内報もある。三成は

着々と大藩誘導に成功していたが、不思議な
ことに、輝政の許へは誘いの密使をよこして
いなかった。三成と輝政の仲の悪さは衆知の
ことであつたが、その理由の他に、輝政の正
室が家康の二女であるという事実が、三成を
して輝政を敬遠させた根本理由であるらしか
つた。が、なんといっても、輝政は父勝入齋
以来の秀吉恩顧の大名であつたし、三成の徳
川家康打倒の名目が、秀頼の御為とあつては
輝政とても、秀頼に弓を引くということでは
きかねるわけでもある。こんなわけで、輝政
の動静は、三成側からも家康側からも、絶え
ず隠密が目を見光らせていたのである。

ところが、ここ二月ばかりのうちに、駿府
にある家康のもとから三人の密使が来た。三
成との合戦の際の去就を問うて来たのだ。そ
して、娘の婿としての輝政へ、絶大なる信頼
の情を寄せていることが、よく判った。輝政
は煩悶した。結局、家康に味方する決心をし
たが、その親書を家康に届ける方法について
はたと当惑してしまったのである。この一家
興亡を賭けた決定を三成側に覚られては一大
事なのだ。城下には蟻も通さぬまでに三成の
隠密が網を張っている。今までに、駿府の家
康へ宛てた単なる御機嫌伺いの手紙を托した

屈強の使者が、五人も、道中で、何者かに惨
殺されていた。

輝政は思考に思考を重ねた末、一つの妙計
を得た。当時の密書伝達の隠密の心得ともい
うべき「隠密五則」という古文書によると、
次のように書かれてある。

一、隠密たる者、すべからず、水火の災に
勝ち申すべき事。

一、隠密たる者、敵の虜となりたる場合は
地獄の責苦にもきつと禁口たる事。

一、隠密たる者、密書は生命よりも大に思
い、露見の折は、噛みくだきて嚙下の事。

一、隠密たる者、犬猫の恥をしのびても、
密書を届くべき事。

一、隠密たる者、生命は軽く、密書は重き
ことを忘れ申すまじき事。

その方法として、通常、武芸秀れた忍者が
密書を携行するのだが、中には、頭髮の一部
を剃り、そこへ文面を刺青したり、歯を抜い
て、密書を義歯の中へ隠したり、こよりにし
て、体毛の中に撚り合せたりしたのである。

このように、当時の密書伝送には、細心の
注意が払われたわけだが、輝政の場合、その
いずれの方法も不安だったのだ。

五人の家康への親書を持った屈強の武士が

惨殺されたことが、輝政をして、病的なほど慎重にさせたといつてよい。

さて、輝政の考えた妙計というのはこうだった。彼は意表をついたのである。つまり、女の密使なのだ。女はか弱くて、常識からは隠密としては思考外である。反面、男からの受難の度合は多いが、斬殺されるという場合はない。しかも、密書を携行していないとなると、男の暴力は浴びても、生命は永らえる筈だ。はたまた、例え浮かれ女などに売り飛ばされても、生命さえ全うできておれば、逃亡は可能である。そこで、輝政は側室を召し抱えるという口実で、その適任者を掘り出そうと考えた。何よりも気丈さと頑健さ。それに、自分への絶対な忠誠が必要条件と考えた。最初に松尾に目をつけられた吟が、その試しの犠牲になったわけである。

輝政は、吟を裸身にし、その羞恥に耐えたことから、彼女の気性の激しさを知った。内股の惨酷な焼印には、吟の肉体的な苦痛に耐える度合の試みと同時に、一つの目的があったのだ。つまり、女の滅多に見せぬ秘所近くに、輝政と記した焼印は、とりも直さず、彼の親書を意味しているのだ。もちろん、密書は持たさず、家康へは、口伝することにした

のである。

わが名の烙印を女の柔肌深く押した密使なら、敵方の隠密に露見することはないであろう、と輝政は、この妙計に莞爾としたのであった。

「……吟、相判ったか。さぞや、苛酷な主君よと憎んだであろうが……これも輝政の生死をかけた密使故なのじゃ……頼むぞ」

輝政ははらはらと落涙した。

「吟、この松尾からも頼みまするぞ……殿の御為じゃ。心して行つてくりやれ」

吟は、思わぬ大事を打ち開けられて、しばらく呆然としていたが、輝政の落涙するさまを見ると、先刻の苛責も、憎めなくなつた。

「有難くお引き受け致しまする……」

吟の言葉に、輝政は、感謝の眼を光らせたのだった。

輝政の慎重さは、吟ひとりの密使では心もとなかつた。それで同じ密使を五人送るべく松尾に側室五人といったのである。誰でもよい、一人でも早く駿府の家康のところへ、家康方加担の口伝が届けばよいのである。

輝政は、吟と同様の手段で、毎夜、四人の腰元を召し出した。が、期待は外れ、吟ほどの気丈女はなかつた。四人のうち、四人まで

が、あの灼熱の烙印を押しつけられると、気が狂ってしまったのである。

結果、やむなく吟ひとりが、輝政の生死を預つて、駿府の徳川家康の許へ旅立ったのだった……。

隠密旅

吟が姫路城下を旅立ったのは、慶長四年の初夏である。五月初めの青い瀬戸の海が、のどかにうねっていた。城中からいったん親許に宿下りした。柔肌の奥深く、ひきつった火傷の痕が、はつきりと「池田武蔵守輝政」と読めた。

吟は、父右衛門にもこの秘密を語らず、ひそかにある夜半、出奔したのである。父の右衛門は、輝政の不興を買って宿下りさせられたと信じこんでいたので、娘の出奔にも、さして落胆の様子もなく「あの不忠者奴が……」と青い唾を吐き出しただけだった。

吟の旅装は町家の小袖だった。髪は禿かむろにすき流している。若い娘らしく、髪には伽羅油、顔には錢屋白粉、唇には紅花の紅が美しく映えている。秀吉没後、まだ丸一年たたぬ天下は、三成と家康との暗雲をよそに、平穩の様相を呈していたから、表街道を辿るつもりで

特集 女間諜、女忍者

吟には、あえて顔を汚したりする擬装は必要だった。擬装はかえって目立つのである。だが、伴も連れない若い吟の旅は、やはり、異彩を放っていた。彼女は陽の高い間だけ歩き、黄昏前には、きちんと宿泊りをした。陽の高い街道は人の往来もあり、荒くれ男につけこまれることもなかった。時には、人通りの絶えた街道もあったが、この時の覚悟は出来ていた。彼女は京流小太刀の妙技で、結構二三の相手には勝てる自信があったのである。

兵庫を過ぎ、女の足にしては早く、池田の宿近くに来た頃、まだ陽は高かった。

この時、吟は、はじめて、姫路城下近くから、執拗につけているらしい一人の男のあるのを知った。年齢格好は四十前後、旅焼けした赭ら顔。小兵の割に、肩幅が異常に広く、腕力の強さと身軽さを感じられる体軀である。身なりは、小間物でも売り歩くらしい、小さな荷箱を背負った旅商人の風態だ。が、旅商人にしては、異様に鋭く光る両眼だった。

(隠密の変装か……?)

吟は警戒した。

池田の宿の屋根が松林越しに、ちらちら見えた街道筋に、白い砂埃が舞い、人通りがちよっと杜絶えている。吟は、ひたひたと足早に近づいてくる男の足音に注意しながら、同じ歩調で歩いた。男が吟の横を通りすぎかけたが、不意に声をかけて来た。

「お女中、どちらまで行かれるのじゃ?」

「……」

「たしか、姫路の御城下からずっと一緒になっているようじゃが……儂は京まで上るのじやがな……若い女子のひとり旅、気掛りでならなんだが、もうここからは京まで一足、まあ、儂の眼の届くところで、災難がなかったのは何よりじゃ」

男は、吟が黙っているのに、ひとりでペラ喋った。

「じゃがな、山崎街道筋では、近年めっきり物騒なことが起っておるそうな。なんでも、京の地獄宿が繁昌して、若い女子が日照りなのでな。随分と若い女子がさらわれるのとこのじゃ。気をつけなさるがええぞ……」

それだけ云うと、さっさと先に立って歩いて行った。

どこと云って、警戒するほどのそぶりはない。

吟はほっと安堵した。と、その時だった。先に立った男がくるりと振り向きざま猪のように突進してくると、吟が身をよける暇もなく、吟は、見事な足払いを喰って、路上に転倒した。起き上ろうとした吟の体の上へ、男がのしかかった。その小兵のどこからこのような重い力が出て来るのかと思えるほど、微動だにしなかった。男の手が吟の鼻を蔽ったと思った瞬間、吟は、鼻腔から脳の芯へかけて、きゅんと痺れるような臭いを感じた。そのまま、吟は、眼の前の男のいかつい顔が白く暈けて行ってしまった……。

雪肌品定め

……何刻経ったか……? 吟はうすら寒いものを肌に感じて、眼をさました。長い昏睡であったようだし、短かい失心であったような気もする。吟は手の自由が奪われているのを知った。後手に堅く縛り上げられ、さらさらした縄が手首に喰い入っている。しかも、うすら寒さを感じたのは、腰から上がむき出しだったからなのだ。彼女はあらわなわが姿に身をよじらせたが、すぐ、隣に転がっているものを見て、眼をみはった。自分と同じようなあられもない姿の若い女が二人、後手に縛

られているのだ。二人の女は猿ぐつわをかまされてゐる。吟は、鼻をつく酒のにおいと煙草のヤニ臭さが、すぐ近くから漂ってくるのを知った。間の襖の隙間から、黄ばんだ燈芯の灯が差し込んでいる。男たちのダミ声がかきこえて来た。

「……やっぱり、姫さらいの仁兵衛だけはあらあ……お前のかっさらって来た女子が、一番の上玉じゃぞ……顔もええが、ほっちゃり白い肌は千両ものじゃ……さすがは仁兵衛じやわい、女子を見る目が高いぞ……」

「そうじゃな。じゃが、仁兵衛、いつものあの薬でモノにしたのか」

「そうじゃ。女子をかつさらうにやあ、遠廻しな口説きやだましは面倒でかなわねえからな。第一、喚き立てられでもしちやあ、事だわな。南蛮渡来の眠り嗅ぎ薬にかかっちゃあ死んだ魚も同然なのさ……ところで、玉の奴まだ薬が効いてるかな。そろそろ、息を吹きかえす頃じゃが……」

仁兵衛が襖を押し開けたらしく、さっと燈芯の光が、吟の眼を射た。彼女は眠った真似をして、薄目を開けていた。男は三人である。いずれも一くせありげな面ばかりだ。話の様子では、女をさらうのを業としている悪

性者ばかりらしい。

三人の男のヤニッばい眼が、燈芯の光に浮き上った、女達の上を這い廻った。

「ほう、まだ、よう眠ってござるな……仁兵衛、そろそろ、京の島原から、女衞の金平がこの女子らを買取りにくる暮六ツ（午後六時ごろ）だぜ……金平が来て品定めまでに、女子の息を吹きかえさせて置かねえと、上値も出ねえぜ。なんしろ、女衞の金平の品定めときちやあ隅から隅まで、小さなアザ一つ見逃がさねえんだ……女がぐったり眠っていちやあ、生きが悪いと難くせつけて随分と値切られるぜ。早いところ眼を覚まさしときねえよ」

仁兵衛は仲間のその言葉に、少し狼狽した顔になって、近々と吟の顔に目を近づけた。

「チッ、この女、薄目を開けてけつかる……やいッ、はっきりと眼を開けやがれ！」

仁兵衛の掌が吟の頬で鳴った。

「なんでえ、その眼は、この俺が憎いのか……だがな、京の地獄宿に行きやあおかいこぐるみ、毎晩、男に抱いて貰って、いい身分になるんだぜ」

仁兵衛は、けっけっけッ、と野卑な笑い声を立てた。

「仁兵衛よ、これほどの上玉じゃ、女衞の金

平に売り渡すまでに、とっくり、拝ませてくれてもいいだろう……別に減るものでもなし……」

「そうだな。じゃ目の保養をさせてやるか」

仁兵衛が、吟の湯もじに手をかけた時、ドカドカと、次の間に人の気配がした。

女衞の金平だった。

「ほう、なかなか上玉やおまへんか？」

金平は、いきなり、吟たちの前に近寄ってくると、女衞特有の貪欲な眼で三人の女を見た。とりわけ、彼の視線は、吟の姿に吸いついていた。

金平の品定めがはじまった。女達を一人一人丹念に眺め廻すのである。

吟は、少しも抵抗しなかった。ただ、あの烙印だけが気懸りだったが、運よく、金平の目を逃れることができた。金平は、吟の素晴らしい雪肌に魅せられてしまい、案外、品定めは簡単だったのだ。

暮六ツ過ぎ、金平と仁兵衛他二人の仲間は三丁の駕籠の側に付き添って、山崎街道を急いでいた。駕籠の中には、吟と二人の女が、後手に縛られたまま揺られていた。

吟は、かねて災難のふりかかるとは予期していたが、このような人買いの獲物になっ

てしまったことが、重ね重ね口惜しかった。
京の地獄宿には、どうせ監視の男たちが、
妓たちの逃亡を睨んでいるだろうし、どのよ
うに苛酷な折檻が待っていないともかぎらな
い。

吟が運命のままに流されようと、堅く唇を
噛んだ時、駕籠の横について歩いていた仁兵
衛が、「ぎゃあっ！」と激しい押しつぶされ
るような悲鳴をあげた。どさりと駕籠に倒れ
かかった。続いて、激しい馬のひずめの乱れ
る音がし、吟の乗っていた駕籠は、どしんと
路地に抛り出された。男たちの喚き声や、太
刀の噛み合う音がしばらく続いたが、やがて
ひっそり静まった。

いったい、何事がおこったのであろうか。
吟にはこの突発的な出来事の判断がつかか
ねた。

「おッ、女子じゃぞ、若い女子じゃ……」
ぱらりと駕籠の垂れが上げられ、灰白い月
光に浮き上った髷面の男が、ニヤッと笑って
叫んだ。鎧のすね当や胴が鈍く光っている。
その格好から野武士だとわかった。

吟は、駕籠の横の路上に、白眼をむいて息
絶えている仁兵衛の死顔を見た。脳天に野武
士の一太刀を浴びたらしく、ザクロのように

破れている。

当然の運命なのだ……

……と吟は思った。

その時、吟は、遅ま
しいその野武士の腕に
ずるずるツと、駕籠の
中から引きずり出され
た。

女の悲鳴が「ひー
ッ」と二つきこえた。
他の二人の女の声であ
る。

野武士の黒い影は、
ざっと数えて五人。頭
目株一人だけが、馬に
乗っていた。仁兵衛、
駕籠かきははじめ金平も
仁兵衛の仲間も、みん
な無惨に殺されていた。
「引きあげろ！」

馬上の男が叫んだ。
吟は軽々と男の小脇
に抱きかかえられて、
街道を外れた疎林の中
へ歩き出した。



特集 女間諜・女忍者

父子相剋

女術の金平一行を殺戮した野武士たちは、遠く、天正十年六月、信長を殺害した明智光秀の一族のうち、秀吉のため山崎合戦で敗残した岩見左門の主従が住みつき、野盗化していたのである。彼等は山崎街道に出没、金品を掠奪しては、影の如く、山中に姿を没し去るので、街道筋では恐怖の的であった。

岩見左門の山寨は、深い杉林の中に営まれていた。女子供もいた。いずれ、女たちは、さらわれて来て無体に住みつかされて、子供をもうけたのである。その表情には、どこことなく憂いを含んだ空虚さがあつた。左門は右頬にざっくり刀痕があり、片眼が白く死んでいる六十すぎの男であつた。一党の総勢は十二人ばかり。一棟の山家に雑居しているのだった。吟と二人の美しい獲物は、最初の夜、正座にどっかと坐った左門の前に、引き据えられた。

左門は、不気味な片眼で、吟たちを見詰め

ていたが、いとも無難作に宣告した。

「吉兵衛、貴様はこの女子と夫婦になるのじゃ。芳平はこの女子とじゃ」

居並ぶ野武士たちの中から、名を呼ばれた若い二人の男が、相好を崩して、二人の女をそれぞれ引きずるように拉し去った。吟ひとりが取り残された。

「皆の者、そろそろ休むがよいぞ」

左門は吟へ視線を焼きつけたまま、手下たちへ命じた。素直に手下たちは左門の部屋から出ていった。絶大な権勢が左門にはあるらしかった。が、吟は、引きさがった手下の中で、左門以上に、ねばっこい眼で自分を見詰めている若い男に気づいていた。その男は鬚面ばかりの中で、一人だけ鬚のない青白く神経質な細面で、どこかに少年のような未熟さがあつた。年齢はまだ二十にとどいていないのかも知れない、と吟は思った。

「女子よ、もそっとこちらに寄れッ」

左門が片眼をちよつと笑わせて云った。

吟は、後手の縛めを解かれてはいたが、駕籠から引き出された時のままの姿だった。

「寄れというに……」

左門の眉が焦立たしげに歪んだ。

「儂は、久方ぶりに、そなたの美形を見て、

年齢甲斐もなく、若い手下にすぐ下げ仕わすのが惜しゅうなった。今宵一夜、儂をなくさめてくれぬか」

吟は、後すざつた。

「逃げようというのか。愚か者奴。ここへ来れば、もう逃げられぬぞ。この儂が嫌わしいのじゃな。儂も世が世なら三万石の大名じゃ秀吉奴に主君光秀殿を殺された故、かく野武士と成り果てたがな。そなたのような若い女子に嫌われるほど、まだ、毛碌はしておらぬぞ。そなたが嫌うても、力ずくでも意に従わせるまでじゃ。容赦はせぬぞ！」

左門は、やにわに、吟の肩を掴んだ。

吟は、あの輝政の烙印のことが気がかりだった。左門の手がかかった時、吟は意識的に身をくねらせて、左門をはねかえした。

「おッ、痴れ者！ その方、武芸の心得があるな……町家の出ではないな」

左門は、きつとなつて云った。思わぬ手応えに、かえってみだらな情火を燃やしたらしく、老人とは思えぬ血の上った眼になると、吟に挑みかかろうとした。

「父上！ 見苦しゅうござりまするぞ。年甲斐ものう、その無体は何事でござりまする！ 心根まで物盗り野盗と成り果てなされたか」

激しい語気で云ったのは、さっきの蒼白な細面の男であった。彼は、左門と吟のあられもない取っ組み合いの一部始終を見続けていたらしい。

「なんだ嘉門ではないか……子供の知ったことではない、早う立ち去れ！」

左門は吟を押さえつけたまま、眉をしかめて吠えた。

「その女子をお離しなさりませ」

「なに、この父に指図するのか！」

「指図ではござりませぬ……儂ももう当年十七歳。もう子供ではありませぬぞ」

「ふん。女子が欲しいのじゃな」

「いま、この一族で、儂だけがひとり者じゃ……さっき、父上が吉と芳に、女子をくれてやった時、残ったこの女子は、てっきり、儂にくれるものと思っていたのに……」

「一夜明ければ、そちにくれてやろうと思っていたのじゃ」

「そのようなけがらわしいものは無用でござりまする……今すぐ下されい」

左門は、息子の嘉門の道理に負けてしまった。洩々、ついと吟を押し離すと、苦々しく云った。

「折角の気分も醒めてしもうたわ……早う連

れて行つて、どうなと勝手に致せ」

吟は、思わぬ助け舟の出現に、ほっとしたもの、若い嘉門のキラキラする眼に、新たな脅威を覚えぬわけにはゆかなかった……

紅葉落涙

吟は、嘉門の部屋で三日三晩を明かした。

嘉門は吟をいたわるだけで、微塵も体を求めはしなかった。いつも、遠い所から熱っぽい瞳で見詰めている。吟は一つ年下のまだ少年の名残りのある嘉門に、妙にうちとけてゆくのを覚えた。嘉門には、今までのような男の生臭さが感じられなかった。吟は嘉門へそこはかとなき慕情を抱き始めている自分を叱るようになった。

（大事な隠密の仕事があるではないか。こんな所で暇どつてはおれぬ……なんとか逃げ出さねばならぬ……）

彼女はわが心をせき立てて激しい焦燥を覚えはじめた。

嘉門は、毎夜、一つしとねに並びながら石のように凝然としていた。退屈なほど静かであった。吟は、心とは別の体の底がやるせなく疼くを感じて、女の性が悲しかった。

四日目の夜であった……

いつになく嘉門はけわしい眼をしていた。

寢床に入ってくると、いつもの石ではなく、幾度も寝返りを打った。そして、不意に、「そなた、この儂が嫌いなのか？」

嘉門の激しい言葉と息吹きが、吟の頬を打った。

なんの反応もなく、黙りこんでいる吟へ、嘉門は重ねて囁いた。

「そなた、儂が嫌いのか？」

嘉門の指先から吟の体に微かに震えが伝わった。その指先の動きは、いら立たしげに、次第に乱暴になってきた。火のように暖かな手だ。吟は嘉門へ、はじめて生臭い男を感じた。が、それは決して嫌悪の情ではなかった。吟は、徐々に募ってくる嘉門の激情に耐えられなくなった。

「そなた、逃げとうはないか？」

嘉門が囁やいた。

吟は無意識のうちに、こっくりうなずいていた。

「逃がしてやってもいいぞ」

吟は、嘉門の顔をまともに見詰めた。いつの間にか、羞恥を覚える心の余裕は消えていた。かつてない、カッとした身内のはてりだった。

「どうだ、儂と一緒に逃げぬか？」

「……………」

「儂もここから逃げたいのだ……父上の物盗り野盗の悪事がたまらなく嫌になったのだ。父上はもう昔の武士の魂を腐らせてしまうた……武士の誇りも何もない……若い儂は、このまま、野盗としてみじめな生涯を送りたくないのじゃ……儂はまだ若い……夢がある……れっきとした大名に仕官して、槍一筋の武士になりたい……一緒に逃げてくれるか？」

「……………」

「儂は、最初に、そなたを見た時から、不思議と胸の底が疼いたのだ……そして、こんな殊勝な立身の希望が湧き上って来たのじゃ」

吟は、嘉門から云い出したこの誘いに、歓喜した。自然と吟の方から、嘉門の首筋へ廻した手に力がこもった……

静かな夜だった。やたらにふくろうが響くように鳴いている。

長い放心のあと、嘉門と吟は旅装を整えて寝静まった山寨を、こっそり抜け出した。

夜道を駆けるようにして、翌朝遅く、二人は京にたどりついた。

四条の旅籠に上った二人は、抱きあって、死んだようにたそがれ近くまで眠り続けた。

ふと、吟が眼覚めると、嘉門がぼつねんと枕許に坐っていた。吟が寝こけているうちに嘉門の激情が、彼の素肌に荒れたのだろう、吟はあらわになった胸もとを掻き合せながら起き上った。なぜか、嘉門の眼はきびしく光っていた。

「そなた、何か秘密があるな？」

不意に嘉門がたずねた。

「儂は見たのだ、そなたの肌に秘めた奇妙な疵を……最初は、ただの火傷のあとだと思つたが、よく見ると、池田武蔵守輝政と読めた……輝政といえば姫路の城主だ、それにしても、その奇妙な烙印はげせぬ……」

吟は、どきりとして、着物の前を合せると床の上に坐り直した。

「その烙印には、何か仔細がある……それに、そなたの掌には太刀のタコがある……武家の娘と見たが、そうであろう……仔細を語ってくれぬか？」

「……………」

「話せぬのか……儂はそなたを妻と思うている……仔細を話してくれてよからうが……」

吟は、嘉門の言葉に、ある考えが閃いた。

（嘉門は仕官がしたいと云った……あたしも嘉門を恋うている。いずれは夫婦になる二人

だとしたら、これから、駿府の徳川家康の許へ行くまでの道中、嘉門は格好の護衛者ではないか。秘密を明かして、家康の許に行き着けば、嘉門の仕官の道を願い出よう……）

吟はこう思つて、烙印の秘密を明かし、家康仕官の話をした。

「それはまことのことなのか？」

半ば疑うように黙って聞いていた嘉門は、ぼつりと云った。

「なんで嘘など申しましょう」

「左様か、それが本当とすれば、もはや、駿府まで行くに及ばぬ」

「え？」

「儂は徳川方に仕官はしとうない……噂に聞くと、石田三成殿が武芸者を新規召抱えているとか。その秘密を持って願い出れば、たいそうな手柄になる……」

吟は、聞くなり青ざめてしまった。

「さ、行くのじゃ、石田殿のもとへ……」

吟は、嘉門の顔を睨むようにしていたが、きつと唇を噛んだ。その時、吟は、自分の犯した重大なあやまちをとり戻すべく、胸の痛むような決意をしていたのである。

翌朝、四条の旅籠で、若い侍が、無惨にも胸を一突きされて悶絶しているのが発見され

て、大騒ぎだった。下手人は、連れの若い女に違いなかった。若い男は云うまでもなく、嘉門であり、逃亡した若い女は、吟である。

……吟が駿府の徳川家康の居城に辿りついたのは慶長四年の晩秋。家康の御前に伺候した吟は、緊張に頬をこわばらせ、小袖の裾をみずからからげて輝政の口伝を伝えた。

「ほう。輝政も粹な密使をつかわしたものじや……」

家康は好色な眼で、吟の青白い肌を見詰めながら、そう云っただけだった。吟は、その家康のまなざしを皮膚に痛いほど感じながら、激しい憤りが、胸一杯にみなぎってきた。

(あたしは、輝政や家康のために苦勞をしただけなのだ……あの生れてはじめての嘉門との恋も、わが手でつぶしてしまったではないか。はじめて知った女の幸福を、隠密というすげない目的のために、潰えさせてしまったのだ……)

吟は、京の旅籠で刃を突き立てて殺した嘉門の死顔を睨にうかべた。

吟は、涙をおしこらえながら、狭間の方を見た。そこには、城のまわりを取り巻いている紅葉が、はらはらと、吟の涙を象徴するかのように、散り舞っていた。

★スリルとファンタジーのグラマー・サスペンス★

耽奇小説

No. 3

目下発売中!!

定価 一二〇円・一十二円

中野区江古田一・久保書店

口絵・誘惑殺人事件
色頁・現金に裸女を張れ
女にたかる……岡田鯨彦
焼かないで……楠田匡介
女のリスト……今 官一
黒猫に礼をいう……都筑道夫
寢室の眼……島本春雄
悪 運……島 久平
女はそれを待っていた
狩 久
黒い点鬼簿……宇治川龍
ヨカリンを探せ……岬洋之助
夜の哄笑……平林啓子
火星夫人の耳飾……岡村雄輔
一〇一人目の乗客……高 三明
人工受精に來た女……野田開作
自殺は俺が引受けた……辻以知郎
ヴェガに憑かれて……青柳淳郎
△裏窓臨時増刊第7集▽



墓を殺す……潮 寛二
空中ヌード劇場……飯田豊吉
妄執の軌跡……葉田 光
羅切供養異聞……竜胆寺雄
深夜躁狂症……猿若屯平

裏窓スリラー

死者は蘇える

矢桐 重八

沖 涉 二・画

美しい青年

志津子が買物籠を抱えて家に戻ると、玄関の土間に、見覚えのある黒い靴が、きちんと脱いである。神経質なほどに、ピカピカと磨かれてある靴。

(また、あの学生が来ているんだわ……)

志津子の胸に、青白い嫉妬がムラムラと燃える。

志津子の夫は、N大学の国文学教授、岡庭徳治である。その夫の教え子の学生が、今日もまた来ているのだ。浜谷という二十一歳の青年である。

(奥の書斎で、夫は、またあの学生と……) 自分の眼が、般若のように鋭く細く吊りあがっているのが、志津子には自分でもわかるのだ。





——浜谷青年が今から半年ほど前、はじめてこの岡庭家を訪れた時、志津子は大喜びでこのおとなしそうな学生を迎えたものだ。

東京駅から湘南線に乗って二時間もかかるこの神奈川県T町の岡庭家には、訪れる客もめったになかった。

結婚して五年になるのに、夫婦の間には子供がなく、まだ三十歳になったばかりの志津子夫人にとって、若い学生の訪れは、気のおけない、よい話相手になるに違いなかった。まして、浜谷は自分の夫の教え子である。

彼がはじめて岡庭家の玄関に立ったのは、ある日曜日の午後であった。

しかし、夫の徳治は書齋からとびだしてくると、にがい顔でつぶやいた。

「困るよ、君。こんな所まで……」

浜谷はそれを聞くと、女のように色の白い顔を赤くさせて、

「すみません。でも先生、とてもお逢いしたくなつて……。ゆるして下さい……」

と、頭を下げた。志津子は愛想よくそれをとりのした。

「まあ、よろしいじゃありませんか。こんな田舎にまで、わざわざおいでになるなんて、

熱心な学生さんですこと。さあ、早くお上りなさいな」

妻の言葉に、徳治も、

「勉強のことは、なるべく学校で聞いてもらいたいな。僕は家でも仕事を持っているからね」

などと言いながらも、書齋へ通した。

志津子は茶をもつて二度ばかり書齋へ行つた。志津子が笑顔で差しだす紅茶とケーキに浜谷青年は、

「は、は、すみません。奥さん、どうぞ、おかまいなく……」

と、恐縮して、何度も頭をさげる。

よく新聞ダネになるような、無軌道な学生たちにくらべると、あまりにも世間ずれのしていない、内気な青年にみえた。

(身体でも悪いのかしら……)

と、志津子が思うほどである。

そういえば、夫と話している時の眼の色の妙な熱っぽさも、つやつやとした唇の赤さも二十一歳の男性らしくない病的な美しさであった。ぴっちりとした身体にいた学生服が、色

★顧みられぬ妻の耐えがたい夜々の嘆きに、古井戸の穴が次第に深く口を開けて行つた！

白の顔に、よく似合った。

その日は、二時間ばかりで帰っていった。

「おとなしい、いい学生さんじゃありませんか。いまだき珍しい……」

と、志津子は、紅茶茶碗をさげながら、徳治に云った。

「うむ……」

と、夫はうなずいた。

「あの方のお家はどこ？」

「蒲田に下宿をして学校に通っているが、郷里は鹿兒島にある。大きな醤油屋の一人息子だ」

「田舎の旧家の息子さんね。どことなく品があるわ。日曜の休みまで、あなたのところへ勉強しにくるなんて、本当に感心だわ」

「もう、その話はいい。夕飯の仕度でもしないか」

と、徳治は、気むずかしい顔で云った。

それから一週間たつと、浜谷はまた岡庭家を訪ねた。

やがて、月に二、三度、彼は必ず徳治の書齋で、三時間ほどの時間をすごすようになった。

徳治は、常に渋い顔で、浜谷を迎えるのだった。しかし、それは、妻に対しての気がね

であることが、志津子にもだんだんわかってきた。

（なぜ、あの学生がくることを、夫は私に気がねをしなくてはならないのかしら？）

と、志津子は思った。私は、あの学生がくることに対して、いやな顔をした覚えは、一度もないのに……。

しかし――

一カ月半ばかりたって、もうすっかり志津子とも顔馴染になったはずなのに、浜谷はなぜか、志津子と口をきくことを避けた。正面むいて、顔を合せるのも避けているように思えた。

銀座あたりの流行の話題や、近ごろの若い男女たちの生活のありさまなど、なまなましいニュースを、浜谷の口から聞かれると思っていた志津子は、だいぶ、がっかりした。

（おとなしいんじゃないんだわ。もともと性格がヘンクツなんだわ……）

と、志津子は思った。

奥の書齋で、二人がいつも何の勉強をしているのか、どんな話をしているのか、志津子は知りたくなった。

多少のいたずら心もあって、志津子は紅茶をいれると、足音を忍ばせ、いきなり書齋の

ドアをあけてみた。

と、異様な光景が、彼女の眼にうつった。

徳治が、椅子に腰かけたまま浜谷と向き合っている。青年の肩を、じっと抱きしめているのである。

ふいにドアがあいた時、二人はバツと離れた。

しかし、もう妻はみてしまった。

何ともいいようのない不自然な、イライラした、不気味な沈黙が、三人をおし包んだ。背をまるくして、浜谷は猫のようにうなだれていた。耳のつけ根が真赤になっている。

「部屋に入る時は、ノックくらいしたらどうだ！」

徳治がどなった。

志津子は、わけのわからない不安と恐怖に襲われ、身体がふるえた。思わず、紅茶茶碗を床の上にとり落した。心の中で（わアッ）と、泣きだしていた。

――その浜谷が、また今日も来ているのである。しかも、志津子が買物に出た、その留守の間に……

夫の寝室

「志津子、帰ってきたのかい。お茶をたのむよ。浜谷君が来ているんだ」

と、書斎の中から、夫の声がした。

志津子は、返事をしないで台所へ行った。

茶をいれて、書斎のドアを押した。浜谷がうつむいたままで、志津子に頭をさげた。

彼女は、キラリと眼を光らせて浜谷を睨んだ。

「志津子。浜谷君を、今夜、家に泊めてあげるからね。夜になったら、僕の部屋に布団を敷いておくれ」

と、徳治が云った。

ぐっと胸にきたが、それでも、

「はい……」

と、返事をした。自分でも、おどろくほどの冷たい、ケンのある声だった。

六畳の和室に、夫と浜谷の布団を敷きながら、志津子は、ふいに身が疼いた。

——この半年、志津子は夫と全然接していない。徳治が妻を求めようとしなかった。夜半めざめて、志津子は一人あえいだ。三十歳の女体である。恥じらいながら、いくたびか夫に訴えた。徳治はひややかな顔で、妻に云った。

「僕らのような頭脳労働者はね、そういう欲

望は、ほかの者より少ないのだ。わかってくれなければ困る」

そういうものか、と、志津子は思った。

そういえば、何かの雑誌にそんなことが、書いてあったようにも思う。

新婚当時から、夫の要求は少なかった。たまに接しても、義務でそれを行うような、熱意も興奮もないものであった。結婚して一週間もたつと、夫婦は別々の部屋に寝た。

恋愛結婚ではなかった。四十近くになっても独身でいる徳治に、世間体を気にした徳治の母が、半ば無理やりに、遠縁にあたる志津子を押しつけた形であった。

二人の間に子供ができないのも、そのあたりに原因があるのかもしれない。

志津子は、夜の不満を耐えるのに、せいいつぱいの努力をした。

夫婦として五年間の生活に、やはり志津子は徳治に対して、夫としての愛情が育っていったからである。

二人の布団を敷き終えると、志津子は、ほっと溜息をついた。

その夜——

志津子は、ふと目ざめてトイレに立った。

一時半頃であらうか。

廊下の向うからある気配を感じた。胸が波立った。

志津子は、足音を忍ばせて、夫の寝室の外に近寄った。

異様な気配である。

志津子は、障子の外にそっと膝をつくと、犬のように手をついて、中の様子をうかがった。

「せ、せんせい……」

消え入るような、浜谷の、きれぎれの声であった。

志津子は、クラクラと目まいがした。身体が、カッと熱くなった。

自分の部屋に戻ってから、志津子は、動悸が静まらなかった。

障子をガラリとあけて、夫を布団の中からひきずり起してやりたかった。しかし、それは、さすがにできなかった。

暗闇の天井を睨んで、志津子はすさまじい嫉妬の炎を燃やした。ほうっと息を吐けば、息はそのまま青い火となって吹きあげ、天井板を焦がすかもしれない。

闇の中に見ひらいた眼が、狂人のように据っている。

（——よく、週刊雑誌なんか騒がれている

アレなんだ。男同志の……。しかし、自分の夫が、まさか……。だが、間違いはない。そう思えば、思いあたることばかりなのだ。ああ……)

志津子は、眼をつぶった。頭の中がキリキリと痛む。どす黒い絶望感が、胸のあたりに重く苦しくおおいかぶさる。

(――夜の私を避ける、すべての原因はここにあったのだ。四十近くまで結婚しなかった原因も……)

嫉妬の鬼

志津子は、どうしたら夫から浜谷をひき離すことができるかを、必死になって考えた。

しかし、すべての方策は、彼らの愛情にくらべて、弱いもののように思えた。

この特殊な愛情の強さは、それが簡単に得られないものだけに、異常な激しさをもって結びついていることを、これも週刊雑誌からの知識で、志津子は知っていた。

(――しかし、私は、必ず、彼らの間を、ひき裂いてやる！)

彼女は、この執念の鬼になった。抑圧された不満が、意外なところに凝固し、爆発した。ある日、台所で、錆びかけたホウチヨウを

磨きながら、彼女は、最後の決心に達した。

(――浜谷を、殺してやる！)

志津子は、磨きあげたホウチヨウを、ぐっと握りしめた。眼が血走った。

その夜から、あれこれと手段を考えた。

刃物をふるう力はなかったし、血をみるのはおそろしかった。そして志津子は罪人になって警察へ連れていかれるのもいやだった。

やがて、彼女は、ついに最上の方法を考えだした。

岡庭家の裏は、すぐ雑木林におおわれた丘になっている。その丘の中途に、古い小さな神社があった。神主などのいる神社ではなく、すでに見捨てられた、みすばらしい建物である。子供すら、めったに遊びに来ない。

その神社の裏手に、おそろしく深い古井戸があるのだ。囲いはすでに朽ち果て、雑草が周囲に生い茂っている。うっかり足を踏みはずしたら、たいへんなことになるので、竹垣をめぐらしてある。しかし、近頃ではその竹垣も雨風にさらされて腐り果てているのだ。

(あの古井戸に、浜谷を突き落したら……)

真つ逆さまに落下していく浜谷の姿を、志津子は想像した。

古井戸の底には、石がある。その石に浜谷

は頭をぶつけて死ぬだろう。たとえ即死しなくとも、底には一尺ほどの雨水が溜っていて有毒なガスが湧いている。落ちたら最後、あの乾からびた空井戸からは、二度と生きては這い上れない……

志津子は、青白い顔をひきつらせて微笑した。

浜谷は、その後も、しばしば泊っていくようになった。もちろん、徳治の部屋に寝た。

世間の目には、仲のよい師弟とも見えるであらう。

志津子が、露骨にいやな顔をする、徳治は、今度は外泊をするようになった。いままで規則正しかった帰宅時間が、夜十一時を過ぎることが多くなった。

(あの学生と、外で、なにかをしているに違いない！ 外でなにかを……)

志津子の決心は、ますます固くなっていった。

殺人成功

機会は、案外に早くきた。

その日、徳治は、横浜に思わぬ急用ができ、朝早く家をでた。

日曜日である。志津子は胸騒ぎがした。今日あたり、浜谷がやってくる日なのだ。

午後二時頃、表のベルが、チリチリと鳴った。志津子は玄関にとびだした。見馴れた黒い学生服、浜谷だった。

「こんにちは、奥さん……」

彼はいつものように伏目がちに挨拶した。ハンカチで、額の汗を拭いている。駅からこの家まで、歩いて二十分近くあるのだ。

「あら、浜谷さん、いらっしやい……」

志津子は、いつにない笑顔をみせた。

「あの……先生は？」

浜谷は、おどおどと聞いた。

「先生は、たった今、裏の神社へ散歩に出かけましたのよ。あなたが見えられたら、そっちの方へ案内してくれて、おっしやっていいましたわ……」

「そうですか。……でも、僕、ここで待たせていただきます」

「いえ、あの、なにかあなたにお話しがあるそうで、来たらぜひ裏の山へお連れするように云われておりますから。私のご案内しますわ。すぐそこですよ」

「そうですか。……じゃ、どうも、すみません……」



浜谷は、半信半疑の顔だったが、志津子に先に立って外へ出るの、仕方なく後についてた。

い道を、志津子は先にのぼった。

「ちょっと坂が急だから、気をつけて……」

「はい……」

裏へまわると、すぐ雑木林で、その間の細

しばらく行くと、浜谷は立ち止った。

Soji.O.

「あ、奥さん。僕、玄関へハンカチを忘れてきました」

「あら、そんなの後でいいじゃないの。さアもう少しよ」

志津子は、先をせかした。こんなところを他人に見られては、きわめてまずい。しかし見渡しても、いつものように人影はおろか、犬や猫の気配すらなかった。

朽ちた社の建物が現われた。この辺りだけわずかな平地になっている。

「先生は、いつもこの神社の裏側の縁に腰をおろして、ご本を読んでいるのよ」

と、志津子は、もっともらしく云った。

二人は、裏手にまわった。

「アラ、どうしたんでしょう。見えませんかね……」

探すふりをしながら、彼女は次第に浜谷をれの古井戸の穴のそばへ歩かせた。

「すいぶん、静かなところですねエ……」

と、浜谷が、感心したように周囲を見まわした。

と、

「あれエ！……」

志津子が、声をあげて浜谷の胸にとびついた。

「ど、どうしたんです、奥さん？」

「そ、そこに、蛙が……」

「蛙？ なあんだ……」

「でも、私、蛙がとてもきらいなの。追い払ってちょうだい。早く、早く……」

「どこにいるんです？」

浜谷は、仕方なく小腰をかがめて、志津子の指さす草むらを見た。

「そこよ、もう少し先、もう少し……」

そろそろと、浜谷は腰をかがめたまま、前に進んだ。

「いけませんよ。逃げちゃったんですよ」

「いるわよ。そこ、ホラ、もう少し先……」

また一、二歩、浜谷は足をすすめた。

その腰のあたりを、うしろから、志津子は力いっぱい、どんッ！……と、ついた。

「ワァッ……」

浜谷は、頭から先に古井戸の穴に落ちていった。

わわわわァん……

という、不気味な反響。

ばさっ！……

音がすると、もう静かになった。

すばやく、彼女は、あたりを見まわした。

いぜんとして人影はない。

ムムムムウウ……

という、うめき声が、井戸の底から聞えたような気がして、志津子は、ギョッとした。

耳を澄ませた。声はもう聞えない。

（空耳だったんだわ……）

ほっとすると、彼女は、そこへ、ヘタヘタと坐りたくなった。足が、ガクガクと小刻みにふるえている。だが、いつまでもここにいては危険だ。

（うまくいった……成功した……）

ふるえる足を踏みしめながら、志津子は急な坂を下りはじめた。足の指に力が入って、買ったばかりの下駄の鼻緒が、ブツリ、と切れた。

（落ちついて、落ちついて！……）

彼女は、自分で自分をいましめた。

（これからの、演技がたいへんなんだから）

親切な警官

玄関をあけると、家の中に人の気配があった。夫が帰ってきているらしい。

志津子は、ドキリ、とした。

「志津子か。でかける時は鍵をかけていけとあれほど云ってあるじゃないか。不用心もはなはだしい……」

徳治が、いきなり怒声を浴びせた。

「はい、どうもすみません。つい、うっかりして……」

志津子は、すぐ謝った。声が少しふるえていた。

「浜谷君が、こなかったかね？」

と、夫が聞いた。

「見えましてわ」

と、志津子は答えた。

「で、どうした？」

「先生はお留守だというと、すぐ帰られましたわ……」

「そうか……」

その話は、それで終わった。彼女は、ほっとした。

その夜、徳治は珍らしく妻を寝室へ呼んだ。志津子は不気味なものを感しながら、久しぶりの求めに応じた。昼間の興奮が作用しているのか、志津子は異常に燃えた。この夫を死んでも離すまい、と、彼女は狂おしく徳治を抱いた。

眠ってから、志津子は夢をみた。

顔の半分が、はじめにつぶれ、頭から血を流した浜谷が、井戸の底から必死になって這い上ろうとしている。

彼女は、びっしりと寝汗をかいた。うなされて目をさますと、暗闇の中で、夫の顔がじっとこちらを見つめている。

志津子は、ゾッととして布団をかぶった。それから、十日ほどたって、夕食の後に、ふと徳治は云った。

「どうしたとか、浜谷君がいなくなったのだからね」

「いなくなった、とは、どういうことなんですの？」

と、志津子は、聞き返した。

「行方不明になったのだ。学校へも出てこない……」

「そんなことが……。郷里の方へでも、帰ったのではないかしら？」

「鹿児島へも連絡した。帰っていないのだ」

「山へでもでかけて、遭難するというような……いやな想像ですけど……」

「あれは、山はきらいだ。どこか旅行に出かけるとしても、わたしに黙っていくはずはないのだ」

その言葉は、志津子の心に、また嫉妬の火をおこさせた。しかし、あの男はもうこの世にいないのだ。いくら徳治が探したところでもうあの男に、二度と逢うことはできないの

だ……。彼女は心の中で、妖しい微笑をうかべた。一瞬、勝利の快感に似た陶酔が、志津子の身体を包んだ。

それから、一週間ばかりたったある日、一人の警官が、岡庭家をたずねた。

徳治は学校に出ていた。警官の口から、浜谷の名がでた時、志津子は、さすがにヒヤリとした。

しかし、警官の問いには、終始、静かな表情で答えることができた。

「……ええ、たくも特に目をかけて面倒をみていた学生さんなものですから、急に行方が知れなくなつたと聞いて、私まで心配で、心配で……。早く無事に探しだしてくださるよう私からもお願い申しあげますわ。おとなしい学生さんでしたのに……」

彼女は、眉をひそめて、美しい憂い顔をつくった。この演技は自分でも上出来だと、彼女は思った。

「はア、若い学生には、こうした失踪事件はよくありがちなことでして。神経衰弱とか、思想とか何とかに行き詰ったとかでね。不良の仲間に入るのも困りますが、あんまりまじめすぎるのも、困りものです、ハハ……」

と、警官は、人の好きそうな笑顔をうかべ

た。五十に近い年配である。

「何か、手掛りでも?……」

と、やや緊張して、志津子は聞いた。

「それが、さっぱり……。交友関係もごくわずかでして、おまけに珍らしく女関係が一つもない。鹿児島親御さんから搜索願がだされているので、こうして探しているんですが私のカンでは、案外見当はずれの所から、ヒョッコリ出てくるんじゃないかと思っています。どうか奥さんも、そんなに心配なさらずに……。それよりも、このお家は、ご主人がお出かけになると、あとは奥さんがお一人で?……」

「はア……。主人が、ぶっそうだから、女中か婆やでも雇おうというんですが、何しろ、夫婦二人きりなもんですから、つい、もったいなくて……」

「それはしかし、ご主人の心配

するとおりですよ。いやア、

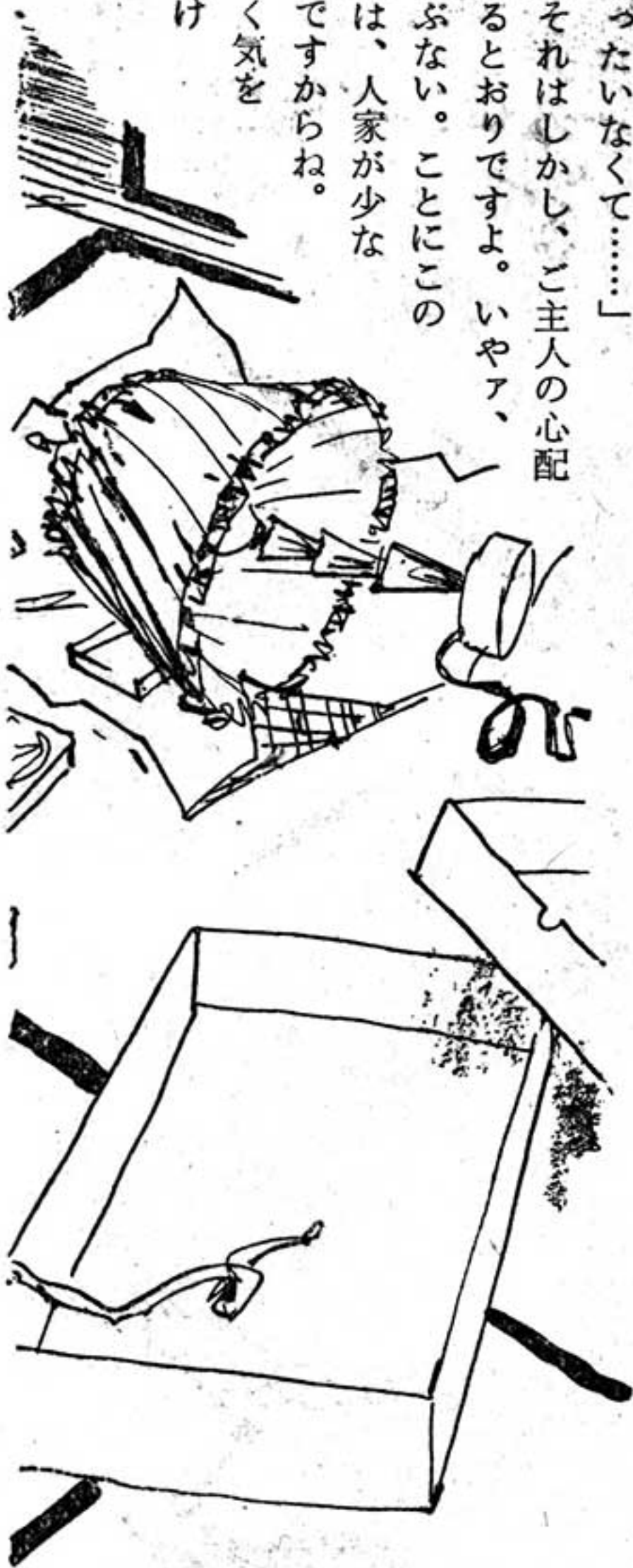
あぶない。ことにこの

辺は、人家が少な

いですからね。

よく気を

つけ



てくださいよ。電話があるんでしたら、何かあった時は、すぐ警察に知らせてください……」

「はアありがとうございます」

警官は、親切な言葉を残して帰った。

志津子に疑いをかける気配は少しもみえなかった。それは当然である。

大学教授夫人が、夫の教え子にかくしたり殺したりする理由は、少しもない。

表面は、しごく円満な岡庭夫妻なのであるから……。

おそろしき脅迫

その夜、志津子は、買物籠を抱えて、夜の道をいそいでいた。

夫の徳治は、今夜ほかに会合があるとかで帰宅が遅くなるはずだった。

志津子は三時頃家を出て、駅前の映画館で久しぶりに洋画を見た。それからマーケットで夜食の買い物をした。

あたりはすっかり暗くなっているの、あわてて買い物すませると、暗い道をいそいだ。

家まで、あと二百メートルばかりの所まで来た。道の左側は雑木林、右は畠が続いている。この辺りまでくると、人家はまばらだった。馴れている道なので、さびしくとも志津子は平気だったが、今夜に限って、背筋に氷でもあてられたようなウソ寒さを感じる。にぶい電燈をつけた細い電柱が、行く手の道の端に、ポツリと立っていた。

その、地上に投げた明りの輪の中に、急に人影が現われた。志津子はドキリとした。

しかし、家はもうすぐだ。彼女は、その人影から顔をそむけて、大いそぎでそこを通り過ぎようとした。

と――

「奥さん……」

その人影が、低い、しゃがれた声で彼女を呼んだ。

Seji.O.



く固まった血がこびりついていて、
しかも――

彼女の咽喉で声をあげた。
顔の半面が、醜くつぶれてい
る。鼻がつぶれ、ねじまがり、左
の目玉はギョロリととびだし、唇は
頬にひき吊れている。額のあたりに、黒

(ひえッ!.....)

の男の顔をみた。

って振りかえり、そ

とまる。思いき

志津子の足が

ぎくりと、

っ?」

「え

「ひえッ!」

男は、低い声で、そう云った。

ですよ」

「お、おくさん。ボクですよ、浜谷

て、頭には、N大学の帽章をつ

に汚れ破れた黒い学生服を着

その醜怪な男は、ボロボロ

後にのけぞった。

あまりの恐怖に、志津子は気を失いかけ、

「幽霊じゃ、ありませんよ。ホラ、ちゃんと

足がありますよ。ヒヒヒ……。奥さん、あな

たは、ずいぶん、ひどいことをしてくれまし

たねエ……」

浜谷は、二、三步前に歩いた。

「あ、あ、あなたは!……」

言葉にならない。

「おかげで、こんな顔になりました……もう

ボクは、先生の前にもでられない、ヒヒヒ」

「ゆ、ゆるして、浜谷さん! 私がわるかつ

た!」

志津子は、やっと叫んだ。

その時、道の向うに足音がして、人のくる

気配がした。浜谷は、さっと姿をかくした。

彼女は我にかえると、バタバタと裾を乱し

で駆けだした。気も狂わんばかりの激しい恐怖だった。

その夜、十一時過ぎになって、徳治が帰ってきた。

「どうした？ 顔色が悪いじゃないか。どうかしたのか？」

と、夫は妻に声をかけた。

「いえ、べつに……」

志津子は顔をかくすようにして答えた。

「気分が悪かったら、僕にかまわず先に寝ていてもいいんだよ」

そう云いながら徳治は、取り乱している妻の様子を、じっと見つめていた。

乳房に這うもの

それから三日ばかり過ぎた夕方、

「ただいま……」

と、徳治は玄関の戸をあけた。

が、いつも迎える妻の姿が見えない。

（また鍵もかけないで外出か。だらしのないやつだ！……）

にがい顔で、徳治は靴を脱いだ。しかし、奥の座敷に、異様な気配がある。

徳治は胸さわぎを覚えて、座敷の障子をあけた。

「あッ！」

かくせんと、彼はそこに棒立ちになった。

薄暗い座敷の真ん中に、仰向けになって倒れているのは志津子である。首に手拭いが喰いこんでいる。

和服の襟もとが、ぐっとはだけ、二つの乳房があらわにむきでている。

「志津子！」

徳治は、妻の肩に手をかけて抱き起した。

両手首が布紐で後ろに縛られているのが痛々しかった。

彼女は、もう眼をひらかなかった。完全に絞め殺されていた。

部屋の中は、乱れに乱れていた。タンスのひきだしは全てあけ放たれ、金目の物はなくなっている。

徳治は、むきだしになっている妻の乳房にふと眼をやった。白い、まるい乳房の上に、小さな灰色の虫が、モゾモゾと這いずっている。

シラミだった。

「あいつだな。ちくしょう！」

彼は、よろよろと立ち上った。

電話をとった。ややためらったが、所轄の警察を呼びだした。

「——妻が殺されました。殺して逃げた奴はわかっています。ボロボロの学生服を着た浮浪者です。ええ、乞食です。顔にひどい傷のある男です……」

徳治は、頭をかかえて、がっくりと膝をついた。部屋の中は、すっかり暗くなって、その闇に、殺された志津子の二本の足だけが白と浮き上っていた。

罪は誰に

警察の取り調べ室で、徳治は、ほうぜんとした表情で、問われるままに語っていた。

「——あの日、私は家に戻った時、玄関に浜谷のハンカチが落ちていたのを見つけたのです。私は、私の留守に浜谷が来たことを知りました。ええ、私には、そのハンカチの匂いをかいただけで浜谷の物だと知ったのです。あの男の汗の匂いは、私には、すぐわかるのです……」

——妻が帰ってきたので、私は、浜谷が来なかったかと聞きました。妻は、来たがすぐ帰ったと答えました。私はその時、妻のはいっている下駄の鼻緒が切れているのに気がつきました。妻は人一倍注意深い性質で、外へ出る時に、鼻緒の切れそうな下駄をはいていくよ

うな不用意なことはしません。ましてその下駄は前日に買ってきた新しいものです。私は何かあったな、と、すぐに感じました。その時の妻の顔色も、ひどく青ざめていたのを思い出します。……

——浜谷の行方不明を知った時、私はすぐ妻を疑いました。私と浜谷の間を、妻が嫉妬しているのを、私は知っていました。ええ、そうです、私と浜谷の間をです……

——私は、妻が浜谷をかくしたのだと思いました。それ以外に浜谷の失踪の理由はないのです。かくす……殺す……殺したかも知れない……私は、リツ然としました。夜、眠っている妻が、ひどくうなされていました。そのうわことから、私は、ますます、妻への疑惑を深めました……

——私は、必死になって考えました。私が妻ならば、浜谷をどうやってかくすだろう……私は、ハタと思いあたりました。裏の神社の古井戸のことです。誰の眼にも触れないで、女の手で、男一人の姿を消すことは、妻の場合、あの古井戸を利用するよりほかに方法がありません。

——私は、すぐにあの古井戸へ行ってみました。中をのぞいても、暗く深く、わかるはず

はありません。と、すぐそばの草むらに帽子が落ちていました。ええ、浜谷の学帽です。しかし、これだけの証拠では、妻の犯行を確かめることができません……

——私は、顔にひどい傷痕のある乞食を探してきました。古着屋で古い学生服を買い、それをさらにボロボロに破り、その乞食に着せました。拾った浜谷の帽子をかぶせ、云うべきセリフを教えて、妻の前にその姿を現わすように指示したのです。乞食が望むだけの金を与えて……

——ええ。私の心には、愛する男をうばわれた憎しみがあつたのです。でなければ、あんな陰険な復讐は考えつくものではないでしょう。私の心も、その時、すでに狂っていたのです……

——その結果、妻のやった怖ろしい行為を知ることができました。妻は、浜谷に化けた乞食に向って「ゆるして、浜谷さん」と、云ったそうです。ああ、やっぱり……

——ところが、その乞食は悪い奴でした。妻の犯罪を敏感に察して、私の留守中に家に上りこみ、今度は芝居でなく妻を脅迫し、殺してしまつたのです……」

徳治は、ここでふつと言葉をきつた。

係官も、いまは無言で、この大学教授の奇怪な告白を聞いていた。

その時、一人の警官が部屋に入ってきた。

「逃走中の学生服を着た乞食を、T駅線路附近で逮捕しました。住所不定、山形市造と名乗っています。問い詰めると、すぐ犯行を自供しました。だいぶ盗品を持っています」

「そうか、ご苦労……」

徳治は、眼をつぶって歎息した。

「つかまりましたか。……ああ！ しかし、妻を殺したのは、あの乞食ではないのです。浜谷を殺したのは、妻ではないのです。みんな、みんな私のせいなのです。責任は、みんな私にあるのです！ 私が罰せられるべきなのです！ かわいそうな志津子！ かわいそうな浜谷……ああ……」

徳治は髪をかくむしり、顔をおおってうめいた。

集 募 稿 原

本誌に適すると思われる原稿なら何でも結構です。アブ・ストーリー、告白、体験、小説等としどしお寄せ下さい。枚数三十枚迄

九度山異変

紅^{べに}紐^{ひも}呪^し縛^{ばり}

小田 桐 爽

東 桂 史・画

★手枷猿ぐつわに身悶えていた女は何者？

★甲斐々々しく紐を編む白い指先の企みは…



飛ぶ男

佐助は、風のように馳けていた。

速い——。それでいて足音が全くなかった。

た。もし、白昼、人がこれを目撃したら、天

狗よ、通り魔よ、と騒ぎ立てるに違いない。

だが、佐助は別に急用を持つ身という訳で

もない。いわば忍者のたしなみとしての足馴

らしであった。

関ヶ原の合戦以来十四年——天下の風雲は

漸く急を告げんとしていた。

佐助は近頃、武者震いを覚える事が多くな
った。すると彼は、自分の体力や術を、最
大の限度まで確かめずにはいられなくな
る。

今日もそんな日だった。

何事か起きるような気がする。いや、ど

こかで、きっと何事かが起っているのだ、と

思う。間もなくその波紋が訪れるだろう。

波紋は荒波となり、飛沫を上げ渦を巻く。

この山里の平和と別れねばならぬ日も、間

近いのだ——。

九度山村の坂道にさしかかると、樹々の間

から、真田屋敷の灯が見えた。

佐助は一気に坂を上りきった。

ふと、行手に人の気配がした。

月はないが、佐助にはわかる。

男と女だ。何事か争っている。場所は、屋

敷の横、林の中だ。

佐助は音もなく近づき、身を伏せて瞳を凝
らした。そして、軽く舌打ちした。

男は三好清海入道だった。若い女を組み敷
いている。女の白い素足が、逃れようとし
て、しきりにもがいている。

「お離し、お離し下さりませ！」

必死の声だ。が、それも呻きに変った。女
は声を奪われたのだ。

「不埒な奴！」

佐助は宙を飛び、いきなり清海入道の前へ
降り立った。

「おっ！ 何奴……何だ、猿か」

「何だではないわ！ 生ぐさ坊主め！」

「生ぐさ？ 違う違う」

清海入道は手をしきりと振り、苦笑した。

「猿、人助けをすところだ。この娘、死ぬ

「気なのだ。手荒だったが、歩むを得ん」

娘は、猿轡を締められ、後手に縛られてい
るようだった。佐助は憤然とした。

「女を手こめにかけておきながら、人助けと
は凶々しい奴だ！ まさか、極楽往生という
洒落でもあるまい」

「何を吐かす、舌を嚙もうとしたので、口を
縛ったまでだ」

「手を縛ったのは何故だ！」

「俺の知った事か！ その娘、縛られていた
のだ。人声がするので、出て見ると、ここに
縛られて泣いていた。解こうとしたが、猿、
縄ではないわ。鉄の手枷だ」

「鉄の手枷？」

佐助は娘の体を改めた。確かに鉄製の手枷
だった。嚴重に喰い込み、肉を嚙んで、細く
白い手首には血さえにじんんでいた。

「なるほど……」

「俺の力でも手に余るので屋敷へ担ぎ込もう
としたが、娘は、死ぬ、と云って舌を」

「わかった。疑って、済まん事をした」

「わかればよい。俺も元来、あまり癖の良い
方ではないからな。疑ぐるのが当り前のよう
なものだて、ワッハハハ」

清海入道は豪快に笑って、娘の体を担いだ。

「とにかく、殿のお力を借りよう」

清海入道は大腿に歩き出した。

娘は長い黒髪を乱し、二、三度もがいたが
むなしい抵抗と知ってか、ぐったりと全身の
力を抜いた。

南蛮手枷

「なるほど、珍しい戒具のう……」

真田佐衛門佐幸村は、女の手枷を凝視した。

血のにじんだ手首の下で、女のなやかな
腰がピクリとうごめいた。

「殿、猿轡を外してくれ、と、女の目が云っ
ているようです。もう死ぬ気はないと——」

猿飛佐助がそう云うと、清海入道は早速女
の口を自由にした。

柔い頬には布の跡が走っていた。

「済まんう。俺は馬鹿力があるので、少し
きつく締め過ぎたかも知れん。悪く思うな」

清海入道は、大きな掌で女の頬を撫でさす
った。

「そうだと。当て身を喰わせればそれで済
んだはずだ。兄者は不器用でいかん！」

弟の伊三入道が睨んだ。

「娘御、なぜこのような目に遭われたか？」

幸村が静かに聞いた。

女は嗚咽して応えない。

美貌だった。抜けるほどに色白の肌をして
いる。背中から腰へかけての、しなやかな曲
線や、ほっそりとした手足は、百姓娘でない
事を物語っていた。

はだけた衿元からこぼれる胸のふくらみ。
乱れた裾の間からあらわれているすんなりと
した足。女の姿態は、武骨な真田一党の官能
を刺戟した。

「南蛮渡りの手枷と見た。もとより、人を捕
えるための道具だ、容易に破れる
ものではない。精巧な造りが施さ
れている。鍵なくしてはずす事な
どは、思いもよらぬ……」

不意に、幸村は突き放すように
云った。

「身の上でもわかれれば思案のしよ
うも浮ぼうが、こう泣いてばかり
おったのでは……」

穴山小助は呟やいて、腕組みし
た。

「猿、逃げて行く男などは見なん
だか？」

と霧隠才蔵が聞いた。

「それが、おらんのだ。誰とも会

特集 女間諜 女忍者 女

特集 謀間女・忍者女

わん

由利鎌之助が膝を打って眼を輝やかせた。

「鑢だ！ 鑢で断ち切るより他に手はあるまい！」

「うむ、いかさまな。それがよろう」

寛十造が大きくうなずいた。

「固そうな鉄だが、朝までには切れよう」

云い捨てて、海野六郎が座を立った。

「気の早い奴だ。鑢を取りに行きおった」

「しかし、そんな物が、この屋敷

にあったか」

「無ければ探しに出るまでだ」

「誰が切りほどく？」

「交替がよからう」

ガヤガヤと銘々が勝手な事を喋り始めた。

そんな家来達の様子を、幸村は微笑を浮かべて眺めている。

女が不意に寝返りを打ち、顔を上げた。

「……殺して、わたくしを殺して下さい」

「何を云う」

「……恐ろしい手枷や足枷を篋められ、けだもののような男達から、思うがまま辱められました！ 生きたくはございませんぬ」

一同はしばし沈黙してしまった。

「……その男達は何者だ？ どこにいる？ 名は何という？」

佐助がたずねた。

女は何事か云いかけたが、再び嗚咽がほとばしり、言葉にはならなかった。

佐 和

手枷がようやく断ち切れ、両手首の傷の手当を受けたが、女の腕は、まだ自由を取戻していないに等しい状態だった。硬直したように動かなかったのである。

どこで、何者から、なぜこのような責苦を与えられたのか、女は全く語ろうとしなかったが、その期間が長かったであろう事は、誰の眼にも明らかだった。

男達の武骨な手でいたわれ、床に就いた時、緊張が解けたためか、女は昏睡状態に入った。やっと意識を回復したのは二日目の朝の事だった。

眼を開くと、すぐ近くに若者の顔があった。

「気がつかれたか……」

前髪立ちの若者は、端正な顔をほころばせた。涼やかな眼が知恵の輝やきに溢れている。

女は起き上り、身づくろいして臉を伏せた。

「名は何と云われるか？」

「……佐和と申します」

「年令は？」

「十八……」

「恐ろしい目に遭われたな」

女は応えない。

「身寄りはないのか？」

「……帰れませぬ」

涙声になった。

「……猿轡をかまされ、手枷を掛けられたまま、夜となく、昼となくさいまれ、舌を噛み切る事すらできなかったのでございます。……殺されていた方が」

女は絶句した。

「場所はどこだ？ 悪虐な者共、真田一党が討ち果たし、恨みを雪いでくれよう。当屋敷から、さほど遠くはあるまい」

「……わかりませぬ。掠われて、辱められ運ばれました。苦しみのみあまり夢現になり何も知る事ができなかったのです。ここがどこかも存じませぬ」

「紀州九度山村、真田の屋敷だ。私は真田大助……」

「……お願いがございます」

「願ひ？」

「わたくしを、このお屋敷で働らせて下さいませ。どんな事でも致します」

必死にすがる表情で、女は訴えた。

「と申して……」

「お願いでございます。わたくしをお使い下さるよう、お取計らいを……」

女は大助ににじり寄り、哀願した。

若い大助は当惑した。

「……無駄とは思いますが、父上に話してみる。」

女手は、要らぬのだが

真田十勇士

幸村は女を住まわせる事にした。

女——佐和はよく働いた。飯炊き、風呂焚き、針仕事、洗いの……何をやらしても手際がよく、屋敷の内外はたちまち片づき、小ざれいになった。

真田十勇士、と云っても、自分達が勝手に

そう名乗っているのだが、彼等は佐和の存在を喜んだ。何事につけても重宝であったし、

佐和の美しさには、心が和んだ。

落ち着き場所を得た佐和は日ごとに美しさが増した。化粧も控えめだし、立居振舞いも物静かだったが、荒くれ男達の中に在っては花のように輝やいて見えた。

好色な清海入道をはじめ、女にかけては自信があると自称する者達が、競うようにして佐和に接近しようと志したが、佐和は巧みに避けて誘いに乗らなかった。

「なあに、おほこではなし男を知った体だ。

腕ずくで迫れば容易に落ちようが、それでは貴様達に済まんし、興も薄いと云うものだ。

焦らずともよいのだ。何しろ、佐和を助けた

最初の男は、この俺だから……」

と清海入道は妙に自信ありげだ。

「馬鹿を申せ。佐和が貴様のような、ひげだらけのタコ入道になびくと思うか。あの女は手ごめに会ったので心に傷を持っている。それを癒やす事が肝要だが、何と云っても御面相がモノを云うのだ。従って、真田一党に人ありといえども、佐和を御し得る男前は、この俺をおいて他にはない」

と高言するのは、渋い男ぶりのよさを自分

だけで誇っている由利鎌之助。

「何を云うか。女は親切的な男に惹かれるものだ。殊に佐和は恐ろしい目に遭っている。親

切を喜ぶ事は人一倍のはず。そこでだ。貴様達が面白がって鉄の手枷を見物している時、真っ先に鎖を探し出して来たこの俺は、もう佐和の心の中に面影が住んでいる男だ。口惜しかろうが、あの女は俺が慰めてやる」

と大まじめに力説する海野六郎。

銘々が他愛もなく気負い立っている中に、佐助と才藏だけが、この騒ぎに加わらなかった。

「忍者は、女に気を許さぬものよ」

霧隠才藏は冷やかに、言葉少なく云うだけだった。

「俺も、何か気になる。殿のお考えは知らぬが、あの女、いないに越した事はない」

と佐助も首を傾けた。

「興醒めな奴等だな。忍者は疑り深くていかん。貴公等二人は、女を虚心担懷に抱いた事などなからう。詰らん男達だ」

と吐き出すように云うのは、根津甚八だった。

大助狂乱

幸村他、真田一党が出掛けてしまい、人の少ない夜だった。

仕事をすべて済ました佐和が、留守居役と

して残った大助の居間へ茶を運んで来た。
「済まぬな……」

大助は机から離れ、佐和と向い合った。

「お寝みなされませ」

一礼して去ろうとするのを、手でよんだ。

「話して行かぬか。私は、まだ佐和の事を何も知らぬ。……知りたいのだ」

「どうか。何もお聞き下さいますな」

「そう云われると、余計知りたくなる」

大助は微笑し、茶をうまそうに飲んだ。

「親兄弟のもとへ帰る気にはならぬか？」

「生涯、お傍に置いて下さいまし」

「それはむずかしい」

「汚れた女ゆえにと……」

「そのような事を云っているのではない」

「ならば、何ゆえに哀しい事をお聞きせねばなりませぬのか、佐和は知りとうございます」

「真田の家には、任かねばならぬ武門の道がある……」

「戦さが始まりまするのか？」

「うむ、しかとはわからぬが、いずれ佐和にも去って貰わねばならぬ」

「嫌でございます。わたくしは、大助様のお傍を、離れたくはございませぬ」

「佐和！ 何を云う」

女の眼が、情炎にうるみ、息づかいが乱れた。胸のふくらみが、波を打っていた。

「大助様！ 佐和は！」

女は激情がせきを切ったように、男の胸へすがり寄った。

「何をする！ 佐和！」

「大助様！ 佐和は、あなたさまの、お情を受けとう存じます！」

大助は頬を紅潮させ、狼狽し、佐和を反射的に突き放すのだった。

佐和は嗚咽した。身も世もなく悶えながら泣き伏した。

「……佐和を、……知りたいと、仰せられました、……戦さが始まると、お云いでした。

なぜ、……男になろうと、思われませぬ」

「佐和！」

「……佐和の女を知る事が、武門の道にそむくのでございますか！」

「困った女だな、佐和は」

佐和は不意に顔を上げて、大助を怨ずるように見た。手が素早く動き、大助の脇差の柄にかかった。

「何をする！」

佐和の脇差を抜き、己れの首筋へ突き立てようとした。

大助は身を躍らせて佐和の手首を烈しく打った。

「お止め下さいますな！」

「たわけ者！」

大助は刀をもぎ取り、佐和を睨んだ。

「汚れた身で、大それた思いを抱き、その上お腰のものに手を掛けました。愚かな女でございます。ご成敗を……」

大助は、得体の知れない憤怒に襲われた。

驚愕、狼狽、羞恥、様々な感情が錯綜し同時に男の血が荒々しく騒いだ。

「ぶ、無礼な！ 慮外者め！ 言語道断な女！ 腐った性根を、この大助が、仕置にかけてくれる！」

よく意味の通らない言葉を浴びせながら、大助は佐和を膝下に組み敷いた。

佐和は、眼をキラキラと輝かせ、喘ぎながら、挑発的な抵抗を続けた。

大助は、佐和の腰から帯を奪った。

女は袴を合わせようと必死になった。

大助は、女の両手首を掴み、畳へ押しつけた。女は低く呻いた。

大助は女の身体を半転させると、女の手を高手小手に組み、縛り始めた。

「ふ、不埒な！ いたずら女め！ この屋敷

に來た時と同じ姿に、してくれる！」

嚴しく縛った。手首から余った帯を胸へ廻わし、力一杯締め上げた。

佐和は、もう抵抗をしなかった。

大助は佐和の黒髪を荒々しく掴み、上半身を引きずり起し、女の白い頬を烈しく撲った。

「ヒィ！」

かすれた笛のような悲鳴が、女の口から洩れた。その頬に、指の跡が赤く浮き出ていた。

「ウッ、ア、もう、お許しを！」

「ならぬ！ 存分に痛めてやる！」

ギク！ と女の後手が、背の下で軋った。

「女！」

「はい……」

「覚悟せい！」

大助は手の甲で額の汗を拭った。

女は素直だった。眼を閉じ、ガックリと全身の力を抜いた。そして訴えた。

「……御存分に、ご成敗を。どんなお仕置をも、お受け致します、喜んで、佐和は嬉しゅうございます……果報に存じまする」

大助の眼に、突然、涙が光った。

初めて知る情感だった。

媚薬

「いかん。これはいかん……」

佐助は、音にならない声でつぶやいた。

昼間、佐助は幸村の供をして、高野山蓮華定院へ赴いた。同寺は真田家の菩提寺であり今日は幸村の母寒松院の一周忌なのである。

「若殿、今日は慶長十九年六月三日でござい



胸騒ぎに似たものを感じて、彼が一足先に

屋敷へ立帰ったのは、忍者の本能だった。

果たせるかな、若殿大助の身边に異変が起きていたのである。

佐助は、その発端を知らないし、主君の間を窺視する非礼も犯してはいなかった。

しかし、窓の外に立つだけで、忍者の鋭敏な感覚は、その場の情景を知り得た。

「まずい、まことに、これはまずい……」

平生の大助に、全く似合わない行動が窓の内でもくり抜けられている。火急の場合に直面して、迷う事なく適確な判断を下し、速やかに処置するのが、忍者のたしなみならば、今の佐助はまさしく忍者の道から逸脱していた。意外さのあまり狼狽が大き過ぎたのである。

「ええ、こうしてはおられぬ！」

我を取戻した佐助は、ようやく行動を開始した。——部屋の内では、小さな嵐が、まさに起ろうとしていた。

眼を閉じ、動こうともしない女の四肢の美しさは、あやしい花のはじらいか、それとも邪悪な女郎蜘蛛の擬態であつたろうか……。

大助は苦痛に似た表情で、女を凝視していた。その額には、脂汗がにじんでいる。

「……大助様……何を迷うのでございます……
お手向いは……致しませぬ」

佐和は囁やくように云って、眼を開き、瞳で誘った。

その時である。女の咽喉元へ、天井から巨大な蜘蛛が降りて来た。

女はそれを知って、甲高い悲鳴を上げ、どういう力によってか、三尺余も標へ跳ね飛んだ。

「大助様、く、蜘蛛が！」

と叫び、激しく身を震わせた。

大助は夢から醒めたような眼の色で、

「何？ 何と申した？」

と聞いた。佐和は、なおも叫ぶ。

「あー 背中へ、蜘蛛が！ 早く！」

「……何もおらぬではないか」

「ま、無慈悲な！」

佐和は耐えかねたような声で、怨じ、低い気合に似た呻きを発し、身悶えとも見える動作をした。すると、結び目はそのままに、白い手首が縄から抜けた。

佐和は、しきりと自分の背中を探った。

だが、蜘蛛はすでに天井へ戻っていたのである。天井裏の、梁の間では、身をひそめた佐助が「やれやれ……」と呟やいた。そして

口に掌を押し当て、一瞬、呼吸を整えた。

「殿がお帰りになりましたぞ。若殿、殿がお戻りです……」

表門の方で誰かが云う。しかし、それも実は佐助の造り声だった。

大助は複雑な視線を佐和に投げながら、立ち上り、廊下へ出た。

佐和は、胸に掛けられた細紐を急いで解き唇を強く噛み、手早く肌を隠すのだった。

髪を直しながら佐和が廊下へ出て行った後佐助は音もなく天井から飛び下りた。

そして、大助の机に置かれた湯呑みを取り鼻へ近づけた……。

「やはりそうか。……不埒な女め！」

佐助は、佐和の去った方を思わず睨むのだった。飲み残しの茶の中には、一種の媚薬が仕込んであるのを、彼は確認したのである。忍者、殊に女の忍者が、特殊な目的で用いる秘薬なのであった。

自縄自縛

夏が来た。

この年、豊臣氏の手によって京都方広寺の再建が成り、八月三日が大仏門眼の供養日と定められていた。だが、その前日、関東徳川

方は、梵鐘に「国家安康」という句があるのを奇貨として「家康の名を切り、頭と体を離し、呪詛したものだ」という難題を持ちかけ落慶供養の延期を命じてきた。

全くのこじつけであり、無法な圧迫であった。駿府と大阪との間を使者が頻繁に往来し江戸幕府と豊臣家の間は、次第に陰悪化した。「坐して滅亡をまたんよりは、起って勝敗を決すべし！」と、豊臣氏は大阪に拠って徳川との戦意を固めるに至った。

しかし、真田幸村は、いつまでも起ち上るうとはしなかった。

幸村は、九度山で不思議な事を始めていた。彼の考案による紐の製造である。新奇な編み方による強靱な紐は「幸田紐」と呼ばれ世人に珍重がられた。

真田の屋敷には五十畳の広間があり、仕事場として使われ、全員が作業に就いていた。

「ええ、……もう我慢がならんわい！ 殿、いったい、いつまでこんな紐を相手に暮すお心算か！ 今こそ豊臣家の恩顧に酬いねばならぬ時でございますぞ！ 殿！」

清流入道は坊主頭から湯氣を立ててどなた。他の者達も同様の気持だった。だが、幸村は静かに首を振る。

「儼はな、入道して伝心月叟の法号をうけ、もはや弓矢とは無縁の者だ。だが……紐商人はよいぞ。堺から十五貫もの注文が参って来る。……天下の事や戦場の往来には倦いた。皆、精出して編んでくれい」

この九度山の蟹居を監視する紀州藩の眼は絶えず光っていたが、幸村は全く意に介せず紐造りの指揮に専心するのみであった。

秋が近づいた頃には佐和もこの仕事を命ぜられた。佐和の造る紐は、金銀のもの、紅白のもの等で、華美な配色の指定があり、「特別な用途のもの故、武骨な男共には委せられぬ。美しく、また、強い品にと、心を籠めて……よいな」と幸村は云ったのである。

この頃、伊勢の大神宮で「蒙古が龍来し、日本国中が修羅の港となる」という御託宣があった、という噂が拡まり、山田の町が大騒ぎとなった。続いて「伊勢皇大神宮」の神符が空から降るといふ出来事が起り、諸民が狂気にみて町といわず山野といわず踊り狂うようになり、それがさらに、大和、近江、京都美濃、と拡大されて行った。

十月の三日——駿府の家康は大阪出陣の令を発し、軍列を整えた。そのしらせは、翌日、幸村の元へ届いた。鳩の帰巢本能を利用した

大阪方の忍者から伝達されたのである。

「ただちに佐和を呼べ。……こう申せ。紐を持参れ、とな」

幸村は佐助と顔を見合わせ、微笑した。

「殿様、お呼びでござりまするか……」

「うむ。佐和の紐が役に立つ日が参ったぞ。おお、丹精に仕上げたのう。これなれば佐助の造る紐にも劣るまい……」

幸村は紐を佐助に手渡した。佐助は、その真田紐をしごき、佐和を眺めた。

「佐和どの……いや、伊賀のお類どのと、もはや申そうか」

女は、その一言ですべてを察知した。後敏な行動であった。鋭い気合と共に、畳が立つて壁となり、襖が倒れて垣と変じ、佐助の追跡を妨げた。だが、佐助は敵の術を忽ち読み

鮮やかな跳躍をくり返して相手に肉迫した。勝敗は、すぐについた。もうもうたる埃の中で、佐助は女を捕え、組み敷いた。

「お前の縄抜けは、見ていたぞ。だが、この俺が縛る縄を抜ける者は、まずない。殿は、お前が忍者である事を、始めから見抜いておられた。わしも、霧隠もだ……」

「む、無念」

「ええ、往生際の悪い女だ。もう逃れようは

ない。神妙にせい。フッフ、殿は皮肉な御方

よ、自分を縛る紐を、お前の手で造らせた」

関東方の忍者、伊賀者のお類は、華美な真田紐で袴々と高手小手に縛り上げられた。忍者を縛る法にかなった佐助の補縛は、複雑をきわめ、この上もなく厳重であった。残りの

真田紐で、お類は天井から吊られた。

——それから三日目、すなわち、慶長十九年十月六日。真田一党は、最高潮に達した町の混乱に乗じて、易々と九度山の閑居を離れ、

難なく大阪へ入城したのである。

一杯食わされて、周章狼狽した紀州藩士が踏み込んで来た時には、強靱で華美な真田紐で縛られ、猿ぐつわまで締められたままで吊

られている美女の、凄艶な苦悶を発見するのみであった。そして、その首には、空色の太

い風系が縛り付けられてあり、糸の先は軒下の滑車を経て、中天高く伸びていた。

冴えた秋空には、巧みな青色の擬色で造られた大風が浮んでおり、地上の縛られた女が必死の身悶えをするたびに、動揺する風の辺

りから、紙片が舞い散っているのを、侍達はようやく認め得た。もとより、その紙片とは

「伊勢皇大神宮」の神符に他ならなかったのである。

(終)

裏

窓

既刊号目次

33年(五月号)裏窓妖異捕物特集号

○絵物語・乱世艶色隠密記	画・山田 彬弘
○絵物語・血まみれマリ	画・秋吉 修
グラビア・別離の詩	撮映・藤沢 修
新連載・地獄の乳房	飯田 豊吉
愛憎血潮傘	松井 籟子
白い幽霊	中村 獺
大名屋敷の怪	橋爪 彦七
獄門首供養	宇治川 竜
麝香肌小町	高木 竜二
妖異お告げ狸	矢桐 重八
吸血艶魔伝	青木 憲一
アマゾン流刑奇譚	大町 三郎
女刺青師	歌川 大雅
戦国刑譚	真野 麗
黄色い帯をしめた少女	竹谷 十三
海賊貴族	川野 京輔
拷問と処刑	鈴木 和夫
マダム僕をどうぞ	青葉 繁

連載伝奇・お小夜嵐	高月 大三
隠密覚書・美女秘巻	島本 春雄
服地がほしい	岬 洋之助
波に笑う女	柳生 亘
追いつめられる男	尾島 新
(定価百二十円・送料十二円)	
裏窓増刊・第六集《耽奇小説》②	
覗(のぞ)き	岡田 鯨彦
歓喜天夜景	竜胆寺 雄
頭部喪失者	猿若 屯平
瓶詰の女	深尾登美子
ダブル・ファイブ	高 三明
人間馴らし	木村 生死
借りた眼	伊能 孝
写真を配る男	狩 久
女を憎む	今 官一
女を逃がすな	都筑 道夫
三人姉妹	鳥羽 瑛子
復讐は死神の手で	松村 喜雄
巨人の時間	戸山 一彦
幼い雌猫	京極 美岐
妄愛の曲り角	朝山 蜻一
シンガポールで拾った女	野高 一作
白壁に蝙蝠	飯田 豊吉
品さだめ	永瀬 三吾
オノロケ豆	岬 洋之助
よんだ情痴	大河内常平
鍵よこせ	陶山 密
雪(ゆきおんな)女	潮 寛二
堀にある木戸	寿二谷 薫

黒い外套と七首	ホンキ・トシク
蜜月の女	F・グルウバア
(定価百二十円・送料十二円)	
33年(四月号)あぶちく・さすべんす特集	
○口絵・白獣の市場	画・山田 彬弘
裏窓巷談・島の喜三郎	鳴海 玄吉
東西映画・名場面を探る	高円寺一郎
野鷲復讐奇譚	矢桐 重八
魔の二十分間	横山 正勝
手提金庫の鍵	神行 京一
肌絵を蒐める男	三国沢 隆
桃色の替え玉	大河内常平
冷酷な雌獣	京極 美岐
鼻から上だけを見た	宇治川 竜
情炎千姫絵巻	橋爪 彦七
禍夜草紙	黒木 忍
隠密覚書・闇若衆伝奇	島本 春雄
十寸髪執念	大門 正人
仁俠恋まんじ	榎 剣吾
連載伝奇・刺青弁天	中林 節三
美代吉捕物暦	飯田 豊吉
伝馬町牢屋敷	鈴木 和夫
蛇女郎呪文	滝 一平
連載伝奇・お小夜嵐	高月 大三
(定価百二十円・送料十二円)	
33年(三月号)裏窓妖婦伝特集号	
○口絵・お化粧草紙	画・東 啓三郎
十六夜お新	橋爪 彦七
白狐呪伝	青木 憲一
奴の小せん	松井 籟子

刺青百万石……………高木 竜二
まぼろしお徳……………伊能 孝
松風吟味……………宇治川 竜
からす猫お紋……………飯田 豊吉
らしやめん駕籠……………小山竜太郎
紅筆さんげ……………岬 洋之助
黒い王座……………ワトスン・独田
地獄部隊……………大宮敬一郎
獣(じゅうじん)人……………横山 正勝
隠密覚書・幽鬼大名……………島本 春雄
仮面の青春……………藤川 博
連載伝奇・刺青弁天……………中林 節三
人魚吉光……………窪村 弘
白い顔の悪魔……………矢桐 重八
連載伝奇・お小夜嵐……………高月 大三
(定価百二十円・送料十二円)

裏窓増刊・第五集《耽奇小説》①
○人工衛星から来た女……………宮 啓一郎
煙が眼に泌みる……………今 官一
尼僧さんげ……………京極 美岐
三津代のあし……………飯田 豊吉
仮面の贅……………山村 正雄
竜宮城の美女たち……………竜胆寺 雄
はおずき……………永瀬 三吾
螺旋階段……………岬 洋之助
女体星座……………葉田 光
白い回想……………宇治川 竜
咬(こうこん)痕……………魔子 鬼一
おんなが微笑っている……………朝島靖之助
典侍拝領式……………猿若 屯平

蓮夫人の靴……………水上 瞭子
何か欠けている……………狩 久
悪夢の宿……………潮 寒二
金星悩殺作戦……………木村 生死
からだに弱点を持った男……………岡田 鯨彦
蠟人形……………宮野 村子
雄性の遺書……………大河内常平
(定価百二十円・送料十二円)

33年(二月号)裏窓遊俠伝特集号

○口絵・柔肌偶奇……………榎剣吾作・古正英緒画
英五郎笠松土産……………橋爪 彦七
情怨姫買宿……………葉田 光
疾風飯岡街道……………飯田 豊吉
やわ肌仁義……………中村 獺
ちょぼ一お松……………宇治川 竜
遊俠剣法……………高木 竜二
愛憎メキシコ無宿……………大門 正人
人工怪物……………ワトスン・独田
意馬狂騒曲……………山田 重義
仮面の青春……………藤川 博
リュカ大王の宝庫……………藤 琴也
隠密覚書・どくろ遊女……………島本 春雄
白いくちなわ……………三国沢 隆
狐(きつねび)灯……………松井 籟子
連載伝奇・刺青弁天……………中林 節三
鏡の中に男がいる……………岬 洋之助
死体を運ぶ男……………潮井 拓
地獄の指輪……………神行 京一
連載伝奇・お小夜嵐……………高月 大三
(定価百二十円・送料十二円)

33年(新年特大号)あぶちつく忠臣蔵特集

○口絵・妖説女忠臣蔵……………画・中島 喜美
阿撫的赤穂囃子……………法界寺 嘉
美しき奴隷シェリスナア……………海部 陽三
闇に生きる義士……………島本 春雄
元禄二筋道……………橋爪 彦七
黄泉路の影……………宇治川 竜
投籠燈秘聞……………松井 籟子
妖説絵図まんじ……………窪村 弘
大不忠者……………鷹野二十三
元禄備安曆……………真野 麗
雪嵐お美代さんげ……………伊能 孝
血まみれ観音像……………飯田 豊吉
吉良の贗首……………稲垣 史生
元禄乱れ小袖……………黒木 忍
二人の内蔵助……………小山竜太郎
あしのうら源内……………岬 洋之助
こんばんわ……………鳴海 玄吉
墓屋敷……………神行 京一
狐(きつねび)灯……………松井 籟子
白い芋虫……………否笠 一郎
SS秘密クラブ……………横山 正克
隠密覚書・逢魔娘……………島本 春雄
連載伝奇・刺青弁天……………中林 節三
仕掛銃……………ワトスン・独田
パチンコ地獄……………大河内常平
リュカ大王の宝庫……………藤 琴也
痴情仏心……………山田 重義
放浪の記……………伏見 和夫
音響魔……………阿部すけはる

(新年特大号定価百五十円・送料十二円)

(裏窓臨時増刊・第四集) ムード

グラビア・甘ったれの小猫……………本誌 特写

雪肌武者(巴御前)……………村松呂久良

妖夢御殿(千姫)……………稲垣 史生

もどかしい夜(おはん)……………狭山 温

蒼い天井(奥村五百子)……………笹本 寅

身を灼く女(山田順子)……………原 比露志

避妊に失敗しない法……………青木 尚雄

座談会・裏話カッラ漫談―その名は夜の華

△出席者▽谷村六介・平井利市・岡田甫

ハレムは実在している……………柳生 亘

セマリ派女優を裸にすれば……………編集部・編

丸の内ガールの秘密……………五島 勉

うらおもて・下着案内……………うらべ・まこと

性の健康相談室……………(男性科・宇佐美正夫

(婦人科・神田 駿一

わが「性」に追われる少女達……………高橋 鉄

ロマ・グレ養生訓……………椿 八郎

五〇代の青信号……………橋爪横椰子

男性不感症……………神田 駿一

おそれと羞恥(めざめ・第三回)……………杵築 富雄

夜のため息……………志波 葉子

濡れた仇花……………武野 藤介

私はこうして美人をつくる……………梅沢 文雄

誘惑化粧術……………四谷 一

(臨時増刊・定価百三十円・送料八円)

32年(十二月号)あぶちくすりらあ特集

○色頁・倒錯のよろめき……………高月 大三

お嫁に行った或る鳩の話……………志摩 久子

○口絵・女を探せ!……………秋吉 密

○グラビア・異に陥ちた暴漢……………編集部・編

隠密覚書・怪異蠟人形……………島本 春雄

鱗肌異聞……………南屋 彦六

地獄島……………美作 賢

雌花のいたずら……………京極 美岐

死人駕籠……………黒木 忍

盗賊煙丸の最後……………藤 琴也

妄(もうしゅう)執……………大河内常平

輪(りんね)廻……………三谷 春樹

殺(さつ)意……………岬 洋之助

夢(むえん)魔……………岩堀 光

死体工場……………大町 三郎

妖夢呪薬譚……………窪村 弘

青い顔の男……………飯田 豊吉

歪んだ眼……………真野 麗

偽装殺人……………三宅 一朗

狐(きつね)灯……………松井 籟子

死を弄ぶ女……………花町 右門

紅燈夢……………横山 正克

血の蜜月旅行……………陶山 密

刺青弁天……………中林 節三

(定価百二十円・送料十二円)

32年(十一月号)あぶちくすりらあ特集

○口絵・廃屋の妖精……………秋吉 密

人差指の妬み……………朝山 靖一

闇(やみ)……………大河内常平

悪魔の祈禱師……………神行 京一

闇入者……………三宅 一朗

地獄から殺しに来る男……………真野 麗

金曜日の戦慄……………鳥羽 瑛子

殺意の黒白……………宇治川 竜

窓(まど)……………岬 洋之助

傷痕だらけの人魚……………松井 籟子

なめくじ幻想曲……………坂 みのる

宝石呪縛……………黒木 忍

連載伝奇・刺青弁天……………中林 節三

隠密覚書・鬼姫変化……………島本 春雄

恋人形……………鳴海 玄吉

異にあえぐ女……………波戸 容

手裏剣……………狭山 温

死体買います……………柳生 亘

妖 虫……………京極 美岐

女炎脂地獄……………岩堀 光

コレラの正体……………田井 良米

黒いマニキュアの女……………木原 康夫

スターリンを狙った男……………陶山 密

偶奇談義……………川口 映治

放浪の記……………伏見 和夫

(十一月号、定価百二十円・送料十二円)

(裏窓臨時増刊・第三集) ムード

グラビア・素肌の絵本……………本誌 特写

特集リポート・熱すぎる妻……………編集部・編

痴漢はこうして発生する……………佐伯 茂雄

痴漢の心理について……………藤原 豪

座談会・闇にうごめくY虫を駆え……………諸 家

痴話閑談……………岡田 甫

“ヘンタイ女性”今昔物語……………高橋 鉄

ツカマツリ顛末記……………木綿 敏夫

千人斬り女豪列伝……………谷 作蔵

性的傾向テスト……………編集部・編
性の秘薬はどこにある……………阿那茂利男

性の健康相談室……………〔婦人科・竹内 茂代
〔男性科・宇佐美正夫

オナニーは無害か？……………松岡 克衛
「漂よい夫婦」見本帖……………日夏由起夫

夫婦のムード20代―50代……………原 比露志
ベッティングの功罪と結婚十戒……………大場 正史

女であることの悩み……………杉靖三郎・山本杉
昼さがりの倦怠……………志波 葉子

愛と悔蔑（めざめ・第二回）……………杵築 富雄
新・枕草子・実らぬ葡萄……………武野 藤介

実話特集・愛欲のアウトサイド……………諸 家
カラーセクション実用放蕩学……………

（定価百三十円・送料八円）
32年（十月特大号）時代伝奇小説特集号

○口絵・妖異羽子板呪法……………秋吉 密
海外グラマア写真集……………編集部・編

書き下し長編・猿蓑伝奇……………島本 春雄
悲曲梟雄伝……………岩堀 光

女犯経秘図……………円城寺 達
斧呪文……………松井 籟子

隠密覚書・地獄大名……………島本 春雄
播磨灘の裸女……………稲垣 史生

紅毛記秘傳……………鳴山 能平
続肌邪宗門……………杉 良平

甲斐の舞面乱……………宇治川 竜
耽奇亭秘舌……………真野 麗

人肌菩薩……………橋爪 彦七
犬は見ていた……………竹谷 十三

放浪の記……………伏見 和夫
悪魔と情婦……………否笠 一郎

女妖の檻……………京極 美岐
（十月特大号、定価百二十円・送料十二円）

32年（九月号）耽美小説特集号
○口絵・日光浴

○「殺された七人の裸女」
植民地の二重スパイ……………大町 三郎

悪のホザナ……………絵口 浩
女足の賦……………真野 麗

女犯経秘図……………円城寺 達
毛……………夢野 蓉古

黄金の処女帯……………柳生 亘
チーズ臭い三人の女……………花町 右門

紫（しどく）毒……………薇薔蒼太郎
ヒ・イズ・マイ・ギャグ・マン……………鳴山 能平

虹の雫……………早川小夜子
マヒトの告白……………岬 洋之助

花吹雪天保女地獄……………須崎 竜平
悪魔に呪われた三人の男……………神行 京一

おもとの亡霊……………三谷 祥介
放浪の記……………伏見 和夫

ヒットラーの財宝を探しあてた男……………陶山 密
扉をたたいた女……………広尾麻津夫

隠密覚書・十人小町……………島本 春雄
ウエストニッパの枷……………竹谷 十三

殺された七人の裸女……………北小路一郎
偶奇坊主……………岩堀 光

民衆の敵を仆せ……………今井 直
鐘ヶ淵因果絵巻……………稲垣 史生

（裏窓臨時増刊・第二集）よるとひる
グラビア・グラマアの季節……………吉野銀之助

夫婦の感覚を解剖する……………編集部・編
ある不感症の妻との対話……………西島 実

クリトリリス不感症はある……………神田 駿一
完全なるCOITUS……………篠崎 信男

性的傾向観破法……………高橋 鉄
性と妊娠のイタチこっこ……………青木 尚雄

安心して性生活を営むために……………太田 典礼
現代女のナキどころ……………うらべ・まこと

実伝・千人斬り紳士録……………谷 作蔵
男と女とそして私……………志波 葉子

メンズと夫婦生活……………羽田 正文
性的健康相談室……………〔男性科・金子 栄寿

〔女性科・太田 典礼
エレガントな娼婦たち……………原 比露志

「不倫な情事」と「女の市場」……………大場 正史
めざめ（白い乳首・人形の下着）……………杵築 富雄

男が女に求めるものは……………瀬田 五郎
匂いぞいずる……………かひや・かずひこ

パリの空の下、赤線は消えず……………莊原 朱雄
新・枕草子・木蓮夜色……………武野 藤介

（臨時増刊・定価百三十円・送料八円）
32年（八月号）異色読物特集号

○口絵・裏窓裸天国
贅の花……………松井 籟子

狂恋懲罰監房……………村岡 良平
貞女お道……………竹谷 十三

いぬ……………麻布 義朗

放浪の記	伏見 和夫
夜の緋縮緬	鳴山 能平
蝦蟇物語・肉こたつの群	佐々木 力
隠密覚書・首吊り中蔵	島本 春雄
最大の逃亡者	陶山 密
日本ムスメを売買した男	ワトスン・独田
黒髪さんげ	真野 麗
仇情お浜船	加藤 晋三
峡谷の血闘	柳生 亘
道化地獄図絵	夢野 蓉古
山西の黒い嵐	大町 三郎
男男と猫女	神行 京一
あ(蛇)ぶ	三宅 一朗
女形地獄	稲垣 史生
生人形の夢	阿部 佐治
吹雪とお花	佐木 勉
胡蝶秘文	岩堀 光
(定価百円・送料八円)	
32年(七月号)倒錯の手記特集号	
○口絵・映画緊縛場面集	
蝦蟇物語・むしだんご	佐々木 力
あべじの足	新津 勉
金色に魅せられる女	西条恵美子
草雙紙の世界	鳴山 能平
放浪の記	伏見 和夫
あ(蛇)ぶ	三宅 一朗
瘡痍哀史	片岡 省吾
悦唐濡れ肌地獄	岩堀 光
乳房を蒐める男	神行 京一
死に誘う天使	花町 右門

生きている竹槍	ワトスン・独田
ノーマン氏の不思議な実験	柳生 亘
情炎白肌双紙	稲垣 史生
弄(ろうじゅう)獣	雪俊 遥
青(あおせん)線	杉山 清詩
魔(ま)くつ)窟	梅崎 登志
妬(とけい)刑	松井 籟子
脱(だつこく)獄	大町 三郎
隠密覚書・女人駕籠	島本 春雄
耽美小説・紫夫人	竹谷 十三
旅芝居見てある記	境 幸彦
(定価百円・送料八円)	
32年(六月号)女隠密・女スパイ特集号	
○口絵・ケツ圧が高いのヨ	
○"憲兵と女スパイ	
マタハリ二世の悲劇	大町 三郎
観世流蜘蛛の秘曲	小山竜太郎
黒水仙の女	竹谷 十三
喰人館炎上始末記	真野 麗
赤いX二十七号	花町 右門
隠密太平記	橋爪 彦七
紅毛玻璃玉地獄	加藤 晋三
逆スパイ青木菊子の最後	柳生 亘
仮面の女体	宮下 文作
真珠湾の女間諜	木村 文平
蒼色の眼をした女	宮本 潔
プロセス・5と女	陶山 密
特高秘話・赤い花々	高月 大三
悩乱破れ葛籠	岩堀 光
柔肌ごよみ	稲垣 史生

福清の蟻地獄	鳥飼 ゆき
愛怨人斬り船	川越 八郎
カザレス公爵夫人の秘密	否笠 一郎
女工哀史・春岡村事件	雪俊 遥
隠密覚書・白珊瑚地獄	島本 春雄
Fの世界	佐瀬利五郎
女装礼子行状記	藤 琴也
悦唐女体讃	高月 大三
風流裏窓艶色夜話	恋塚 四郎
(定価百円・送料八円)	
(裏窓臨時増刊第一集)よるもひるも	
グラビア・悩殺準備完了	
"・ドライはウェットのはじまり!	
東京の秘密クラブ	五島 力
東京のヘソの穴には	(獵奇録音)
ヨーロッパ女を攻めるには	野高 一作
P術指南(特殊女性の告白)	井上 章子
マダム商売(マダムの手記)	志波 葉子
耽美する女体の流れ	神保 朋世
男女・色豪コンクール	原 比露志
テストされるあなたのSEX	高橋 鉄
女人多淫のメカニズム	神田 駿一
女性にはたして不感症か?	竹内 兵衛
短小に悩む青年達に	西島 実
インポテンツの治療法	金子 栄寿
早漏はここから起る	寺田文次郎
自宅で行なえる性力増強	橋爪 檳榔子
三十男はここを狙え	高橋 晋
中年夫婦の痴戯を描く	武野 藤介
現代女性の欲望を描く	大野 千秋

告白と相談……………解説・神戸佐一郎

夫は醜い女を愛していた

夜ごと街に立つ未亡人

夫を嫁い同性愛に耽る妻

婚約者では満足できないオールド・ミス

エロチックお洒落術入門……………うらべ・まこと

風流随筆・四畳半おとこの楽書……………今官一 他

(第一集は売り切れましたが、臨時増刊第二

集▲よるとひる▽との合本がございます。定

価二〇〇円・送料十六円)

32年(五月号)女の隠謀・お家騒動特集号

○口絵・裏窓はだか天国

○"・内外映画緊縛場面

児小姓を犯した浅岡の局……………加藤 晋三

雌雄まんじ……………真野 麗

染血の百物語……………戸山 一彦

大奥狸囃子……………稲垣 史生

願狂院の相馬子爵……………瀬戸口寅雄

天保素走り小僧……………西尾 富岳

うわなり火事……………橋爪 彦七

なでしこ地獄……………広尾麻津夫

ポルシア家罪悪史……………三宅 一朗

曠夜をさまよう死体……………陶山 密

ドイツ皇太子の陰謀……………大町 三郎

ブレンヴィリエ家没落始末記……………花町 右門

仇(あだばな)花……………松井 籟子

カザレス公爵夫人の秘密……………否笠 一郎

カルカッタの生地獄……………ワトスン・独田

聖アガートの乳房……………竹谷 十三

悦虐の女にせ聖女……………雪俊 遥

一家を狙う復讐鬼……………柳生 亘

隠密覚書・丹州鬼の巢城……………島本 春雄

あぶのうまる広告紹介……………高月 大三

祖国を売った女スパイ……………戸山凡太郎

監獄十字路……………藤 琴也

秘録・暴帝略譜……………桜井 純二

(定価百円・送料八円)

32年(四月号)妖奇犯罪実話特集

○口絵・泥靴にけがされる小羊……………秋吉 轡

男装の淫婦モーパン嬢……………花町 右門

邪恋京人形師……………若尾 鋭介

翻られる女体……………瀬木 敏郎

女性憎悪者(ウーマン・ヘータ)……………柳生 亘

カザレス公爵夫人の秘密……………否笠 一郎

女囚を奪う怪盗団……………瀬戸口寅雄

ロックン・ロールの鳴る間に……………大宮敬一郎

アミアン街道女教師殺害事件……………大町 三郎

夫は満足していない……………宮下 潔

地獄塔の脱獄者……………陶山 密

見捨てられた男の復讐……………立石 梅雄

ちりめんの赤い紐と女……………堺 幸雄

花嵐遊女の達引……………稲垣 史生

烹られた女達……………雪俊 遥

呪いの小盒……………香山風太郎

淫草(みだらぐさ)……………川越 八郎

モイ族の媚薬……………柏倉 欣造

秘境女人国……………稲垣 史生

死棺屋敷(隠密覚書第一話)……………島本 春雄

姉妹奴隷……………神谷 欣二

若妻地獄……………竹谷 十三

呪われた神々の地獄……………三上 綾子

(定価百円・送料八円)

32年(二、三月合併号)妖艶毒婦姦婦特集号

32年(一月号)凄艶妖奇読物特集号

31年(十二月号)名刑事特異犯罪捜査特集号

31年(十一月号)戦慄犯罪特集号

○第二巻・32年三月号までは売り切れました

○32年九月号まで定価百円・送料八円。

○32年十月号より定価百二十円・送料十二円

○新年特大号は定価百五十円・送料十二円。

○臨時増刊は定価百三十円・送料八円。

○増刊第五集・第六集▲耽奇小説▽は定価百

二十円・送料十二円。

○▲よるもひるも▽▲よるとひる▽の合本は

定価二〇〇円・送料十六円。

○ただし三冊以上まとめて御注文の方には送

料は当社で負担いたします。

○御注文には振替御利用が、最も確実簡便で

ございます。

○御住所御芳名注文書名をはっきりとお書き

のほどお願い申し上げます。

東京都中野区江古田一〇二三〇二

株式会社 久保書店

振替口座・東京一〇七五六番

傾城忍者

高木龍二

中島喜美・画

一 越前駕籠



永源寺という寺である。

その塀にそって左へまがると、

竹藪の道になる。

駕籠は音もなく進んでいた。

夜ふけというのではないが、こ

のあたり、陽が落ちると、まるで

人気はなかった。

「ぐえッ」

異様な悲鳴が聞こえたのは、駕

籠が、竹藪の道へまがる、その曲

りっぱなであった。

「止めい」



駕籠の中から声があった。

数えると、先供、脇供、控えの侍、すべて十三人で、これはまず、一万石以上の大名駕籠であろう。
ぴたりと止った。

「何事じゃ？」

「はっ」

あらためて見直すまでもなく、悲鳴の実態はすでに目に入っていた。

よろよると、一人倒れた男がある。坊主頭だ。

しかし、僧侶でないことは、その着衣で分るし、同時に派手な扮装を見れば、こいつ——男芸者、つまりは太鼓持ちなのだと、難なく判断できている。

もう一人いた。

顔を包んでいるが、これは武士である。

倒れた幫間の上にかがみ込んでいて、さて、キツとこちらを向いたのである。

右手に拔身をさげている。

幫間はなぜ殺される？

傾城かむろ花の如き城郭の中に、女忍者は何を見たか？

特集 女間諜・女忍者

それが、血に染んでいた。

「辻斬りでござります」

と、脇供の一人が答えたのも、無理のない状景であつたろう。

「捕えい」

駕籠のぬしは、躊躇なく命じた。

「はっ。それッ、方々！」

抜刀して、バラバラと走り出したが、相手の侍は、手輕にあつかえる奴ではなかった。

「ちっ」

舌打ちしたようである。

同時に拔身を左手に持ちかえると、右手が懷へ入った。出たっ！

——と、何やら異な物が、空を裂いて、激しく駕籠を襲ったのである。

ピシッ

深々と駕籠の中に突き刺ったのは、奇妙な三方乱れの手裏剣であつた。

「へん、嫌な奴に出くわした」

抜刀侍たちが目前に迫っている。

べっ。

唾を吐くと、くるり——背を見せて走り出した。

速い。

まるで、風に乗るように、軽々と走る男である。

「待てっ」

特集 謀間女・忍者女

と、それでも後を追ったが、

「無駄だ。——追うなっ」

と背後から声があり、見るとそれは、いつの間にやら駕籠を出た一万石のあるじであつた。

死骸の傍に歩み寄った。

「ふむ。……大伝馬町桑名屋弥吉……中村屋吉兵衛と並んで、当今江戸随一という太鼓持じゃ」

ひと目で、びたりと言つてのける大名である。

大岡越前守忠相であつた。

元禄十三年寄合衆、正徳二年山田奉行、享保元年普請奉行、そして同二年江戸町奉行となり、元文元年寺社奉行に就任している。

はじめ五百石の旗本、今は三河国西大平一万石の大名であつた。六十九歳である。

「ただの辻斬りでない。この三方手裏剣がわかるか？」

傍の家来に尋ねる。

「はっ」

と供侍は困惑の表情になった。

「伊勢乱波の三方手裏剣、または二木流忍者投剣ともいう……ただの辻斬りでないぞ。裏に必ず何かある。しかも殺されたのが、江戸一番の幫間桑名屋弥吉とあつてはのう……はあて……。そうじゃ、石子伴作を呼べ」

さすがに越前守である。

一万石の寺社奉行となつても、かつての名町奉行としての眼力を失なつていなかった。

石子伴作は、天一坊事件に働いた名与力であり、越前守の昔の配下

であつた。

二 影 女

新吉原といつても、明暦二年に、今の浅草裏に移ってから、もう八十年近くなる。

江戸の町も大きくなった。

將軍家も八代吉宗である。

慶長頃、糺町八丁目、鎌倉河岸辺に、わずか二十数軒散在していた遊女屋も、慶長十三年、庄司甚右衛門が傾城町の設立を願ひ出て、沼地二丁四方に葭原を設立した慶長十七年から、明暦二年十月、現在の新吉原に移つて、江戸町一丁目、二丁目、京町一丁目、二丁目角町——称して五丁町と栄え、松の位の太夫職、高尾太夫もすでに十一代目となつてゐる。

遊女の数もぐんとふえた。

太夫四人、格子六十五人、散茶二人、新座敷持二百九十人……そのほか、座敷持、部屋持局女郎——あわせて二千人以上である。

芸者の数も多くなつた。

男芸者つまり幫間の数も馬鹿にならなかつた。

その幫間仲間でも名を売つた中村屋吉兵衛が、おちつかぬ表情で坐つてゐる。

吉原近くの番所の中であつた。

対坐する年配の武士があつた。

眼が澄んでいる。そのくせ、腹の底まで見通すような鋭い光があり元禄以来のなまくら侍でないことは、この眼を見るだけで容易にそれ

と知れる。

与力筆頭石子伴作である。

「旦那、どう考えて見ても、お上の御厄介になるようなことをやらかした覚えは、とんとございませんので」

剽軽な吉兵衛が、クソまじめな顔で言うのだ。

「いや、おぬしが何かやつたというのではない。少々たずねたいことがあるのじゃ」

「へえ？」

「つまり、吉兵衛、その方は蛇であろう」

「へ、へび？」

「そうじゃ」

「御冗談を……生れつゝの馬っツラで、御蟲眞の旦那方には、馬じや馬じや、馬吉じやなんぞと、御座敷の肴にはなりまして、へへへ……これで立派な人間様のつもりなんですがねえ。へえすいません」

腹の中では、むツとしてゐる。

いかに相手が名与力でも、男一匹つかまえて、蛇——たアひどいじやねえかという訳である。

「ははは」

伴作は笑い出した。

「これは、悪かつた。少々言葉を端折り過ぎたようだな。——言うなれば、ジャの道はへびの蛇ということじゃ」

「へええ？」

「わからぬか。——おぬしは、当代随一の太鼓持である。ならば、仲間のことは詳しいはず。そこでたずねたい」

「なア……」

と吉兵衛、ほっとした顔になった。

「はじめに申し聞かせる。桑名屋弥吉は殺されたぞ」

「えッ！」

思わずドキンとしたのであったろう。

「それア本当でございますか？」

「嘘をついてなにとする。しかも下手人は、容易ならぬ相手じゃ。奇妙な兇器を用いおる。ただの辻斬り兇賊でないのじゃ。話してもわかるまいが、三方手裏剣を投げる奴で、これは今御禁流となっておる。

その御禁流の二木流忍者投剣をあえて用いるからは、あらかじめ、主君の許しを得てのことであろう。知りたいのは、曲者の背後にある大名——いや、その大名も見当はついておる。なぜにその大名が、太鼓持ごときを殺害せしめたのか、そいつを知りたい……いや是非とも知らねばならぬのじゃ」

「へえエ……お大名が御家来衆を使って、弥吉さんを……」

幫間吉兵衛の唇がゆがんだ。

何か思い当ることがあるのに違いない。——そんな表情である。

「相手は大名、ここで名を明かすことは、控えねばならぬ。——が、吉兵衛、心当りはないか」

「へえ」

「ないか？」

「それが……」

「ん？」

「ひょっとしたら、あのことでは……。でも、きつく口止めされておりますので」

「一人死んでおるのじゃ。それでも申せぬのか？」

「……それが……」

この時である。

「げっ！」

叫んで吉兵衛が前のめりにツンのめった。血！

背後から飛来した三方手裏剣が、グキッと吉兵衛の首筋に突ッ立ったのである。

背後に高窓があった。

「しまったッ！」

表へ飛んで出たが、人の影はすでにない。否。

ひとり、番所の角に立つ人影があった。

「神妙にせい」

石子伴作の声で、番所役人たちが、ばらばらッと飛び出している。

「屋根の向う」

と、その人影がいった。女——の声であり、見れば、双子縞の単衣に黒襦子の帯をしめたまだ若い女である。

「二木流伊勢者」

近づいた伴作に、その女は呟やいてみせた。

「え？」

眼を見はる。

（これアただの女でないぞ）

「たずねるが……」

と問いかけると、くると背を向けて、

「簀田」

一言いって、ずっと歩き出している女である。

(――簀田……簀田……)

胸のうちに繰り返して、石子伴作は誘われるように二三步後を追った。

と――

「町方の仕事ではないようです。石子さま……」

ふりむきもせずいって、すーっと女の足が速くなった。走るのではない。そのくせ、まるで風に乗ったように音もなく速い歩法である。

(――そうか)

うなずいて伴作は足をとめた。

番所役人どもは茫然と立ったままであり、はっとなって互いに顔を見合せたときには、女の影は視界から消えていた。

三 吉宗と助八

「忠相から話を聞いた。予の禁じた二木流の手裏剣を用いる者があ
る。助八、そちの考えはどうじゃ」

「榊原侯……」

江戸城吹上御苑である。

問うたのは白綾子の寝衣に白綾織の帯、月に顔をむけて、月に話している形の八代將軍吉宗公であり、短かく答えた男は、あたりの影にひそんで姿を見せぬ。

吉宗は、紀伊光貞の三男であり、頼宣の孫家康の曾孫に当る。幼名源六郎、元禄十年四月、越前丹生三万石、松平主税頭頼方と称していたが、兄頼職のあとを継いで紀伊中納言となり、続いて家継の後を襲

い、八代將軍になっている。

冷飯時代が長かった。

苦勞をしてきている。

老中どもより従って下情に詳しく、その上、伊賀忍者簀田助八を、お庭番となし、折にふれ下情を聴取している。

影の男は、その簀田助八であった。

「予にむかつての面当てか？」

「も一つ奥がござりましょう。二木流を禁じられ、それがための反抗ならば、選んで吉原幫間二人までも殺害せしこと、解せませぬ。おそらくは旗本衆を襲わせましょう。お咎めを受けても、浪人せし者、当家とかかわりなし――と突っぱねればすむことでござります」

「もっともじゃ。式部大輔とて、先年のこともあり、故なく予にさからうこともなからう」

吉宗は尚武の意味で、しばしば放鷹をこころみている。

先年、こんなことがあった。

吉宗が鷹狩りを命じて、大手門を出ると、拝謁に現れたのが、この時大手門詰大名であった榊原式部大輔政岑である。

派手な姿であった。

萌黄色琥珀織の上下である。

白糸源氏車紋の着物である。

白櫛金飾りの刀脇差である。

吉宗は常に質実を説いていたし、この姿を見て、言葉も掛けず、横眼に睨むようにしたのみで通り過ぎた。

御言葉を賜うのが慣例であった。

榊原政岑は面目を失したのである。泣く子と地頭には勝てぬとして

も、腹の中ではおもしろくなかったろう。証拠のつかめぬ反抗なら、してもみたかろうし、またやりかねぬ男でもあった。

「なんぞ理由があろう。助八、探るのじゃ」

相変らず、月に向って喋る吉宗であった。

「衰えました」

と、これも影にひそんだままの助八が答えている。

「城探りはならぬか」

「娘がござります。手前は衰えましたなれども、娘儀、手前以上の者お役に立てたく存じます」

「うむ、許すぞ。いずれは、予も顔を見たい……ふふ、女忍者か……」

ふふふふ」

含み笑いの声を残して、將軍吉宗は歩き出した。

四 闇 問 答

暗い部屋である。

「二木流」

と男の声がいった。

「知っています」

と女の声が答えた。

しかし、その姿は、闇の色に溶けて、その片鱗もつかめないのだ。

「申して見よ」

「そのもとは、清和源氏なり。祖を二木義長に発す。一説に、秀郷とも言えり」

「うむ」

「伊勢に住す。伊勢乱波を集め、その長となり、後三河に移りて、家康公に仕う」

「うむ」

「一流あり、すなわち二木流陰の兵法にして伊賀流に似たり。その一つに、三方手裏剣あるも、泰世に無用とて、当代に至り禁流の旨仰せ出さる」

「よし」

しばらく不気味な沈黙が続いた。

「江戸随一の幫間二人が殺された」

その静寂を破ったのは男の声であった。

「知っています。はじめ、もと南町奉行職にして、今寺社奉行たる大岡越前守忠相動き、命により旧組下なる与力石子伴作吉兵衛に問うこ

とあり、時に、三方手裏剣放つ者あり、吉兵衛悶死す」

「ふ……なんでも知っている奴じゃ。——ならば問う、西へ飛べと命じたなら、何とする所存じゃ？」

「姫路」

「ふむ」

「二木義長の継孫、すなわち榊原式部大輔政岑は、今、播州姫路に在城ですもの」

やっと女らしくなってきた。

「探れ。相手は十五万石の大名じゃ、むずかしいぞ。江戸府内を飛びまわって、世情を探るようには参らぬ」

「父上様のように、老いぼれてはおりませぬ」

「こいつ！」

男の声は、簀田助八であった。

女の声は、娘の葉末であろう。

「行けっ」

「はいっ」

ずっと、風のように動いた。暗い部屋の中を、黒い影が動いて、音もなく襖が開き、また音もなく閉じたのは娘の葉末が部屋を出たからであろう。

一切が闇の中である。

影に生れ、影に生き、闇に働いて闇に死ぬ——これが伊賀者の宿命であり、簀田家の家訓でもあった。

闇問答。

これが、その一つの現われであり、父であり師でもある簀田助八ですら、娘葉末の変貌を知らなかった。

齒をすべて抜いている。

十二種の入齒があり、三十六法の変貌が自在であった。

「哀れなやつ。女と生れきて、女のよろこびを知らずにいる。望むならば、伊賀流を伝えず、女なみに育てて、春を迎えさせたものを……進んで闇に生きる道をえらびおった。しかも、天来の素質はおそろしい。頭抜けている。かえって哀れなことよ……が、これもさためである。行くがよい、働くがよい、好きなようにするがよい——暗い、影の道を、闇の世界を、歩くがよい……」

闇部屋に独り残って、簀田助八は呟き続けている。

——が、独楽はすでにまわりだしていた。音もなくまわる独楽、忍

者の独楽、まわれれば必ず兇をつかみ、地獄へ誘う人間流転の独楽である。



まわる、まわる。

北

幫間二人の死の謎をとき、十五万石の秘密をとくべく、今まわっているのは女独楽、葉末という人間独楽なのだった。

はじめ、粟末独楽は、二ヶ所へ飛んだ。その第一は、寺社奉行大岡越前守の寝所であり、その第二は、与力筆頭石子伴作の組屋敷であった。

ともに、石つぶてという形である。
この石つぶてには、包紙があった。

姫路なり。発す。簀——葉。

包紙には、紅の字で短かく書かれてあり、越前守忠相も石子伴作もこれだけで意味がとれたのであろう。

ニヤリ
と笑って、二人とも焼き捨てている。

五 女狩り同心

百五十七里。

これは、江戸を発して、播州姫路までの里程である。
曇っている。

いまにも、冷たいいやなものが襲ってきそうな曇天を背景にして、近寄りがたく、厳然とそびえているのは、慶長十五年、沼田輝政の補修になる天下の名城姫路城であった。

白鷺城ともいう。

しかし、城に心なしと誰がいいきれよう。

近よりがたく厳然としては見えても、住む者の心に邪気があり、内部に妖異を孕んでいたのでは、おのずと靈氣を感じて城の威容もまた

崩れざるを得まい。

剣難。女難。

人相にたとえるなら、この二つの難相が、ありありとその天守閣に浮かんで見える。

「逢魔の城」

はるかに天守を眺めて、ふと呟やいた老婆があった。

白髪で、齒抜けで、腰のまがった汚ない老婆であり、長旅を続けて来たのであろう。顔も着物も埃にまみれている。

ポツリ

雨が落ちてきた。——次第にその数を増し蒼黒い濠の水に、無数の波紋をつくる。

雨の日もあった。

風の日もあった。

そしてまた、雪の日も時にはあったであろう。戦塵に汚れたこともあったに違いない。

しかし、濠は無心である。ただ無心に、幾代かの城主を迎え、また送り出している。

文明頃は、赤松政則、小寺豊職一族が累代在城していた。

天正八年からは、羽柴秀吉、羽柴秀長、木下家定が就封した。

関ヶ原合戦の後には、池田輝政が五十二万石を領して入城し、元和三年、本多忠政、寛永十六年、松平忠明、慶安元年、松平直基、同二年、榊原忠次、寛文七年、松平直矩、天和四年、本多政武、寛永元年榊原政邦、そして政祐……と、城主変転の歴史をたどり、今、榊原式部大輔政岑が、十五万石を領して住んでいるのだ。

雨は沛然と豪雨になった。

「ちくしょう、気に入らねえ雨だ」

三四人、ばたばたと野小屋へ駆け込んで、その一人が、吐きすてるようにいった。

はて——？

この野小屋には、今のいままで、あの老婆がいたはずであり、さてしかしフツと姿が消えている。

「凄く、まア降って来たものだ」

数えて見ると、野小屋へ駆け込んだのは、四人で、——正確に言えば、男三人、女一人である。

女は、まだ娘であった。

領内の百姓の娘であろう、まずしい木綿物を着てはいても、十七八の年頃で、若さが匂うようにみなぎっている。

美しい。

整った顔立で、陽には焼けていても、これでちょっと手入れをすれば、びっくりするほど美貌の女になるはずである。

三人の男は、様子で見ると、郡代所属の下役人らしかった。

「しばらくは続く雨だ」

と一人がいった、隅の方で小さくなっている娘の顔をチラッと見て

「ちょうど、いいあんばいだ」

別の一人が、娘の方に顔をしゃくっていった。

「何が？」

と、これは三人目の奴である。

寄山才次郎——背がひよろつと高い。

森崎三郎次——髭面で短軀である。

米山源次郎——出っ歯で色が黒い。

一口に特徴をいうなら、こういう奴等であり、三人ともに、あんまり出来のよくない人間なのだろう。

「何が？」

と髭面が重ねて問うた。

「濡れている」

と出っ歯が短かく答えた。

「え？」

「幸いに、剥いだらどうだろう。顔の造作はよくっても、普段は目に入らぬあたりに、妙な傷でもあれば、われわれの落度となる」

謎のような言葉だった。——それでも、こやつら同士には通じるの

だろう。

「よし」

と、ひよろ高いのが、いきなり、隅の方で小さくなっている娘を引

っぱりよせたのである。

「あっ！」

「神妙にせい」

傍若無人とは、こういう時のため用意された言葉かもしれぬ。

悲鳴をあげて抵抗する娘を押さえつけると三人の男が、よってたか

つて、たちまち裸に剥いてしまった。

暗い野小屋に、白い大きな花が咲いた。

それは、温かい裸形の人間花であった。

「かすり傷一つねえの」

手とり足とり、羞しい裸身を舐めるように眺めまわして、米山源次郎がいった。

「このまま、殿のおもちゃに供するのは、おもしろいような娘だて」
森崎三郎次である。

「ふっ。いっそわれらが一足お先に賞味してはどうだ」
こういったのは、寄山才次郎だった。

「色町へ売り飛ばす女ではない。露見してみろ、三人共首がないぞ」
「やれやれ」

この時である。さっきから遠鳴りしていた雷が、突然頭上に迫って不気味な稲光りと共に、天地も裂けよと大音響を発したのであった。近くに落雷したのであろう。

同時に、三人の下役人が、何かに頭を打たれて、

「うーん」

と目をまわしてしまった。

「ひひひひ」

笑った奴がある。それは、今まで野小屋の天井板に、まるで蝙蝠のようにベタリとはりついていた老婆であった。

雷鳴と同時に、ふわりと宙に浮いて、三人の男を蹴倒したのだからこの婆ア、もちろんただ者であるはずがなかろう。

六 巡礼小町

雨はすでにあがっている。

「ううん」

はじめに正気づいたのは、出っ歯侍の米山源次郎であった。

「や？ 女がおらぬ」

あわてて二人を叩き起した。

「かみなり奴っ」

「頭が痺れたな」

きよとん、とした顔である。

「馬鹿っ、女がおらぬぞ」

「えっ」

「逃げたか」

飛び出して、探して、うろついて、結局野小屋へ戻って来た。

「えらいことになった。われわれは切腹ものだぞ」

「うむ」

「別の女を……」

「いや、御領内の美女は、あらかたもう集めてしまった。

さてとなると、十五万石の御領内でも、小町娘の数は知れたものだて」

「全く」

「あのお杉が、娘狩り最後の一人だったな」

「どうする？」

「困った」

「娘狩り同心……はじめはおもしろかったし、加増出世の楽しみもあって、喜んでお受けした役目だが、さて、こうなると、いっそううめらしいの」

三人とも、へたへたと坐り込んでいる。

「だいたい、女どもが悪いのだ」

髭面三郎次がこぼしはじめた。

「泣く子と地頭には勝てぬ。城へ入れば、おとなしくいうなりになるべきなのに、すねたり、さからったり……だから」

ら殿の怒りを買って、長くもない命を縮めることになる。従って女が足りなくなる。よってわれわれがいそがしくなる……けっ」

「愚痴をいうなっ」

「いいたくもなる」

「うるさいっ」

「何をっ！」

窮境に立って争いを生じるのが、小人の常である。

寄山才次郎と森崎三郎次が睨みあった。

女を連れ帰らねば笠の台が危ない奴らであり、しかし、これという良案も浮かばなかった。

と――

「おや、あの巡礼娘……一人旅と見えるが、見ろ！ 凄いやうな美人だ」

いきなり、米山源次郎が腰をあげていったのである。

巡礼娘が野小屋の前を通る。

「どうだ」

「ううむ」

「やるか」

三人は顔を見合せた。

（ふんづかまえて痛めつける。無理往生になっとくさせて城へ運ぶ……）

巡礼娘なら、どこからも苦情は出まい――

期せずして、三人の胸中が一致したのである。

「おい」

と呼びとめて、野小屋の中へ引きずり込んだ。

争っている。

悲鳴が聞こえた。――何か言っている。また悲鳴……ピシリと肉を打つ音がした。

ビリッ

着物の裂ける音がし、呻き声と喚く声と板戸にぶつかる音が続いて聞こえて来たが、やがて静かになった。

今度は、ぼそぼそ囁やくような声である。

「……よいか。城へ入れば極楽だ。しかし、さからう事があれば、命がないと思え。おとなしくしておれば、大名暮しができる。よいな」
米山源次郎の声であった。

「この姿のままでは拙い。一っ走りして、着物を都合して参ろう」
ガラリと戸を開けて、出っ歯面をぬっと出した。

戸の隙から見れば、巡礼娘が裸に剝かれて突っ伏している。
みごとに發育した、美しい娘であった。

七 狂宴

外から見たのでは、何の変化もなかった。

しかし――

一步城内に踏み込むと、ガラリと様子が変わっている。

城内馬場が姿を消している。

奥庭の樹林も伐り払われていたし、そこに新しい建物が並んでいた。
十五万石の広い城内である。

その気になれば、貧乏長屋の二百軒や三百軒、訳なく建てられるはずで、しかし、いま目に入るのは、そんなしろものではなかった。

大門がある。

柳の木があり、塀囲いがあり、色っぽい軒灯が並んでいる。城外はすでに寝静まっているが、城内は不夜城であった。わかった！

それは、まことに妖しく異様なことではあったけれど、間違いなく江戸吉原の情景であった。

吉原を小さくした……といったらよいのであろう。

すれば、大門、そしてあの柳——の意味もわかろうというものである。

見返り柳だ。

一步大門を入れば、揚屋がある、局見世がある。

三絃の音が聞こえる。

太鼓の音も聞こえる。そ

のほずである。——

いま、揚屋と見え

るつくりの一軒

で遊興する者

があるのだ。

正面に一人、貴公子が着座している。

色が白く、品のある容貌だが、眼に難があった。

二条の血走が、えぐるように瞳に迫っているのである。

その横に女がいた。

錦純子の仕掛けに、額仕立の胴緋絞り縮緬間着を着て、白綾襟の緋縮緬の長襦袢、帯は金欄錦純子を前に結び垂れている。

誰にでもわかる。

これは、吉原遊女、それも太夫職の姿であった。

前帯振袖の振袖新造もいる。

禿^{かむろ}もいるし、幫間も、芸者も、ちゃんと揃っているのだ。

「踊れ踊れ」

大盃を傾けながら、正面の貴公子がいった。

声が濁っている。

酔ってきているのであろうが、これは、十五万石のあるじ、榊原式部大輔政岑であった。

踊りだした。

一人——二人……三人——四人。

トントントン

太鼓が鳴り、その拍子に合わせて、手をふり足をあげし腰をゆすりそれは卑猥な踊りであった。

「源内っ！」

呼ばれて、太鼓を叩いていた奴が、

「はっ」

と答えた。——幫間に扮していても、腰に脇差しをさしている。



「始めろ」

「へへっ」

立ち上った。

「ああ、こりやこりや」

おのれも踊りながら、女達に近づくと

「見えます。見えます」

ひょいと一人の裾に手をかけたのである。

「キヤーツ」

と逃げると、

「どっこい」

帯を捉えて足をからんだ。ドタリ

と女が倒れると、これについて、自分も転がりながら、素早い奴である。——何やらもそもそしていたと思ったら、もう帯を解き、腰紐を解き、あられもない姿にして、

「えいっ」

と、突っ転がした。

女は、紅い長襦袢から、すっぱ抜けた形で全裸のまま、青畳の上を、ころころ転がった。

「踊れ踊れっ」

トントントン

太鼓が鳴り出す、三味線が鳴り出す。

裸体にされた女は、踊りだした女たちの背後に隠れながら、あっちへうろうろ、こっちへうろうろ、それでも必死なのだろう。

「源内、追い出せっ」

正面から政岑の声が飛んだ。

「へへっ」

幫間侍源内が、今度は馬鞭を持って、裸女を追いはじめた。

ピシッ

ピシッ

裸肉に鞭を放って、踊女の蔭から追い立てる。

狂っているのだ。

これは、狂者の夢の饗宴であり、心ある者には正視できぬ眺めであった。

八 高尾太夫

「困ったことだ」

重職小田切将監が苦り切っている。狂宴の音が、遠く離れた東丸評定の間にまで、かすかに洩れてくるのだ。

「かようなことが、將軍家の耳に入れば、御当方も危ない」

これも、しかめっ面の目付役本多織部正である。

二人は対座して、先程から対策をねっているのであった。

「家中の者には、一切口外を禁じてあっても、噂はどこからともなく

洩れるものじゃ」

「領内の娘共を狩り集めております。自然、噂を呼びましょう」

「——すれば、必ず幕府の隠密を誘う。理の当然じゃ」

「備えは十分とは申せ、兵法にも、守るは難く、攻めるは易いとあります通り、いづどんな手段で、幕府の犬共が城内に入らぬとも限りませぬ」

城の出入りは嚴重になっている。

それに、二木義長以来の伊勢忍者が、股肱の臣として数多く養われており、こやつらが蔭目付として、城中城外に自を光らせてもいる。

しかし——

それだけでは、安堵できぬ政岑の行状であった。

「策はないな」

「要は、殿の自覚を待つのみです。もともと暗君ではなし、將軍家への面当てに始めた御乱行、いずれは納まりましょう」

顔を合せての相談も、つまるところは、ここへ落ちるのが常であった。

「拙いのは、あの女じゃ。あの女一人がわしの心をいらいらさせる」

「なに、手の者を放って、事情を知る幫間二人は冥土へ送り届けてあります。——いずれ機を見て、あの女には毒をくれましょう」

「うむ」

「少々の乱行は、いずくの大名にもござりましょう。それを一々咎めては、天下騒乱の因ともなり、せつかくの泰平に傷がつくことぐらい英明の吉宗公、先刻承知かと心得ます。問題は、高尾太夫、この女さえ消してしまえば……」

「機を見てやるがよい。いかに松の位の太夫職とは申せ、たかが吉原

の遊女じゃ。それを城中に迎えて、われら戦国以来の股肱の武士が、その前に臣礼をとらねばならぬとは、考えるだけで胸が悪くなる」

顔見合せて、あらためて吐息する二人であった。

「や！」

将監が顔をあげた。——床柱にしかけた鈴が鳴ったのである。

襖外に所用の者が姿を現したのであろう。

「誰じゃ」

「宇津木でござります」

襖の向うから声が来た。

「何の用か？」

「殿のお召しでござります」

「え？」

「高尾殿が、碁を致されます。その相手をせよとの御錠で……」

「けっ」

（——なんたることだ。十五万石の家老職が、遊女の碁遊びの相手をするのか……それが主命か）

「急病じゃ」

「は？」

「急の腹痛にて、下城致したと申しあげろ」

「はア……しかし」

「黙れっ、老職の一言であるぞ」

「はっ」

また、鈴が鳴った。——宇津木幾之進退却の合図である。襖外には織部正組下の伊勢忍者が控えていて、密談の蔭守りを勤めている。

「ああいう幫間侍が多いので困るの」

「全く、宇津木は次席家老の嫡男、それが、性根を失なって、城内吉原の遊びにうつつを抜かしております」

「元禄の昔、浅野の忠臣は、わずか四十七人であった。浅野は五万石当家は十五万石、さりながら忠臣の数は、二十人を出ないありさまじゃ」と、将監はぼやいたが、なかに、この男とて大石良雄ほどの器量はないのだ。

一体に泰平になれ、人間がみな小才になっている。

九 若紫変化

「待てっ」

闇の蔭から、底力のある声が飛んだ。

「はい」

と足を止めたのは女である。

「何者だ？」

「若紫でありんす」

「なにっ」

蔭からぬっと出た男は、苦い顔になった。

城内鉄砲櫓の下である。

「大門より外への出入りは禁じてあるぞ」

「知りいせん」

「けっ」

口を歪めて近寄った。

「俄仕立の廓言葉なぞ聞きとうないわ。いずれは領内の百姓の娘であらうが、けがらわしいッ。大門の内は、殿の粹狂で致し方もないが、

特集 謀間女 忍者女

貴様の如き無貞節の女に、所構わず歩き廻られてたまるものか。それでなくてさえ、一旦事ある際に、敵の大軍を防ぐ十五万石の名城が、散々汚されておる。——ええい、戻れ戻れッ。戻って殿に盲従する腐れ武士どものおもちゃになるがよいわッ」

「あい」

と前帯の女は足を返した。

「待てッ」

と、二度目の声が飛んだのは、この女の姿が鉄砲櫓の下を離れて、闇の色にとけようとした時である。

ツツツ

音もなく追いつがって、

「おい、女ッ。おぬし百姓娘でないな。と申して城下町の商家の娘でもない。たしかに武士の娘だ。もう一度、顔を見せろ」

と、油断のない構えになっている。

「うーむ。家中の女でもない。奥の腰元でもない……殿の命令で、城内遊女になりさがった家中の女、奥勤めの腰元なら、みんな顔を覚えてある。——怪しい奴」

いきなり、むずと女の右手首を掴んだ。

政岑に盲従して、望まれた娘を差し出したり、幫間侍になり下ったりしている腰抜け侍ではなかった。

伊勢以来の血を継いだ股肱の二木忍者の一人である。

女の歩法の微妙な点に、武芸鍛錬の影を直感したのであった。足音が聞こえた。

「その女を何とする」

近づいて言ったのは、次席家老宇津木兵部の嫡男、幾之進であった。

（——けっ。幫間侍め）

「怪しい女だ。引っ立てて吟味する」

「それはならぬ」

「なにッ」

「その女は、新しく抱えた振袖遊女若紫だ。大門内の女は、高尾殿の支配下にある。勝手な取調べはならぬぞ」

「うるさい。拙者は、鉄砲櫓を守る城内目付組毛利小弥太だ。役儀によつて致す事、口出し無用！」

「黙れ黙れ。城内遊女は支配外じゃ。無礼致すな」

「けっ、幫間め」

「なにッ」

「この女が、幕府の犬であつたら何とする」

「えっ？」

「幫間侍にはわかるまいが、この女は武芸鍛錬の者だ」

「ほう」

「それとも、氏素姓がわかつておるか？」

「領内浜木村、百姓与兵衛娘お杉——娘狩り同心の調書もついておる」

「偽者だッ！」

「え？」

「浜木村のお杉なら、訳あって存じておる」

その瞬間である。

今まで、黙っておとなしく立っていた女が急に動いた。

右手首をガッキとつかまれている。

しかし、女は足を用いた。毛利小弥太が、握った手首に、ぐっと力を入れたのと同時に右足を飛ばしたのである。

避くべくもない強烈な奇襲であった。

小弥太は男の急所を一撃されて、撥ねるように倒れていた。幾之進は、茫然と立っている。

「ほほほ」

その顔を見て、女は笑い出した。

「く、——くせもの……く、くせ」

女の冷たい笑い声と、鋭い眼光にハッと気を取り直して喚き出したが、こいつは簡単に当身で倒れた。

悶絶した二人を、するすると物蔭へ引きずり込んで、

「わたしは見た。確かめた。——もう、用のない城……」

呟やきながら、毛利小弥太の着衣を引っ剥いでいる。

十 伊賀父娘

暗い城壁の上から、蛇のように、くねくねとのびて来るものがあった。

縄である。

やがて、この縄を頼りに、黒い人間がつたい降りて来た。

五尺——十尺……十五尺——

「兇！」

突然、城壁の上で叫んだ者がある。同時にあっちからも、こっちからも、

「兇！」

「兇！」

と応ずる声があった。

「松明」

「籠灯」

ちゃんと用意ができていたのであろう。まず最初に、一条の光りが濠へ傾斜する石垣をなめはじめた。

「いたっ！」

籠灯の光りが、縄をたよりに脱出をはかる人影を捉えた。

ヒュン

ヒュン

間髪を入れず、三方乱れの二木手裏剣が夜気を裂いて走った。

「飛んだ！」

黒い人影は、縄を離れて宙へ飛んだ。——下は黒々とした濠である。

水音。

波紋。

発見が早かった。このままでは、外濠をかためられると袋の単になつてしまう。

しかし、手は打ってある。

その効果が水音と同時に現われた。

「火！」

「火！」

城内に火の手が上ったのである。油と蠟燭を細工して、四半刻後の発火を計算してある。火は武器庫に近く、防火が第一であった。従つて追手の人数も制限されてしまった。

「ふふふ」

暫くして、城外遠く、れいの野小屋の前に立って笑う者があった。白髪齒抜けの老婆である。——歩き出した。

百五十七里。

姫路を発して、江戸日本橋までの里程である。

簀田助八の伊賀屋敷——、三日たっている。

闇部屋問答が始まった。

「問う」

「十一代三浦屋高尾なり」

「はほう」

「榊原殿、身分を隠して高尾太夫を身受けし帰国の際に伴う。城中に入れ、別邸を造りなして吉原に似せたり。詳しくは書面に綴る」

「うむ、それで幫間を殺したのか」

「高尾身受けの事、榊原式部大輔なりと知る者、桑名屋弥吉、中村屋吉兵衛の両名のみなり、口外を恐れて殺害せるものと思惟す」

「隠密行如何？」

「老婆」

「うむ」

「巡礼娘」

「うむ」

「娘狩り同心をはかりて、娘お杉の身替りとなり城中に入る。若紫の名を貰う」

「はほう」

「探るに、政岑侯逆心は無し。城内吉原を造営せるのみにて、謀叛の為の城池改修眼にとまらず」

「よし」

闇問答は終わった。

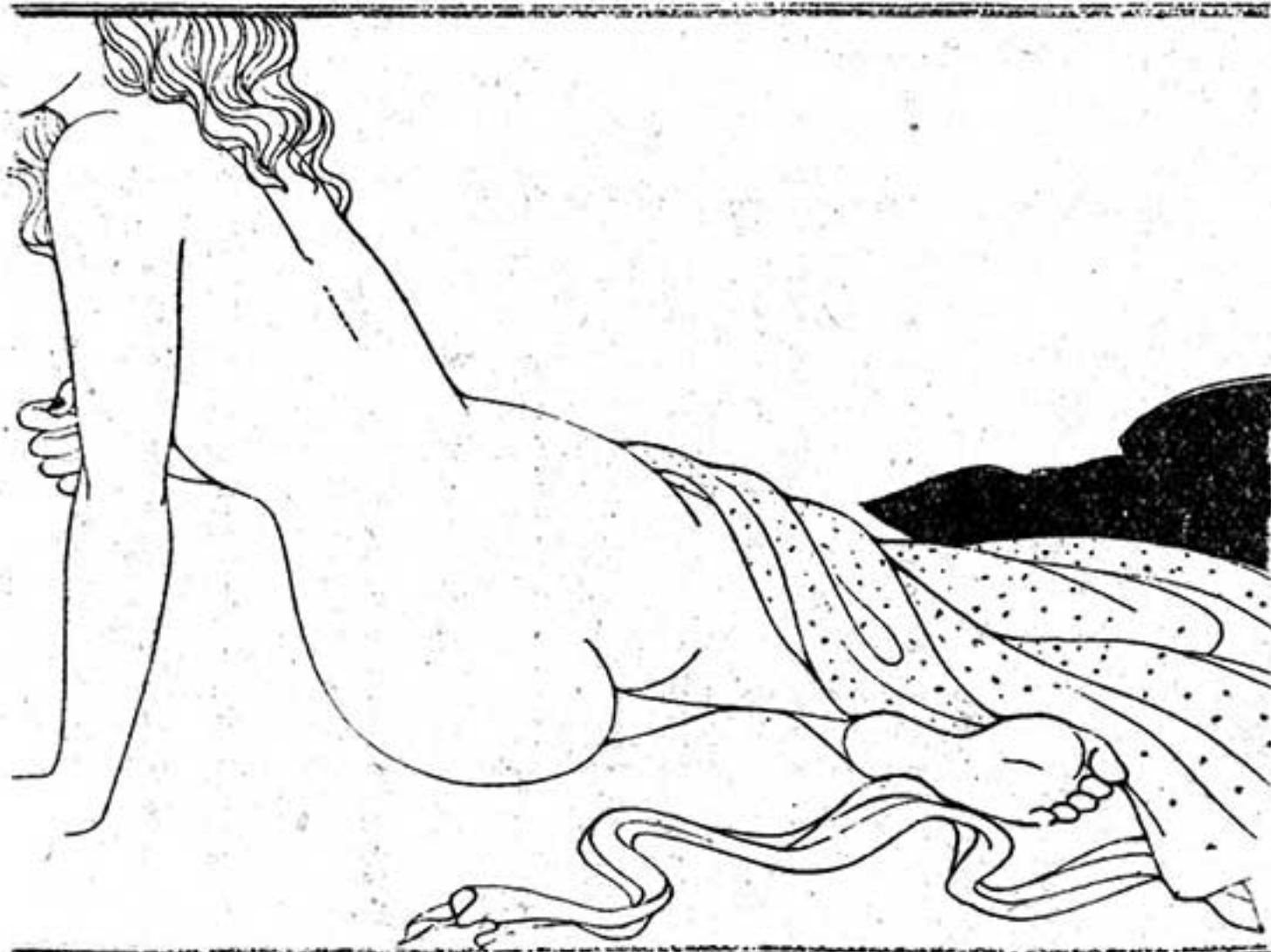
寛保元年十月十三日、榊原式部大輔、遊女高尾を城に迎えたる件、

不行跡なりとして、隠居蟄居を命ぜられ、越後高田へ所替えの断が下った。女隠密簀田葉末の働きである。

告予号次

雄春本島

《裏窓妖異譚》 敷屋変化



十二支を彫り込まれた侍女達の妬

情に狂う渦中に無垢な乙女が！

天井から響く、陰々たる猫の声！

こんなにすばらしい夜はなかった。

彼は陶然とみつめていた。

月光の下に横たわる、すんなり

した美しい体を……。

みごとに発育した、それでいて

しなやかにひきしまった体つき。

わけでも、腰のあたりのあぶら

のりきったゆたかな丸み……。

しかも、その眼は何の疑いも抱

かず、一瞬後に迫る運命も知らぬ

げに静かな信頼の色を宿してい

た。

その眼を見ていると、彼は征服

者の誇りと満足にうっとりしてい

たい気な思ひ上りを、ピシヤリ

とたたかれたような気がした。

まさしく湖畔の精だ！ この美

しさを冒瀆しようとする心を、恥

じなければならなかった。

しかし、ぐずぐずしてはいられ

ない。

いつ、アイツらが邪魔に入るか

わからないのだ。

共有を主張して止まない飢えた

男達に、彼は一瞬はげしい憎悪の

念をもやすのだった。

せめて彼の手で、犠牲者をあま

りおびやかすことなく……。

許しを乞うような思いで、そっ

処女の羞恥？ 本能的な警戒？

全身が鋭敏な感覚帯なのだ。

どこをさわられてもくすぐった

くてたまらないというように、身

も世もなく跳ね悶える。

ともすれば滑り抜けそりになる

美しき犠牲

コント

彼女は男の手
あわれめられた中
に



と、なめらかに光る肌へ手を触れ、滑らかな肌の感触に、彼はゾクゾクして来た。

ピクリ！

彼女は全身をくねらせた。

その鮮やかな手ごたえは、彼の

手から心臓へ電気のように伝わっ

て、快い衝撃にうずかせる。

おちついて、素早く。

一思いに押えつけるんだ。

「さあ、おとなしくしてくれよ。

そう、いつまでもじらすんじゃない」

い

上ずった声でささやきかけなが

ら、腕に力をこめる。

彼女の瞳孔は恐怖に開ききった

まま、必死に逃れようとする。

「おい！ どうしたんだ。まだソ

イツ一匹カタがつかないのか！」

「早くしてくれ」

ジリジリした男達の声。

もうためらっている時ではない

彼は荒々しい勢いで、美しい犠牲

の上に挑みかかっていった。

数分後、彼は英雄の誇りで、たき火の方へ大股に歩み寄った。

彼の釣り上げた鱗を待ちかねて

鍋にバターをとかし始めている、

腹ペコの友人達に向って……。

「お待ち遠様。うまく料理してく

れよ」

★探訪記者
ノート

悪魔は見ていた



神行京一

山田 彬 弘・画

はしがき

異常な探訪記者であり、私の奇友でもあったあの加藤太郎も、今はすでに冥府の人である。

その関係の形見は、わずか数片の遺骨を妙法寺墓地の、位牌型墓石の下にとどむるのみだが、——しかし、彼の遺した記録は尨大であり、第一線記者生活二十年のその集積は一朝一夕に語り尽せぬ量を誇っている。

——中に、五枚の写真がある。

いずれも一見してわかる警察種の怪写真であり、そのポーズが、男モデルの顔を不分明にしている、女性モデルは、その顔を正面にしている鮮明であつたし、しかも一枚一枚別人になっている。

五枚の写真の裏には、それぞれ五組の男女名が記入されていた。



加藤の筆
跡である。

四枚目の記入
名を見るまでは

私はそれが各写真

の男女モデルの名称
だと思っていた。とこ

ろが、四枚目の写真裏を
見て驚いたのである。急に

興味が湧いた。——そこで早
速、附属の記録に目を通して、

この五枚の写真の裏には、奇妙な
怪事件の隠されている事実を知った

訳である。

はじめに、五組の男女名をあげておこう

その一 萩原真一郎

真沙子

その二 中川 民雄

小見川恵子

その三 吉岡 進

村田 歌江

その四 加藤 太郎

高橋 芙美

なんと、加藤自身の名が、四枚目の写真に
記入されているのだ。

その五 榊原雄次郎

美津子

これらの写真は一枚の角封筒に入ってい
た。切手も消印もあり、表に市南下京区七条
鳥九柿本町、吉岡進殿、——裏には京都新報
探訪部一記者……とペン字で書かれている。

その一

机上の電話が、けたたましく鳴った。

「はい、加藤だ」

珍らしく、社会部探訪室の自席で、のんび
りしていた加藤記者が、面倒臭そうに受話器
をとりあげてどなった。

「——なにッ、殺し！」

★恋人達は狙われている！

あられもない怪写真のモデルは清浄無垢な彼女だった！★

次の瞬間不意をうたれたように聞き返す。途端に、今まで、かしましかった室内が、落雷に見舞われたようにビクーンと緊張した。

いつもの事である。

岡松記者通称オーさんと、秋山記者通称一番さんは、呑みかけていたお茶にむせて、目を白黒させたし、記録担当の室岡記者と、写真部の田中カメラ氏は、黒白を争っていた卓上碁盤を引っくり返したし、連絡の給仕に性教育としゃれていた古参尾形記者は、煙草の火をつけようとしていたライターの焰で鼻の頭を焼いてしまった。

「どこだ？」

と加藤が噛みつくように尋ねている。

「え、なにッ？ こらっ、おちつけッ」

相手は、どうやら、はやほやの駆け出し記者らしく、興奮していて、いささか要領を欠くようである。

「下賀茂……うん、下賀茂のどこだって？……」

……うん、うん……警察は？ まだか……どうして……え？」

じれったくなったのか、みんな電話のまわりに集って来た。

「誰だい？」

と尾形古参記者が、鼻の頭に唾をつけながら尋ねる。ふり向きもせず、その質問には、「野崎の奴だ」

とどなっておいて、加藤は電話に伏えた。

「馬鹿ッ、違う違う、こっちの事だ。それで現場には手をつけてないだろうな？ よし、すぐ行く、ヘマをやるなッ」

ガシヤンと受話器を叩きつけるように置いた。

一同の視線が、加藤の顔に集中する。

「新婚の若妻殺しだ。野崎の奴が、インタビューを取りに行つて発見した。つまり本社と防犯協会の共催で募集した防犯標語の当選者なんだよ。皮肉だね」

言葉短かく説明して、再び受話器をとりあげると、機動班を呼び出した。

「探訪室の加藤だ。車ッ！」

「殺しだな」

電話の向うでも、ピーンと来たらしい。

新聞社ならではの感のよさである。

飛び出した。

現場は閑静な住宅地帯で、目的の家は小ぢんまりとした新築の家屋であった。

空地があり、その横を走っている狭い道が大通りと交錯するところに、公衆電話のボツ

クスがあった。

まだ若い野崎記者が傍に立っている。

「どれだ？」

「あの門構えの家です」

「よし。おれたちは写真を撮る。君ア、合図したら、すぐ警察へ電話しろ」

若妻の死体は、玄関の三畳の間にあった。衝立があつて、倒れている。どこかの山を描いた絵で、その山裾の辺りが大きく破れていた。

美貌の若妻は、倒れた衝立の横で、仰向けになっている。

血が飛び散っていた。

白のブラウスに紺のタイトスカートで、傷は三ヶ所——背後から脇腹をえぐったのと、左腕と、そして、純白のブラウスを深紅に染めた胸の傷である。

三畳と四畳半二間に台所、便所、風呂場があつて二階のない狭い家だが、屋内を物色した形跡はなかった。

寝室には、派手な夜具が敷いてある。

「おやっ？ 妙な物が落ちてるぜ」
同行の秋山記者がかがみ込んだ。

「写真だな」

と加藤ものぞき込んだが、

「おっ、こいつア！」

思わず顔を見合せてしまった。
あやしい写真である。

「おい」

「うむ」

「この女モデル、被害者じゃないか。そっくりだぜ」

「うーむ」

「複写したところ。これア鍵だよ」

「おい、ターさん。こいつを一枚撮ってくれんか。おい、ターさんよう」

田中写真班を呼んだ。

通称ターさんは、裏手の方に廻って、しきりとシャッターをきっていたが、返事のかわりに、突然、悲鳴を上げてよこした。

「うわーッ！」

「何だ！」

「どうしたんだ？」

加藤と秋山記者が、ギョッとなって腰を浮かせた。

「首吊りだ！ 便所の中でぶら下っていやがる」

あとでわかった。

首を吊っていたのは、新婚の良人であり、便所の入口に、血に染んだ出刃庖丁が落ちて

いたし、その手にも、着物にも、返り血を一杯浴びていたのである。

警察の捜査も順調に進んだ。

探訪室では、また雑談が始まっていた。

「ちえっ、案外だったな」

「まさか亭主が便所の中で首吊り自殺をしていようとは思いませんでしたよ」

秋山記者と野崎新米さんである。

「はじめは驚いたろう」

「ええ。呼んでも返事がない。けれども表戸に錠がおりてなかったので入って見ると、あの有様です。泡をくらって公衆電話まで走りました」

「とんだ特種さ」

「へっ」

「亭主が女房を刺殺して自分は首を吊った。

原因は——てえと、例の写真だな。信じていた美しき若妻は、とんでもない過去を持っていたと言う訳だ。近ごろの女性は怖いよ。過去に愛人の一人や二人あるのなんざ、まア普通だな。しかし、あの新妻のは、ちとひど過ぎた。事もあるうに、ふっ、亭主のかつとなつた気持もわかるね。何しろ、ただのヌード写真なんかじゃアねえんだからね」

「おい、一番さん」

横から、尾形記者が口を入れた。

「え？」

「人ごとじゃないだろう」

「何が？」

「お前さんの奥方も、コンテスト向きの肉体美人じゃないか。ひょっとしたら、今度の若妻みたい……」

「じょッ、冗談じゃない。うちのは良家の高級品娘だったんですぜ。それに、初夜は間違いのねえバージョンと来てるんだ。おあいにく様だね」

「その良家の子女というのが危ない。今度の事件の被害者も、俗に云う良家の女だったじゃないか。学校を出て、間もなく結婚しているし、勤めの経験は全くないと云うのだからまア世間知らずのお嫌様だった訳だ。それが……」

「わかった。わかりましたよ、もう！ 先輩の口にかかる、火のない所から立派に煙が出ちゃうんだから怖いよ」

「はっはは」

秋山記者の妻君は、社でも評判の美人である。——からかって、みんな笑いだした。

しかし、笑わない男が一人いた。

雑談の仲間にならず、むずかしい顔の加藤

太郎である。

何を考えているのか、田中写真班が、現場で撮って来た例の写真を、じっと見詰めて動かないのだ。

こんな物は見馴れている彼であるのに……暫くして、その写真の裏をかえすと、ペンをとって、何やら書き込んだ。

萩原真一郎

真沙子

惨劇の家の新婚夫婦の名前である。

その二

夜桜が美しい。

紅の雪洞と提灯が、その柔かい明りで、夢幻的な夜桜情緒をつくり出しているのである。

二人は人ごみから離れた。

「ここだったわね」

と若い女が言った。

「うん」

と口の中で答えたのは、二十六七の青年である。

「お写真撮ったでしよう」

「うん」

「今から考えると、いい記念になるわねえ」

「うん」

「二人とも写真嫌いで、一緒にうつしたのはあれ一枚きりですもの」

「うん」

「どうしたの？ 何を言っても、うん、うん……ねえ、どっかお悪いの」

「いや、別に」

「そう、ならいいけど」

二人は岩の上に腰をおろした。女は美しくポツと上気した頬であり、瞳が幸福そうにかがやいていた。

恋する乙女の眼であり顔であり声である。

しかし男の顔は何かを考える顔であった。

「そうそう、大事な事忘れてた。お部屋見つけたのよ」

「うん」

「権利金も部屋代も適当だし、ねえ、もういつでも結婚できるわね」

「そう思うかい」

「え？」

「結婚は遊びじゃない」

「あら、遊びだなんて、あたしたち真剣じゃないの。会社でも評判になって来たし、早くお部屋を見つけて結婚しなくちゃ……っておっしゃったのはあなたのほうよ」

男は口を歪めた。しかし、女は気づかずにいるのである。

「明日はお休みだしお荷物運びましようよ。」

——悪いけど、あたし決めちゃったの。だって、すぐ決定しなきゃ、別の申込みがあるから、そっちの方へふり向けるって言われたんですもの。でも、まかせるとおっしゃったでしょう。費用が適当だったら、君の好きな所でいいって」

「そんな事言ったかな」

「あらっ！」

女は、はじめて男の様子が妙なのに気づいたようである。

「変よ、やっぱり。ねえ、どうかしたの？」

「いや」

「何かあったのね」

男は顔をあげた。立ち上った。

「はつきり言う。ほくは、栄子さんと結婚する事にきめたんだ」

「えッ！」

ぎょっとなって女も立ち上った。

「辛い君とは清い交際のままで来た。しかし栄子さんとは、昨夜、もう事実上の結婚をしてしまったんだ」

「そんな……そんな……ひどいっ！」

「ひどい？ ひどいのは君の方だ。隠しても駄目だよ。ほくは、ちゃんと知っているんだから。君って女の正体が、やっとわかったのさ……永遠に、顔を見るのも嫌だね」

「——あ、あたしの何を知っていると言うの……ね、あたしは何をしたっておっしゃるの」

「ふん。これを見たらわかるだろ」

男は、いきなりポケットから角封筒を取り出すと、叩きつけるようにして歩き出した。

「待って！」

「うるさいッ」

冷たい声であった。女は、その語気に押されて追う足を釘づけにされてしまった。

その足が白い封筒を踏んでいる。

大粒の涙がほほを伝って流れた。

珍らしくない愛の破綻の一景であり、しかし女は、その夜、一転して死の道を辿ったのである。

服毒自殺であった。

女は、京都新報販売店の二階、三畳を間借りしていた。その関係で、警察より先に、本社へ急報が来たのである。

遺書があった。

——あたしは民雄さんを失ないました。もう生きる望みはありません。あたしは

誰かに呪われているのです。あの人かも知れません。以前あたしに求愛した人、京都新報探訪室の鳥居俊造さん。あたし

には中川民雄という愛人がありました。ですからお断りしたのです。当然の事ではないでしょうか。もし鳥居さんの復讐だとしたら……でもわかりません。誰かあたしを呪っているのです……

小見川恵子

遺書の文面である。乱れ乱れた筆跡も哀れであった。



枕元に細かく引きちぎった写真があった。つなぎ合せて復元してみると、それは、あられもない怪写真であり、しかも、そのモデルは、紛れもなく自殺者小見川恵子であった。

複写したこの写真の裏に、加藤は二人の名前を書いた。

中川 民雄

小見川恵子

遺書にある鳥居記者は、すでに四ヶ月前、取材に急行中、交通事故のため殉職していたのである。

その三

二つの事件は、表面的にはごく単純な事件であった。

良人が妻を殺害して、犯人であるその良人は自殺している。

恋愛中であり、結婚を目前に控えた女性が服毒自殺した。遺書もある。

そして、その原因は、いずれも、その女の思わしい過去が暴露された事にある——と警察も考えたし、加藤の社の連中も、この結論を疑う者はなかった。

戦後の女性は思いきった事をする。アプレ

でドライで、たとえ良家の子女であり、まじめな事務員であり、学問の場に学ぶ女学生であつても、信用がなかった。

重後の令嬢が、万引をし、高級売春婦として検挙された事がある。

どの会社にも、部課長級の二号的な事務員がいる。

ある女子大生は、アルバイトに春を売っていた。

こうした例は枚挙にいとまがなかった。

だから、例の写真の一件が当局や記者連中の知るところとなつても、特別の関心をひかなかったし、また、事件そのものにも、犯人が自殺してしまつたり、遺書があつて愛の破綻が明瞭であつたりして、追求する価値がなかった事も原因して、各社とも大して大きく取扱わなかった。

ニュースを追う者の常である。

昨日の事件は昔の事件だった。

しかし、ここに一人、この世の常ならざるもの、人間の暗い半面……仮面の陰に存在する歪んだものに対して、誇張すれば狂的——と言ってよいほど異常な興味と執着を持つ男がいた。

加藤太郎である。

彼の物尺からすれば、他殺と自殺の相違こそあれ、二つの事件に怪写真の關係する事實は、この世の常ならざる出来事であつた。

裏に必ず何かある。

歪んだ、狂的な、暗い執念の存在が直感でさぐる……

加藤は、ひそかに動き出していた。

もちろん、明確な目標がある訳ではなかったがきつとそのうちに何か——をつかめると考えていたのである。

聞き込みを始めた。

すでに解決した事件であり、表面的には、まるで収獲がなかった。

萩原真沙子。

結婚三ヶ月である。二十三才。近所の評判は、可もなく不可もなかった。おとなしくて美人で愛想がよくて教養がある。とてもいい奥さんだ——と言う者があるかと思えば、ずぼらで無精でケチで冷たい——と言う者もある。娘時代は、沖野真沙子と言つた。沖野商事株式会社というのがある。小会社だが、この社長の娘で、女学校を卒業すると、洋裁学校に入った。唄が好きでノド自慢に出たりダンスのレッスン場にも出入りしたりしている。

しかし、特別これという噂もなかった。

洋裁学校時代の友人に聞くと、一度ダンス帰りに痴漢に襲われた事もあるが、無事に救われている。

良人の真一郎とは、音楽同好会の集りで知りあい、交際から恋愛に発展し、結婚した。平凡である。

加藤のノートは、無意味な文字の羅列で埋められて行った。

小見川恵子。

京洛紙業株式会社の事務員である。国は岡山で、その学校を出て、兄と一緒に入洛した。兄は、入洛一年後病没している。勝気で情熱的な面があり、同じ会社の社員中川民雄を、同僚の吉浜栄子と争って、一度は恋の勝利者となった。これ以外に、浮いた噂はまるでない。今どき珍らしく、生涯に男は一人——といったタイプの女性なのであろう。

岡山に縁者はあるが、まだ荷物類を引取りに来ていなかった。

京都新報の販売店へ下宿していた関係もあって、加藤はここでは、ゆっくり遺品類を調べる事ができた。日記をつける習慣のなかった事は、すでにわかっている。写真嫌いというのであろうか、アルバムのたぐいも見当ら

なかった。

詩集がある。

詩が好きだったのであろう。自作の詩らしきものを書き並べた帳面があった。——と、中から一枚の写真が出た。

寄りそって立っている若い男女で、誰の目にも恋愛中なのだ、とわかるような写真である。小見川恵子と中川民雄の二人で、背景は丸山公園なのだろう。

加藤は、何を思ったのか、断りもせずこの写真をポケットへ滑り込ませた。

第三の事件は、この時すでに始まっていたのである。

「おい、まゆみッ。起きろっ」

ゆり起されて、キャバレー「黒真珠」のナンバーワンである真弓は、ねむそうな眼を開いた。

「もう勘忍してよ。ゆうべ散々いじめたでしょ。くたくたなのよ」

勘違いして甘ったるく言っている。

「何を言やがる。起きろッ!」

枕元の畳に、ジャックナイフが、ぐさッと突っ立った。

「まア、どうしたって言うの、あんた!」

さすがにはね起きて、内縁の良人の顔を見

る。

「こいつを見てみる」

鼻先に一枚の写真を突きつけられた。

「あらっ、いやらしい! こんな写真見せるなんてお下劣ねっ」

「馬鹿野郎、ようくその顔を見てみやがれ」

「あ! これ……あたしじゃないの」

「おい、お前いつから、そんな商売をはじめたんだ。おれが最初の男だと言ったときながらくそッ、よくもだましやがったなッ」

横っ面を張り飛ばした。

「あッ」

馬乗りになって、なおも平手の雨を降らす奴である。

「待って! まってッ! 嘘よッうそよ、あたし覚えがないわ。きつと他人の空似でしょ」

「けっ。こんなによく似た空似があつてたまるけえ。こいつ、どうするか見てやがれ」

髪をつかんで引きずり廻す。

「あッ……い、いたい……い、痛いったら」

「身から出た錆だッ」

胸の辺りに片足かけて、ぎりぎりッと踏みこじった。

「あッ。ひいーっ! か、勘忍して、ほ、ほんと、本当なのよ……ほ、ほんと……」

男は耳をかさず荒れ狂った。

夜になった。

加藤は社の探訪室で、この男と会見したのである。

「まゆみの奴アどうしても泥を吐かねえ。半殺しの目にあわせてやっても、まだ白ア切つてやがるんだ。そこで考えた。生証人を引張り出してやろうとな。この写真は、そら、封筒もある。この通り、京都新報探訪部一記者と書いてあるだろう。お前さんこの奴が送ってよこしたもんだぜ。さア聞かして貰おうか——どこでこの写真を手に入れた？」

男はこんな風にまくし立てたのであろう。それから押問答があつて、男が引揚げたあと、加藤の手許には、例の写真と封筒が残っていた。彼は、写真の裏に、二人の名を書き入れた。

吉岡 進

村田 歌江

吉岡進は、まゆみの内縁の良人であり、特攻隊くすれのヤクザあがり、今は黒真珠のバーテンであり、村田歌江はまゆみの本名であつた。

その四

その翌日である。

加藤は、胸の中で凝結しかけたある推理を反芻しながら、期するところがあつて、吉岡進とまゆみの愛の巣を訪ずれた。

まゆみは臥せっていた。

キャバレー「黒真珠」ナンバーワンの美貌と姿体の持主も、今は見るも哀れな存在であつた。

左の眼が腫れ上り黒ずんでいる。

右の頬にナイフの創が一条ある。

裸にすれば、胸といわず、肩といわず、背、腹、太腿……至るところの肌に、折檻の痕がある



のだらう。

「昨夜もお話し致しましたように、極力調査を進めているんです。社の名誉にも関する事ですからね。そこで、ある種の必要から、奥さんのアルバムがもしありましたら、ちょっと拝見したいのですがねえ。ええ、必ず出所を突きとめて見せますよ」

吉岡進を呼び出して、注文した。

「アルバム？ そんな物が何の役に立つんだね。要するに、あの写真を撮った奴を見つけ

てくれりゃそれでいいんだ」

「ええ、しかし、ある種の考えが当方にはあるんです……とにかくお願いします」

強引に、アルバムを借り出した。

調べる。

一枚一枚丹念に見ている。吉岡と二人で写した写真もかなりあつた。

その中の一枚に加藤の眼が歩

つた。

「これは、どこで撮ったものです？」

「丸山公園だよ。あいつと熱々

の仲になった頃……つまりごく最近だがね。それを畜生ッあのアマめ、とんでもねえ食わせ者でやがる——事もあるうに、あんな写真のモデルを……」

「まあまあ落ちついて。撮影者は誰です」

「これのかい？」

「ええ」

「さア、写真屋だよ。丸山公園へ出張して来ている奴だ。男と女の二人組でね。何と言ったっけなあ……送ってよこした封筒には印刷してあったが、忘れちゃったよ。しかし、そんな事が一体」

「その封筒は残っていませんか？」

「ねえな」

「じゃア、この写真だけ一枚、お借りして行きますよ。例の写真の撮影者は、わかり次第通知しますから」

「男モデル野郎もわかったら、ついでに教えてくれ」

吉岡の眼には殺気めいたものがあつた。

「もちろん。しかし、責任をもって証人を突きとめますから、それまで奥さんに手荒な事



をせぬよう頼みますよ」

加藤はそうそうに引揚げた。

その足でたずねたのは、沖野商事の社長宅であり、ついで足を向けたのは、萩原真一郎の兄の家であつた。

ここでもアルバムを調べている。

惨劇の家の遺品は、真一郎の兄が引取り、その中にアルバムがあつた。

「これだ」

加藤は中の一枚に目をとめた。

萩原夫妻が仲よく肩を寄せて写っている。

背景は丸山公園なのであろう。

いったん社へ引揚げた。

「ターさん、ちょっとつきあってくれ」

田中写真班を引っ張り出してぶらりと丸山公園へ現れる。

「よう、どうしたんだい、いたい？」

公園内をぐるぐる廻って、しかし、一言の説明も加えない加藤に田中記者もたまりかねた。

「あれらしい」

と、加藤が始めて口を開いて顎をしゃくった。

「え？」

見ると遊山客相手の写真屋が立っている。

男女一組の写真屋で——「お独りの方は、記念のため、美人と一緒にいかが？」——こんなキャッチフレーズを貼紙にした看板を立てていた。

連れのない独り者や、男達ばかりの組にはあの女が、写真パートナーにもなるのである。

なるほど凄うような美人で、しかもなかなかの肉体美である。

「ターさん」

「ん？」

「あの女の、ヌードを撮る工夫はないものかな」

「えッ！」

加藤が突然妙な事を言い出したので、田中写真班は呆れ返って、この奴の顔を見た。

「どうだ？」

「冗談じゃない。正気かい」

「もちろん。おれは常に正気さ」

「ふーむ」

何か訳があるんだな……ビーンと来た。

「難題だな」

「とにかく、まず奴等のねぐらを突きとめようか」

これは簡単だった。

自宅でも写真屋を開業している。ただ、観光シーズンには、こうして市内名所客地へ出張撮影に出て来るのである。

彼等の後をつけて、これだけは確かめた。

しかし、モデルでもない女のヌード写真をそれもこっそり撮るなんて事は容易でなかった。

「降参だ」

田中写真班は手をあげてしまった。これと

いう妙案も浮かばなかったのである。

「仕方がない。写真は諦めたよ。——が、見るだけでもいいんだ……。はて……」

加藤は考え込んだが、急にニヤリと笑ってみせた。

「うむ。一つ手がある。当って見よう」

「どうするんだい？」

「後で話すよ」

「俺はお払い箱か？」

「しかり」

「けっ。勝手にしやがれ」

何が何やらさっぱりわからず、田中写真班はむくれ返って帰社してしまった。

翌日。

探訪室の自席でブスツとしている加藤に、

田中写真班が話しかけた。

「どうだい。写真屋嬢のヌードの件は？」

やっぱり気になっていたと見える。

「見たよ」

「えっ？」

「大した肉体美さ」

目的を果たしたにしては、加藤の顔色が冴えないのが妙である。

「どんなテを用いたんだい？」

「強引に頼んだよ」

「ふえっ！ 女に脱いで見せてくれろってかい？」

「馬鹿だな。近所の銭湯だよ。ある重大事件の探訪だと言ってな、身分も打明けて、いつとき番台に坐ったのさ」

「なあーる」

田中カメラ氏は感心したが、加藤はむずかしい顔のままである。

予想に反した……らしい。

手に入れた三枚の怪写真を並べて思案する眼になった。

一時間。

「そうかッ——そうかもしれぬ」

突然、新しい道を発見したように、口の中で呟やいた。

「よしっ。第二のテだ。美人美人！」

いきなり立ち上ると、文化部へ飛んで行った。

居合せた連中は、呆氣にとられたようである。

「おい、加藤がまた気違いじみて来たぜ」

「うん、あいつがああなると、決って何かあるんだ」

「今度ア一体なんだろう？」

「何が美人だか知らねえが、いやに張り切っ

て飛び出しアがった」

てんでに、ガヤガヤやりはじめた。

「ほう。加藤のやつ、当社随一の美人、ミス京都新報を引っ張り出したぜ」

窓から外を見ていた秋山記者が、いきなり叫んだものである。

「え、文化部の高橋記者かい？」

文化部の高橋婦人記者は、社内随一の美人記者でもあった。

——それから一週間。

加藤は誰に何を聞かれても、ニヤリと笑うのみで答えなかった。

「加藤さん、郵便」

一週間後の朝である。郵便係の給仕が、一通の角封筒を持って来た。

宛名 京都新報探訪室 加藤太郎

送主 関西日報社会部一記者より

「ほう、関西日報と来たな」

開封。

中には写真が一枚。それも、例のあの怪写真であり、モデル女は、何とミス京都新報の高橋婦人記者であった。

ニタリ

と加藤が笑ったのは、これを予期していたからだっただけらしい。

「ふふふ」

含み笑って、その写真の裏に、二人の名前を書き入れた。

加藤 太郎

高橋 芙美

「ミス高橋が、カンカンに怒るだろうて。ふふ……」

その五

榊原写真館。

と表に古びた看板が出ている。加藤は見上げて、しばらく考えていたが、やがて意を決したように中へ入った。

午後九時である。

前もって調べてある。この家は、榊原夫妻

水入らずの二人住いだった。

「今晚は」

——が、返事はなかった。

「今晚は！」

奥で、コトリと微かな物音があり、しかし依然として返事はなかった。

加藤の顔が急に緊張した。——何か不吉なものを感じたらしい。

いきなり、踏み込んだ。

「あっ、やったな！」

叫んだ。

見たっ。

奥の一室である。男が一人、胸を鮮血に染めて倒れている。女が、その傍に、荘然と立っていた。足元に、血染の果物ナイフが落ちていた。

男は、榊原雄次郎

女は、榊原美津子

あの丸山公園の二人組写真師であった。

「死ぬッ」

はっと我にかえると、女は、叫んで足元のナイフを拾い上げた。

「その前に、聞きたい事がある」

加藤は果物ナイフを叩き落して、静かに言った。

加藤が、この女から何を引出したのか、それは彼の記録ノートに明らかにされている。

榊原美津子。

旧姓浜野美津子——哀れな女である。

彼女には、熱愛した一人の異性があつた。

村崎東一郎という二十七才の青年である。

相思相愛。

やがては、結ばるべき似合いの一对でありしかし、好事魔多し、意外な破綻がこの二人を待っていた。

突然、村崎が美津子を捨て去り、別の女性と結婚してしまったのだ。

その理由は、一枚の写真であった。

それも、ただの写真でなく、美津子がモデルとなつてゐる、すさまじい怪写真だったのである。この写真を突きつけて、村崎は美津子の前から去つたのであった。

弁解。

哀願。

美津子の必死の否定も効果がなかった。

「あばずれ！」

「猫っかぶり！」

「変態女つ！」

返つて来たのは、こんな悪罵のみである。

彼女には覚えのない事であり、——やがてこれは悪意ある何者かが、写真の首だけを入れかえたものだと思つた、が、もう後の祭りであつた。

「これだけ巧妙に首のすげかえをやる奴は、写真師仲間でも、まず名人級だよ」

彼女に、その事実を教えてくれた榊原写真師は、以前から執拗に求婚していた男でもあつた。傷心の美津子は、夢遊病者のように、榊原のものとなつた。

——が、もともと嫌い抜いていた男であり

二人の結核生活は、彼女にとって地獄そのものであつた。

そのくせ別れられずに今日まで来たのは、榊原の異常な加虐的愛撫に、いつしか反応する女に仕込まれて、心では憎みながら、肉体が榊原の鞭を待つ女となり果てていたからである。しかし——

そんな彼女でも、清純な昔の愛を、愛し愛される幸福な結婚生活を、求め、欲する心をまるで失なつた訳ではなかった。

もう遅いのだ。

すべてを失つた。

ギリギリと歯噛みしたくなる。そんな時、幸福そうな相愛の男女を見ると、むくむくと兇暴な発作に駆られる。

あいつらも、あたしと同じ悲嘆を味わうがよい。あたしと同じかなしみを……

彼女は、榊原と一緒に商売に出て、撮影した幸福そうな男女の、醜い破綻を夢にまで見た。夢は実行へと移つた。

怪写真を手に入れると、榊原の指導で上達した写真術を駆使して、撮つた女性の首を、その写真の首とすげかえては、男の名宛に送りつける事を考へついたのである。

萩原真沙子、小見川恵子、村田歌江がその

犠牲者であつた。

加藤は、小見川恵子のモデル写真の顔が愛人村田民雄と一緒に撮つたその時の顔とまるで寸分の狂いもない表情である事に不審を抱いたのである。

同一人物なら顔かたちには相違のないのは当然としても、その表情まで複写したように寸分の狂いもないというのは妙だ。複写……複写……そして、ピーンと来たのである。

罨をかけた。

高橋婦人記者を連れ出したのは、彼の推理を確かめるため、熱愛の二人をよそおつて、榊原夫妻のカメラの前に立つたのであり、その計画は、みごとの射たが、運命の手は、一足先に、榊原夫妻を地獄の淵に追いやつてしまつた。偶然、美津子は、おのれを幸福の絶頂から悲運のどん底へ転換せしめる原因となつた、彼女の偽首怪写真を、良人雄次郎の本箱の隅に見つけたのである。途端に一切をさつた。

榊原雄次郎——この男こそ、彼女から村崎東一郎を奪つた悪魔だったのだと……惨劇は数秒の後に発生した。

彼女は果物ナイフを握つて、この悪魔を刺殺してしまつたのである。

(終)

殺人犯はそこにいた

冷たい銃口と冷たい笑いが迫る／

殺人犯と向き合った若い人妻の恐怖／



三国沢 隆
宮島 龍・画

一

いつの間にか永い陽も西に廻り、豆腐屋のラッパが流れてくる時刻になっていた。

市場への帰り道に鎌田家へ、ほんの少しの間立話してもするつもりで寄り込み、つい時を過ごしてしまった。

「およろしいじゃございません？　いくら新婚はやの貴女でも、今夜は御主人お帰りにならないんでしょう。御夕食、あがってらっしゃいましたな」

「おねえさま、そうなさいよ。光子とってもおいしいカレーライス、腕をふるって作るのよ。味をみて、褒めて戴きたいわ」

高校二年の光子ちゃんも、多枝の腕にぶら下がって勧める。無邪気な娘だ。

「じゃあ、御馳走になりましょうか」

多枝はいったん上げた腰を、椅子に戻した。夫は宿直で会社へ泊りだし、気がねも遠慮もいらななごやかな鎌田家の雰囲気、今宵の淋しさを紛らし、甘えたい心地もあった。

市場帰りの野菜籠は、ちょっとだけ立ち寄るつもりだったので、勝手口に置いたままだ。

鎌田夫人と、また一しきり雑談に花が咲いた。台所から肉や野菜をいためる匂いが流れてくる。なるほど、光子ちゃんの腕はかなりいいらしい。

子供向きのテレビドラマを見てみると、鎌田氏が戻ってきた。

「あら、お帰りなさいませ」

「お邪魔しております」

「やあ、奥さん。——どうぞそのまま、いや私も暫時、テレビ見物といきましょうか」

気さくな鎌田氏は、多枝に恐縮させまいとして、着がえもせずに夫人と並んで腰を下ろし、画面に見入る。本当に温厚な、いい主人だ。すぐに童顔を綻ばしてドラマの興味の中へ没頭している。

ドラマが終ると、次は素人の出るクイズ番組のはずだった。それが突然、

——臨時ニュースをお知らせします——

という声と共に地図らしい画面になった。

「あら、何でしょう。今ごろ臨時ニュースなんて？」

鎌田夫人がそう呟いた時、次のアナウンスが始まった。

——本日午後四時四十分頃、世田谷区成城××地、鉄工業木村寛造さん四六歳は、岐

阜県生れ住所不定、元木村さん方雇人大西照男二九歳に、自宅八畳の間で射殺され、内妻もとさん二五歳は腹部に盲貫銃傷を受けて危篤——

ソファから転げ落ちそうな格好の木村氏の死体、ベッドに横たわったもとさんの写真。いつも動く画面を見馴れた目には、動作を停止した不気味な現場写真は恐ろしい感じで目に迫る。急に脊髄を伝わって冷たいものが走るような、不快な感じが起り、多枝は腕を廻して、そつと服の上から背筋をなでてみた。

画面は最初出た地図に変わった。

——大西は犯行後、木村さん方の通報で張られた非常線を抜け、永福町、高井戸方面に潜入の模様、警察では目下同方面に嚴重な捜査網を張っておりますが、該当地区の皆様も充分の注意と警戒をお願い致します——

「まあ、嫌だわ！ この辺も危険地区に入っているわ。ねえあなた、どうしましょう」

地図の上を走る鞭が描いた円内に、この住宅街も入っていたので、鎌田夫人は顔を硬ばらせ、子供のように夫の腕にすがりついた。

料理を中止した光子ちゃんも、いつの間にかやってきて画面に見入っている。

——犯人大西は、身長一米八〇厘、瘦形で

面長、髪は短かく前に垂らしております。薄水色の開襟シャツ、茶のズボンに黒のブル靴アルペン帽をかぶっております。なお、犯人は木村さん方で使用の拳銃を所持、実弾はあと数発残っている模様です——

浅黒い陰悪な目つきの男が、薄笑いを浮かべて画面一杯を占める。

「きゃア——」

光子が悲鳴をあげ、多枝の膝にしがみついた。

「大丈夫！ 怖くないわ」

そう慰めながら、多枝も胸の中にうつすらと生れかかっている灰色の恐怖に、ひそかな慄えを覚えているのだ。妾も早く家へ戻ろう。たった一人でも、家へ戻って全部の戸締りをして、早く寝よう。そう思って立上った。

「今晚は——。鎌田さん、いますか？」

玄関で声がした。顔見知りの堀内巡査の声だった。鎌田氏が応待に出ると、

「ラジオやテレビのニュースで御存じかも知れませんが、実は……」

犯人の大西が包囲網を狭められて、この近辺に立廻っているというのだ。茶の間で聞いていた三人の女性は、ギョッと顔を見合わせ

た。

「怪しいことがあったら、防犯ベルを押して下さい。私もこの近辺を絶えず見回っていますから……」

帰ろうとする巡查を、多枝は急いで呼び止めた。

「あの……家へ戻りたいのですが……御厄介でも送っていただけませんか？」

「ああ、若林さんの奥さんですね。ほう、御主人はお留守で……。そりゃあ心配でしょうなあ。いいですとも、お送りしましょう」

鎌田氏宅から四十米三軒目の筋向いが多枝の家だ。両側に家が立ち並び、いつもは夜間でも平気な道筋が、今夜は妙に不気味に感じられる。親切な鎌田氏が、巡查と一緒にいつてきてくれたのだから、充分に心強い訳なのだが、多枝の胸はまだ小刻みにおののいていた。

勝手口へ回り、スイッチを捻って、三人で家へ入った。居間の蛍光灯をともし、ぐるっと見廻す。別段異状はなさそうだ。

「奥さん、方々の鍵をかけて、早くお寝み下さい」

鎌田氏が窓々の鍵をかけてくれた。

「もう心配ありませんよ。もしもの時には防

犯ベルもありますし……」

そう言って、巡查と鎌田氏は勝手口から帰って行った。

「ああ——」

多枝は居間へ戻ると、いままで張りつめていた心の弦を一時に緩め、クタクタとソファに崩れ込んだ。しばらく目をつぶって放心状態に陥っていると、忘れていた空腹感が甦える。

——何か食べなくちゃ——

そう考えて立上った時だった。

カチリ——。

低い物音が背後で起った。

「あッ……!!」

反射的にふり向いた多枝は、咽喉の水気が一遍に蒸発したような



竜

驚愕に襲われた。体じゅうの毛穴が、キューンと閉じて鳥肌立つ。

洋服簞笥から現われたのは、薄水色開襟シャツに茶のズボン、やせて背の高い、険しい目つきの男——さっきニュースで見た大西だ。右手の拳銃が螢光灯の光を吸って、黒々と濡れている。

二

「静かにしろ！ 声を立てたら、これだぞ」
拳銃が上下に揺れる。

「おとなしくしていさえすりゃあ、俺は何の危害も加えねえ。非常線の解かれるまでの我慢だ。いいか！」

押し潰すような低い声。あまりの恐怖に石像化した多枝を壁際に追いつめ、拳銃で腹部を小突きながら、絶えず外の気配に神経を研ぎ澄ましている。靴音が近づくたびに、血走った目がギョロツとそれを追う。獲物を狙う禿鷹のような鋭い目だ。

多枝はそのすきを窺って、少しでものがれたい心で、足をわずかに動かす。

「動くなッ！」

男の瞳が、はっと向けられる。多枝はまた壁に体を支えられた人形になった。

右手は銃口をこちらに向けたまま、左手が洋服簞笥に伸びる。夫のズボンから革バンドがはずされた。

「あっ！」

両腕がうしろに捻じ上げられ、ぐるぐると革バンドで縛られた。

「おめえ、なかなかハクイな。ふふ」

相変わらず低い声だが、前の脅しとは性質を異にした、新しい恐怖が胸元にわいてくる。

惨忍で淫らな顔が、ぐっと迫った。

「若林さん！ 若林の奥さん！ 異状ありませんか？ 堀内ですよ」

ポーチで堀内巡査が呼んでいる。男は、憎しげに扉の方に一瞥を与え、素早く多枝の手から革バンドをはずした。——行け——と顎をしゃくる。

「いいな。異状なし、というんだぞ。余計なことは喋るんじゃあねえぞ」

背中に拳銃を当て、男は小声でささやく。

多枝はおずおずと玄関に足を運んだ。

のぞき窓を開ける。堀内巡査は何の疑念もなくポーチに立っていた。

（ああ、彼の立っている所から、わずか二米とは離れていない私のうしろに、殺人犯人がいるのだ。知らしてやりたい。犯人はここに

いると大声で叫びたい。でも駄目。私の背中には、犯人の拳銃がびったりと突きつけられているのだわ。犯人が、人差し指をほんの少し曲げれば、私は……ああ……）

こわばった顔にしいて笑みをつくり、多枝はようやくの思いで言った。

「先ほどはどうも……。ええ、別に異状、ございません」

「奥さん、さっき話した殺人犯が、ついにこの界限へ逃げ込んだらしいんです。いえ、心配はありません。捜査網をだんだん絞っていきますから逮捕はもう時間の問題です。戸締りだけは気をつけてくださいよ。ではまた」

巡査は行ってしまった——。

男はまた、多枝の腕を縛ったが、今度は嫌らしい行動に出ることをしなかった。会話の様子で、いよいよ危険の迫った状態に置かれたことを悟ったのだろう。ハンカチで多枝の口を塞ぎ、勝手にあったビニールの物干紐を、足に巻きつけた。

一切の抵抗を封じられた多枝は、ソファの上に置かれた。男はカーテンの蔭から外の様子を注意深く見つめる。

そういえば、前の通りに靴音が頻繁になった。砂利が敷かれたばかりなので、夜の静け

さの中によく響く。ふだんはさほど人通りのない道だ。

男の目には庭をへだてた道に向けられる。私服刑事らしい姿が、右から、左から、行会う度に耳打ちして別れる。ガラスに孔のあくような目つきで見ているのも、この男にとっては命の瀬戸際なのだ。

何時間、いや何十分たったろう。猿轡をはめられ、うしろ手に縛られている多枝にとっては、ずいぶん永い時間に感じられる。もう真夜中を過ぎたような気もするが、事實はまだそれほど時がたっている訳でもなからう。

男がふっと肩で息を吐いた。

人通りがやや途絶えた様子だった。

「何か喰うものはないか」

独りこちなながら男は勝手へ行った。

このすきだッ！

多枝は、毛虫のように体を蠕動させ、ソファの右端へ移動する。その壁に、防犯ベルの押釦があるのだ。この防犯ベルは、押した家では鳴らず、隣りの家で鳴る仕掛けになっている。押売りやゆすりには、直接気づかれないので、押した途端に危害を加えられない利点があるのだ。多枝の家と右隣りの石渡家

が相互に配線してある。

もう少し、もう少しで、押釦だ。

手では押せなくとも、頭で押そう。どっちにもせよ、鳴りさえすれば、誰か救助にきてくれる。ソファの縁に体を乗り出し、思いきり首を伸べす。あと三纏、二纏、一纏――。

三

「ふん！ こんなものがあつたのか！」

怒りの形相も物凄く、男は防犯ベルの配線を引きちぎった。ああ、もう少しのところまで頭が届こうとした時、勝手に何もなかった失望で戻ってきたのだ。

「こんなものがあるから、じたばたあがきやあがる！ やいッ、今度変な真似すると、承知しねえぞッ」

拳銃が強く脇腹をえぐる。こそばゆく、心臓が固く小さく凍りつく。猿轡の奥で、ヒューッと笛のような音がした。

「そうだ。電話もあつたっけ。あいつも切つとかなくちゃ」

男は電話器に近寄った。ポケットからナイフを取り出し、コードを切ろうとして、にわか

んだ。

「いいか、何か食料を届けさせるんだ。もし間違つたことを言うと、これだぞ！」

猿轡はずされたが、手足はまだ固く縛られたままだ。市場のパン屋の番号を言うと、男が節くれ立った指で、不器用にダイヤルを廻す。

「それ、出たぞ」

男が受話器を顔に近づける。片手は拳銃を離さない。

「もしもし、不二屋さん。……井口住宅の若林ですけど……夜分ですみません……パンをね、届けていただきたいの。……そう、ハムパンとね、クリームパン。二ツずつ……いえ三ツずつね。……それから、飲み物……ミルクがあつたら、三本ね……お願いするわ」

やっこの思いでそう言うと、男は受話器を下ろした。

「いいな。パン屋がきたら、玄関に置かせるんだ。用が済んだら電話もほれ、この通り」

ナイフがコードをプツツ、と切った。

パン屋の店員がやってきた。自転車を庭まで乗り入れ、荷掛から注文の包みを取上げると、元気よく玄関の扉を叩く。

「奥さん、不二屋です。御注文の品を持ってきました」

男が（返事をしろ！）と促す。

「はい。御苦労さま。——いま、手がふさがっているの。そこへ置いといてちょうだい」何も知らない小売員は、扉の外に包みを置いて立ち去った。男は油断なくガラス窓を透かして、その行方を見守る。

私服が小売員を呼び止めた。（若林さんのところへ、パンを届けにきたんです。ええ、変りなかったようです）そんな会話だろう。すぐ二人は別れた。

パンの包みを部屋に持ち込んだ男は、またたく間に三つばかり平げ、次の奴を手にとると多枝の存在に気がついた。

「おめえも喰うか？」

多枝の腹はいささか餓えていたようだが、食欲は湧かないのだ。体じゅうの隅々に、恐怖があらゆる神経を押えつけている。拒絶の意志を表わそうと首を振ったが、それすらも自分の思う通りに動いてくれないのだ。男が近づいて、ちぎったパン

を口に押し込もうとする。（いらない）といったのだが、その心とは反対に、口が開いてしまう。

パサパサした海綿を噛むようだ。味も何もない。噛んでも噛んでも、唾液の分泌が少しもないのだ。男が次のパンを押しつけるのであわてて口中の奴を咽喉へ送る。まるで煉瓦の塊を呑み下すようだった。

男の目がまた異様な輝きを放ってきた。

多枝はその目の変化を読み取ると、ろくに噛みもしないパンをのみ下した。

グ、ググ、グ……

固い抵抗が咽喉を下がる。白い首の線がかすかに動く。柔らかな曲線がぐっと胸の谷間に続いている。花模様のワンピースの乱れた胸元に、パンを落した男の手が伸びた。

（ああ……）

ホックがはずされた。ざらざらした掌が、白い丘陵のような咽喉の上をはい回る。拳銃を持った右手が、ぐいっとな背に回される。

（もう駄目だ！）多枝は深い海の底に引き込まれるような目まじいを感じた。体全体の力が一時に抜け去る——。

「奥さん、——若林さん。変りないですか」

堀内巡査が、二度目の巡回にきたのだ。

「チエッ！」

舌打ちした男は、素早く多枝のいましめを解いた。また前通りに玄関で応待させようという腹なのだ。

四

「ええ……異状ございません……」



「御苦労さまです」

相変らず背後には拳銃が突きつけられているのだ。異状ないどころか、貞操と生命の危機に、もう何時間か晒されている。何とかして知らせたい。救いを求めたい。それが、僅か一枚の扉に遮られて、不可能な状態なのだ。

「どうも奥さん、危険なことになります。この辺まで網を絞ってきた警視庁の捜査陣がね、確実な足取りをつかんだのだが、不意にこのあたりで消えているんで……」

のぞき窓で顔の半分だけは出ている。何とかこの巡査に、犯人がここにいることを伝えたい。――たった一言、口に出せば犯人は逮捕されるのだが、その前に多枝の背中の拳銃が火を吹くだろう。ああ、どうしたら――どうしたら合図を送ることができるだろう？

（そうだ！ 思い出した！ 無電技師の兄が娘時代に教えてくれたモールス信号、一番簡単なのがSOSの符号だということを思い出した！……でも……どうやってそれを送ろう



に潜んでいるに違いないんですがね。……おや？ 奥さん、どうしました？」

瞬きに気づいたらしく、巡査は尋ねた。

同時に、背後の拳銃が、グイッ、と強く押される。（変なことをしゃあがるとぶっ放すぞッ）という合図なのだ。

「いえ……別に……」

もう信号を送るところではなかった。脅迫に怯えながら平静を装う返事も、やっとの思いだ。

「それでは、失礼……」

ああ、とうとう行ってしまった。多枝の懸命な努力も空しく、巡査にはわかって貰えなかったらしい。失望と、次に襲う恐怖の連続で頭の芯が痺れる。深い溜息と共に三和土に崩折れそうな多枝を、男は居間へ連れ戻した。

また、手足は強く縛られ、ハンカチが口を覆った。

いつまでこんな目に会わせられるのだろうか。早く夜が明けて欲しい。いったい、いまは何時頃なのだろう。時間の経過も定かにわ

からないまどろこしき。近所の家も、今夜ばかりはラジオさえ止めて、家族が一固まりになって警戒しているらしい様子で、雑音一つ聞こえないのだ。ああ……時が早く過ぎればいい。

男は窓際の壁に身をよせて、外をじっと窺っている。刑事の捜査連絡が頻繁になったようだ。

こんな状態が、朝まで続いて欲しい。そうすれば貞操の危険からは一まず免かれる。夜が明けさえすれば、明るくなればどうにかなるだろう。そんなはかない空頼みが、縛られてソファに転がされた多枝の、唯一の希望なのだ。

（あの巡査が目瞬きのSOSを読み取っていたら……でもそれを怨むことはできない。薄暗い玄関の小窓で、何の打合せもない間のサインだったもの。気づかなかったのは当たり前だわ。でも……どうして私だけが、こんな目に遭わなけりやならないの。遺恨も何もないこの男が、偶然私の家に逃げ込んだために、私の幸福な家庭、私の生命、私の貞操まで危機に晒されるなんて……）

男が窓際を離れた。刑事の姿が見えなくなったらしい。男の緊張が永く続くよう、警察

の張込みが夜っぴて行われるように祈っていたのに、その願いも空しいものになった。

卑しい笑いに歪んだ男の顔が、ソファの前に回った。猿轡がはずされた。

「ヒートツ」

思い切り声を上げたつもりだったが、実際はかすれた空気が咽喉を通っただけ、それも男の油臭い掌にすぐ覆われた。

五

「声を立てるんじゃないかと、あれほど言っているじゃあねえか。静かにしろい！」

拳銃が、胸のくぼみに当てられると、多枝の心臓は早鐘のように動悸を打った。

「おめえも、生娘じゃあるめえし、俺の気持もわかるだろう。おとなしく、いうことを聞くんた。——な——」

腕のバンドも、足の紐も解かれたが、一切の抵抗力を失った多枝は、身じろぎもできない体を、男の眼の前に横たえているよりほかはなかった。

「ふふふ——いい肌をしてる。おめえ、案外肉づきがいいな」

ワンピースの胸をぐっとはだけ、ブラジャーの紐を切る。ピクツ、と冷たい痙攣が、足

首の先にまで伝わった。

「ま、待って……」

多枝は必死の声を振り絞って言った。

「あなたは……あなたは、自分が逃がれられれば……この場から逃がられればいいのでしよう。——これ以上の事をなさるなら、私は大声をあげて人を呼びます。無論あなたは拳銃で私を殺すでしょう。死んだって……死んだって……穢されるくらいなら、死んだ方がましだわ」

「ふん。お望みなら、殺してやろうか。何も殺すのはハジキばかりに限らねえや。この紐だって、簡単におめえを殺せるんだぜ」
物干紐が、男の手で輪をつくられ、多枝の眼前に「この中へ首を入れる」といわぬばかりに揺れた。

「ああ……」

顔をおおって絶望感に虚脱しかかる多枝に男はせせら笑いの息を吐きかけ、肩をつかんで引き寄せる。

「それに、おめえ、死んでも何されたくねえんで、無理な話だ。死んだって、俺はおめえを抱くことができるんだからな。ふふ」

思わしい、鬼畜に等しい男だ。むしろその方が刺戟と快味を増すと考えているのか、そ

れとも言葉の脅威に恐れおののく獲物の、苦しみ悶え、呻きのたうつさまを、冷酷に見下ろして楽しもうというのか。指の間からのぞいた男の顔は、ぞっとする物凄く笑いを浮かべている。

ぐっと前から抱き締められた。針のような硬い鬚が頬にこすりつけられる。

「いや! いや!」

どうもがいても、驚に捕えられた小雀だ。

「静かにしろいッ! それとも、舌でも噛んで死ぬか? 望み通りに、絞殺してやってもいいぜ。どっちにしろ、俺の楽しみは同じだが……見事死ねるか……はは、ははは」

人間の生への執着というものが、こんなに根強いものなのだろうか。

男にそう言われると、多枝はいままで考えていた「死」をも放棄しなければならぬ自分気がついた。

浅ましく呪わしい魔の手が、とうとう女としての生命を、妻としての貞節を、無惨にも奪おうとしているのだ。

失心状態が、すべての抵抗を中止させた。

「そうれみろ。結局は俺の意のままになるんじゃないかねえか。無駄骨折らせやがった」

ぐったりとなった多枝を、軽々と抱き上げ

ると、寢室のカーテンを頭ではねのけ、掛布団の上に荒々しく投げ出した。

ワンピースが剥ぎ取られる。ペチコートの

レースが細かく震えている。男の上体が、背を丸めて多枝の視野を遮ぎり、重い圧迫感が徐々に強まってきた。

◎ 毎号大好評! 次号七月号もお見逃しなく ◎



裏

窓

妖

異

譚

次号特集

本誌の七月号は
妖異特集号です

……発売日は五月二十三日……

☆思わず背筋が寒くなるような読物。気が☆
☆つくどと掌がべつとりと脂汗で濡れている☆
☆ような小説。裏窓妖異譚を御期待下さい☆

振替か現金書留で直接お申し込み下さいスグ送ります

島本春雄著

妖異二人小町

振袖小姓捕物控



魔剣閃めき含み針が乱れ飛ぶ／謎と情痴をはらむ大江戸の闇に挑んで颯爽ふたたび起つは曙色の大振袖ひるがえした捕物小姓美弥太郎の優美姿／

定価百五十円・定価二十四円

自然に涙が溢れ出る。何だかこんな目に会っているのが、自分の身の上の出来事とは思えない。

もうこうなると、音のない映画を眺めているような、無感動な意識の錯覚に引きずり込まれてしまう。

それでいて、涙が止めどなく流れる、感情の混乱が起す奇妙な現象だった。

男の手が、胸からだんだんに下がる。

多枝が、ビクッ、と体を固くした。
男の手が一瞬、腹の上で止った。

六

「大西！ 手を挙げるッ！」

突如、鋭い声が響いた。カーテンに人影が写っている！ 刑事だ！

「しまった！」

男は身を起しざまそう叫んで歯噛みをし

た。

情欲に狂い猛るにまかせて、居間のソファに拳銃を置き忘れていたのだ。

男の目が忙しく左右に走る。

逃げ道を探しているのだ。

居間に続くカーテンのほか、逃げ口は枕元の窓だけだ。

素早く身を翻えした男は、多枝の頭を飛び越えて窓に体当りを喰らわす。

耳に突き刺さるようなガラスの割れる音と共に、男の体は窓枠を破壊して、庭へ飛んだ。

「わあッ」

「えいッ」

庭に待機していた警官が飛びつき、格闘が始まった。

もうこうなれば逃れられない。

応援の警官が集まってくる。ついに拳銃殺人犯大西照男は手錠をはめられて護送車に乗せられてしまった。

「奥さん！ 危なかったですなあ。もう少しのところでは、取返しのない失敗をしてしまうところでした。さぞ怖かったことでしょう」

堀内巡査が申し訳なさそうに弁解したが、

多枝はベチコート姿を恥かしく思うゆとりもなく、ベッドの上で今度こそ本当に、自分の声をあげて泣いていた。

「儂もあの時、そう、二度目の巡回の時、おかしい予感がしたんですが、奥さんが目瞬きをしたのにすぐ気がつかないで、申し訳けありませんでした」

堀内巡査は捜査陣の本部に借りた町会事務所へ戻り、一休みしてから、ふと多枝の顔を思い出したのだ。

（若林の奥さん、ひとりでいたのだから、用心深いのも結構だが、儂との応待に、二度までも扉を開けずにのぞき窓で目ばかり出して……待てよ……あの目が、何かのサインを……でもはつきり「異状ありません」と言っていたのだから……それにしても……少し変だ！パン屋に会った刑事に、どんな具合だったか聞いてみよう）と堀内巡査は思った。

「それで、ますます怪しいと考えたのです。その刑事の話では、パン屋がやはり奥さんの姿を見ていないことがわかりましてね。念のために隣の石渡さんから電話をしてみたんですが、全然不通。防犯ベルを押すと、これも何の反応なしで、いよいよ疑惑が濃くなったのです」

そうだ！あの目瞬きは、SOS信号を送っていたのだなと、気がついたのはその時だった。

堀内巡査は捜査陣に顛末を報告し、若林家の裏手から忍んでみることにした。

「勝手口の錠がおりてなかったのが、この場合しあわせでしたよ。ま、何にしても大変でしたね。もう、本当に心配ありませんよ。ゆっくりお寝みなさい。まだ怖いようでした

ら、どこか御近所に話して泊めて貰ったら？」

堀内巡査は腕を上げて時計を見た。

「まだ十一時十三分、ぐっすり眠れば、今夜の出来事は明日の朝には夢のように忘れられますよ」

多枝は急に下着一枚の自分に気がつき、羞恥で頬を赤らめ、鎌田氏のところへでも泊らせて貰おうと思い、体を起こした。

またしても捲き起る怪異の渦中に
悶えのたうつ妖艶可憐の美女群
正邪相うちしのぎを削る智能と秘
術・妖術伝・悪呪隠密離・白狐呪
法・幽霊飛車・地獄籠籠など八篇
収録。

振袖小姓捕物控

裸女地獄

島本春雄著

定価 150 円

送料 24 円

久保書店の特選新書・絶対面白い島本春雄の傑作!!

慶安女忍道

円城寺 達

砧 恍 二・画

長安の遺書

芝高輪台町。広い原っぱに、ぼつんと建っている古い土蔵の中である。

赤茶けた裸蠟燭に照らし出された、肌もあらわな娘の姿――。

太柱に縛りつけられて、羞恥の色をぱっと顔に散らし、哀れにも美しい、雨に打たれて海棠の色増す風情だ。

「どうだ、これでも白状せぬか。お前が、仏具商坂本屋の娘とは仮の名、慶長十八年にお咎めをこうむった金山奉行、大久保長安の孫だということは、すでに調べ済みだ。この上痛い目を見ずに、長安の遺書のありかを白状した方がよからう」

坪内左司馬は、竹竿で床板をトンと突き、



恍

おどす如く、さとすが如く詰め寄る。

「ああ……」

肉までくびれ込んだ縄の痛み、息を吐くさ
え苦しい切なさ、お節は仮死の境に誘い込
まれそうだ。

「さあ、白状せい。——言わぬか。言わぬと
あらば……」

竹竿が空を切った。

「うッ！ うーむ」

衣裳も破れ、半ば肌を現わした柔らかな胸
元に、灼けるような衝撃——。

歯を喰い縛り、後れ毛を噛んで、お節は必
死に痛打に堪えていた。

「どうだ。いい加減で兜を脱いだら」

手前がくたびれたので、手を休めた左司馬
またも近寄ってささやく。

なるほど、自分は久保長安の孫だ。父は
長安の三男だったが、家康の怒りに触れて一
族が獄門、打首となった折、ひそかに江戸へ
逃れて坂本屋六右衛門と変名し、増上寺前で
仏具商を営み、昔を忘れた平和な生活に入っ
たのだ。

左司馬が欲している祖父の遺書とは、何で
も莫大な財宝の隠匿個所が記されてあると、
父から聞いていた。

（この財宝があれば、往時の石見守以上の豪
奢な生活が送れる。だが、人目を忍ぶ名にも
馴れ、平凡な仏具商の生活に満足している現
在、いたずらに過去の古傷に触れてまで手に
入れたくはない）

父六右衛門実は久保藤次郎も、常々こう
言っていたし、お節も同感だった。だから、
遺書の入っている箱は、居間の天井に父が上
げたまま、久しい間忘れられることなく忘れてい
た。

父が死んで、店は番頭の伊助が切り盛りし
て昔に変わらぬ繁昌を続けている。このまま、
同じ平穏な暮らしを続けて、小さな幸福の中
に生きることをお節も望んでいた。

父の生前から出入していた、坪内左司馬と
いう浪人が、どこで探ったものか、一家の秘
密を極に、財宝を手に入れようとするのだ。
世の中の為になるなら、そんな財宝も甘ん
じて渡してやりたい。未練はないのだ。

だが、この男には、どうしても渡したくな
い。何となく、底の知れないよこしまな企て
を抱いている予感が、お節の口を封じた。

「うぬッ、これでもかッ！」

またもや、竹竿が唸りをあげて迫る。

阿修羅の形相凄まじく、なおも打据えよう
とする左司馬の腕を、掻いくぐって前に廻り

「ま、待って下さい。お嬢様に代って、私が
遺書のありかを申し上げますッ」

懸命に押しとどめたのは、番頭の伊助。

「お嬢様、こうなっては仕方あり
ません。お嬢様の生命には代えら
れません。貴女様も、欲を離れた

暮しに、満足している現在ではご
さいませんか。お諦め下さって、

この伊助にお任し下さいまし。伊
助は、お嬢様が御無事でしたら、

ほかに望みはございません」

お節の漆黒の瞳から、銀の雫が
頬を伝わって、ぼとり……。

桜貝のような足の爪先に滴り落
ちた。

風雲を望む野心児の手に秘宝は渡せないのだ！ 忍者萩乃の幻妖な探り！

特集 女問諜 女忍者 女

火 焰 地 獄

「伊助。では貴様が、長安の遺書のありかを知らせるといふのだな」

「へい。お嬢様の生命の瀬戸——。思い切つて申し上げます。が、坪内様、申上げましたからには、お嬢様の命はお助け下さいますか」

「むろんだ。——で、どこにあるのだ」

「はい。——長安様の遺書は、御先代様居間の袋戸棚の天井裏に、黒塗の箱に入っております」

「ふむ。袋戸棚の天井裏か！」

にやり、笑みを洩らした左司馬、何と思つたか、矢庭に傍らの縄を取ると、伊助に躍りかかつて、後ろ手に縛り上げようとする。

「な……なにをなさいます。理不尽な！」

「えい、喧しい。静かにしろ。貴様の言葉が嘘かどうか、手に取るまでは、信ぜられんからな。おとなしく儼の戻つて来るまで、ふたりに仲よく待っている」

御丁寧にお節のしごきを裂き、それぞれの口を封ずる猿轡。

「暗くては、幾らそのなりでも淋しかろう。灯だけは残しておいてやろう。戻つて来るまで、静かにしておれよ」

ピイン——。

海老錠が下りた。左司馬の立去る足音が遠くに消えると、静寂がふたりを包む。

（お嬢様、勘忍して下さい。私が余計な差出口を挟んで、お嬢様の守り技こうとしていた長安様の遺書を、あんな狼のような奴に渡してしまいましたのは、本当に申訳ございませぬ。この償いは、伊助が命を賭けても、できる限りのことを、致しますでございます。私はただ、お嬢様のお身の無事を願うだけではかのことは考えられなかったのでございます）

（いいのよ伊助。妾はお祖父さまが遺されたという、財宝などは欲しくはない。あんな素性の悪い浪人にやるのは、本意ないこと、口惜しいと思うけれど、それも前から定まった運命と考えれば、諦めがつきます。妾は、それよりも尊い、金銀で買えない宝を、お前の真心を得た満足で、いっそ幸福です）

柱を中に挟んで、背中合せ……。猿轡をかまされていて言葉は交せないが、互に心の裡では相手の愛情の深さ、強さに感謝し、自由の利かない体ながら、ふたりきりの時間をこうして過ごすことの陶醉に、喰入る縄の痛さも忘れて……しばしうっとり甘い夢の中にいる。

伊助が不意に、何に驚いたか、体を硬ばらせて、僅かながらに動く肩先でお節の注意を促がす。

——え？ 何？

首をよじらせたお節、はっと恐怖の目を見張る。

瞳の中心にチロチロ裸蠟燭の灯が映る。

すでに燃え尽きようとしているのだ。左司馬が無雑作に、床板に立てていったものだ。すぐ戻つて来ると言つて出た左司馬は、まだ顔を見せない。増上寺門前のわが家まで往復には充分な時刻はたっている。

——計られたのだ——

悔恨と絶望が、ふたりを一時に襲った。

左司馬は、蠟燭が燃え尽きればそのまま床板を焼き、さらにふたりの縛られているところまで火焰が延び拡がり、ついには蔵全体に火の廻ることを予期して、灯を置いて行ったのだ！

今まで、おとなしく左司馬の帰りを待っていたのは、愚かなことだった。

懸命に身をもがいても、どうにもならないふたりだ。

とうとう、蠟燭が、形を失った。

ジジジ……

芯に残った灯が、かすかな音を立てる。
熱気で液化した蠟涙が、床板に浸み込みながら、不規則な曲線を描きつつ拡がる。
支えのなくなった芯がゆるく倒れ、消えるかに見えたが、僅かに小さな灯を残して燃え続ける。

パツと板にもえ移った。

やがて、勢いを得た火焰の集団は、見る見るうちに強力な火勢を増して来た。

「ああ、お嬢様、どうしましょう」

ようやく猿轡だけは解けた伊助忍び寄る火焰を、どうにも防ぎようのないもどかしさで、こんな言葉を発するよりほかはないのだ。

上方に小さい窓しかない蔵の中だ。火焰と煙が、渦を巻いて噴出口を争う。が、またたく間に、広からぬ内部に充滿し、荒れ狂う。

「む、むううッ」

声の出る伊助も、猿轡を嵌められたままのお節も、容赦なく鼻腔から侵入する黒煙と、周囲から迫る紅蓮の炎、熱気に、身をよじらして耐えようとする。

——ああ……く、苦しい……

特集 謀間女 忍者女

「お嬢様、申訳ございません。お嬢様を、こんな目にお会わせしたのも、みんな私の至らないばかりに……お許し下さい。でも……私は、本望です……こんなところで、死ぬのは残念ですが……お嬢様と一緒にあの世へ行けることと思いますと……私は……私は……」

金鉄をもとかす業火の中で、伊助は死を目前に、空しい恋の花の咲き盛る幻影を胸に抱いて呟く。

それもこれも、ぐわうッ、と一際激しく音を立てて噴上げる火柱の中に巻込まれてしまった。

怪火に驚いた火消が駆け付けた時には、風を呼び、夜空を焦がし、ドウと棟が焼け落ちて手のつけられない有様だった。

女 忍 者

「これが、去る慶長十八年、幕府の手によって取潰された、大久保石見守長安の、財宝を秘めた個所を書き遺した、問題の紙片でございます」

「ふむ、これがの……」

張孔堂、由井正雪は、左司馬の手から一枚の紙片を受取った。

周囲から、車座になった張孔堂七人衆の面

面が覗き込む。

もし、その文書によって、長安の財宝が発掘できたら、正雪一味の企ては非常に有利になるのだ。死後の家宅捜査で、自宅から金七十万両、銀錢珍品多数を発見された長安だ。

その秘密に隠匿した財宝が、おそらくこれと同額以上と、誰の考えでも推察できる。控え目に見積って半分としても、大事を決行する資金には充分な助けになる額だ。

「この文の要旨、確かに長安が身辺の危機を感じ、金銀、異国の珍物を、某所に隠したとある。——だが、次の絵図だが、山川、道筋はよくわかるが、只の白地図。一体、どこであらうか？」

正雪の言う通り、文の末尾にある略図には何の手懸りとなるべき文字も記入されていないのだ。

……無音の気配。

「やッ！」

吉田初右衛門が、矢庭に愛用の朱槍を、天井目がけて突く。

すわ曲者！ 正雪を除いた六人が、続いてすつくと立ち、天井を仰ぎ見る。

ポタリ！ 正雪の手にある長安の遺書の上に、紅い雫が落ちた。

「曲者に傷を負わせたぞッ、逃げ路を塞げッ」
初右衛門の声にに応じて、七人衆はもとより
のこと、道場や控部屋に屯していた門弟たち
手に手に獲物を掴んで色めき立つ。

「東西の破風を固めろッ」

下知を下したのは、楠流の棒術を使う安見
善兵衛だ。

梯子が持出され、大屋根にかけ渡される。
用心深く、ひとりひとりが屋根に登って配
置につく。後詰は整然と隊伍を組んで、二重
三重に階下に待期する。これぞ楠流兵法菊水
の陣だ。精鋭の選抜剣士が囲む菊花陣を崩し
ても、物量攻勢を誇る流水陣が下に待機して
いる必殺の構えなのだ。

喧騒の真ッ只中に、悠然たる態度を失わな
いのは、正雪ひとり——

懷紙で、紙片の血痕をおもむろに押え、紅
の色の浸み込みを確かめると、静かに立上っ
て隣室の書院へ移った。

書院の隅の、おのが机の上を見た時、さす
がの正雪も、顔の色がハッと変った。

机の上には、左司馬が持参した、長安の遺
書の入っていた桐箱が置いてあった。

それが、蓋も底も、真ッ二つに割られて、
無難作に投げ出されているのだ。

まさしく、箱は二重底だったのだ。薄い、
桐板を合わせた間に、もう一枚の紙片をひそ
ませてあったものに相違ない。その紙片に何
が書いてあるかはおおかた想像がつく。曲者
はそれを知っていたのだが、明らかにその紙
片一枚では完全なものではない。正雪の手許
の略図と照合して、初めて財宝のありかがわ
かるようになっていたので、それを奪ってか
ら天井裏へ廻り、上から俯瞰して知ろうとし
た。吉田初右衛門に気取られた時までに、果
して略図を見て、財宝の所在を突留めただろ
うか。

「おうッ、出たぞ、出たぞ」

「曲者が屋根へ姿を現わしたぞッ」

西の破風から現われた黒装束の曲者、

「曲者推参！」

宝蔵院流の一文字構え、びたと胸板を狙っ
た丸橋忠弥。

「えいッ」

目にも止まらぬ早さで繰り出す。流星の閃
めきに心臓部を縫われたかに見えた間一髪。

ハッと黒装束は身を沈ませ、鋭鋒を避ける
と、その反動を利用し、軽々と身を浮かせて
棟瓦の上へ飛び移った。

ヒュッ！

坪内左司馬の半弓を放れた矢。

「ああッ！」

小手を射られた曲者、思わず脇差を取落し
てしまった。

「しめたッ！」

吉田初右衛門、素手と素手なら、取組に自
信がある。「うおうッ」と怒声を発し、相手
の胸元に飛び込んで行った。

逃れよう。そうはさせまい。激しく争う内
に初右衛門は、曲者の体が非常に柔軟である
ことを感じ、奇妙になまめかしい想像に襲わ
れた。腕に触れる胸の肉の豊かさ——。

——女だ。この曲者、女だ！——

はつきり意識した時の、呼吸の乱れを利用
してか、

「えいッ」

曲者——女——は初右衛門の腕の輪から、
火花のように空中に躍り上った。

いったん屋根の端へ飛び降りると、続いて
二度目の跳躍、流水陣を作る門弟たちの頭上
を越え、庭へ降り立ち、あッという間に、庭
木を足掛りに、築地塀を越え、闇の中に姿を
没してしまった。

抜け穴

「各々方にお集まり願ったのは余の儀でもござらぬ。すでにお聞きの方もあろうが、御先代様御他界を機に、よからぬ蠢動をはじめる不逞浪人共、最近驚くべき財宝のありかを突止めようとしている……」

本丸評定の間——老中、両町奉行、若年寄等の重臣たちを前に、松平伊豆守、智恵伊豆は、先夜女隠密の萩乃からもたらされた事件の数々を物語る。

高輪台町古土蔵の怪火。萩乃が救出したお節伊助兩人の口から洩れた長安の秘宝、張孔堂一味の動向……。そして、二重底の中の紙片のこと。

「これもし、敵の手に渡らば、必ず天下の大乱となる。われらの手で発掘なし得れば、幕府の財政を救う一助ともなると考える。然し何分にも二枚揃って完全な地図となるものらしい紙片なのだ」

一同の目前に差出した萩乃の奪取して来た紙片は、正雪たちの見たものと同じく、前書に続いて地名のない地図が書かれている。

「一体、どこの地図でござろうかな」

「大久保長安の所領は甲府であったな」

「だが、彼は石見、佐渡、伊豆大仁と、所々の鉾山奉行であったし……」

「長安の遺書と言えば……」

秋元但馬守が、信綱の方へ向直って言う。

「紅葉山の御霊廟にも、長安の遺書が、神君の遺品と共に納められておるはず。人の噂には外国の高官に送った秘密文書ということになっておるが、あるいは、これが謎を解く鍵になるものかも知れぬと思うが……豆州殿、貴殿こういう考え方は、どうでござろう」

「何？ 御霊廟の中にある長安の遺書……ふむ……。それが……」

長安が駿府で急死したのは、慶長十八年四月二十八日だったが、一説には家康が政策上毒殺したとも伝えられている。事実旬日のう



悦

特集 女問諜・女忍者

ちに検視役人が家宅搜索を行い、領地家財は没収、家族使用人に至るまで、罪を得たが、その折、役人が発見した黒塗の文箱を、封のまま家康に差出した。

家康は封を切って取出した文書を目に見るなり顔色を変え、また嚴重に封をして誰にも見せなかった。没後も遺言で、江戸城本丸の西の方、紅葉山前の御霊廟に収められ、何人の目にも触れず、四十年近く謎のままに箱の中に眠っている長安の遺書！

近習の須藤道也と萩乃が呼ばれ御霊廟から長安の遺書を持参するよう命ぜられた。

今日の萩乃は、すっかり御殿風の、矢絣の留袖に厚板帯、女隠密とは見えない清楚な色気がこぼれるようだ。

夕暗が、紅葉山の木々の間を、じわじわと忍び寄る頃になっていた。

鍵を外し、廟の中へ入ると、埃と微の臭いがひんやりと鼻を襲う。萩乃の灯す手燭で、黒塗の箱はすぐ見つかった。遺品棚の一番下の端にあった。

「これでござるな」

埃を払って道也が手に取上げた。

表へ出て働の通り扉に鍵をかけるのは、萩乃の役目だ。

「う、うーむ」

後ろ向きになって扉の環に輪鍵を通した時道也のただらぬ声！

振向くと、くたくた崩折れる彼から、黒装束の賊が、箱を奪って逃去ろうとしている。

「待ちや」

紫矢絣の裾が翻えった。紅葉山の林を縫って追うことしばし――。

賊の姿が消えた。

吹上御苑の泉水の真ん中、遠州流築山の石組を改めて見直すと、忍者の勘で、わずかな隙間から抜穴らしい地下道の降り口を発見し自分もするりと中へ滑り込んだ。

石段を幾つか降りると、ようやく立って歩ける位の地下道だ。

行けども行けども暗黒。

どの位進んだらうか。やがて、ぽっかりと薄明りの射す崖下まで来ると道は途絶える。

——水道橋辺の崖下だらうか——

萩乃も築城法について一通りの心得はあるので、初めて知った江戸城の抜穴だが、大体

この辺に来る予想は、歩きながらも考えていた。篠笹の多い崖をよじ登る。上の道に立って周囲を見廻すと、果して三崎町と飯田町の

間、神田川取入口の近くだ。対岸に水戸屋敷の白い土塀が、夜目にも長々と浮いて見える。

賊は？ そう思った時、周囲から群り寄る武士たちの姿に、はっと思ったが遅かった。

「どうだ。脛の傷は癒ったかな」

「今夜はどうやらお主の負け、おとなしくついて参れ。面白いものを見せてやろう」

吉田、金井、その他の面々に、萩乃はぐりと取巻かれてしまったのだ。

畳返し

「萩乃どの……とか申されたな。御存じであらうが身が張孔堂正雪。控えおるのは熊谷三郎兵衛、加藤一郎右衛門、丸橋忠弥……」

鷹揚に紹介する正雪、総髪に白の綾綸子の小袖、綾織の法眼袴で端然と座している。

「お手前の働きぶり、女性には稀な目さましき。さてこそ伊豆殿御信任と、感服仕った。

その男も及ばぬ勇氣と胆力に賞で、一旦は奪い取った品なれど、御霊廟の文書、披見の座にお手前も加えようと存するが、いかがでござろう」

熊谷三郎兵衛が次の間から箱を持って来ると、正雪の前に置く。

「よいかな。よくお目に留めてごろうじろ」中から取出したのは、坂本屋から奪い取った箱の紙片と違って、一卷の軸だ。

すると正雪の手によって開かれる。

だが、そこに認められてある文の内容は、明らかに正雪一味の失望を感じさせる、意味のない長安の財産目録だった。

末尾に（黒塗の小箱五十万両）とある記載が、正雪と萩乃の手に分れた紙片の財宝を語るものであろう。

「由井様、拝見させていただきました、ありがとうございます。萩乃はこれで、失礼させていただきます」

皮肉に笑ってすらりと立上る。

「お待ち下され。先夜の勝負、もう一度改めてお手合せ願いたい」

吉田初右衛門、萩乃が襖を開けた次の間に立ちはだかつて槍をしごく。

「加藤市右衛門お目見得申す」

「熊谷三郎兵衛、槍一筋進上」

「坪内左司馬！」

庭に面した廊下に、半弓を構える。

金井半兵衛の大太刀が、背後から迫る。

正雪は上段の間に端座したまま、冷たい顔が益々皓く冴えている。

「萩乃どの、ま、落着かれい。そして、お手前が持参なされた地図のありか、今誰の手にあるか、お聞かせ下さらぬか」

勝誇ったような正雪の声！

と、同時——エイッ！身を沈ませた萩乃の口から鋭い気合が、刀槍の輝きを弾き返す強さで響いた。矢絰の袖が直角に立つ。

クルッ、一枚の畳が宙に浮いた。

「おおッ、畳返し！」

畳にびったり体をつけて、一緒に庭まで飛出す妙技、正雪も萩乃が忍者とはいえ、これ程の達人だとは思わなかった。

「不覚！」

その上、たった今まで膝の上にあった巻物も、見事に奪われている。

先夜と同様、一瞬のうちに塀の彼方へ消え去った後の闇空を、正雪は無念そうにいつまでも見凝めていた。

それから半刻後、松平邸に帰った萩乃は、報告と共に巻物を信綱の前に差出した。

「左様であったか。すると正雪、やはりこの財宝を懸命に狙っておるものと見える」

信綱は軸を巻納めようとした。

「おお、ここが少し損じているな」

「はい。正雪の手より取戻す折、破れましたものと見えます。申訳ございませぬ」

「いや、それを咎めるでない。萩乃、これを見よ」

軸の巻初め、古渡錦欄の表装が破れ、下貼りの反古紙が見えている。長安の道中日記らしい文字が、細かに書かれてあるのだが、信綱の注意をひいたのは、それが伊豆大仁金山時代のものらしいことだ。

「してみると、伊豆近辺に財宝の埋蔵個所があると考えられる」

手文庫から地図を取出し、暫く思惟をめぐらす信綱。

「おお、そうかも知れぬ」

ハタと膝を叩いた。

その場から萩乃の姿は、人目を避けつつ江戸を発った。忍者得意の速歩は、夜の明けぬ内に平塚から大磯、酒匂川の渡しにさしかかっていた。

宝の山に入る

富士がくつきり青空に聳えている。

晩夏を惜しむ時鳥の声が、広い緑の高山のあちこちで聞こえる。

萩乃は足にまかせて歩き廻った。

伊豆山権現裏から、急峻をよじ登って岩戸山を越え、日金山（十国峠）の谷間へ入っていたのだ。智恵伊豆の智恵が、果して智恵負けになるか、ならないか、いちかばちかの賭けのようなものだ。

成程、実地に歩いてみると、半端な地図に当嵌まる個所が、次々に符合する。

もう一息。

陽はまだ高い筈だが、二抱えもある杉林の下は黄昏れ時の暗さだった。地図の中央にある丸い点が、あるいは宝の埋蔵個所かも知れないと、見当をつけて登って行くのだ。

幾刻たったか、あたりの闇が、段々濃くなって来た頃、果然眼前が開け、平らかな盆地へ出た。

「やっ！」

目前の急激な変化に目を奪われた隙に、背後から飛来した鎧、危うくかわして振り返ると巨大な山男が突立っている。

バラバラッと同じような男たちが周囲を取り囲んでしまった。手にはそれぞれ鎧様の獲物を持っている。

「貴様ッ、何の用でこの山奥へ入ったッ」

「俺等の守る宝を取ろうたって、滅多に渡す

ものか！」

ぎらぎらと憤怒の瞳を燃やし、前後左右から襲いかかる山男たち。恐らく長安の秘宝を守ってこの山中に住みついた者たちだろう。

ピュッ、ピュッ！

一本かわせばまた一本、連続して飛来する鎧の雨、山道を走る足も萩乃以上に速く、向うは地の理を心得ている。右に左に、よきチームワークを発揮して追い迫って来るのだ。

——しまった！——

逃げのびようとする足の下が、空を踏んだ時、心の中でそう舌打ちした萩乃は、次の瞬間全身にからみつく網の目の中にいる自分を見出した。うまうま彼等の陥穽に落込んだのだ。

その夜、縛められた萩乃の前で、六人の男たちは、淫らな喜びの笑を浮べ、濁酒に酔い痴れ、だみ声をあげて歌い興じていた。

こんな山男ずれに——。

そう思う心の底で、忍者の使命が、厳しく自分自身の胸に言い聞かせる。忍者は、敵から殺される以外の場合、死んではならぬ。たとえいかなる責苦に遭おうとも、命ある限りは使命を全うする為に闘うのだ。女の操を捨てることも、場合によっては止むを得ない。

——ああ……死ぬにも死ねない——

中でも頭領株らしい大男に縛られたまま軽と抱え上げられた萩乃、別室で縄を解かれたが、ここは座敷牢めいた造作で、出口は一方の低いぐり一つだ。

「フフフ、やい女、ここまで来れば、もう往生際もきまったらう。おとなしく俺の言う通りになれ」

さっと襲いかかる分厚い熊のような手、どこか獣臭い大男の息が、襟元をかすめる。

さすがの萩乃も、狭い部屋の中だ。左右にかわして逃れようとしても、おのずと限度がある。

「ああッ！」

闇の中にほんのりと、人に見せたことのない萩乃の乳房が、白磁の高雅さを思わせて浮上る。

じいーんと、気の遠くなりそうな一瞬だった。

男が急に、襲撃の手を止めた。

外の様子を、耳で探るように顔を上げた。

萩乃を擁していた手を離すと、慌てて、それでも入口の錠をおろし、弾かれるように飛出して行った。

色 餓 鬼 船

六人の山男の前に、お節と門弟大勢を従えて立ったのは、坪内左司馬だった。

「男どもよく聞け。ここに居るのは、貴様たちの旧主、大久保石見守長安殿の嫡孫、お節様だ。この度要用あつて埋蔵金を受取りに来たのだ」

張孔堂一味の根強い策動は、またもやお節を詐つて連出し、萩乃のあとを追つて来たのだ。左司馬に強いられて蒼白な顔で、人形のように立っているだけの道具にしか過ぎないお節が、財宝を引出す唯一の鍵になると考えついたのも、正雪らしい遠謀深慮だ。

即刻、埋蔵金は日金神社裏の滝壺から、夜を徹して引上げられた。

記録通りの五十万両はなかったが、それでも、約五十貫詰の金塊を入れた甕が次々に姿を現わした。総数十七個、二十数万両の金塊が、張孔堂一味の手によって、翌日の夜明けまでに山を下りて行った。

左司馬は縛られた姿の萩乃の前で、高らかに笑う。

「もう少し縄付きのままで辛抱しろ。何しろ二度の失敗で、お主の腕前を知っているだけ

に、うっかり縄も解けんからな」

すでに金塊は、大場の宿から三島へ向っている頃だった。

「妾を、どうなさるおつもり？」

「別にどうするという訳でもない。が、金塊が駿府へ着くまでは、お主とお節は、無暗に解放する訳には行かんからなあ」

翌日の午下り、沼津の千本浜、狩野川の川口寄りの船付場から、別仕立の運送船が一艘出帆を待つばかりになっていた。

「お主の忍者としての働き、誰もが驚嘆し、惚れ込んでおる。——惚れ込むといえ、拙者、その、お主の別の美しさに……」

急にぎらついた瞳が、襟元から胸のあたりを射るように見据える。ハッと、縛られた姿で居ずまいを直す萩乃を、油ぎった腕が伸び、強い力で抱きすくめられてしまった。

それでも尚、忍者は死ぬことを許されないのだ。呻き、身悶え、萩乃は空しい反抗を続け全身が上気する。それがかえって左司馬の欲望をあふり立て、激しく挑んでくる。

醜い死闘の胴の間に、この時姿を現わしたのはお節だった。

「萩乃さま！ あの時助けて戴いた御恩返しでございます」縛めの縄をぶつとりと切る。

「貴様ッ、邪魔するかッ！」

気がついた左司馬、一刀を手にするや否やお節の肩先へ——パツと血しぶきが立つ。

「ああッ！ お節さん」思わず駈寄る萩乃。

「いいの、いいのよ……萩乃様……それより早くこの船からお逃げなさいまし。——船底には、伊助が爆薬を抱いて忍んでおります。

坪内様も、よくお聞き下さいまし……長安の財宝は、孫娘の妾が……この船諸共、海の底へ戴いて参ります……伊助と共に……」

愕然とした左司馬、棒立ちとなって血にまみれたお節を見下す。と、その刹那。

ドドドゥン！ 船体を突抜ける激しい爆発音！ 駿河湾の真唯中で、二十万両の金塊を載せた運送船は、天に冲するばかりの火柱を噴上げ、あつという間に真二つに割れ、海中深く没していった。

由井正雪が陰謀発覚を悟って、駿府の梅屋で自害して果てたのは、それから半月後の慶安四年七月二十五日だったが、仮に長安の遺宝が無事に彼の手に渡ったなら、どんな結果になっていただろうか……

萩乃は顛末を復命後、信綱に乞うて忍者の役を解かれ、さる小祿の士に嫁し、平凡な女房で世を送ったと聞く。

妖奇スベンス

地

狼

の

巻2

乳

飯

×

曲

吉





△あらすじ▽

——東京読物新聞の記者、藤木千治は、上野不忍池公園前の電話ボックスから、社へ連絡の電話をかけていた。と、銃声一発、眼の前の舗道に坐っていた乞食が、前のめりに倒れる。車道を走ってきた自家用車の窓から、突然狙撃されたのだ。しかし千治は、その乞食と、自家用車の間を駆けぬけていった黄色いトランクを持った少女を知っている。

殺された乞食は、近所では殿様乞食とよばれ、下谷の邸宅に住んで資産を溜めこむ風変りな人物で、名を山本磯六という。

その夜、東銀座のバー・ロンリーで、部下の婦人記者、京極夢子とその話をしている千治の前に、昼間不忍池で見た少女が入ってくる。少女は風美といって、このバー・ロンリーの女給、雅美の妹である。

千治が昼間のことを問いかけると、風美は身をひるがえして外へ逃げる。記者の夢子がさかさずその後を追う。

黄色いトランクを追って消えた夢子はどこへ？ 空から降って来た美女死体の謎！

深夜喫茶の中で、風美は仲間のチンピラ、ロックンの六郎と落ち合った。夢子の尾行は感づかれ、かえって夢子は、彼らの仲間の紺野という男に誘拐される。

それから三日たって、読物新聞社の千治のところへ、殺された殿様乞食の娘で、花絵と名乗る濃艶な女がたずねてくる。そして千治に殺人現場の写真をもらっていく。その写真には、黄色いトランクを持った少女、風美が写っていた。花絵は、この風美の顔が欲しくて千治の前に現われたのだ。

一方、キャバレー・デラックスのマネージャー前田英五は、ボスの黒須金次郎から、黄色いトランクを探せと命じられる。

前田は、部下の鬼松、紺野、六郎たちを集めて、黄色いトランクを探させる。そのキャバレーの地下室に、夢子は監禁されていた。

新橋駅前の公衆電話で、オリエンタル・ホテルの鳴海条吉に連絡していた花絵は、群集の中で、ボス黒須金次郎の命令を受けた中国人の殺し屋、王に拉致される。(前号まで)

風の展望台

はるか彼方に、東京湾が煙ってみえる。船が、影絵のように浮んでいた。

「あッ、船だわ。こんな東京の真ん中からでも、船が見えるのね」と、風美が叫ぶ。

「今日は風が強いから、富士山だって、あんなにハッキリ見えるぜ」と、指さしたのは六郎だった。

銀座Nデパートの屋上の、そのまた上の展望台の金網につかまっ

て、二人は、まるで子供のようにハシヤイでいた。いや、二人ともまだ子供だといってよかった。風美は十七、ロックンの六郎も、やっと十九になったばかりである。

どちらも、年齢より二つ三つ老けてみえるのは、やくざの世界に足をつっこんでいるせいであった。

風が強く、デパートの赤い旗が、バタバタと激しい音をたてている。風美の髪が、大きく流れて、六郎の顔に触れる。風の強い展望台には、ほかに人の姿もみえなかった。

「風美……」

六郎が、風美の肩に手をのせた。風美は黙って肩をひねり、男の手を払った。

「よう、風美イ、こっち向けよ……」

と、六郎は女の前に向きなおり、その両肩に手をかける。

「なによ……」

風美は、うるさそうに、顔をしかめる。

「おれ……おれな、お前が好きなんだよ」

思いつめた声である。不良少年の眼が、その時、澄んだ色になった。

「ふふん……」

と、風美は、鼻でわらった。

「じょうだんじゃ、ねえんだ。真剣なんだ」

六郎は、わらわれて意気こんだ。

「おれ、お前に、大事なことを教えてやる。たいへんなことなだけ……」

「たいへんなこと?……」

「おととい、デラックスのマネージャーが、おれ達を事務室に集めた
だろう?」

「あたしが、あのブンの女を見張っていた時だろ?」

「そうだ。あん時だ。鬼松兄貴と紺野と、おれの三人が、マネージャ
ーに、何を云われたと思う?」

「……………」

「黄色い、小型のトランクを探してくれて頼まれたんだ。うまく見
つかったら、五十万円くれるっていうんだ」

「五十万円? 黄色いトランク?」

「ある男と女が、ノガミの駅で、どこかのズベ公にかっぱらわれたト
ランクだ」

「えッ? どうしてあれを?」

「マネージャーは、そのトランクをかつぱらったズベ公が、まさかお
前だとは気がつかない。鬼松も知らない」

「コンちゃんは知ってる。あたし、あの晩、コンちゃんにしゃべっち
やったもの」

「それがまずかったんだ。紺野と鬼松が、いま必死になってお前を狙
っているぜ」

「あのトランクの中身は、いったい何だろうか。そんなに重いもんじ
やないよ」

「すげえ金目の物らしいぜ」

「あたし、すごいもの、かっぱらっちゃったんだな」

「そうだ。だから、お前は今、いろんな奴に狙われているんだ。あの
トランクの持主だって、いま頃は青くなって、お前のことを探してい
るぜ」

「うっかりアパートへ帰れないな」

「あたり前よ。下手すりゃ、お前の姉さんだって、とんだトバッチリ
を受けるぜ」

「あのブンやも、あたしのこと狙っていやがるんだ」

「風美。あのトランクをよ、早くどこかで金にかえてよ、おれと一緒
に、どこか遠くへ高飛びしようじゃねえか。おれ、お前に惚れてるん
だ。お前のいうことなら、何でもきくからさ」

六郎の言葉に、真剣な響きがあった。

「六ちゃん、あんた、あたしをだますんじゃないね」

風美の眼が、六郎をにらんで、山猫のように光る。

「お前をだましてあのトランクを取り上げるつもりなら、こんなこと
お前に話すもんか」

「あたしも、ほんとに、六ちゃん好きだよ」

「えッ、ありがてえ。それでよう。あのトランクは、いまだどこにある
んだい?」

「ここよ」

風美は、手にさげたバッグを、ポンとたたいた。口金はずして、
中から手垢に黒ずんだ一枚の小さな木札をだす。

「なんだい、こりゃ?」

六郎が奇声をあげる。

「手荷物一時預りの引換札よ。九番。カブ。フフフ……」

「どこの一時預りだい?」

「それは、まだ秘密。ウフフ……」

白い歯をみせて、小さな妖精はわらった。

千治慾情

京橋の読物新聞に近い、裏通りのごくありふれた安酒場「よしこ」

もうカシバンの時刻をだいたい過ぎていて、

常連が二人、ロレッツも怪しくキエンをあげていた。その一人は読物新聞の探訪記者、藤木千治。二十九歳。独身。溢れる精力をもて余している働きざかり。

もう一人は、これもこの「よしこ」から、つい目と鼻の先の運送会社の発送部長で、権藤という中年の男。

「——つまりね、藤木さん。その殿様乞食を殺して、トクする奴は、いってえ誰かってことを考えるとだね……」

「もうわかったよ、権さん。どうも、権さんが運送屋になったのは、間違いだったな」

「そうか！ あんたもそう思うか。……いやおれの推理ではね、殿様乞食には、娘が二人居た。姉は六年前に家出して行方不明。妹は病人だが、いまのところ命に別状はない。しかも財産は妹のほうに譲られている。つまり、怪しいのは……」

「家出している姉かい？」

「そのとおり。恨み重なる親父めを、自動車の中から一発！」

「あの女がねエ……」

千治は、花絵と名乗るあの女の、強烈な香水の匂いを思いだした。

豊満な肉体を黒一色のスーツに包んだ艶姿、黒ダリヤ。あの女からもらったハンカチは、千治の内懐ふかく秘められている。酔った千治の

肉体に、ボツゼンとして狼のような慾情が湧く。

「ああ……」

と、彼はうめいた。両足を駄々っ子のようにバタバタ鳴らす。

「たまらねエ！ おかみ、たのむ！」

千治は、カウンターの向うに、大げさに手を合わせる。皿を洗っているおかみは、三十二、三……。小柄でまるポチャで、小肥りの四肢を、ピッチリと和服に包んでいる。

「また始まった。駄目、駄目。だから早く奥さんもらいなさいっていうのよ」

毎度のことで、おかみは笑って相手にしない。

「一晩！ いや、一度でいい！」

「駄目よ」

権藤が助太刀をだす。

「藤木さん。あたしがスゲエ白線を紹介しましょうか。デパートの売り子ばかり揃えてるところでね……」

「そうしなさいよ、千治さん。我

慢すると身体に毒よ。さ、そ

ろそろ一時よ。お二人の

宿直のお相手を、い

つまで私にさせ



ておくつもり？」

「おれはおかみに惚れてるんだ。一度だけ！ たのむ！」

「惚れやすいは飽きやすいってね。一度だけなんてのは、いちばん下手なクドキ文句よ。第一、あんたと寝たら、お夢さんに硫酸かけられちゃうわ」

「ああ、お夢か。お夢のやつ……」

千治の勢いが、シュンと衰えてしまった。酔いもさめる思いである。あれから四日、依然として夢子からの連絡はない。その心配をまぎらわせるための酒でもあるのだ。

「お夢さんの居どころ、わかったの？」

「わからん。明日の朝までにわからなかったら、警察に捜索願いをだす」

「ナサケない新聞記者ね。彼女の行方くらい自分で探したらどうなの。それが男の愛情ってものよ」

「探したよ。足が棒になって、膝の関節が曲らねえくらいにね。ああ、夢子！ どこにいやがるんだ！」

つい今の元気はどこへやら、千治は泣き声をだして、頭をかきむしった。

「へエ、婦人記者どうかしたんですか？ そいつは知らなかった。最後に彼女の姿を見たのは誰なんです。その辺りから状況を割りだしていきゃ……」

権藤が、また一席ぶちはじめた時、背中戸がガラリとあいて、一人の男がとびこんで来た。

車上の美女死体

「あ、権藤さん。やっぱりここでしたか！」

とびこんで来た男に、権藤は赤い顔をふり向ける。

「なんだ、早川か。どうした？」

「たいへんなことが起きたんです。いま、八王子からの最終トラック便が帰ってきたんですが、そのトラックの上に、女が乗っているんです……」

「ふん。女がね……」

「そ、それが、死んでいるんで！」

「えッ、死んでる？」

権藤の眼が、まるくなる。千治の神経が、ピーンと緊張する。

「どこの女だ？」

「それが、全然知らない女なんです」

「運転手は誰だった？」

「大森に山下です」

「よし！ すぐ行く！」

権藤が表にとび出す。その前に千治がすでに椅子を蹴とばし、のれんをかきわけている。

つばめ運送京橋支店。

事務所の隣りの倉庫の中に千治はとびこんだ。にぶい電燈の光りが、荷をおろしかけているトラックの上を照らしている。その横に運転手が二人、青い顔でふるえていた。

千治は、はずみをつけてトラックの上に飛び乗る。ムシロ包みの荷

が数箇。その荷と荷の間に、仰向けになって倒れている女。派手な柄のワンピースを着て、ひと目で若い女と知れる。髪が乱れ、頭の後ろから血を流している。ワンピースの裾が大きくまくれ、白い太腿が投げだされているのが、異妖にむごたらしい。

千治は、ムシロ包みの荷の上に腹這いになって、かげになっている女の顔をのぞきこんだ。

「あっ！ これは！」

驚くのが当然である。

女は、雅美！ バー・ロンリーの女給。そして風美の姉の雅美！

（雅美がどうしてこんなトラックの上で死んでいるんだ！ 自殺か！ 他殺か！）

——その時、知らせを聞いた所轄警察署の一行がのりこんできた。パッパッパッとフラッシュが光り、あらわな四肢の、むざんな雅美の死体がカメラにおさめられる。

一行の中に、顔みしりの長沢部長刑事の顔をみつけた千治が、

「長沢さん……」

と、声をかける。

「早いな、藤木君。どこから匂った？ 邪魔しないでくれよ」

「そういう顔をするもんじゃありませんよ長沢さん、ぼくはね、この女の身もとを知っているんですぜ」

「そうか。そいつは好都合だ。この近所の者かね？」

「東銀座のバー・ロンリーの女給で雅美っていうんですよ。年齢は二十一、だったかな。自宅は杉並区高井戸のアパート、ミドリ荘。円松寺ってお寺のすぐ裏で……」

「バカにくわしいな。事件をかぎつけるのも早すぎるし」

「くわしいってのは、怪しいってエことですか？ いやですよ、長沢さん。まだ自殺とも事故死ともコロシとも決っちゃいないンでしょ？」

「立派なコロシだよ。首をしめられている」

天から降った女

——午後十一時に八王子の支店を発車したこのトラックが、京橋の支店に着いたのは一時ちょっと前。その途中、どこにも停車しなかったと、運転手が答えた。

「ウソつけ。息がくさいぞ。途中でいっぱいひっかけてだろ。八王子で飲んだ酒なら、ここまでするうちにさめてるはずだ。それとも、車を運転しながら、酒を飲んだのか」

長沢刑事が、鋭い眼で大森運転手を睨む。

「ヘイ。どうもすみません。ついその……」

「まあいい。積荷は何だ？」

「家具です。机とか椅子……。八王子の山城木工所から、八丁堀の家具問屋へ運ぶ品物です」

「積荷は机が二つに、椅子が五つか。少なかったんだな」

「ええ、ですからロープもそんなに嚴重にかけてなく、荷と荷の間が空いていたンで。その間に、あの女が天から降って寝ていたってわけです」

「荷を積みこんだのは誰と誰だ」

「私と、助手の山下と、八王子支店の者と三人です。荷が少なかったので、十分とかからないうちに積み終えました」

「その時には、女は居なかったンだな？」

「アタリマエでさア。その時に見つけていたら、向うで大騒ぎになってますよ」

「積荷を終えて、君たちが運転台に乗りこんで走りだす、その隙に女の死体が投げこまれたような気配は？」

「そんな様子はなかったよなア、山下」

と、大森運転手は、助手の山下をうながした。

「ええ、ガサリとかドサリとか、音がしますからね、あのグラマーの重さじゃ……。それに車が動きだすまでは、八王子支店の奴が見送っていますから」

「——で、京橋支店に着いて、荷をおろしかけた時に、女の死体がでてきたってわけなんだな？」

「そうです。山下の奴は、ビックリして車の上から真逆様に落ちやがったくらいで……」

「あの女を知っているか？」

「いいえ、全然知らねえ女ですよ。山下、お前、知ってんのか？」

「知らねえ。見たこともねえ……」

長沢刑事は、ここでちょっと間をおいた。ふうん……と考えていたが、率直な質問を発した。

「——きみ達、あの女は、どこできみ達の車に乗せられたと思うね？」

「わかりません。あたしもさっきから一生懸命考えているんですが、さっぱりわかりません。あんな女の死骸を背中の中にのせて、真夜中突っ走ってきたのかと思うと、ゾーッとしますね。うすッ気持の悪い話でさア」

「——酒を飲んだのはどこだ？」

「ええと、あれは、私鉄の八王子線の高井戸駅と、大和台駅の、ちょうど真ん中へんだったな、おい山下」

「ずうっと大和台の駅に寄ったほうだよ。あそこところは、ひどく線路がカーブしていて、道路までグーと曲っているからよく覚えてい。おまけに鉄道の土堤が高く、見通しがわるいんだ。その土堤の前の小さな飲み屋で、二級酒をいっぱいずつ、飲んだんです」

「その間に、女が車の上に放り上げられたンじゃないか？」

「まさか。だって、あたし達が土堤下に車を置いて、飲み屋にとびこみ、いっぱいやってまた車に戻った時間ってえのは、そうですね、五分ぐらいなもんでしたよ」

「まア、七、八分てところだな。十分とは居なかった」と、山下があいづちをうつ。

「その時の時刻は？」

「あの時、飲み屋の前の、土堤の上を、ゴオーッと電車が通ったんです。そしたら店の婆アが、あれは高井戸を十二時三分にでた最終だって云ってました」

——高井戸には、雅美のアパートがある。

殺人の現場は、だいたいその方角とみてよい。犯人は、二人の運転手の隙をみて、雅美の死体をトラックの上に投げこんだ。何のために？……犯行の場所をくらすためにか。……あえて事件の怪奇性をねらう、殺人者の悪戯か……

——雅美の死体は、右の鎖骨が折れ、腹部胸部に打撲の痕が数箇所。手足には無数のスリ傷。後頭部に強打の痕があり、血がかなり流れている。そして彼女の息の根をとめたのは、咽喉に黒々残る指

跡。悪魔の爪跡。完全な扼殺であった。

みの虫吊り

——夢子は、必死にもがいた。もがくと、夢子の身体全体が、ユラユラと前後左右にゆれる。空中に浮んでいるのだ。しかし、此処がどこなのか、彼女にはわからない。

(木だ！ 木の枝に吊されているんだわ！)

かろうじて、それだけがわかる。

嚴重な目かくし、猿ぐつわをされている。後ろ手に縛られ、足首から脛にかけてグルグル巻き、身体全体にスッポリとメリケン粉の布袋がかぶせられていた。

袋の口をくくった縄で、木の枝から吊り下げられているのだ。

——あの地下室の中で袋詰めにした夢子は、深夜自動車でここに運ばれ、この奇妙な恰好でさらされているのである。

夜が次第に明けていくのは、目かくしの布を通してわかった。

夜明け前の冷えた空気が、しみじみと夢子の肌をとりまく。

ここに吊されたのは、午前二時頃か。それから二時間はもうたった。

海老のように背中を折り曲げた苦しい姿勢である。屈んだ自分の両膝の間に鼻を押しつけたまま、彼女は気を失うまいと必死に耐えていた。

自動車の走る音が聞える。大声をだして救いを求めれば停ってくれる程の近さに道路があるのだ。しかし、口の中にはハンカチがねじこまれ、その上に手拭いの猿ぐつわが、ピシリとふたをしている。睡が

みんなハンカチに吸いとられて、咽喉がカラカラに乾上っている。

背中にくりあげられた両腕はすでに感覚がなくなり、乳房をしめつける縄が呼吸を圧迫する。地獄の苦しみであった。

(ちくしょう！ あの狐づらめ！)

とんでもない冒険にとびこんでしまった、という後悔はない。あるのは敵への憎しみだけである。

白々と夜が明けきった。

早朝、人の通る足音が聞えはじめた。

夢子は、最後の力をふりしぼって、身体を動かした。枝が、ギギ……ときしって袋がゆれる。葉がザワザワと音をたてる。と——

「——ありや、なんだ！」

叫んだ声がある。

「ヘンなものが、ぶら下っているぞ！」

「動いているじゃないか！」

一人が声をあげると、たちまち二、三の人間が集る気配がした。

(ああ！ やっと、助かった！)

と、思った瞬間、はりつめていた気がガクリとゆるみ、夢子の意識は、ボウッ……とかすんだ。

——ふと気がつくと、夢子は布団にくるまって寝ていた。身体の節節がモーレッツに痛んで、思わず、ううッ……と、うなった。

目をあけると、まぶしい光りの中に、千治の顔がクローズ・アップされている。

「やっと気がつきやがったな」

なつかしい声。夢子は、ワッと泣きたくなかったが、ガマンした。

「——ここは病院ね。クレゾール臭いわ。あ、そうだ、私は気絶したんだっけ……」
「チェッ、ひとことみたいに云うない。芝公園の山の中の木に、みの虫みたいにブラさがっていたんだぞ」
千治、夢子の無事な顔を見て、うれしくてたまらない。ホッとすると、ひどい心配をかけた夢子に、こんどは無性に腹がたって、ついボンボン云ってしまう。
「大人になっても木の上でカクレンボかい。」



おれの買ってやったスーツが、泥と埃でメチャクチャだ」

「また買ってもらからいいわよ」

「チェッ。一週間も雲がくれして、いったいどうしたっていうんだい」

「どうしたもこうしたもないのよ。あの風美という女の子の後を尾けていたら、狐づらの男が出てきて、あっさり、さらわれちゃったのよ」

「どこへ連れていかれたんだ？」

「それを探ろうとして苦労したのよ。だけど敵も用心深くて駄目なのくやしいわ」

「全然見当がつかないのかい？」

「地下室なのよ。上の方で、かすかにナマの音楽が聞えていたわ」

「銀座か？」

「だろうと思うけど、目かくしされて自動車でグルグル廻されたんで、よくわからない。銀座でなければ、新橋、神田、上野、浅草……新宿までは行かなかったと思うけど……」

「頼りねえなア……ギャングどもにメンブレでも……」

「あの女の子が、一味の仲間よ」

「風美が？」

「仲間というよりは、手先ね。あとはロックンの六郎、こいつはいつも風美と一緒に。狐づらの紺野。腐ったような金歯をはめてる鬼松という男。あとはマネージャーと呼ばれていた背の低い、カニみたいな顔の男……私の目の前に現われたのは、これだけよ。くやしいから、奴

らの名前と顔は、頭の中にしっかり刻みこんできたわ」

「そうか。お夢……」

と、云いかけて、千治はふと真顔になる。

「……お前、大丈夫だったろうな？」

「なにが？」

「なにがって、アレだよ。手を縛られていたんだらう？ 無抵抗だからな」

「バカね。手を縛られ、ついでに足も縛られっぱなしだったのよ。胸のあたりをさわられただけ」

「それで安心。バンバンザイ」

「それより、そっちのほうはどうなのよ」

「雅美が殺された……」

「えッ？ いつ？」

「二日前だ」

「誰に？」

「まだわからねえ」



「どこで？」

「それもわからねえ。発見されたのはトラックの上なんだが……」

「奴らよ。私をさらった一味よ」

「えッ。何か心当りでもあるのか？」

「カンよ。第六感よ」

「姉が殺されたのに、風美は全然姿をみせねえんだ。もしかすると風美も……」

「私、こうしちゃいられない。アッ痛ッ……」

起き上ろうとして、夢子は顔をしかめた。

「おッと。まだ起きるのは早いぜ。ちっとばかり身体が衰弱してるかな。ま、二、三日は寝ていな。おれは痩せた女はキライだよ」

干治は彼女の両肩をおさえて寝かせる。

「喰いたいものがあつたら、何でも云いな。買ってきてやるぜ」

「うん……」

と、夢子は鼻を鳴らしてあまえ声。

責め写真

赤坂のオリエンタル・ホテル。

その十六号室に、一週間ほど前から宿泊している客、鳴海条吉。

コツコツとドアをノックする音。ボーイがはいってくる。

「お客様、お手紙がまいりました。速達でございます」

「手紙？ おかしいな。僕がここに泊っていること、誰も知らないはずなんだが……」

——知っているのは花絵だけである。その花絵も、四日前に外出し

たきり、行方不明になっている。電話連絡もないのだ。

一礼してボーイは部屋を出ていく。

普通よりは、やや大きな角封筒。中身も厚い。宛名は間違いなく鳴海条吉様……。裏をかえす。

——黒須金次郎……。

ぐっと、条吉の眉が寄る。唇が歪む。

（——相変らず、すばしっこい奴だ。おれがここに居るのを、どうして知っているのか）

条吉は、このホテルに隠れているのだ。かすかな動揺を顔にだして封をきる。

中から、数葉の写真が出てくる。

「?……」

その一枚を手にとって、鳴海条吉、思わずうむ……と、うなった。

写っているのは、花絵である。しかし、ただの花絵ではなかった。

なんと——素裸に剥かれ、腕を背中に縛りあげられた残酷なポーズ。

「ちくしょう！ やりやがったな！」

条吉、キリキリと歯を噛んだ。

次の写真——足首を縛られ、その縄を前から首にひっかけてしめあげてある。花絵の背中が前に折れ曲っている。海老責め。苦痛にゆがむ花絵の顔。白い額に、あぶら汗が光っている。

次の写真——床の上に投げだされた後ろ手の花絵と、その白い裸身に鞭をふるっている男。男の横顔が写っている。仏像のように柔和な顔をした小肥りの男。

「ちくしょう！ 王の奴、日本へ来ているのか！」

写真の王を睨みつける。香港一と云われた冷酷無比の殺し屋である。

香港を脱出して日本へ舞い戻った条吉と花絵を追って、その不気味な仏顔を東京に現わしたに違いない。

次の写真に目をやる。胸から上へのクローズ・アップだ。豊かに盛り上った乳房の頂点に、ギリギリと縄がかかり、その柔かいふくらみを上下に分割している。縄目が乳房に喰いこんで陥没しているのだ。レンズに向けた花絵の眼が苦痛を訴える。喰い縛った齒の間から、ヒヒイという悲鳴が聞えるようだ。

——これらの写真ばかりがおよそ十枚……。あるいは片足吊り。あるいは前宇宙吊り。あるいは柱にハリツケの如く……。あらゆる凌辱のポーズに踊る花絵の裸身。

ほかに、手紙らしきものは何もない。

「この写真だけで、意味は通じるってわけだな。ちくしょうめ！」
残忍なる呼出状。

条吉は内懐に手を入れた。三二口径ブローニング。腕は確かである。この腕だけで香港に買われていった条吉である。

彼は部屋の中を、グルグルと歩き廻った。

怒りに、全身が火のようになっていいる。しかし、彼はぐっと腹に力を入れ、角瓶をあけた。黄色い液体を、口の中にほうりこむ。

（落着け、落着け！　ここであわてたら、敵のワナにかかるだけだ）
どっかりと腰をおろす。目をつぶる。しばらく冥想して、彼は唇に微笑をのせる。

（黒須や王なんかのわるヂェにのる鳴海条吉ではない……）

タバコに火をつける。紫色の煙りを、ふうっと天井に吐きあげる。

東京に着いてからの出来ことを思いかえすのだ。

——上野駅で、ちょっと油断したばかりに黄色いトランクを盗まれた。あのエラーが痛かった。盗んだのはロングヘアの黒ズボンをはいたズベ公だ。すぐ追いかけて自動車の中から一発射った。足を狙ったのが外れて、後ろの乞食にあたった。殺人事件になって、それが新聞に載った。花絵にいいつけて、あのズベ公が写っている写真を新聞社に貰いにいかせた。昔の子分や仲間にも、その写真をみせて、どこのかを調べるためだ。

——もし、その写真がうまく手に入ったらとすれば、おれにとって必要なのは、その写真だけだ。花絵の身体はもう必要ではないわけだ。責め殺されても、おれはちっとも痛くないわけだ。問題は、黄色いトランクを持って逃げたあのズベ公だ。ところが、おれはあのズベ公の顔をチラとみただけだ。どうしても写真が欲しい。また新聞社に行って貰ってくるか。いや、もう危い。……

——やっぱり花絵を助けるか。しかし、王のハジキも、馬鹿にならないから……

彼は迷った。考えながら、送られてきた責め写真を眺める。

（こうして痛めつけられている花絵も、またいいものだ。とすると、まだ殺させるのは惜しいというわけか……）

フフフ……と、条吉のうすい唇に、冷たい笑いが洩れる。

真夜中の洗濯

雅美殺しの犯人捜査は難行していた。

第一に犯行の場所が、まったく見当つかないのだ。雅美の部屋はめ

ちやくちやくに乱れていて、何かを探しまわった形跡がある。雅美がこの部屋で殺されたものなら、トラックの上で発見された理由がつかない。

八王子線大和台駅に近い線路土堤の前の飲み屋の年寄りの口述も、つばめ運送の二人の運転手の言葉と、だいたい一致している。

ただ運転手側が二級酒いっばいずつと述べているに対し、店の側では、焼酎二はいずつと云っている。したがって、車を停めていた時間も十五分程である。トラックを置いたその場所を円の中心にして、二キロ周囲にわたって、空地、空屋、倉庫など、犯行に適すると思われる場所を綿密に調査したが無駄であった。

警察では、犯行の動機を、痴情、怨恨関係とみて、交友関係を徹底的に洗っている。



——雅美は、頭はちょっとバアだったが、気つぶのいい、可愛い女だった……

ロンリーへ行っても、もうあの底ぬけに明るい笑顔をみられないと思うと、千治は人並みに感傷的になった。それだけに犯人が憎いし、行方の知れない妹の風美も心配だった。

千治は、疲労回復した夢子と一緒に、ミドリ荘アパートを訪れた。三階の雅美の部屋の向い側、自動車セールスマンの細君とも、もう顔馴染みになっている。

「あら、また来たんですか。もうしゃべることありませんよ。私の知ってることは、もうみんなしゃべってしまいましたからね。第一あの夜は、私は早くから寝て、何にも知らなかったんですからね。怪しい物音なんか気がつきませんでしたよ」

ロコツにいやな顔をする。

「今日は雅美さんの親友だった人を案内してきたんです。これ、坊やにあげて下さい」

百円ばかりの袋菓子を出す。

「いえ、何もそんな。どうもすみませんねエ……そうですか、雅美さんのお友達ですか、あなたは……」

「はあ……」

夢子は、頭をさげて愛想笑いをする。

「けっこうなアパートですこと。お部屋代、高いんでしょう？」

と、夢子は、そんな話からはじめる。

「いいえ、不自由だらけで、うちみたいに、子供が三人も居ると、物干場のせまいのが不便でしてねエ……」

「お洗濯ものは、そこのベランダに乾すんですの？」



「ええ。屋上にもあるんですがね、お天気の良い日なんかは、アパート中の人が奪い合いになってしまつて……そういえば、あの雅美さんも、日頃の生活はダラシがないくせに洗濯好きっていうんですかね。」